
魂旨 ~たまうま~

赤神幽霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂旨 くたまつまゝ

【Nコード】

N7973I

【作者名】

赤神幽霊

【あらすじ】

6月9日、抱えていた仕事にようやく一段落ついたみこは、前々から気になっていた学校の屋上の噂について調べるべく、一人深夜の学校へ向かった。

屋上で彼女が出会ったのは、今年の卒業式の日、屋上から落ちて死んだという、噂に上がっていた名前の少女の幽霊だった。

その少女が魂旨であることを、みこはその目で確かめる。

翌日の放課後、みこは幽霊の少女と話をするべく、再び屋上へと足を運ぶ。

そこでみこを待っていたのは、クラスメイトの少女の敵意に満ちた視線だった。

本編の前の注意書き

恐れながら、本編の前に注意と人払いをさせていただきます。

まず、「この作品には「15歳未満の方の閲覧にふさわしくない表現」が含まれています。15歳未満の方はすぐに移動してください」

この物語には以下の成分が含まれます。

その内どれか一つでも、苦手または受け付けられないものがある方は、引き返してください。

あなたの気分等を損ねてしまう可能性があります。

・ レズ、又は百合

・ 残酷な描写、グロテスクな描写

・ 誤字、脱字、言葉の誤用

・ 登場人物の多くが女性（というか少女）

・ 普段なら削除しているような、グダグダ感溢れるはっきり言っていないのでは？ と思ってしまうような文章の放置

・ 悪乗りし過ぎな感じのするネタ

・ 15歳未満の方には不適切と思われる表現

・ だめだこの小説、変態しかない

・上記のような作者の自己満足

・その他、一部の方には不快に思われるかもしれないこと

これらを承知の上、かつ15歳以上の方で、時間と精神に余裕があり、まあ読んでやってもいいかなという方は、これより先へお進みくださいませ。

更新予定を申し上げておきますと、プロローグから9話まではまとめて投下しておきます。それ以降、20話までは一週間ごととなっております。

現在、一区切りとなる20話までストックがございますので、HDDクラッシュといったトラブルや、物語の展開に対する大幅な変更を伴うような作者の心変わり、体調不良等がなければ、そこまで滞りなく更新していけるかと思えます。

それ以降の更新予定は、現在のところ未定とさせていただきます。長々と失礼いたしました。

プロローグ

六月九日午前二時頃。

雲一つない夜空の下、しんと静まり返った住宅街に響くのは、どこかしらで鳴く虫の声と一人分の足音。

涼しい風が優しく吹きつける夜道を巫女服姿の少女が歩いていた。よく手入れされた黒髪が、夜風にそよそよと揺れる。

何も知らない人からすれば、コスプレした変な女の子が、夜遊びしているようにも見えなくもない。

コスプレの部分は否定できない　巫女服でなければならぬ理由はないのである　けれど、もちろん夜遊びするためにそうしているわけではない。

彼女が目指すは自分が通う高校。誰もいない屋上から聞こえてくるといふ、女性のものらしい声について調べるためだ。

今年の卒業式の日、卒業生の一人が屋上から落ちたらしい。

事故か自殺か、それとも他殺か。今でも真相は定かではない。

事故とするには不自然な点もあるようだが、それでも他の理由よりはよほど可能性が高いとして、一応事故ということになっている。ただ、その後からなのだ。声が聞こえるようになったというのは、校内ではもはや周知のことだ、ある事ない事噂されている。声の主がその卒業生なのか、それを今から確認しに行くのだ。

もしそれが悪いものであるのなら、確実に仕留めよと言われている。そうでなかった場合は、好きにさせる。

目的地たる校舎が見えてきた。

彼女の視線は自然と屋上へ向けられた。

「……？」

彼女は長いまつ毛に縁取られた目を瞬か^{しばた}せると、それから軽く息

をついた。

……あれで誰も気づかないのかなあ。

学校指定のセーラー服姿の何者かが、今にも落ちてしまいそうなぎりぎりのところに座っているように見えた。

屋上の扉を開けるとそこにはやはり、転落防止用フェンスの外側で腰かけている一人の少女の姿があった。

……この感じは、うん、報告通り。それにしても……。

特に悪い気は感じない。どころか、やけに場が澄んでいた。とりあえず屋上に出てすぐのところから声をかける。

「こんばんは」

どこかを見つめていた少女は勢いよくこちらに振り向いた。白いリボンでポニーテールに結わえられた髪が飛び跳ねる。どうやらビックリさせてしまったようだ。

「え……。み、巫女……？」

少女はそう言った口を閉ざすことさえ忘れて固まった。それもそうだろう。真夜中の学校、その屋上で巫女服姿の少女と出会っただなんて、誰が予想しようか。

「御覧の通りです」

微笑み、巫女服姿の少女は両手を広げてくるりと一回転して見せる。つられて、背中の中半ばにかかるほどにまで伸ばされた、絹糸のような艶やかな黒髪が流れた。

「わたしが見えるの？ 声が聞こえるの？」

「見えてなかったら声なんてかけないし、聞こえないなら返事のしようがないよ」

苦笑気味に返答しつつ、セーラー服の少女の元まで歩み寄る。

「さすがにこの服装だとフェンスを乗り越えられないから、フェンス越してお話するね」

「えーと、巫女さんが何の用でしょうか？」

顔に困惑を浮かべたセーラー服の少女は首を傾げた。

「昼夜関係なしに誰もいないはずの屋上から聞こえてくる声を調べに来た、というわけです」

「それってもしかして……わたし？」

セーラー服の少女は己の体を指さしながら訊いた。

「たぶんそうだと思う。聞こえてくる声は女性らしいものって言われてるから」

「じゃあ、わたしどうなるの？ 消されちゃうの？」

「何もしない……かな。悪い人じゃないみたいだし」

巫女服の少女の言葉を聞いて、ほっと胸を撫で下ろすセーラー服の少女。

「よかったあ……。でも、わたしって人なのかな？」

「どうしてそう思うの？」

「わたし、ここから落ちて死んだはずなんだけど」

「確かに、もう死んでるね」

「わたしって……やっぱりお化け？」

「うん。そういう類たぐいのものになってるね」

「そっか……。やっぱりわたし、お化けなんだ」

さして取り乱す様子もなくセーラー服の少女は呟き、

「ところでさっ！」

唐突に、興味津々といった感じで身を乗り出した。

セーラー服の少女の上半身が、フェンスの存在を無視してそれをすり抜ける。

「は、はひ！？」

予想外の出来事に、巫女服の少女の声が裏返った。

目と鼻の先にその顔がある。お互いの息が、かかる。

でも、フェンスの存在を無視しているという事実が、セーラー服の少女はもうこの世の住民ではないことを、これ以上ないくらい鮮明に物語っていた。

巫女服の少女にはわかっていった。相手が自分だからこそ、彼女の吐息を感じられるということが。

実際、彼女の姿は誰にも見えず、彼女の声が届か届くこともない。だから、この学校に通う人にはその存在さえ認識できない。

巫女服の少女のような、ごく一部の人間を除いて。

すでにこちら側に 肉体を持つ者の側 には属していないのだ。それどころか、死者の側にも属していない。

何か よくある話では強い未練 が、彼女の存在を繋ぎとめている。こちら側に属していないのにも拘わらず、その存在が残っていること。それが証拠だ。

「巫女さんの名前、教えてもらってもいい？」

セーラー服の少女が笑む。夏の陽光のような、眩しいくらいの笑顔だった。

「みこです。都守みこ」

「巫女さんだっっていうことはもうわかってるよ。わたしが知りたいのは……ってあれ？」

「ダジャレでもなんでもなく、私の名前が“みこ”なんです」

みこがそう告げると「そうなんだ！」と彼女は目を丸くした。

「わたしは五月雨さみだれなずな。なずなって呼んで。よろしくね！」

なずなは笑顔のまま手を差し出す。

それに応じようと無意識に差し出したみこの手はなずなの手に

「うそ……」

呟かれた声は掠れていた。

ありえないとばかりに目を見開いたなずな。信じられないものを見るかのように、みこと“それ”とに視線を何度も向ける。

“それ” 繋がれた手と手。

なにもものにも触れることの叶わなかったなずなのその手が、確かにみこと触れ合っていた。

「触れてる……。みこの手……柔らかい……」

「なずなの手、ちゃんと温かいよ」

なずなのもう片方の手を引き寄せ、みこはそれを両手で包みこむようにした。そうして、優しく微笑む。

「……あつたかい。温かいよ……みこ」

なずなは温もりを求めるように、みこに倒れ込んだ。

まだまだ未完成の月が、そんな二人を静かに見守っていた。

第1話 6月9日 日常

暑い。

夏本番になつたら溶けてしまつのではないかと、本気で心配になるくらいに。そんな六月上旬の朝だった。

汗を額に滲ませ、急ぎ足で二年二組の教室に入り、みこは自分の席に着くなり突っ伏した。

朝早く、まだほとんど人がいない教室。

その数少ない登校者の一人は、みこの姿を認めるなり近づいて声をかけた。

「みこが挨拶もなしにいきなり力尽きたってことは、珍しく疲れているのね」

「気だるげに顔を上げると、席の正面には呆れているような、労うような、どちらともつかない曖昧な表情をしている友人の姿があった。

体を動かすのに邪魔だからと短くカットされた黒髪に、気の強そうな目つきの少女だ。

「おはよー紗希^{さき}」

「はい、おはよう」

みこの棒読みに等しい挨拶に気を悪くした風もなく、紗希は穏やかに笑って見せた。

空宮紗希^{かみやま さき}。高校一年のときに知り合った、みこにとって今では気の置けない友人の一人だ。

「うーん。寝不足なのね」

両手を腰に当てて屈んだ彼女は、みこの目の下にできた微かな“くま”をもの珍しげにまじまじと見つめ

「てりゃ」

静かな教室に鳴り響くシャッター音。ケータイで写真を撮った。

「こ、こんな顔撮らないで。恥ずかしいよ」

みこは両手で顔を覆い隠すも、もう遅い。

「へっへーん。みこの珍しい顔写真ゲット。待ち受けにしよーっと」

紗希はわざわざ画面を見せてくる。

「うわぁ、本当にそうしてるし……」。

「そんな、紗希い酷いよ……」

無駄と知りつつ抗議の視線を送る。そこで感じる違和感。瞼が重
い……。

「いいじゃん一枚くらい。絶対誰にも見せないって。それと、邪魔
して悪かったね」

「ふえ？」

「ごめん紗希。今なんて……？」

「あー」と、急にバツが悪くなったような顔をして、髪を意味なくいじる紗希。

「少しでも寝るんでしょ？ ホームルーム始まる前には起こしてあげるからさ」

「……………すう」

紗希がすべてを言い終える頃には、みこはすやすやと安らかな夢の世界へ旅立っていた。

「この娘^こったら」

紗希は小さく笑むと、みこの頭を優しく、愛おしそうに、数回撫でてから自分の席へ戻っていった。

午前中最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、お昼休みとなった校内は賑やかさで溢れていた。

午前の授業をなんとか意識を繋いで乗り越えたみこは、ようやくといった風に「うーん」と伸びをした。

さて、とみこは鞆の中を漁り、その中からお弁当の包みを二つ取り出す。

片方は薄桃色で、もう片方はふた回りほど大きいサイズで青色。その内の青い方を大切そうに抱えて席を立つ。

「毎日ご苦労なこつたねえ」

一緒に食べようとお弁当を持ってやってきた紗希にぼんと肩を叩かれる。

「一応、未来の妻ですから」

さも当然とばかりにみこは胸を張る。

「そうは言ったって、結婚するの、向こうは嫌がってるんでしょ？」

「嫌がってるというか、決めかねてるって感じ？」

「そんな相手にあなたは毎日甲斐甲斐しくお弁当作って届けてあげてるってわけよね、それって」

「そうなるのかな。でも、一つ訂正。あげてるんじゃないくて、してる。ううん。むしろさせてもらってるの。んじゃ、行ってくるねー」

「え、あ、って……行っちゃった……」

紗希はみこに向けて中途半端に伸ばした手を、力なく下ろした。

教室を出たみこは小走りで六組を目指す。

いつも通りの光景に、すれ違った見知った顔の生徒らは、何か微笑ましいものでも見るかのような表情で彼女を見送った。

「しょうちゃん！」

六組の教室に入り、首を巡らせる。

ちよつと怖そうな印象を相手に与えてしまいがちな鋭い目を細めて笑む男の子。

談笑する男子生徒の中に目当ての人物を見つけたみこは、昔からの呼び方そのまま、幼馴染に声をかけた。

話し声がぴたりと止み、男子のグループの目が一斉に歩み寄りこちらに向く。

そのグループの一人、みこに呼ばれたその幼馴染は、楽しそうだった表情を困ったようなものにして、みことお弁当を見比べた。

「都守さん」……」

しょうちゃんと呼ばれた彼、霞翔雨^{かすみょうう}は友人らから向けられるニヤついた視線を気にしながら、ぎこちなくみこを名字で呼んだ。みこを名字で呼び慣れていないことは明らかだった。

「はい、しょうちゃん。お弁当どうぞ」

周囲の反応が気にならないわけではないが、みこはそれらを見えないフリしてあくまでも笑顔でお弁当を差し出す。

「前にも言ったけど、昼飯くらい自分で用意するって」

「迷惑、かな……?」

「そういうわけじゃ……」

「なら、いいじゃない。私が好きでやってることだし。嫌だって、止めるって、はっきり言われたら、さすがにしないけどね。そうじゃないなら受け取ってよ」

「あ、ああ……」

翔雨はいかにも渋々といった感じでお弁当を受け取る。いつものように。

そのことについて翔雨をいじり始めた友人らにみこは「あんまりしょうちゃんをいじめないでね。いろいろ事情があるから、私たち」と冗談だと知りつつも、つい真剣な顔でそれを止め「しょうちゃん、お弁当箱はいつもと同じ方法でね」と言い残し、六組を後にした。

「で、さ。みこはどうなの？」

紗希がお弁当を食べる手を止め、もう何度目になるとも知れない問いかけをした。

「んー？」

ちようど口の中に食べ物を取り込んだばかりだったみこは、言葉の代わりに首を傾げて見せた。

「……とりあえず飲み込むまで待つわ」

紗希はこれ見よがしに深々と溜息をついた。頬杖をついて正面からみこの顔をなんとなくぼんやりと眺める。

みこ曰く、化粧をしているわけでも特段何かをしているというわけでもないという。それなのにこの肌の綺麗さは何だろう。理不尽だ。

母親譲りの整った顔立ちは精緻な人形のように、無表情のときはそれがかえって怖さを感じさせられてしまうこともあるほどだが、しかしそんな難点は、表情が豊かなみこにはあまり影響がなくて、なんというか、うーん。ずるい……。

「紗希？」

「ん、何？」

どうやら見惚れていたらしい。紗希は生返事してから己の失態を自覚した。

「何って、紗希がだよ。私が、どうしたの？」

「あー、だから、その。みこはさ、霞かすみくんのこと、どう思ってるわけ？」

うーん、と顎にピンと伸ばした人差し指を当てて思案すること数秒、

「どうなんだろう。正直、よくわかんないよ」

みこは困ったように苦笑した。

ここどころ、だいたい二日ほどの間隔を空けて同じ質問をされているのに、みこは気にした様子もない。

「みこは好きでもない相手との結婚を勝手に決められて、嫌じゃないの？」

本音がどうかはともかく、とつくに教えてもらったはずの気持ち。けれど、どうしても聞かずにはいられなくなる自身を、紗希は抑えきれなかった。

「なんで？」

「だって、好きな人じゃないのよ？」

「でも、嫌いな人でもないよ」

にこり。みこは柔らかく笑む。同性さえどきまぎさせってしまうような笑みだった。

「だからって……。体を預けることになってもいいの？」

「ちょっと怖いかな。でも、覚悟はとづくにできてるから。もちろん、やるだけやって『やっぱり結婚しません』って、捨てられることもね」

「そんなの覚悟しないでよ！」

平気な顔をしてそんなことを言っただけのけたみこに向かって、紗希は我を忘れて叫んでいた。教室に残っていた生徒全員の視線が集まる。

「あ……」

恥ずかしい。いたたまれなくなって下を向く。

驚かせてしまっただろうか。恐る恐るみこを窺ってみると

「紗希は優しいね」

彼女は、微笑んでいた。

「え、あ……？」

「心配してくれてるんだ、私のこと」

こくん。

詰まったように言葉が出てこない。紗希は頷くことしかできなかった。

「ありがとう。でも、私は大丈夫だよ」

なんで、そう言い切れるの？

紗希は目で訴えかけるように見つめた。
意図を察したかのようにみこは言った。

「ちっちゃな頃からね、ずっと、後を継ぐためだけに、継いでも大丈夫なように育てられてきたから。だから、平気」

それにね、とみこは続ける。

「しょうちゃんならそんな酷いことしないし、大事にしてくれると思うんだ。しょうちゃん、優しいから」

へらへら。につこり。どこか恍惚としたような、嬉しそうな顔。

本人は自覚していないようだが、みこが霞に好意を抱いているのは疑いようがなさそうだ。

みこのこんなでれとしたりしたらしない表情は、あんまり見たことがないような気がする。今まで同じような問答を繰り返してきているのに。一体、いつからなのだろう。

それとも、霞のことを思い浮かべている今の間だけ、そうなってしまっただろうか。

覚えてたら試してみよう。うん。

「じゃあさ、もし、もしもだよ？ 霞くんに好きな人ができたらど

「つするの?。」

「え? そりゃあ応援するよ。しょうちゃんが幸せなら、その方がいいし。」

「みこはそれでいいの?。」

「うん。」

「相手が、霞くんじゃなくなるのよ?。」

「私は、私を大事にしてもらえたら、それで満足だから。そういう人なら、誰でもいいかなー、なんて、思ってたりますのですよ。」

みこが照れたように「えへへ」と笑った。

でもその目には、何かを悟っているような、諦めているような、無機質な光が灯っているように思えた。

第2話 6月9日 放課後その1

放課後。

一緒に帰ろうという紗希の誘いを、今日は残ってやることから断ったみこは屋上を目指していた。

事件以降、屋上への扉は施錠されている。だから、みこはポケットから取り出した鍵を使った。

「あれ？」

本来あるべきはずの手応えがない。
試しにドアノブを回してみると

「開いちゃった……」

元より鍵などかかかっていなかった。夜に来た際、帰りに閉め忘れたのだろうか？ いや、そんなはずはないと首を振る。では、一体なぜ……？

みこが屋上に姿を現すと、二人分の驚愕の気配が伝わってきた。

「え、え、えええ！？」

「っ！」

みこの姿を認めるなり声を上げたのは、昨夜出会った幽霊の少女なずな。そのなずなの隣には

「……………咲実さん？」

咲実せり。腰にまで届く長い髪を背中流しつつ、その両端を細く赤いリボンで結わえてツインテールみたくしている。ほんの少しだけ目尻が下がっていて、優しそうな雰囲気をしている。全体的に見て、なずなどは対照的に、大人しそうな印象の少女だ。そんなクラスメイトの彼女は怯えるようにびくっと身を震わせたけれど、そんな態度とは裏腹に、みこに向けられたのは射抜くような視線だった。

「えっと……少し話、いいかな？」

敵意に満ち満ちた視線に出迎えられたせいか、どうにも調子が狂う。

私、咲実さんに何か悪いことしちゃったかなあ……。

記憶を掘り返してみても、そんなことをした覚えは一切ない。なずなの方はというと、嬉しそうにみこに飛びついてきた。

「あ……」

その瞬間、咲実が切なそうな顔をしたのをみこは見逃さなかった。

「ねえなずな、咲実さんはひゃん！」

声が裏返った。なずなのせいだ。

彼女は胸に顔を押し付けて頬を擦りつけていた。

「ちょ、ちょっとなずな!？」

「ははっ、みこの胸って大きくてやーらかーい」

やーらかーい……? あ、そっか。柔らかいか。ってそうじゃな

くてですね。

「なずな、後で気が済むまでしていいから今は離れて」

このままではどうしようもないので、仕方なくそう言って離れてもらう。

というかその、ねえ。これ以上胸を責められるとですね、まずいわけですよ、いろいろと。

ちよっとお話したいだけだったんだけどなあ。言わなきゃいけないこともあるし。

「ほんとっ!?! 気が済むまでしていいの!?!」

期待に満ちた目を向けられ、

「うっ……」

ついでを仰げ反らせてしまった。軽い気持ちで言うんじゃないかった。後が怖い。

「それにしても、みこが後輩だったなんてびっくりだな。あ、言葉とか気を使わなくていいからね」

なんとか離れてくれたなずなは、咲実に向けて手をひらひらさせた。

「そう言っと思ったよ。ねえなずな、咲実さんとはどういう関係?」

「恋人だよ」

大輪の花を咲かせるように、なずなの顔にとびきりの笑みが広がる。

「……そっか」

そんな顔をされてしまったのは、どう反応していいのかわからなくなる。みこは曖昧に笑った。

「驚かないんだ？」

「ほんとに驚きたかったんだけどね」

なずなの幸せそうな表情の前にそんなものは吹っ飛んでしまいましたが、言えない。

「……なずなに用があつて来たんじゃないの？」

なずなに手招きされ、渋々といった感じで歩み寄った咲実が、意図的に低くしたような声で訊いた。

「なんだか怒られているみたいだ。」

「それもそうか。二人きりの時間を邪魔しちゃってるわけだし。」

「ええとですね、特に用があるってわけでもないんですけど……どうしてなずなは成仏してないのかなあと。あと咲実さん、もしかなくとも見える人だよな？」

「なずなと咲実が顔を見合わせた。」

「やっぱりというか今更というか、咲実にはなずなが見えているよ。うだった。声も聞こえているし、逆に呼びかけることもできる。」

「ただ、触れることはできないのかもしれない。なずながみこの胸」

に飛び込んだとき、咲実はずっとそれを見ていたから。

夜にならずに出会った時のことを思い出す。

他人と触れ合うことを、触れ合うことで得られる温もりを、なはずは強く求めていた。

死んでしまっただけから、誰とも　咲実と触れ合うことができない。お互い姿を見ることができなのに、手を伸ばせばすぐにでも届く距離にいるのに、差し伸ばされた手は目の前に存在する大切な人をすり抜けてしまう。

なずなも、咲実も、大好きな人の温もりを得ることはもうない。たぶん、そうなのだろう。

なんとかできないかな……。

「そういえば、なんでだろ……?」

つい思案に耽りそうになっていた意識を引き戻すと、なずなが頭を抱えていた。

「……」

とりあえず、なずなの方は後回しにしよう。

「えっと、咲実さんは?」

「……都守さんなら言っても何の問題もない、かな。都守さんの言う通り、見えるよ。余計なものも」

「そういうのに触れたりはしない……?」

恐る恐る訊ねてみると……、

「それができればとっくにそうしてるわよ!」

案の定、物凄い剣幕で詰め寄られた。

「う、ごめん。そうだよね……」

確認のためとはいえ、悪いことしちゃったなあ……。

「……せり、みこに怒鳴ってもしょうがないよ。ごめんね。何も悪くないのに」

見かねたはずなが、咲実を宥めてくれた。

「……ごめんなさい」

咲実が申し訳なさそうに頭を下げた。そこには『やらされてます』って感じはしない。本心からそう思っているようで、みこはなんだか余計に申し訳なかった。

「ううん。私が無神経なこと言ったせいだから、気にしないで」

「えっと……あたしも一つ訊いていい？」

沈黙を嫌うかのように、咲実は口を開いた。

「うん、なんでもどうぞ」

みこが笑顔でこれに応じると、咲実の隣で手が上がった。

「はいはい、みこのスリーサイズが知りたいです!」

……聞かなかったことにしよう。

「なずなから聞いたけど、どうして今になって調べに来たの？ もう六月なのに」

咲実は一切なずなの発言に構うことなく、当然の疑問を口にした。

「ねえ無視？ 無視なの？ 二人してスルーしちゃうの？」

なずなは無理やり二人の間に割って入り、交互に顔を見やる。が、咲実は見えていないかのように完全に無視している。

えっと、無理に構う必要はないってこと……だよな。でも、なずなが泣きそうな顔してるんだけど。いいのかなあ。

「もうそろそろ来ちゃうかな、って思ってる」

これだけでは何のことかわからないはずなのだが、心当たりでもあるのか、咲実は少し考え込むような仕草をして、

「……大きな黒い蛇のこと？」

信じてもらえないだろうと思ってる、みこがあえて伏せておいたその存在のことを言い当てた。

そういった話は、せいぜいネット上で秘かな噂になるかならないかという程度にしか広まっていないはずなのだが。

それに、そういった話を知っているならば、もっと他にもいろいろあるだろうに。どうしてよりもよって大きな黒い蛇と言っただろうか。

あれは、まごころんべい近くまで来てようやくその存在を感知できるような、存ぞん

在隠蔽の性質を持っている。

だから、いくら感覚が優れていても、事前にそれを知り得ることは通常ありえない。それを知るには、別の資質が必要になってくるわけ。そこまで考えて、ふと思う。咲実……？

「咲実……さきみ……先見ってことなのかな。昔そついう家系があったって」

「夢のようなものだけだね。もう血がずいぶん薄くなっちゃってるから、かなり曖昧なものだよ」

まさかと思って口にしてみると、どうやらそのままだったよう
で。

こんな時つてどういう反応したらいいのかな。それに……。どこか遠いところを見つめるような、咲実の瞳。そこに悲しそうな光を見つけたとき、どんな言葉をかけるべきなのか、みこにはわからなかった。

「一緒に食べてもらうつもりだったのに」

「そんなことまで……」

ここまで知られていると、もう驚くを通り越してしまって反応のしようがない。でも、これで納得したことがある。咲実は、なずなど一緒に消えるつもりだ。

咲実は、みこがそれを邪魔する存在だと知っていたから、敵意を向けた。

みこは納得すると同時に、秘密裏に終わらせることを諦めた。ちゃんと言葉を交わして、説得しておかないと、妨害があるかも

しれない。それで失敗なんてしたら、咲実はいいのかもしれないけれど、大変なことになる。

時間帯にもよるが、例えば 学校にいる人間が次々と消えていくとか。

「ね、ね、何の話？」

一人蚊帳の外になっているなずなが、くいくいとみこの服の袖を引っ張った。

「なずな、ちょっと待って。後でちゃんと説明するから」

「……はい」

しょんぼりとしたような口調。

みこは罪悪感を覚えつつも、なずなにはもうしばらく辛抱してもらうことにした。

「食べることも、夢で？」

「一応言っとくと、感覚が夢を見ているのに似てるってだけで、夢じゃないからね？」

「そう念押ししなくても大丈夫だよ。そういうのって決まった名前がないからどうしても、ね」

咲実は自身の記憶を辿り、呼び方なんて考えたこともなかったことに気が付いた。

「名前……。確かに、都守さんの言う通りかも。えっと、さっきの

質問の答えだけど……うん、その通り」

「なぜなにはどこまで？」

「先見のことなら教え……あ」

咲実の言葉が途中で止まった。何かに気づいたような、そんな顔をしている。

どうしたんだろうと少し考え、みこは「あっ」と声を上げそうになった。

そうだよ。呼び方も何も、そのままでもよかったんだ。どうして気がつかなかったんだろう。そのまま先見って言えばよかった……つてそれだとややこしくなっちゃうかも。

だからなのかな、咲実さんが先見って呼ばなかったのは。無意識に避けたのかも。

実際は、先見の能力から苗字が咲実になったのだと思うけど。

「先見でよかったのね……」

咲実はどこか疲れたように息を吐いた。

「次からは先見って呼ぼっか」

「え？ あ、そ、そうね」

みこが笑いかけると、咲実は一瞬戸惑ったような反応を見せた。

「あの……都守さん、あたしのはせりって呼んでくれない？」

咲実と先見で、なんだか複雑そうだった。

そもそも先見なんて、他の誰かに言っても、そうそう信じてもらえるようなものでもないから、その力を先見と呼ぶ日が来るとは思ってもいなかったに違いない。

拳句自分の名字も咲実と、音にしてみれば同じなものだから、何か思うところがあるのかもしれない。

でも、一方的に名前で呼ぶのはなんだか嫌なので、

「私も、みこって呼んでもらってもいい？」

せりにも同じようにしてもらおうことにした。

「え？ う、うん。わかった」

「それで、続きなんだけど。……せりは大きな黒い蛇のこと、なぜなに伝えてないの？」

「……………」

みこの質問に対し、目を伏せたせりは沈黙で答えた。
なぜなに伝えていないことを肯定しているようなものだ。

「せりは本当にそれでいいの？」

そう問うも、せりは黙ったままで口を開こうともしない。

それでも、みこはじつとそんなせりを見つめ、静かに相手の言葉を待つ。

急に静かになる屋上。

グラウンドから聞こえる運動部員らの声が、別の世界のもののように感じられる。

不安そうな顔をしたなずなが、沈黙した二人の間で視線を行ったり来たりさせていた。

初夏という季節がら、夕方とはいえまだ日は高く、暑さで滲んだ額の汗が頬を伝い……落ちた。

不意に沈黙を破ったのはせりだった。

「最初はね、すぐにでも死のうと思ったの……なずなと同じようにでも……」

自分の名前が拳がったなずなは、死という不穏な言葉を聞いて、身を乗り出そうとした。

みこはそれを制し、おそらく「せり」と叫ぼうとしたのだろう。なずなの口を封じつつ、黙ってせりの告白に耳を傾ける。

「……どうせ死ぬんだったら、あたしは、なずなと一緒に、同じ所へ消えたい！」

顔を上げ、叫んだ。

その拍子に、溢れ出た透明な滴が宙を舞った。

「せり……」

口を解放されたなずなは、気遣うような優しい声で、想い人の名前を呼んだ。

微かに震える体。ぎゅっと、強く握りしめられた手。血が滲むほどにきつく噛みしめられた唇。

そして何より、決壊寸前のダムのように、今にも泣き出してしまいそうななずなの表情は、見ていただけで辛い。

なずながもし生きていたのなら、もし触れることができたのなら、せりを抱きしめていたに違いない。

「ただ、なずなは死んでしまっただけで、せりに触れることもできなくて、抱きしめるどころか、せめてその手を握ってあげることまでできない。」

「できることは、声をかけることだけ。」

「そう考えると、悔しさという、そんな一言で片付けるのが、躊躇われるくらいだった。」

「……ねえ。死ぬとか消えるとか、二人はさっきから何の話をしてるの？」

「しばらくして、感情を無理に押し殺したような声で、なずなが訊いた。」

「みこは確認の意味を込めて、せりの顔を見つめた。」

「泣き腫らした顔の彼女は何も言わずに目を逸らした。」

「だから、今度は言葉にして問いかける。」

「なずなに話しても、いい？」

「……」

「せりは脇目も振らずに走り去ってしまった。」

「せり……」

「その背中を茫然と見送ったなずなは、辛そうに彼女の名前を口にしながら、やがて意を決したようにみこに向き直った。」

「みこ、お願い。あの娘が言ったことの意味を教えてください！」

「悲痛な叫び。なずなの言葉は、そう表現するに相応しいものだった。」

た。

本当は、みこが勝手に話すべきことではない部分も含まれている。しかし

それでも、今は話さなくてはならない時だった。

……気は進まないけれど……。

「まずは……そうだね、大きな黒い蛇のことから話そうか」

大きな黒い蛇。その存在のことを口にしただけで、その正体を知っているみこは複雑な気分になった。

「さつきせりとの話で言ってたやつね」

真剣な顔で、なずなは次の言葉を待つ。

見えない人からすれば、みこが今から話すことは荒唐無稽なお話なのだが、今回はその話を聞く当人が幽霊という非科学的な存在だ。そのなずなが、あまりにも真面目な顔をしていたので、この後どんな反応を示すのだろうか、いけない期待をちよっぴり抱いてしまった。

「大きな黒い蛇、縮めて大黒蛇^{だいこくじゃ}。大黒蛇はね、人の魂を食べてしまうの。食べられた魂は、その力を奪われて消滅させられてしまう。魂にはね、ちゃんと還るべき場所があるんだ。そこからまた廻っていく。そういうシステムなんだ。けど、食べられたら還ることなんてできない。だから、食べられた人が生まれ変わることもない」

「それで、そんな奴の名前がどうして拳がったの？」

意外にも、あっさり受け入れられてしまった。

……私のこと、信用してくれてるのかな？

「それはね、なずながちょっと他の人とは違うから」

「……わたしが？」

なずなは怪訝な顔をして、自分の体を指さす。

無理もない。身に覚えなんて、あるわけがないんだから。これは、そういうものだ。

「うん。なずなはね、幽霊としての味がいいというか、美味しい魂
というか、大黒蛇にとってはご馳走なの。それだけじゃない。魂旨
を取り込んだ存在は、その瞬間から途方もないくらいの力を得るの
ど、うやったって制御できっこない、神様さえ匙さしを投げちゃう強大な
力を。私たちは、なずなのような魂たまのことを魂旨たま旨って呼んでる。一
世紀に三人くらいしかいない、稀少な存在」

この話は相変わらず気分が悪くなるなど、みこはしかめっ面を作る。

死んでまで食べられたり、取り込まれたりしてしまうなんて、そ
んなのって、ない。そう思うから。

「今もどこかを彷徨っている大黒蛇は魂旨を見つけると、それを食
べるためにやって来る。そして、魂旨とその周囲の人をまとめて食
べてしまう」

「せりが言ってた、一緒に食べてもらうつもりだったのに、ってい
うのは、もしかして……」

その先はみこが言うまでもない。

なずなも、もうわかってているはずだった。

なずなは頭を抱え、よるめいた。せりが望んでいたことこの理解を拒絶するように、小さくゆっくり首を振りながら。

認めたくない。信じたくない。なずなはそんな心境だった。

そんななずなの姿を前にして、みこはかけるべき言葉を探した。けれど見つかったのは、最低の一言だった。でも、こうするのが一番いいと思ったから、だからみこは笑顔で告げる。目の端に水滴があるのは気のせいだと、自身に言い聞かせて。

「せりつてさ、なずなのこと大好きなんだね」

……なずな……いくらかける言葉が見つからないからって、これは酷いよね。卑怯だよ。だからね、後でいくらでも罵っていいから、私のこと。

「……ばか。……せりの大馬鹿あ！……ひう……ぐす……」

はっと目を見開いたかと思うと、言うだけ言ってその場に入なへと座り込み、なずなは泣き出してしまった。

みこは咄嗟になずなを抱きしめていた。

「ごめんね、せりじゃなくて、ごめんね……」

本来なら自分の役目ではないのでは、という後ろめたさからか、なずなが泣き止むまで、みこはずっと謝り続けていた。

第3話 6月9日 放課後その2

せりはもう、帰ってしまったのだろうか？

なずなが泣き止む頃には、夕闇が世界を包み始めていた。

「……少しは、落ち着いた？」

みこも人のことを言えた立場ではないが、黙ったまま一言も喋らないなずなが気になったので、そう声をかけた。

「せりは、死ぬつもりだったんだね。わたしが死んでから、ずっと一人で苦しんでたんだ」

みこの耳元で聞こえたのは、凧の海のように穏やかな声だった。どうやら、今は落ち着いているらしい。

よかった……と、みこは胸を撫で下ろした。

さて、続きだ。この様子なら大丈夫だろう。

「なずながこの世に留まったこと、せりが幽霊を……なずなを見ることができたこと。この時点でもう奇跡だよ。この奇跡のおかげで、せりは死ななかった。なずながどれだけ悲しむか、せりには痛いほどよくわかってしまうから、死ねなかった」

そこで、みこは言葉を切った。

なずなが体を離れたからだ。

彼女はすっと立ち上がると、屋上の端まで行き、掴めないフェンスを掴むようにして、どこか遠くへ視線を向けた。

屋上に吹きつける風で、ポニーテールが力なく揺れていた。

このままどこかへ消えてしまっくんじゃないか……。

寂しそうなその背中へ、みこにそんな不安を抱かせた。今すぐにも抱きしめたい。不意にみこはそんな衝動に襲われた。けれど、堪える。それをするのは、誰でもいいというわけではないから。本当にそれをすべき人間がいるのだから。

……ねえ、せり？

心の中で、走り去っていった少女に呼びかける。なずなと共に在るべき少女に。

「皮肉なことに、わたしが死んだせいだよね」

視線をそのままに、なずなはそんなことを言った。みこは何も言わなかった。言えなかった。

だから、その言い草には触れずに、話の続きをすることにした。

「ここまでではよかった。もちろん、なずなが死んだことを除けばね。だけど、幸か不幸か、せりには先見の力があつた。やがて来る大黒蛇の存在を知ってしまった」

気になるのは、先見の力を持つせりが、どうしてなずなの死を防げなかったのか。

幽霊としてこちらに留まっていることから、なずなの死についてもどこか腑に落ちない。

この二つのことに、何か関係性はあるのだろうか？

そんな、少し考えたら浮かんでくる当然の疑問を、今は胸の奥に押し隠す。

「実はさ、せりに先見の力があるってことは知ってたんだ」

言わずらそうにしながら、こちらを振り向いたなずなは白状した。

「せりが打ち明けてくれたの？」

きつと、そうなのだろう。なんとなくだが、それ以外は考えられないような気がする。

訊ねられたなずなの方はというと、なんだか嬉しそうに微笑んでいた。

その理由はある程度予想できてしまうわけだが。

「そう。なんとなくさ、そんな気はしてたんだ。妙に勘がよかったから。だから、せりがそのことを告白してくれたとき、あんまり驚かなかった。ああ、そうなんだって。少しは驚いたけど、それどころじゃなかったし」

「それどころじゃなかったって、どういうこと？」

「わたし、話してもらえてすごく嬉しかったんだもん。狂喜乱舞って感じ。だってそうでしょ？ 未来がわかりますだなんて、誰がそんな話信じるのよ？」

「えっと……」

みこにもそんな覚えがあった。

……ちっちゃい頃、友達に幽霊が見えるって言っても、誰も信じられなかったなあ……。しようちゃん以外は。

結局、見えない人からすれば幽霊なんていないことになるのだろうか。

触れることもできるみこには、生きているものと幽霊の区別がつかない、なんてことさえあるというのに。特に一人でいる時は、相手が壁抜けしたり浮いたりしてくれないと、幽霊かどうかわかり辛い。

「……確かに、信じてくれる人はなかなかいないかもねえ」

「でしょ？ 普通だったら、事実であっても、ううん、事実だったらなおさら秘密にしておくようなことなのに……。そんな、普通だったら信じてもらえないようなことを、わたしに打ち明けてくれたの。その時のせりは、どれだけ不安な気持ちでいたことが……。ただ目に焼き付いてるよ。不安を押し隠しきれない、緊張したせりの表情」

その時を懐かしむように、瞼の裏に焼きつけた光景を見るかのように、なずなは目を閉じた。

「その信じられないような話を、なずなはちゃんと信じたんだね」
なずなのあまりにも柔和な表情が眩しく見えて、みこは目を細めた。

「当たり前よ。だってせりは、わたしにとって一番大切な存在だから」

その言葉は自信に溢れていて、とても力強かった。

「その一番大切な人があなたと共に、死ぬどころか消滅しようとしています。恋人であるあなたはどうしますか？」

みこは胸がチクリと痛むのを感じた。

このやり方は、やはり卑怯だろうか？

けれど、みこの言葉ではだめなのだ。今のせりの心に届くのは、彼女にとってかけがえのない存在である、なずなの言葉だけ。

我ながら酷い言い訳だなあと、みこは自己嫌悪に陥ってしまふ。

「わたし、止めません！」

なずなはにこやかに告げた。

「は？」

みこは口を開けたまま石化した。

きつぱりとなずなの口から言い放たれた言葉。それを理解するのに、みこは数秒要した。

“止めない”なんて回答は、まったくもって予想していなかったからだ。

なずなも、せりと一緒に消えることを望むのだろうか。

理解して みこは「どうして」と訊ねた。

対するなずなは、みこの反応を楽しむように、にこにこ笑うばかりで答えてくれそうにない。

……なんだかなずなの笑顔って、見ているこっちも元気をわけてもらえてるような気がして、なんかいいなーなんて。いやいや、そんなこと考えてる場合じゃなくてですね。えーと、ああもうなんだっけ！

「まあ、なずながそう決めたなら、このことについて今のところは何も言わないけどね。それよりもなずな、成仏できない理由、思い当たることあった？」

途端、なずなの表情は曇った。

「あー、それがさ……」

「さっきまでの話だと、どう考えても“せり離れできないから”だと思っただけど、違う?」

みこは意地悪な質問を、これまた意地悪な笑みを浮かべつつ投げかけた。

お茶を濁そうたって、そうはさせない。

「うっ……」

図星をつかれたなずなは何も言えなかった。
恥ずかしいのか、赤面している。

「例えそうだとしても、こんか……」

魂還、と言おうとして、説明していないからそれでは意味が伝わらないと思い、言い直す。

「えっと、成仏しろとか言つつもりないし、無理に成仏させようとしたりしないよ」

なずなを安心させるためにも、みこは本音をそのまま口にした。
そもそも、死んですぐにこの世から去らないことは別に悪いことじゃない。それができないのは、それなりに理由があるのだから。

……ほとんどの場合、どれだけあがいてもどうしようもなくて、

泣く泣くそうするんだけどね。

だけど、なずなの場合はそうじゃない。なずなもせりも、お互いを認識できる。言葉を交わせる。

確かになずなの生前の体はもう失われてしまっているけれど、言ってみればただそれだけのことなのだから。

せりが霊体を感じられるように、触れられるようになれば、その壁さえ消滅する。

二人の絆が本物なら、それは十分あり得る現象だった。

「……ほんとに？」

なずなは身を縮ませ、上目使いでこちらの顔色を窺った。

「ほんと。もし私がそんなことしようとしたら、呪い殺してくれていいよ。私、抵抗しないから」

「の、呪い殺したりなんかしないよ！」

なずなは、胸のすぐ前にそれぞれ握り拳を作って前屈みになり、心外だとばかりに抗議した。

「……えつと、年上……なんだよね？」

なんとというか、かなり子供っぽい仕草だ。

みこは自分のことを一切棚上げて、失礼なことを考えていた。紗希や翔雨が知れば、一言一言あったに違いない。

「ほんとかなあ？」

思わずにやにやしながら、疑っているふりをする。

「ほんとだって！ そんなことより、せり探そ？ わたしの気持ち、伝えたいんだ！」

胸の前で握りしめた手はそのまま、その場で足踏みしている。今にも駆け出しそうな雰囲気だ。

ゆさゆさと左右に揺れるポニーテール。白いリボンが耳に見えないもない

みこは、散歩に連れて行ってもらえると知って喜ぶ小犬を連想した。

「そうだね。行こっか」

そろそろ、せりも落ち着いている頃だろう。

正直、今日中にもう一度会って話をしなければとは思っていたのだけれど、一人だとなんだか気まずくて、いささか億劫だった。

なずなの提案は、みこにとってまさに渡りに船だったので、乗らせてもらうことにした。

「なずな、せりのお家ってどこ？」

「え？ なんでせりの家に行くの？」

なずなは意味がわからないといった風に首を傾げる。

「だって、もう帰っててもおかしくないじゃない？」

「せり、まだ学校にいるよ？」

もう帰ってしまったかと思っただが、どうやら違うらしい。けれど、どうしてそんなことがなすなに……。思考し、みこは『結び憑き』という言葉を想起した。

「……………どうしてわかるの？」

もしやと思い、期待を胸に問いかける。

「感じるんだ、せりを……。気配というか、なんというか」

「そっか……………恋人って言ってたもんね……………」

みこは笑みが零れそうになった。なんというか、いいなあと思っ
た。

死でも別つことのできないくらい、二人は強い愛の絆で結ばれて
いるということなのだから。

結び憑きとは、生前にお互いを強く想い続けていた場合に起こる
現象だ。

なすなのせりを想う気持ちと、せりのなすなを想う気持ちとが、
固く結ばれている。

その結びつきを通じて、離れていてもお互いの存在を感知できる
ようになっていく。

心と心がいつも寄り添っているようなものだからだ。

それはきつと、すぐ隣に愛する人がいるように素敵なこと。いつ
でも、どこでも、大事な人をとて近くに感じられるのだから。

結び憑きとはいっても、決して相手に取り憑いているというわけ
ではない。

なすなはあくまでも自由であり、せりからしてみればなすなは守
護霊みたいなものだ。

結び憑いているのなら、なんとかできる……………。

きつと、心は通じ合っているはず。感覚を磨けば、お互いに触れあうことも夢ではない。

二人の間でどのような取り決めがなされているのかはわからないが、その気になればお互いの思っていることや考えていること、感じていることなどを知ることが容易だ。

「どうしたの？　なんかみこ、嬉しそうだけど……」

その原因たる一人が怪訝な顔をした。

笑むことこそしなかったとはいえ、どうやらそついう雰囲気だったらしい。

「んー、そうかなあ？」

「そつだよ。一体どうしたっていうのさ？」

今ここで話すより、せりと合流してから話した方がいいだろうと考えたみこは、

「ひ・み・つ」

悪戯っぽく笑って見せた。

「う！」

するとなぜか、なずなの頬が一気に朱に染まった。

瞬きさえせずに、じつとこちらを見たままなずなは微動だにしない。

……う？　うってなんだろう？

みこが不思議そうに首を傾げると、夢から覚めたみたいにはつと
なったはずなは蹲り「だめよな。あなたにはせりという運命の
人がいるのっ！ せりせりせりせり……はぁん」などと、時折身悶
えしながら、呪文のように呟くのだった。

ええつと……。私のせい、なのかな……？

みこは困ったように苦笑し、指先で頬を掻いた。

第4話 6月9日 放課後その3

衝動的に走り出してしまったせりは、自然と校舎裏に行き着いた。気付いたらそこにいた。まさに、そんな感じだった。

屋上からここまで、一度も減速することなく駆け抜けてきたがために、せりの心臓は暴れていた。

手を膝につき、呼吸を落ち着かせる。

息が整っていくとともに、ある程度の冷静さも取り戻したせりは、ここが“その場所”であることを認識した。

「……なんで、ここに来たんだろっ……」

呆然と呟き、壁に背を預けた。

なずなの幽霊を見つけてからは、二度と訪れまいとしていたはずなのに。

「なずな……」

「ごめんなさい。」

後に続く言葉は口に出されず、心の中で呟かれた。

ここに来ると、どうしても思い出してしまう。

あの瞬間を……。

屋上から真つ逆さまに落ちてくるなずなの体。

頭から地面に激突する瞬間に聞いた、鈍くて嫌な音。

首がへし折れ、有り得ない方向を向いたなずなの顔。

広がっていく、赤い血。

驚いたように見開いたままのなずなの目。

気配を感じて空を見上げると、眼前にフェンスが迫っていて……。

当たる。そう確信したせりは、目をぎゅっと閉ざした。

『タルト、おねがい』

そんな声が聞こえたような気がして、

「え……?」

うつすらと開いてみた視界に何かの影が映り、同時にフェンスの軋む音がした。

恐る恐る周囲を見渡すと、くの字に折れ曲がったフェンスがなすなの近くに落ちていた。

数日前に見た光景が、そこにあった。

校舎裏。そこで、なすなが頭から血を流して倒れていて、ぴくりとも動かない。

まさかと思って屋上を見ると、フェンスが一枚足りなくて……なすなの近くに形の歪んだフェンスが転がっている……。

先見の力が見せた、近い将来。

肝心の日時がわからない、そんな半端な能力だから。だからせりは可能な限りなすなに張り付いていた。警告も、もちろんした。

……なのに。それなのに、防げなかった……。

なすなの姿が見当たらなくて、不安に思ったせりは散々探し回った末、心臓にナイフを突き付けられているような思いで校舎裏に来た。

その時、そこには誰もいなくて、なすなの体もなくて。

杞憂だと思った。今日じゃないと思った。

念のため“もう一度”屋上を見に行こう。それで、一先ずは安心しよう。そう考えていた、その矢先。

よりもよって、目の前になずなが落ちてくるなんて。

……屋上で待っていればよかったんだ。たとえ式がもうすぐ始まってしまふような時間だったとしても。そろそろ体育館にいるだろう、なんて考えずに。

「せり、みーっけ」

突然の声に、せりは跳び上がりそうになった。
ぎりぎりのところでそうならなかったのは、その声が自身にとつてとても大切な恋人（ひと）のものだったからだろう。

「……なずな」

せりが背にしているすぐ横の壁をすり抜けて、なずなが姿を現した。

それに少し遅れて、

「生身じゃ壁抜けできないからなあ……」

上から降ってくる声。視線を上げると、学校制服の割にどうしてか丈の短いスカートを手で押さえながら、みこが二階の窓から飛び降りてくる。

「み、みこ!？」

静かに着地したみこはなずなと並び立った。
いつもと変わらぬ雰囲気になずな。一方みこはどこか身を固くし

ているように見受けられた。

「な、何の用よ……？」

どこか険のある声を出している自分が、せりは嫌になった。

「用もなにも、まだ話は終わってないからね。まずは……ごめんなさい」

「え？」

いきなり深々と頭を下げたみこに戸惑う。

この娘は一体何を言い出すんだろう？

どうして謝られているのかわかっていない。

そのことをせりの表情から読み取ったのが、みこは言い難そうに理由を告げる。

「その、なずなに話しちゃったから、さ。勝手に、いろいろと……」

ああそのことか。合点がいくと共に、なずなの方に視線が動いてしまう。

視線を受けたなずなはにっこり笑って、

「わたし、止めないよ」

それは、せりが望んでいた答え。

「それじゃあ！」

「でもね」

せりの喜ぶ顔を、今度は悲しげに見つめながら、

「わたしは、一緒に食べられてあげない」

そんな答えを、なずなは導き出したりしていなかった。

「っ」

せりは頭の中が真っ白になった。

「なん……で」

なぜ？ どうして？

そればかりが心中で渦巻き、なずなに縋るような視線を送ってしまふ。

「だって、消えちゃったら二度と巡り会えなくなるじゃない。それに、わたしはまだ消えるわけにはいかないんだ。せりがそんなじや、安心して逝けない」

二度と巡り会えなくなる。

……それは、もし来世というものがあるのなら、それは確かにそうだけ。

だけど、生まれ変わるなんて、来世だなんて、そんなものがあるとは、とてもじゃないけど信じられない。それにね、なずな。安心できないって言うけどさ。それだったら……。

「じゃあ、さ。どうして……どうして一人で死んだの？」

「それは……」

なずなは言葉を詰まらせ、黙り込んだ。

「どうして黙るの？」

いつもそうだった。この質問をせりがすると、決まってなずなは黙り込む。

……それはつまり、あたしに知られたら、まずい理由だってことなの？

「なずなっ!」

今にも掴みかかりそうな勢い。すでにその一歩踏み出している。そんなせりと、返答に窮するなずなとの間に、

「はい、そこまで!」

みこが割って入った。

「みこ……?」

「みこ……?」

二人の声が見事に同じタイミングで発せられてしまったあたり、やはり彼女らは仲がいいというべきか。

二人の話に口を挟むつもりがないかのように、黙って成り行きを見守っていたみこがいきなり割って入ったため、せりもなずなも怪

訝そうにしている。

「えっとね、せりに確認したいんだけどさ、せりはなずなと一緒に居たいんだよね？」

みこは、先ほどの緊張したような感じではなくなっている。むしろ余裕があるように見受けられるのは、その表情が旧友と久しぶりに会った時のような、嬉しげなものだからだろうか。

まるで、そう思えるようになることを確信しているかのようである…。

正直、今のせりには不快なものだった。

「……そうよ」

せりは顔を背けながら、吐き捨てるように告げる。

……みこにあたっては仕方がないのに。

しかし当のみこは、まるで意に介した風もなく、微笑みさえ浮かべて見せている。

「じゃあ、消える必要はないよね？」

どこに消える必要性があるのかな？

罪悪感から直視できないけれど、みこの視線はそう言いたげだった。そこに、他意は感じられない。

「確かになずなが見えて、話もできるわ。でも、なずなは幽霊で…」

せりがそこまで言ったところで、

「幽霊だと、何がいけないの？」

みこが心底不思議そうな顔で訊いた。

「……え？」

……むしろ何がいいのか、あたしが訊きたい。

「私にとっては、幽霊も生者もあまり変わらないんだよ。だから、何でだめなのか、いまいちよくわかんなくて」

小鳥とかリスとかそこらへんの小動物がするような感じで、みこは小首を傾げて見せた。

……そっか。幽霊とかそういうものに、みこは触れられるんだっけ。聞く限りでは、それ以上のこともできるのかな……。

「だって、あたし達は触れ合えないじゃない！」

みこにとっては、相手が幽霊であっても、それが問題となることはないのかもしれない。

相手が死んでしまっても、幽霊としてもそこに存在するのならば、あまり変わりが無いのなら、そうだろう。

けれども、せりは違うのだ。

……みこみたい人は、ほんの一握りだけなのに。

仮に、死んでしまった大切な人の魂が、成仏できずに幽霊となっ

て、まだ近くを彷徨っていたとしても、それをほとんどの人は認識できないのだから。

よしんば認識できたとしても、触れられる者などそうそういない。みこにとってはなんてことのないことでも、せりにとっては、愛する人が　　なずなが幽霊であることは、絶望的なまでの障壁となる。

……いつそ見えない方がよかった。何度そう思ったことか。

そう気持ちが沈みかけた時だった、

「なずなに限って言えばだけど、触れるようになれる……触れ合えるようになることができるとしたら？」

せりとなずなにとって聞き捨てならないことを、みこは告げた。

「……は？」

せりは耳を疑った。

なずなの様子を見ると、みこから何も知らされていないのだったのか、彼女も驚いているようで、目を見開き両手を口元にやっている。その手の下では、声にならない声を発した形のまま、口が塞がらないのだろう。

「ちょ、ちょっと待ってよ。そんな……そんなこと……」

できるの？

せりは問いかけるように、期待と不安の渦巻く視線をみこ向ける。なずなの方も、半信半疑の視線をみこに注いでいた。

……本当、なんだろうか。

「ねえ、せり。消えるだなんて言わないで、私に賭けてみる気、ないかな？」

人懐っこい笑顔でそう提案するみこを、せりは睨みつけるように見つめた。

次いで、なずなと顔を見合わせる。

「なずなはどうするの……？」

「わたしは信じたいな。せりはどうしたい？」

「あたしは……」

何ら迷うような素振りを見せることもなく、さらっと言い切るなずな。

どうしてこんな都合のいい話をあっさりと信じようとするのだろうか。

それも、今までもろくに話をしたこともない相手の。

……いくら気持ちで判断するタイプだからって、そんな簡単に信じるのはどうなのよ、なずな。……そりゃあ、あたしも信じたいけど。けど……。

せりは、返事を待つみことなずなに視線を往復させた。

「あ、そっか。そっだよね……。どうして触れ合えるようになるのかの根拠がないと、信じたくても無理があるよね」

ややあつて、合点がいったかのように手を打ったみこが「えいっ！」と一声。

なずなの手首を掴み、もう一方でせりの手首も掴むと、おもむろに二人を引つ張って　その二つの手を、なんと繋ぎ合わせた！

「！？」

「！？」

何が起こったのか、せりにはまるでわからなかった。いや、頭では理解しているのだが、心が追いつかないのだ。

なずなと二人して、まじまじと繋がれた手を凝視したまま動けなかった。

そのままたつぷり一分ほどして、

……あたし、さ、さわ、さ、触れてる……。なずなと手を繋いでる！

ようやく追いつく心。

今度は喜びのあまり、とにもかくにもじっとしてはいられなくなったので、せりは思い切つてなずなを抱きしめた。

鏡に映したのかと思いたくなるくらい、まったく同じようにしてなずなも抱きついてきていた。

呼吸が止まるんじゃないかってくらいに強くてきつい抱擁。ぎゅううつと抱き寄せられた体が痛みを訴える。けれど、めり込むんじゃないかってほどに密着した体の感触があまりにも心地よくて、その苦しさや痛みさえもが愛おしい。

……嗚呼。ずっと、こうしたかったんだ……。

「なずな……」

「せり……」

抱き合う二人の目の端には、涙が浮かんでいた。

第5話 6月9日 放課後その4

下校時刻も過ぎて、すっかり暗くなつた頃。

みこら三人は学校の近くの公園にやってきていた。

住宅地の中でありながら、意外と広い敷地に、色とりどりの花が植えられた花壇は手入れも行き届いているため、散歩のために訪る人も多い。桜のために用意されたスペースもあり、その季節には花見に訪れる人も少なくない。

そんな公園も今は、朝夕別々の子供の元気な声が嘘のようにしんと静まりかえつていて、時折寂しそうな風が力なく吹いている。

それでも、犬の散歩等の理由で多少は人の往来があるため、他の人には見えないはずなを含めて会話をするのは、少なからず氣を使う必要がある。

だからみこは、なるべく人目につかない場所に二人を誘導した。

その場所とは、花が咲き誇っている時期にはこれ以上なく人目につきやすいが、季節が過ぎて花弁が散り、青々とした葉っぱを生い茂らせている今となつては、わざわざ暗くなつてから見に来るような人は滅多にいない、桜の花見用スペースの奥だった。

ひっそりとあるベンチにせりとなずなを座らせ、みこはその後ろに回つて二人それぞれの肩に手を添えている。

「どつなつてるの？」

やっと気分が落ち着いたらしいせりが、再びなずなと繋ぐことができた自分の手を一瞥して訊いた。

「ん？ せりとなずなが手を繋いでる」

恋人繋ぎだねと、みこは微笑みの花を咲かせた。

「そ、そ、そうじゃなくて！」

面と向かって言われたせい、せりは照れてしまって、ほんのりと朱に染めていたその頬をさらに赤くした。

みこの目を気にするどころか、むしろこれでもかというくらい見せつけるように抱擁し合っておいて、何を今更恥ずかしがっているのだろうか。

……見てるこっちが恥ずかしいんだよねえ。女の子同士っていうことについては、別にいいんだけど。

動くに動けないこちらの身にもなって欲しい。

もちろん、この気持ちは現在進行形だ。

みこがそう思う原因、努めて気にしないようにしていたなずなへ目をやると、

「わーい触れるー！」

彼女は先程からはしゃぎっぱなしで、せりのあんなところやそんなところまで、ここぞとばかりに遠慮も躊躇もなく触ったりいじったり、頬擦りしたりしていた。

無理もない。特になずなは幽霊となつてから、せりはおるか、何にも触れられなかったのだから。触覚に飢えているのだろう。

「きゃんっ。ちょっと、あんっ、まって、なずなっ、はうんっ！」

くすぐられた子猫みたいに、せりが実にかわいらしい声で鳴き、小柄な体をびくびくさせている。

さすがにみこは頬をひきつらせた。要するに、引いたのである。

なずなの手が伸びる先を見てしまったからだ。

……うわぁ。あの、なずなさん？　ここ、公園なんですけど。まだそういうことするような時間じゃないんですけど？　それなのにあなたという幽霊ひよは、一体誰のどこをお触りで！？

「ごめんね、せり。もう無理、待てない。我慢できないよう」

うつとりとした目でせりを見つめ、熱い吐息を漏らしながらもたれかかる。

なずなはせりの髪に顔を埋めて匂いを嗅ぎ、首筋にキスをし、耳を甘噛みした。

「なずな　つく、んあつ……」

堪らないといった感じで身を震わせたせりは、切なげな声を上げ　ちらとみこを見て、声を漏らすまいと、空いている方の手で慌てて口を押さえた。

「んんっ、んぐっ、んん　」

それがかえって扇情的な感じを生み出す結果となったように思えるのは、みこの気のせいだろうか。

「せり……手、どけて？」

口を押さえるせりの手に、自身の手を重ねたなずなは、何かを求めて哀願する。なずなのその目を見たせりは、彼女が何を求めているのか、手に取るようにわかった。

ゆっくりとなずなによって下ろされていく、力の抜かれたせりの

手。

その手で覆われていたものが露わになるやいなや。 。
呆然とその衝撃的な光景を見つめること数秒。頭から湯気でも立ち上りそうなほどに赤面したみこは、耐えきれなくなって目を閉じた。

視界が暗闇に閉ざされ、塞げない耳から音のみが入ってくる。

……あわわわわっ。思わず目を閉じちゃったけど、こういうのは見ない方がいいんだよね？ まあ、見てよくても見ないけど。

二人の吐息と粘着質な音が、目を閉ざしたがために、より鮮明に聞こえてくる。とはいえ、フレンチキスを眺めるような趣味は生憎と持ち合わせていない。

しかし、だ。ずっと目を閉じているというわけにもいかない。目を閉じたことで敏感になった聴覚は、確かに足音を捉えていた。それも、近づいている。

端から見たら、今の状況のはかなり異様なものに映るだろう。何も無い空間に向かって一心不乱に舌を絡める少女と、その後ろで何も無い空間に手を添えつつ、目の前の少女を止めようとするらしい少女の二人組。

……うん、変だ。すっごく変。

たとえなすが見えたとしても、そういうのが好きな人でもない限り、この光景は見せられたものではない。せりの気持ちを鑑みれば、見させるわけにもいかない。

そういうわけで、足音が過ぎ去るまでは警戒しなければならず、さらには、これ以上近づいてこられたら、木々の合間を縫って遠目に見えてしまいかねないので、目を開いて周囲を確認し、二人を無理矢理にでも止めなければならぬ。

「二人とも、お楽しみのところ悪いんだけど……」

勇気を振り絞って目を開ける。

やっぱり二人は濃厚な接吻を継続中で、その行為に夢中なのか、みこの言葉に対してまるで反応がない。

「……あう」

みこはちよつと逡巡してから、双方の肩から手を離した。

途端に二人の体は貫通し合う。世界に対する在り方が異なる二人の間を繋いでいた、みこという仲介役がいなくなったことで、情報の食い違いが生じたのだ。

……二人とも、ごめん。

みこは心の中で謝罪した。がつつくようにせりの唇を、舌を、口内を蹂躪していたなずなは、その前のめりの姿勢からか、せりとベロンチを貫通して地面に頭が半ばまで埋まった。

「んぐうつ!?!?」

ぶはっ、と水の中から顔をだすみたいに頭を引き抜いたなずなは恨めしそうな目でみこを仰ぎ見た。

「むー。いいとこだったのにい」

抗議の声を上げられると、みこは謝るしかない。

「い、ごめんなさい……」

尚も不満を言い募ろうとするなずなを、せりが止めた。

「待つてなずな。……もうすぐ誰かが通りかかる」

足音が、どちらの出入り口の側から聞こえているのかまではわからなかったみことは違い、せりは自分たちが入ってきた方とは違う、もう一方の出入り口からこちらまでの道のりの中途を見つめていた。

「もしかして、さつき待つてって言ったときには見えてた？」

みこの問いに、せりは首を横に振った。

「キスの最中に、ね。頭がぼーっとして、まあいいやって、つい思っってしまったけど」

誤魔化すように視線を明後日の方向へ向け、髪を意味もなくいじる。

「そこは思いとどまってくれないと……って、まあ無理か」

なずなのように内心を表に出してはいないが、せりもまた興奮しているのだろう。

唐突に断ち切られた、当たり前だったこと。二度とないはずだったそれが、再び蘇ったのだから。

「……あれ？」

視線を足音の方へと向けたみこは首を傾げた。

思いも寄らぬ人物がそこにいたからだ。

その人物　翔雨は、ゴミ籠に何かの中身を捨てていた。
どこか気落ちした風に肩を落とし、誰かに謝るかのようにゴミ籠
を拜んでから、元来た道を辿り始めた。

「どうしたの？」

不思議そうにしたせりが小声で訊ねる。

「ん。なんでもない……かな」

みこはかぶりを振ってそれに答えた。

……しよつちゃん。

離れたところから目にした光景に、みこの心がちくりと痛んだ。
なぜなら……翔雨が手にしていた物は、見覚えがある物だったから。

第6話 6月9日 都守の屋敷

みこの家は、学校の最寄りの鳥居駅から電車に揺られること二駅、上代駅で降りてさらに四十分ほど歩いたところにあった。上代山中腹にある、都守神社の裏手である。

「すっかり遅くなっちゃったねえ」

みこは隣で疲れたように立ち尽くすせりと、気遣わしげにそんなせりを見ているなずに苦笑した。

「えっと……どうしたの？」

「いや、どうしたもこうも……。ねえ、なぜな？」

「うん。まさかこんなに歩くとは思わなかったよ。しかも途中からずっと登り坂だし。わたしは浮いてるからいいけど、せりにはちよつときついと思う。みこって普段の通学どうしてるのさ？」

「駅まで歩いてるけど」

「……………」

「……………」

半ば呆れたような顔を見せるせりとなぜな。

みこのすらっとした細い足に詳しい目がいつてしまつ。よくこれでする足が太くなつてしまわないものだ。

「それにしても……ここがみこの家なんだ」

せりは改めて目の前の家を見て、溜息混じりにそういった。どう見たってお金持ちな人が住んでいそうな洋風のお屋敷だった。それにしても、どうして洋風なのだろうか。普通に考えて、こういう場合は和風だろうに。

確かに、レンガ風の赤茶けた壁には葉を茂らせた何かの植物の蔭が絡んでいたりと、周りを囲む木々によってあまり目立つこともなく、山中にひっそりと佇むその屋敷は、神社周辺の景観を損ねているというわけでもないのだが。

「その……なんで洋風？」

「えっとね、和風な建物は神社で間に合ってるから、こっちは洋風にしようってことらしいの。とりあえず上がってくださいな」

質問を不思議に思うこともなく、みこはさらっと言ったのけた。

「さいですか」

「……………」

せりが微妙に不機嫌になったような感じがして、みこは「もしかして私、なんか変なこと言っちゃったかな？」と首を傾げた。

「いや、ううん。なんでもないから」

とりあえずみこは、二階の来客用の部屋に二人を通すことにした。従姉妹や紗希のように泊まりがけで遊びに来る人や、日数のかかる処置を依頼した人のために用意してある部屋だ。ちなみに、そうい

う部屋は他にもある。

「人の気配が全くしなかつたけど、誰もいないの？」

聞き耳を立てるようにしていたせりが怪訝な顔をした。

「うん。明日までは私一人だよ。家の人はみんな出払っちゃってて、普段の仕事……表の仕事って言えばいいかな、その表の仕事の他にもね、私みたいなのが生まれる異能持ちの家系にしかできないことがあるから、それで。……まあ、家の仕事に表も裏もないんだけど」

「そうなんだ……」

なずながどこか悲しげに呟いた。視線の先には……せり？ 何やらただならぬ事情がありそうな感じだった。

「飲み物持ってくるよ。何がいいかな？」

「麦茶があるなら麦茶でお願いするわね。なかつたらお水で」

「わたしはオレンジジュースがいいー！」

「なずなは飲めないでしょ」

「あ、そうか。わたし幽霊だった……」

がつくりとなずなはうなだれた。それと同時に悲しげに揺れるポニーテール。なずなの気持ちの浮き沈みとポニーテールは、どうやらリンクしているようだった。

「幽霊でも飲めるよ？ 家にあるものは、だけど」

そんな二人に、口元に笑みを浮かべたみこは片目を瞑ってみせた。

「えっ！ みこそれほんと？ なずなも飲めるの！？」

二人の瞳にそれぞれ期待が満ちる。

「うん。それとね、二人とも、何か気づいたことはない？」

「え、何を……？」

せりは首を傾げ、記憶を遡るように目を閉じた。

「なずなが廊下や階段を歩いて通ったことだよ。ちゃんと足音もあつたと思うんだけど」

「そういえばわたし歩いてたね。今だってちゃんと座れてるし。……あれ？」

なずなが自分の体を見下ろした。そうして、瞬きを数回繰り返してから視線をみこに向け、せりに移してからもう一度自分の体を見た。

「つて嘘！」

なずなは勢いよく立ち上がって歓声を上げた。

「見てよせり、わたし自分の足で立ってるよ！」

「なずなも気づいてなかったんだね……」

他のことに気を取られていたらしいせりはともかく、まさか当人が気づいていなかったとは。それがむしろなずならしいような気がしてしまうから、みこは苦笑するしかない。

「ほ、ほんとに立ってる……!」

床を踏みしめたりしてはしゃぐなずなの傍らで、せりはそこにいるはずのない死んだ人間でも見たときのような、驚愕の表情を浮かべていた。

……まあ、なずなは幽霊だけど。

「でも一体どうして?」

「家に結界張つてあるからだよ。『変換結界・物感・快』っていうの。家の中にいる限り、幽霊さんは物質透過をすることができなくなっちゃいます。幽霊のいる異相次元に、檻を作つて閉じ込めるっていうのが元々の術なんだけど、私はそれにちよつと細工しまして、生きているのとだいたい同じような感じで振る舞えるようにしちゃいました。ちゃんと生前の感覚を味わえるようになって……なつてると、いいなあ」

「うん、全然わかんない」

「なずな、そういうことは胸張って言わない」

「はっ……」

がくつとみこが肩を落とすと、

「あっ、でもでもっ、感覚はまるで生き返ったみたいだよ！」

なずなは焦りも露わにそう口にした。

「そ、そうかな？ なら、良いんだけどなあ……」

なずなには悪いと思いつつも、みこは素直に喜べない心境となつてしまっていた。だからみこは、せめて本当にそうであることを祈った。

「その結界って、あたしがなずなに触れるようになれたりはしないの？」

「えっと、人とか生物はそれぞれ認識の仕方が異なるから、この術だと無理なんだ。できるとすれば、どちらかが一方的に触れるっていうのが限度だから。でもそんなのは嫌だよね？」

何か薄い膜とかラップみたいなもので、なずなを包み込んでしまう。そういう選択肢もあるにはある。が、本当にやりそうなので黙っておく。せりではなくずなが、である。そもそも二人が本当に望むのはそんな接触の仕方ではないし、どのみち今晚中にはどうにかなるのだ。

「ええ……」

「寝る時間までには何とかするよ。せりも久しぶりになずなと目一杯、愛し合いたいみたいだしねえ」

「み、みっ！！」

「ねねっ、どうせならみこも混ぜろっよ。わたしたち、お礼にすっごく気持ちよくしてあげる！」

何かを言おうとして、あとが続かなかったせりに代わり、なずなが閃いたとばかりに提案した。

「……それは名案ね」

せりは少しの間考え込んだかと思うと、真剣な表情で頷いた。

「えっええんりよりよ、遠慮しておくよ」

顔を熟れたリングゴみたいにしたみこは、それだけ言うと逃げるように階下に向かった。

沈みそうになったせりを励まそうと冗談で言うてはみたが、返しにまさかあんな提案がなされるとは。みこは自分の発言を、ちよつとだけ後悔した。

「ああっ、あっ、熱い。熱いよせりっ！」

「これはお仕置きよ、なずな。さっさと股を広げて晒しなさい。さつきから人のばっかりじーっと観察してっ！」

「あっ、熱い。火傷しちゃう！ あんっ、止めて」

「あら、それなら股をこつちに差し出ししているのはどうしてかしら？ 本当はもつとして欲しいんでしょ。この変態！」

洗面所兼脱衣場に、二人分のバスタオルと着替えを置きに来たみこは、扉一枚隔てた浴室から聞こえてきた声にぎよつとなつた。何やらお取り込み中のようだ。

「た、タオルと着替え、置いてくねー」

電光石火の早技で廊下に出たみこは、大きな音がするのもお構いなしに、力強く扉を閉めた。

……聞かなかつたことにしよう。うん。私は何も聞いてないからね？ 別に中の様子が気になつて仕方がないっていうわけじゃないから。うん。

せりが攻めでなずなが受けなんだーとか、せりつてSだつたんだーとか、なずなはやっぱリDMさんみたいだなあとか、これっぽっちも思つてないんだから。

きつと熱湯シャワー……。私つたら何を想像してるんだろう……。

妙な体の火照りとにわかになつた鼓動を鎮めるため、みこは深呼吸を何度も繰り返した。

「さて、二人がお風呂で楽しんでいる間に準備済まさなくちゃ」

足早に向かつたのは一階にある自室。

「墨と筆と赤糸と、えーつと小太刀どこだっけ。後は包帯に消毒液でしょ。えーとそれから……。生飴と幽飴かな」

部屋どころか家中を漁ること数分。目的の物を揃え、手入れと確認を終えたみこは「これでよし」と、一つ頷いた。

「みこー、上がったよー」

そこへタイミング良くなずなの声がした。

みこが廊下に出ると、二人の浴衣姿があった。

せりのそれは、黒地に描かれた鮮血のように赤い曼珠沙華が印象的だ。

普段は物静かであり、理知的な目をしたせりにはとてもよく似合っている。

背が低めなことあつてか、どこかお人形さんめいた愛らしさがあつた。

一方、なずなが着ているものは、桃地に花開いた桜の枝やひらひらと舞う白い花卉が描かれている。

黙って大人しくしているなずなは、普段の元気潑刺としている雰囲気もなりを潜め、それはもう清楚で、かわいらしさに溢れていた。みこ自身は、赤地に桃色で描かれた花が優しげに咲き誇るものを身につけている。

「サイズは大丈夫？」

「ええ、なんとか」

せりが複雑そうな顔をしながら答えた。

「みんな浴衣だねっ。浴衣なんて、なんだか旅館に来たみたいだよ！」

そのすぐ後ろでは、なずなが袖をひらひらさせながら嬉しそうに

していた。

「せりどうしたの？　なんか、様子が変わだよ」

「その、まかさみこのお古の下着が実際に着てみるとちょうどいいサイズだなんて思いもしなかったから……」

「色んなサイズ持ってたよ。去年までしょっちゅうサイズ合わなくなっていたっぱい買う羽目になったことも、せりのおかげで報われました」

せりの視線が、みこの胸と腰とを往復する。

「みこのおっぱいって大きいわよね。そのくせお腹周りもお尻も引き締まってるし。ぼん、きゅっ、きゅっ、なんてどうやったらそんな体型になるの？」

「せりだってそうだよ。それに……もしかしなくてもお椀型でしょ？」

「みこのも形いいじゃない。張りもあるみたいだしねえ」

せりが意味ありげな眼差しをみこの胸に向けている。

「ねえねえ、二人とも誉めあつてるところ悪いんだけどさ」

やりとりを見ていたなずなが、沈んだ声で告げた。

「……………あ」

「……………あ」

何だろうと振り向いたせりが、どうしたのかなと視線を移したみが、それに気づいてそれぞれ言葉を失った。

……………うん。見事な絶壁だ。

「わたし、泣いていいかな？」

目に涙を湛え、大粒の滴をその端に浮かべたなずなの顔が、そこにあっただ。

第7話 6月9日 儀式場へと

せりと一緒に前と後ろからなずなに抱きついて胸を押し当て合うという、季節柄もあり正直言って暑苦しいことこの上ない行為をすること、どうにかなずなを宥めることに成功したみこは、二人を伴って神社へ向かった。

先刻とは違ってかわって、なずなは上機嫌だ。

……なずなに言ったらまた機嫌悪くしちゃうだろうけど、和服は胸が小さい方がより似合うというか、かっこいいと思うんだけどなあ……。

「ごめんなさい、みこ。あたしの不注意で」

境内にある儀式場へと向かう最中、ぼんやりとそんなことを思っていたところに、せりが耳打ちで謝罪してきた。

「気にしてないよ。でも、なんでなずなはあんなことをリクエストしたんだろ。あれでどうして機嫌を直したの？」

「なずなはレズなの。みこみたいな娘はなずなの大好物よ。そんな相手に抱きつかれて、なずなが機嫌を直さないなんてことはないわ」

せりは断言した。なずなの嗜好は知り尽くしているのだろう。

「せりは違つの？」

なんとなく口にして、すぐに後悔した。

「あたしはなずなが好きなのであって、なずなみたいに他の女の子まで対象にはなりません」

せりはわざわざ一字一句に力を込めて言い放った。声量を抑えていることが迫力を醸し出して、少し怖い。

「あつ……。ごめん」

……でも、否定はしないんだね。

「いいわよ別に。そう考えるのも無理ないと思ってるから。それとね、みこ。なずなが上機嫌なのは、浴衣の件もあるのよ」

「……そうなの？」

「正確に言えば、着替えなんだけどね。なずなったら『もう制服しか着れないよー！』って嘆いてたから」

その時のなずなの姿を思い出したのだろう。せりは苦笑を浮かべていた。

「制服かぁ。……そんなに嫌かな？」

みこたちの通う私立の美珠みたま高校の制服は、夏と合服はセーラー服だ。

胸元のスカーフは、一年生は白、二年生は赤、三年生は黒と、学年で異なり、スカーフの色を見れば学年がわかる。

夏は半袖の白色で、同じく白のセーラーカラーには、紺のラインが一本入っている。

合服は紺色で、同色のカラーと袖には、白の三本ラインが入って

いる。

夏服と合服のスカートは紺色のプリーツスカートのだが、夏服にいたっては赤・黒・白の物もあり、赤と白のそれには裾から三センチくらい上のところに、赤には細い白のラインが二本、白には黒い太めのラインが一本入っている。

スカートが赤ならセーラーカラーのラインも赤の物を、黒か白ならラインが黒の物を用いる。当然だが、どれか一セットあればよく全種類をコンプリートする必要はない。

冬服については、セーラー服を変形させたものとなっており、肩先には膨みをもたせ、袖口は広がっている。色は黒色で、カラーにはダークグレーのラインが三本入っている。

冬服のスカートは、黒いレースのハイウエストスカートとなっており、腰のところにある大きめの飾りリボンがかわいい。

簡単に言うとゴシックロリータ風の制服なのだ。

近々、夏服と合服のスカートはプリーツスカートだけでなく、ふんわりとした柔らかな感じのフレアスカートも選べるようになるらしい。

ちなみに、季節を問わずどうしてかスカートの丈が短く、当たり前のように夏服と合服は膝上十五センチで、冬服は季節を考え微妙に妥協したらしく、膝上十センチだったりする。

なぜか創立以来そのままらしい。脚を見せろということか。

正直、いつそのこと私服オーケーにすればいいのにも思う。しかし、それはそれで服選びに頭を悩ませることになりそうで、嬉しいようなめんどろなような……微妙な気分になる。

まあ、入学試験の面接の際に『スカートの丈が短くても構わないか』や、『未だに旧型のスクール水着を採用している』こと、『体育着の下もまだブルマのまま』だったり、『水泳の授業は男女同時間であり、普段の体育も基本は同じ場所を使うので、男子の視線は気にならないか』といったことを、別に構わないかどうか、いちいちやたら念を押すように、スカートや水着にいたっては実物を見せ

て、試着（別に着替えた後、じろじろと眺められるわけではなく、ただ単に別室で一人着てみるだけである）までさせて、問うような学校である。

そもそも学校のパンフレットにも目立つように書いてある上、偏差値もそこそこ高いため、入学を希望する者は大抵承知の上でやってくるのであろうが。

これでよく定員割れになったりもせず、今まで存続してこれたものだ。

意外なことに、入学志願者は男子生徒より女子生徒の方が、毎年多い。

一体どんなマジックなのだろうか。

……私が言うのもただけど……。だめだこの学校、変態しかない。本当に大丈夫なのかな……。

みこは今更ながらに少し不安に思った。

「おーい、みこー。戻ってこーい」

つい物思いに耽ってしまったみこのほっぺが、つんつんと指先で突かれる。

「あ、せりごめん。……私は好きだけどなあ、制服」

「いや、うん、それはあたしもそうだし、なずなもそうなんだけどね。でも、一生よ？ 一生制服なのは、みこでも流石に嫌でしょ？」

「う……、確かに、それなら巫女服の方が……」

「巫女服好きなんだ？」

「うん。大好き！」

「……みこつて素直なのね。それで、幽霊の着替えって正直どうなの？」

「うーん……。一度着替えられてるなら、大抵の幽霊は着替えられるはずだけどねえ」

せりの話によると、なずなが最初に着ていたのは冬服だったらしい。それが、せりの夏服を見た翌日にはいつの間にか夏服になっていたらしい。なずなに訊ねてみても、その本人にも何が起こったのかわからなかったというのだ。

「そういうものなんだ？ それにしてもあたし、幽霊が着替えてるところなんて初めて見たわ。案外普通なのね」

「服を思い描いて念じただけに、何もないとところから服が出てきたり、脱いだ服を消したりしているように見えるところを除けばね。実物を着るには幽霊専用のものか、家みたいに結界なりなんなり、術を施さないとだめだから」

「疑いたくはないんだけどさ……、本当になずなは大丈夫なのよね？ 安心して、いいのよね？」

「なずなから生まれて、なずなに還ってるだけだから大丈夫。でもね……」

「でも……？」

「ここから先は、なずなにも話さないといけなかな」

「ん、なあに？」

声量を普段のそれに戻すと、隣で鼻歌交じりにスキップしていたなずなが振り向いた。

「ふにゃあっ！」

気を削がれたからなのか、振り向いた拍子になずなは足をもつれさせて前に倒れた。

なずなの場合、普段から足が実際に地面と触れ合っているわけではないため、さながら空中散歩をしているみたいなので、蹴躓いたりはしない。

慣れない浴衣と、止めた方がいいというみこの忠告を無視して下駄を履いていたのが、脚をもつれさせてしまった原因だろう。

幸いというべきか、みこの家の外にいる今は、幽霊であるおかげで転んでも地面にぶつからないため、痛くも何ともない。

当然のことながら、なずなのイメージの顕現である服も汚れない。

「ふみゆう……」

「何やってるのよ……」

せりが呆れたような顔で、半ば地面に埋もれて呻くなずなを見やっつた。

「……ごめんね？」

「みこは謝らなくてもいいわよ。どう見たってなずなの不注意なんだから。それで？」

せりに続きを促され、みこはなずなに気遣わしげな視線を送りつつも続けた。

「あ、うん。えっとね、なずなはいつ成仏すればいいのかなって。私が成仏って言うのは、ちょっと変な感じがするけど」

「っ」

「へ?」

青ざめるせりと、ぽかんとするなずな。

「なずなを見てて気づいたんだけどね、せりが恋しいあまりに無理してこっちに残ってるみたいだから」

「……えっ?」

「ギクッ」

そんな二人の様子をあえて気にせず継いだ言葉に、今度は意外そうな反応をせりは示していた。

その一方で、自ら擬音を口にしつつ、起き上がりかけた四つん這いの姿勢のまま、一度びくんと身を震わせたかと思うと硬直するという、わかりやすいことこの上ない反応を示したのはなずなだ。

「……わ、わざわざそんなことを話すってことは、何かあるの?」

「いろいろかなあ。一番大事なことは、学校で言った通り、なずなは特別な魂の持ち主だから、二人にとつては悪いものに狙われちゃうってこと。危険なのは大黒蛇だけじゃないんだ。特になずなの場合、肉体という防壁の役割を果たしていた器がない無防備な状態だから、いい的です」

そこでみこは一度言葉を切り、他人事のように聞いていないかどうか、両者の表情を見て確認する。

「それに、狙われるのはせりも同じです。なずなを誘き出す最高の餌であると同時に、せりの体もまた、悪いものからすれば喉から手が出ちゃうくらいに魅力的なのです。二人は一生自分の身を危険にさらし続けることになるわけで、正直言つて長生きできない。死ぬにしても、それはとつても凄惨な最後。人の形を保つてはいないと思う」

みこはいつになく厳しい視線を二人に向ける。

「これから起こりうる弊害の内、人と幽霊の違いによるものに対しては、二人とも覚悟の上だつて学校帰りに聞いたから知ってる。でも、今の話はどう？」

みこが問いを投げかけると、せりはなずなを、なずなはせりを、お互い同じタイミングで見つめた。合図も何も無い。ただ自然と視線が向かったような、そんな感じだった。

本人らも予想外だったのか、二人の顔にそれぞれ朱が差している。それから、どちらからともなく口を開く。すると

「なずなを守る術が必要つてことね」

「せりを守るにはどうすればいいの？」

見事な同時発言だった。

さらに、その内容もお互いの相手を思いやるものだった。

「……ほんとに仲いいね」

自然と笑みが零れる。

みこはいいなと思った。

「まずは相手なんだね」

自分の喉はこんな声が出せるのかと、みこ自身がびっくりするくらいに優しげな声が出た。

どうしてそんな声になったのか。

それはきつと、二人のお互いを思いやる愛情たっぷりの気持ちが、みこに伝わったからだろう。

「なずなと一緒がいいもの」

「せりと一緒じゃなきゃだ」

今度は、二人の視線がみこに真っ直ぐ向けられていたのにもかかわらず同じタイミングで発せられた。

お互いの呼吸なんて、手に取るようにわかるくらいに通じ合っていることを証明するかのように。

「これだけは譲れないわ」

「これだけは譲れないよ」

当然のように同時に言い放つ。まるで立体音響のよう。
二人の瞳は、どんな困難を前にしても負けないような、強い決意を宿した瞳だった。

「……心配する必要なかったみたいだね。っと、着いたよ。この続きはまた後で」

ふうと、みこは緊張を解くかのように、胸に溜まっていた空気を吐き出す。

気がつけば、すでに目的の場所に辿り着いていた。

第8話 6月9日 儀式・前編

普段は立ち入り禁止の、表向きは倉庫ということになっているその建物の中へと、せりとわずな緊張の面持ちで踏み入った。

建物の中は、手足を拘束する手枷足枷が付いた、ちょうど一人一人が十分に寝転べるような台が二つある部屋だった。

六メートル四方の部屋の入り口から向かって正面には扉があり、奥にも部屋があることを物語っていた。四方の壁にはそれぞれ異なる形をした、せりやわずなような一般的な人が見たこともない文字が一文字ずつ書かれており、その字の中心には赤に金色の紋様が施されたお札が一枚ずつ貼ってある。

「さ、どつちの台でもいいから、二人とも寝転がってくださいな。そのままだと痛いと思うから、頭の下にタオル敷いてね」

部屋の様子を見て絶句している二人に、みこは「はいこれ」と枕の代わりになりそうな感じに畳んだバスタオルを手渡す。

「……ねえ、これからあたしたち、一体何されるわけ!？」

せりが戸惑いも露わに訊ねた。

その傍らで、どこか興奮したような様子のなすがこくりと生唾を飲み込んでいる。

気分の都合で巫女服に着替え、墨を磨ったりと準備に勤しむみこの耳に、ぼそっと「拘束プレイ……!」というわずな呟きが聞こえたような気がしたのは、気のせいだろうか。

「えっとね、体中に文字をぎっしりと書き込むの。じっとしててもられないと書き込めないけど、くすぐりたいと暴れちゃうでしょ？」

だから動きを封じないといけないの。それに」

「それに？」

なぜか嬉しそうななずなが首を傾げる。

……普通は嫌がると思うんだけどなあ。

「せりに書き込むのは霊感覚を拡張する術式で、なずなに書き込むのは生感覚を拡張する術……」

「性感覚!？」

「言つとくけど、別にいやらしい意味じゃないからね?」

目をきらきらさせながら復唱したなずなに念のため釘を刺すと、急に「なんだ違うのか……」とがっかりされた。

「そんなわけないでしょ!」

顔を赤らめたせりが、なずなの頭を力一杯叩くと、その手は当然のように空振りに終わる。

どうやら、なずなは意味を取り違えていたらしい。

……まあ、生感覚なんて言葉、使わないもんねえ。

「話を戻すよ。二人の体に直接術式を書き込むんだけど、普通に書いちゃったらすぐに消えてしまうから、体の奥深くに刻み込まないとだめなんだ。だからといって、本当に刻み込んだりなんかしちゃうと、二人のせっかくきれいなお肌が傷付くから、書いた術式が染

み込んでいく方式を取ります。そこで問題なのは、染み込ませるときに激しく痛むので、のたうち回ることになります。そうになると、手が着けられなくなっちゃって、痛みを肩代わりしてあげることができないから、体を拘束させてもらいます」

「……」

「……」

儀式場に舞い降りる沈黙。

せりもなずなも彫像と化してしまった。

「えっと……心の準備はいいかな？」

みこは苦笑を浮かべ、気まずそうに頬を人差し指でかいた。

「準備も何もないわよ。やってもらわないことにはどうにもならないんだから」

ややあつて、半ばヤケクソ気味になったせりは、浴衣に下着に靴を脱いで裸体を惜しげもなくさらし、もうどうにでもなれと台の上に寝転がった。

「せりって思い切りが良いんだね。なら、気が変わる前に始めちゃおっか」

みこは仰向けに寝転ぶせりを万歳の体勢にして、手首足首に痕がつかないようにとハンドタオルを巻いてから、台付属の枷をはめる。

「あ……」

扇情的な光景に、様子を見守るなずなの息が荒くなる。

「襲っちゃだめだからね？」

無駄かもしれないなと考えつつ、なずなに言葉で注意しておく。

これはなずなも拘束しておいた方がいいかもしれない。主にせりの安全のために。

みこはおもむろに小太刀を取り出した。

せりの表情が強張る。

「安心して。せりを切りつけたりはしないから」

みこは左腕の内側にその切っ先をあてがい、すつと手首の方向に向かって縦に引いた。切り裂かれる肌。

みこの体が、びくつと震えた。

縦に真っ直ぐ奔った傷から流れ出る血を硯に垂らし、墨と混ぜ合わせる。

今ある分がなくなるまで血は必要なく、腕を伝ってせりに垂れてもいけないので、手早く傷を消毒して包帯を巻く。もちろん、血が必要になったらまた切ることになるので、その都度に処置しなければならぬ。

「それじゃ、上からいくね」

先がつまようじのものがついていない方と同じくらいの筆に墨を付け、せりの首筋へ。

「ん……あつ……」

せりのか細い切なげな声が聞こえる中、細かな文字を次々と書き込んでいく。

我慢強いのか、なずなどの夜の遊戯で慣れているのか、せりは時折体をくねらせはするものの基本的にじっとしていてくれるので、みこととしてはとても作業がやりやすく助かっていた。

なずなが我慢できずに襲いかかることも想定していたが、そちらは床に寝転がって自分の作業に忙しいようだ。具体的にどんな作業をしているかまではあえて言わないが。

それからどれくらいの時間が経っただろうか。

みこは無事、せりの体に術式を書き込み終えた。ある部位を除いて。

そう、問題はここだ。

みこの視線はせりの股間に向けられていた。

脇から腰にかけてのラインとお尻、乳房などはくすぐったそうというよりはむしろ、気持ち良さそうに小さく鳴いていたことから考えると、別に暴れたりはいらないだろう。

けれど、せりの様子を見る限りだと別の意味で危うい。調べてみれば、ずっと焦らされ続けていたわけである。このままでは、下手に触れるとどこかしらに到達してしまいかねないような気がする。そうになると、なにがあれして乾いていない墨があれのそれで流れ書いた文字が消えてしまうことになる。

……どうしよう。

「その……我慢できそう？」

荒く熱い吐息を繰り返すせりに、潤んだ瞳で見つめられる。

「できれば、少し……休ませて」

辛うじてそれだけ絞り出したせりは、目を閉じて呼吸を整え始めた。

「なずなにもやらなくちゃいけないから、その間休んでて」

「……ごめんなさい」

「気にしないで。それに、せりは私よりもずっと大人しかったよ？」

「そっか、なら、よかった」

せりの淡い笑顔を見届けてから、足下に目を向ける。

そこには、なぜかびくびくと体を痙攣させているなずなの姿があった。

つい深い溜め息が出る。

……どうりで静かだと思った。

「というわけだから、今度はなずなの番だよ？」

呼びかけながら、とんとんと肩を叩く。

「……はい」

異様に落ち着いた声音になったなずなは、手早く裸になると左の台に横になった。

どうにも表情が虚ろだ。あんなことをしたのだから、そうなるのも仕方がないといえばそうなのだが。

せりと同じように拘束を果たすと、その首筋から術式を書き込み始める。

最初の方は声も動きもなくやりやすかったのだが、それも鎖骨のまでのことだった。

次第に表情が泣きそうなものになっていき、くすぐったそうに、気持ち良さそうに身悶えし始めた。はあはあと荒く熱っぽい息をしながら、筆が動く度に身をくねらせる。

「んあ……あ……ひゃっん……っはあ……」

胸を終えてお腹に差しかかった頃には、なずなの声はもはや喘ぎ声と化していた。しかも決して小さくはない声量だ。耳に毒なことこの上ない。

乾いてしまった筆に新たに墨を付ける際、せりに術式を書き込んでいる間のなずなの様子がふと脳裏に浮かんだみこは、どうしても気になったので休憩しているせりを見やった。

よくよく考えたら、あんな状態でなずなの嬌声こせうを耳にすれば休むどころではなかったであろうことは想像に難くない。

一体どんなことになっているのやらと心配したが……。

……あれ、せりつたら寝ちゃった？

閉じられた目。穏やかな表情。ゆっくりと上下する胸。すっすうという微かな寝息。

せりは疲れ果てて眠ってしまったらしい。

しかし、おかげである程度の間は気にせず作業ができる。

みこは重くなってきた右手に鞭打って書き込みを再開した。

第9話 6月9日～10日 儀式・後編

焼ける痛み。

燃え盛る炎の中に腕を突き入れると、感じるのは熱さというよりも痛み。

あまりにも熱いと、感覚はそれを痛みとする。ある一線を挟んで、その割合は変化していく。刺し入れられる痛み。

同じ刺すでも、ナイフのような刃物で刺されると、錐のような鋭い物で刺されるのは違う。

傷の範囲や深さ、刺された箇所などの様々な要因により、感じる痛みは異なる。

そう、痛みなんてものは無数に存在する。

しかし、そうだとわかっていてもこの痛みは、そんな無数にある痛みのバーゲンセールをやっているのかと、そんな無数にある痛みの全ての頂に位置するのではないかと、そんな風に思ってしまうほどに。

痛み。そう、痛みだ。呼吸ができなくなり、一瞬にして意識が遠のく。しかしそれさえもが一瞬で、すぐにまた意識がはつきりする。死。

それを真面目に覚悟してしまうほどの苦痛。

けれど、あたしがそれを感じたのはほんの数秒のことだった。代わりに感じたのは、お腹の上に何かが載せられた感触。これは……手？

「っ　　あ！」

痛みが消え失せたのと同時に、台の横に立つ誰かが膝を折った。

視線を向けると、白と黒が目に入った。

「は　　っ　　は　　ぐっ！」

押し殺しきれしていない呻きが漏れ聞こえる。

苦しそうに繰り返される、浅く短い呼吸。

コップの水をぶちまけたかのような音が、そこに一度だけ混じる。

やがて、呼吸を落ち着かせたその誰かが顔を上げた。

その顔を目にした瞬間、

「み　　」

その名前を叫ぼうとしたところで、あたしの意識は浮上した。

もはや痺れて感覚のなくなってしまった左腕を見て、みこは嘆息した。

……包帯してたら、またしょうちゃんに「また無茶したな！この馬鹿みこ！！」って怒られちゃうなあ。

かといって、包帯の下に奔る^{はし}幾筋もの傷を隠すことは難しい。

冬服ならば袖で隠すこともできただろうが、もう夏服で何度も登校してしまっている。今さら冬服なんて着て行ったら、心配性の幼馴染にそれこそ何事かと詰め寄られるだろう。

もつとも、この時季の暑さを考えると、とてもではないがそんな気は起きない。

瞬間治癒なんてことも可能なのだが、これくらいの傷なら二日も

すれば完治する。

そんなことは、鍛錬中に長期間療養を余儀なくされるような重傷を負ったとか、実戦でどうしてもすぐに治しておかなければならない、なんてときでもない限りはしないことにしている。

どうせ一瞬で治るからと調子に乗れば、存分に痛い目を見ることになるからだ。

これはどうしようもないなど、みこは覚悟を決めておくことにした。

その一環として、翔雨に怒られるその時を想像したみこは、どうしてかうつとりとした表情になった。

気持ちを切り替え、せりに向き直る。

「せりー、起きてー」

ぺちぺちと肩を叩くも、せりが目を覚ます気配はない。

起こすのが躊躇われるほど気持ち良さそうに眠っていたせりが、急にうなされ始めたのはついさっき。

なずなの方に術式を書き込み終え、せりを起こそうと振り向いてすぐのことだった。

「せりー!!」

左手は思うように使えないので、右手だけでゆさゆさとせりの体を揺らす。

……こうなっては、仕方ない。せりを起こすのは諦め、寝ている間に勝手に進めさせてもらおう。

寝ている間の体に何かされるのは、あまりいい気分はしないだろうから、そうしたくはなかったんだけど……。

みこが筆を手にして気を引き締めたその時だった。

「みこ！」

せりが目をぱっちりときき、みこの名前を叫んだ。

「お、やっと起きた」

なすながからかうように顔をニヤつかせる。

「寝ちゃってたのね、あたし……」

ぼんやりと周囲を見渡したせりは、自分に呆れたとばかりに目を伏せる。

「よかった。さすがに眠っているところに書き込むのは気が引けるよ。場所が場所だし」

みこは安堵の息を吐き出した。

「……できれば知らないうちに終わらせて欲しかったわ」

自分がどういふ状態であったか思い出したのだろう。

せりは恥ずかしそうに顔を背けた。

「そういえばうなされてたけど、悪い夢でも見た？」

みこは何気ない風を装った。

「それよ！ みこ、これって本当に大丈夫なの？」

「ん、大丈夫だよ？」

「だって、みこが血を吐いて……」

それを聞いて、みこは納得した。

「見たんだね、せり。……ごく近い未来なら、見通しやすくなるみたいだね」

せりは「ええ……」と頷いた。

「痛みを肩代わりするっていうのは、本当はしたらいけないんじゃないの？」

本気で心配している目で見られ、みこは答えに窮した。

「私の体にちよっぴり負担がかかるだけで、だめってことはないですよ」

大したことはないという風に言ってみる。

できれば騙されたということにしておいてもらえないだろうか。

そんな願いを込めながら。

「夢の後、先見が始まって……。そのときに数秒だけ感じたあの痛み……白状するとあんなに苦しいのは嫌。だから、肩代わりしてもらえるのならして欲しい……」

真剣な表情でそう言うせり。

みこは内心ほっとしかけたのだが……。

「……って言うつても思った？」

それは脆くも崩れ去った。

せりは挑むように、その目つきを鋭いものにした。

睨まれている。そこに含まれている感情は怒り、覚悟、優しさ
感謝。

「さっき言ったことは確かにあたしの本音。でもね、こんなお願いをしたのはあたしたちの方なのよ？ だから、あの痛みはあたしたちが受けなければならぬわ。そりゃ、みこみたいに静かに耐えたりはできないけど。泣き叫んだり喚き散らしたりはしてしまっけど。それでもその痛みは、あたしたちのものなの。望んだものを得るために、あたしたちが受け入れなければならぬの。まあ、目障りかもしれないし、うるさいだろうから、そこは見逃してもらえると助かるわ」

「……………でもっ!!」

……………声も体も、震えてるよ、せり……………。

そこへ、もう一方の台の方からも声が上がった。

「みこ、わたしの肩代わりしなくていいからね。その代わり、二人同時に始めて欲しいんだ。二人で一緒に耐えたいから……………」

「なずなまで……………」

せりの体の震えを見てとって、それが何を意味するのかを悟ったらしいなずなは、無理に笑顔を作ろうとして失敗していた。

……慣れてる私だって結構きついつてことは、黙つといた方がよさそうだね……。

とはいえ、そんなことを言ったところで二人の気持ちは揺らぎそうにない。

それはここに来るまでの間に確信している。

「というわけだから、その、もう十分休憩させてもらったことだし、遠慮なく書き込みを終わらせて。ね？」

しばらくの無言。

せりとなずな、両者からの固い意志の圧力がみこにのしかかる。

「二人とも……………。わかった」

結局、折れたのはみこの方だった。

みこはぐつたりとして動かない二人の体を、大事に抱きかかえて奥の間に運び込んだ。

床に描かれた奇妙な紋様の上に、並んで仰向けに寝かせる。

気を失った二人が目を覚ます気配はない。

せりの右手の小指となずなの左手の小指に、一本の赤い糸の端をそれぞれ結ぶ。糸は毛糸ほどの太さに編まれた絹糸だ。

みこはそれをじつと見る。そこに確かな道を見出し、満足げに頷いた。

「やっぱり、二人揃って通心の資質持ちだ。これならちよつと後押

ししてあげれば二人の間くらいならつと……」

墨で床の紋様を囲うように円を描く。

さらにその内側に、せりとなすなごのそれぞれを囲むように縦の楕円を描く。二人の指を繋ぐ糸も横の楕円で囲む。

そうして、今度はそれぞれの円周状に生飴と幽飴 見た目は普通の丸い飴玉である（ちなみに生飴はレモン味で幽飴はイチゴ味）を各方角に一つずつ置いていく。

最後に、何も書かれていない長方形のお札用の紙にすらすらと筆を走らせ、それを赤い糸の真ん中に結んだ。

「これはおまけ。私からのプレゼントだよ」

最初に描いた円の外側、部屋の入り口付近に立ったみこは静かに目を閉じ、ただ一言。

「結べ」

全ての円と床の紋様が淡い紅の光を帯び、赤い糸の真ん中に結んだお札が燃え立つ。

その炎はしかし、糸を燃やすことなく糸を伝って、未だ眠る二人の体へと移っていく。

体に移った炎はその火力を増し、二人の全身を傷つけることなく優しく包み込む。

それぞれの体で燃え盛る炎はやがて交わり一つになり、淡い紅の光へと変化して二人の体に染み込んでいく。

紅い光が収まるとともに、描いたはずの円もまた消滅していた。

……これで意識も戻るはず。

少しかわいそうに思いながらも、二人を起こす。

さすがにここで寝かせるわけにもいかない。かといって、運び出そうにもみこ一人ではどうしようもない。一人を運んでいる間に、不審者にも忍び込まれてもう一人は犯されちゃいましたなんて、とても冗談では済まされないからだ。

……どうも最近、変なのがうるついているみたいだしね。

見た者の魂さえも凍てつかせてしまえるような、絶対零度の視線を扉に向ける。

できることなら、あまりしたくない目つきだ。そのおかげで助かることも多いのも確かだが。

そう、ちようど今みたいに。

そうこうしていると

「んふう……？」

先に気がついたのはなずなだった。

「気がついた？」

「……あれ、みこ……そっか、わたし最後に気絶しちゃったんだっけ……」

「そつだよ。無事に儀式も終わったから、服着てね。準備ができたから帰るから」

まだぼんやりとしているのか、部屋を移動していることに気づくことなくなずなは浴衣を生み出して身に着けている。

その間にせりを起こそうとしたところで、なずなから待ったがか

かる。

「あ、待って。せりはわたしが運ぶから起こさないで、お願い！」

「……そっか。うん、いいよ。それじゃあ、一緒に浴衣着せよっか？」

みこの言葉に、なずなは「うん」と声を弾ませて答えた。
その帰り道。

来るとき以上になずなはご機嫌だった。

「はあん！　せりの胸、あたってるう！」

顔面崩壊としか言いようのないくらいにだらしない表情で、なずなが幸せ成分百パーセントの声を上げる。

……あの、なずなさん？　すごく恥ずかしいのですが……。

抗議の視線も、あまりうるさくしないようにという注意もまったく届かない。それくらいに、なずなは浮かれていた。

儀式場をでる前、みこが少し指導しただけだというのに、早くもコツをつかんだらしい。

なずなは見事に一人でせりを背負うことに成功していたのだった。

その後、道中で気がついたせりに、詰問口調でなずながどんな様子だったかを聞かれたみこは、鬼気迫るものを感じて正直にそれを伝えてしまった。

結果、二人の部屋からは明け方まで、なずなの嬉し恥ずかしな悲鳴が漏れ聞こえ続けることになった。

第10話 6月10日 早朝

一つのベッドで、お互いを抱き寄せあうように眠る二人の少女。体の下側になっている方の手は指と指を絡め合うように繋がれ、上側になる手は相手の背中へ回されている。

耳を澄ませば聞こえてくる二人の静かな寝息は、無駄にぴったりと合っていた。二人とも浴衣が乱れており、胸やら太ももが露出してあられもない格好になってしまっている。

「ん……せり……」

桃色の浴衣を着た少女がもぞもぞと体を丸めるように動いて、せりと呼ばれたもう一人の少女にさらに身を寄せる。

顔と顔がくつつきそうな位置だった状態から下へ。顔の位置は、ちょうど胸のところに。

そのまま桃色の浴衣の少女は、平均的なそれよりかは明らかに大きい胸に顔を埋めた。

「んふう……」

吐息とともに、どこか満足そうな笑顔を浮かべる。

顔を埋められた方も、その背中に回していた手が自然と相手の頭に向かい、優しく包み込む。

そんな微笑ましい光景を前に、

「あらあら、まあ」

両頬に手を当て、恥ずかしそうに身を擦る女性がいた。年の頃は、見た目から言うと二十に満たないだろうか。

みこと大して変わらない背丈。みことそっくりな顔立ち。けれど、雰囲気はみこのようなのんびりとしたものとは異なり、おっとりとした雰囲気だった。みこのように意識して落ち着きや余裕を装うのではなく、自然とそうなっているのだろう。

「んんう……？」

自分たちを覗き込む気配に気がついたのだろう。

せりは眠そうにながらも、瞬きを何度も繰り返し……はつきりと目を開いた途端にその主と視線が合った。

「ああ、起こしてしまいましたか」

「……みこ？」

目を覚ましたせりは最初、そこにいる人物はみこだと思った。

「残念ながらはずれですよ、かわいいお客様」

みこではないという、みこらしき人は悪戯っぽく笑う。

その仕草に違和感がないために、ますますせりは困惑した。

記憶にあるみこの姿と比べても、見た目に目立った差は見られない。

みこではなくて、みこに似ていて、みこの家にいるとなると考えられるのは……。

「…………！ みこのお姉さんか妹さん！？」

「嬉しいわねえ、そんなに若く見えるのかしら」

女性はにっこりと心から嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「え？ え？ そそっそれじゃあ、みこのお母さん!？」

それは、さすがにそんなはずはないだろうと、せりが最初に候補から外した選択肢だった。

「はい、正解です。おはようございます。いつも娘がお世話になっております」

ぱちぱちと小さな拍手を送り、みこのお母さんは一礼した。

「あ、おはようございます。お邪魔してます」

反射的に挨拶を返しつつ、

「その、失礼ですが、ほ、本当にそうなんですか？」

せりはどうしても信じられずに確認してしまった。

「これでも三十路後半なのよ？」

悪戯っぽく片目を瞑ってみせるその姿は、どれだけ高く見積もっても女子大生くらいにしか見えない。

「はあ……何と言いますか、その……すごく若いです」

若い。

せりはもうそれ以外の言葉が出てくる気はしなかった。呆然と相手を見つめるのみである。

「ありがとう。そう言うせりちゃんはずっかり美人さんになったわねえ。おばさん見見えちゃったわ」

みこのお母さんは懐かしそうに目を細めた。

「え………?」

てつきり初対面だと思っていたせりは戸惑いを隠せない。

「せりちゃんのお母さん、聡璃さくらと私は幼馴染なのよ。せりちゃんが小さい頃だけど、何度か顔を合わせているのよ?」

「ごめんなさい………」

「ああ、覚えてないからって、せりちゃんは謝らなくてもいいの。せりちゃんはまだまだ小さかったし、仕方のないことだもの。というわけで、都守魅祓みはらいと申します。今度は覚えておいてね?」

しゅんとなってしまったせりに、魅祓は優しく微笑みかけた。

そこへ、

「母様!？」

部屋の入り口から、大きな声が上がった。

せりがそちらに目をやると、魅祓にそっくりな女の子が目を見開いている。

「あら、みこ。おはよう」

魅祓が優雅な動作で振り向いた。

「あ、うん、おはよう。いつ帰ったの？」

母親に声をかけられた途端、みこは驚愕からあっさりと立ち直ったようだった。

「ついさっきよ。帰ってすぐにこっちに向かったの。懐かしい感じと、なんだか変わった感じが一つのところにあったから、つい気になっちゃって」

「ごめんねと、魅祓は申し訳なさそうな顔をした。

「今度からは一声くらいかけてね。お風呂の用意できてるのに。ご飯だってもうすぐできるんだよ？」

みこはぶくうと、頬をフグよろしく膨らませて抗議の意を少しの間だけ示し、ちよつとだけ残念そうな顔になった。

ようやくみこの子供っぽいところを目撃したせりは、内心で予感的中とばかりにガッツポーズをしていたりしてなかったり。

……そういう仕草をする娘だと思ってたよ、みこ。

「まあ。それじゃあ、みんなでいただきましょつか。みこの左手のことも気になるわあ」

ずっと細められる目。口元は笑っているのが、どこか怖いようにせりを感じた。魅祓の横顔からみこへと目を移すと、みこにはなんの動揺も感じられないことから、きつとせりの気のせいなのだろう。もしそうでなくても、気のせいということにしておきたい。

「なずな、起きて」

せりは二人から視線をはずし、胸に顔を埋めて眠るなずなの体を揺する。

近くで話をしていても、みこの驚いた声にもまったく反応することなく眠り続けているだけあって、なかなか起きてはくれない。

ぺちぺちと頬を叩いてみたり、肩をつかんで激しく揺すったりしたところで、ようやくなずなに反応があった。

「うーん、んにゅう?」

よくわからない呻き声を発しながら、寝ぼけ眼でぼんやりとこちらを見つめている。

やがて何を思ったのか、ふっと目線を逸らすと、

「あむっ!」

「んあっ!?!」

がぶっ、とせりの乳房に噛みついた。

別に本気で噛みついたというわけではなく、歯を立てることなく唇で啜え込んでいる。せりの瑞々しい肌に傷をつけないように配慮したつもりらしい。

「まあ!」

「なっ……!!」

突然のことに、つい驚いて開いてしまった口を手で覆い隠す魅祓。同じく開いた口が塞がらないみこはというと、言葉にならない言

葉を発しようとして震える唇を除き、石像と化してしまっている。
なずながぺちやぺちやと湿っぽい音を立てる度に、せりは体から
力が抜けていくのがわかった。

「だめっ、なずなあ……つく……あん……。そんな、そんなとお
……なめちゃだめ……！」

どれだけ制止させようと声をかけてもまるで聞く耳を持たないの
は、おそらく意識がまだ半分ほど夢の中にあって覚醒しきっていない
ということだろう。要するに、なずなは寝ぼけているのである。
力づくで引きはがそうにも、基本的に身体能力はなずなの方がず
っと上なためにどうしようもない。

……取っ組み合いになる以前であればどうとでも料理して、その
後でたっぷりとお仕置きを……なんて考えている場合ではなくて。

どうしたものかと、与えられ続ける正直な話気持ちよくて抗いが
たい感覚に、必死で抵抗しつつ思案を巡らせるも何も思いつかない
というかやつぱり考えられない。

そんな状態を見かねた魅祓が手を出そうとするより先に、みこが
歩み出て何かを大きく振りかぶった。

「いいかげんにい……しなさい！」

なずなの頭に振り下ろされる物、それは　はりせん。

……どうしてはりせん！？

特有の軽快な音が、家中に響き渡る勢이었다。

擬音にするなら、パアアンだろうか。それともバシィン？

「いつ　　!?!」

がばつと素早く身を起こしたなずなは、何が起こったのかとあたりをきよるきよると見回し、

「は、はりせ……」

はりせんが存在に気づき、それを手にしている人物へと目を向けたところで硬直した。

「おはよう、なずな」

顔に張り付けたような笑みを浮かべるみこ。

それはもう目が離せないほどに素敵な笑顔で、まるで鬼がとびつきりのおもちやを見つけたときに浮かべそうな、それほどまでに愛らしい、しかし絶対にお目にかかりたくはない笑顔だった。

「あ、あは、ははは……。お、おはよう、みこ」

乾いた笑みを浮かべて、なずなはなんとかそれだけを絞り出す。無理もないなど、せりはちよつと同情した。

……鬼って、ほんとに存在するのね。

せりの目から見ても、はりせんが金棒に思えるほど、みこは怒気のオーラを纏っていた。

「結び憑くほどに愛し合ってるなんて、素敵ねえ。みこが世話を焼きたくなるのもわからなくもないわあ」

ねえ、と魅祓はみこに意味ありげな視線を送る。他にもあるんでしょうと、まだ他に理由があることを確信しているような、そんな視線。

「でしょっ?」

と、それに気がつかないみこではないだろうに、当人はまるで話そうとしないので、なずなは親子の会話に聴覚を集中させるのをやめた。

……顔がひきつってるよ、みこ。

なずなですらわかるほどに、みこは演技が下手だった。あれではとてもではないが魅祓には通用しまい。

それでもみこがその理由とやらを口にしないで済んでいるのは、ひとえに魅祓が深く追求したりしないためだろう。

ご飯を口に運びながら、ちらつと隣の席の様子を窺うと、せりが背筋を伸ばして行儀よく朝食を食べている。

そのどこかツンとしたような、澄ましたような感じがこれまたかわい。

でれでれし始めてしまう前に、今度は事情聴取中の魅祓とみこを眺める。

先ほどからみこは、魅祓に根ほり葉ほり訊かれていた。

なずなとせりの向かいの席に並んで座っている二人。こうして見比べてみると、双子と言っても通るんじゃないかとさえ思えてくる。とはいえ、落ち着いてちゃんと見れば、見分けがつかないというわ

けでもない。

まず、髪はみこの方が長い。みこは背中の中半ばにまで達しているのに対して、魅祓は揉み上げの長さはあまり変わらないものの、後ろ髪は背にぎりぎり届くかという程度。

次に、みこの目に比べて魅祓のそれは少し細くて、優しげだ。

さらに、胸の大きさも違う。魅祓のものは、みことせりの間くらいだろうか。

ごくりと、なずなは我知らず唾を飲み込んだ。

違いはまだあり、背丈はみこの方が若干高く、服越しに見積もった感じでは、みこが痩せすぎているように思える。

なんとというか、席に着く際に見たところ、太股のむっちり感が違うのだ。もう少しみこはこう、肉を付けた方がいいような……。

いつの間にかみこの理想の体型を考え始めたなずなは、一人頷いた。

「どうしたの……?」

「ふえっ!?!」

声のした方を見ると、せりが怪訝そうな顔をこちらに向けていた。

「えっと……その……」

……言えない。魅祓とみこを觀賞もとい視姦していただなんて。

……あれ?

「……何も言わなくていいわ」

やれやれだとばかりに、せりは肩をすくめる。

「……………」

まだ何も言っていないのに、せりは意外なほどあっさりと引き下がった。

どうしてだろうと首を傾げていると、

(こつこついうことよ)

頭の中に直接響くせりの声。

せり本人は何事もないとばかりに焼き魚を突っついていて。

ちなみに魚は鯖の塩焼き。幽霊用とやらを食べさせてくれたが、塩加減が絶妙だった。しかし、どこがどう幽霊用なのかはさっぱりだった。

しかし、せりは一体どうやったのだろうか。

(……………伝えたいと思えばいいだけよ。ちなみに、昨日の晩からなすが思っていることは筒抜けよ。心が開きっぱなしだから)

なずなは軽く衝撃を受け、箸を取り落としそうになった。

(ええっ!?!? えと……………こつこつ?)

(そうよ。一方的に感じ取るのは不公平だから、あたしの心も開くわね)

これがテレパシーというやつなのだろうか。

声を発することなく、話すよりも多くの情報を一瞬で伝達できるなんてすごく便利だ。

けれども、その代わり声が聞けないのは、耳が少し寂しい。

冬の湖面を静かに揺らす風音のように澄んだせりのアルトや、夏

風が奏でる風鈴の音色のようなみこの涼やかな声が、無性に恋しくなってしまう。

ベッドの上でのせりが出す声なんて、それはもうたまらない。なすなは昨夜のことを思い浮かべ、口元を綻ばせた。

(……は、恥ずかしいこと言わないでよ。えっと、ずっと心を開いているのも困るときがあるだろうから、心を閉じる方法を教えておくれね。といっても、ただ単に隠したいって思えばいいだけよ)

なすな……。その、ありがとう。

頭の中に響いてくるようなそれとはまた違った、心に直接流れ込むようにせりの想いが入ってきた。

……なるほど。心を開いていると相手はこういう風に想いまで感じ取るのか。

(みこには感謝してもしきれないわね。ねえなすな、信じられる？あたしたち、二時間くらいしか寝てないのよ?)

(そういえば、まだ5時にもなっていないよね。……嘘!?)

(あなたが寝起きの件で反省させられている間にみこから聞いた話だと、あたしたちの間でのみ機能するテレパシーみたいな能力と、疲れも眠気もすっきり取れているのは、みこのおまけのおかげなんだって)

(そうだったんだ……。今度お礼しないとね)

(そのためにも……)

なるべく早く、自分たちの身くらいはちゃんと守れるようになりましょう。

そうだね。

決意を胸に、なずなは意識を自分の内側から引き上げた。

さつきからせりと言葉を使わずに話すことばかりに集中していて、まるで意識が外に向いていないことに思い至り、他のことに意識を向けながらも話せるよう、練習しておくことにしたのだ。

「あ……えっ……？」

そこで、魅祓がこちらとせりを見比べて、なにやらにやにやとしていることに、ようやく気づいた。

魅祓だけではない。みこも顔がにやついている。

困惑するなずなの様子に耐えかねたらしく、みこが口を開く。

「……二人とも、本当にあつあつだねえ」

「あつあつよねえ」

それを追うように魅祓が続いた。

……もしかしなくても気づかれてる……！

一気に火照るなずなの体。つい気になり、せりを窺う。せりの顔は、照れと恥じらいのあまり、耳の先まで赤く色づいていた。

……うん。わたしが組み敷いたときもそんな感じだよね。かわい
いよ、せり。

こんなときだけど、なずなは思わずにはいられないのだった。

くっつ！

怒り、喜び、恥じらいといった感情が混ざり合った、言葉になら
ない何かが、なずなの心に流れ込んだ。

それは、なんだかとても甘酸っぱかった。

第11話 6月10日 なずなの隠し事

みこが教室に入ると、その姿を認めるなり紗希が血相を変えて詰め寄ってきた。

「みこっ！！」

「えっ？ えっ？」

何事かと戸惑っているうちに、ぐいっと左手を捕まれ、目の高さまで持ち上げられる。

「また、怪我してる……。今度は何があったの？」

泣きそうな顔をされ、みこは狼狽した。

こっぴどい表情をされると、どうも弱い。

「大丈夫だよ、紗希。これは別に、危ない目に遭ったからじゃなくて、術を使うために自分でやった傷だから」

数ヶ月前まで生傷が耐えない時期があり、理由をはぐらかしていると、一度本気で泣かれてからというもの、みこは大雑把にだがその理由を白状することにしたのだった。

もちろん、求められれば詳しく話す。どこまで信じてもらえているのかは、わからないけれど。

それにしても、だ。普段は強気な紗希の、泣きそうな、弱々しい表情というのはなんとというか、こっぴどくくるものがあるというか、愛らしいというか。

……なんか私、なぜなに毒されちゃったのかなあ……？

そんなみこの心情を余所に、紗希はお互いの鼻がぶつかりそうなくらいに顔を近づけて、じっとみこの瞳を覗き込んだ。

……近い！ 近いってば、紗希！！

「ほんと？」

「ほんと」

「……………」

やがて、身を引いた紗希は割れ物を扱うかのように、そっとみこの手を下げてから放した。

「……わかった。おはよ、みこ」

安堵したらしい紗希は、いつもの雰囲気に戻った。

「おはよう、紗希」

返事をしつつ、みこは重ねた両手を自分の胸に当てた。

すでに顔は離れているにも拘わらず、未だに心臓が暴れている。どうやら紗希の方も似たようなものらしい。

今更恥ずかしくなったのか、顔が少しばかり赤い。

「え、と……………」

「そ、そうだみこ、きよ、今日やる英語の授業の訳なんだけどさー」

二人して微妙な空気を何とかしようと、半ば無理矢理会話していた頃

うーんとなずなは、胸一杯に空気を吸い込むように伸びをした。

「せり、気持ちいいね！」

「おへそがまる見えよ」

と言いつつ、なずなに習うように伸びをするせり。

「せりだって」

なずなが笑い、つられたようにせりも笑う。

「キス、しよっか」

「なずな……」

学校に来るなり、二人は屋上に出ていちゃついていた。それが、六月十日の朝の学校における光景だった。

昼休み。

みこ、紗希、せりの三人と幽霊一人は、立ち入り禁止という張り紙を見事にスルーして、屋上でお弁当タイムを満喫しようとしていた。

「みこって咲実さんとそんなに仲良かったっけ？ あんまり会話してたような記憶もないんだけど……」

ほどなくして、やけに親しげに話すみことせりに気づき、紗希が箸を休めて首を傾げた。

「昨日からかな」

「昨日からよね」

みことせりは顔を見合わせた。

「いつの間……」

そう呟く紗希に、改めてせりが遠慮がちに訊ねる。

「その、空宮さん、本当にあたしもいいの？」

「あー、紗希って呼んで。こっちもせりって呼ばせてもらっから」

「え、ええ、わかったわ。それで、紗希……」

「別にいいんじゃない？ みこも喜ぶし」

紗希の反応はあっさりとしたものだ。来るものは拒まず、といったところだろうか。

それとも、みこが喜ぶからだろうか。

「紗希、ありがとー」

なぜせりが遠慮がちにしているのか、よくわからないでいるみこは無邪気に笑っている。

「なら、お邪魔します」

紗希のみこへの対応が、視線といい態度といい、どこかせりやなずなに共通するものがある。

せりにはそんな気がしてならないため、少なからず居心地の悪さを感じているのだ。

(ねえなずな。どう思う?)

せりは背中に感じる温もりに、声に出さずに語りかける。

(うー? 紗希ちゃんのこと?)

昼の陽気につとつとしていたのだろうか。ちょっと眠そうな感じが伝わってきた。

(うん。みこはまるで気がついていないみたいだけど……)

なずなは紗希のすぐ正面に座り込み、むむーうと唸り声を上げながら観察する。

それが見えているはずのみこは、さずがというべきか、何事もないかのように自然に振る舞っている。

(負けた……わたしのより……二センチも……)

(……何を見てるのよ。そんなこと言っていると、もう胸には触らせ

てあげないからね)

(つ！ ごめんなさい、ごめんなさいっ！ お願いだからそういうのはなしにしてえ)

(それで、どう思う？ あたしはたぶん、そうだと思うんだけど)

(うーん。……真面目な話、せりの見立て通りだと思う。なんか、緊張してるといっつか、気を張ってるといっつか、少しでも油断したら抑えているものが一気に溢れ出しそうな感じ。結構危ないかも)

(なずな……あたし、なんだか嫌な予感がするわ)

(せりー。せりの予感によく当たるんだから、そんな不吉なこと言わないで！ すっごく怖いよ！)

「……みこ、その五月雨先輩ってさ、ここに今もいるの？」

(……あ)

(……わたし？)

二人がそんなことを話している内に、いつの間にやらなずなの話になっていたらしい。

「なずな、私に触れてもらってもいいかな？」

みこがせりの隣に座り込んだなずなに問いかける。それと同時に、紗希の手を優しく握る。

「……だそうよ？」

せりに目配せされ、なずなはほんとにいいのかぁと思いつつも
みこの肩に手を置いた。

「先輩！」

「……紗希ちゃん。えと……久しぶり」

感極まったような紗希とは対照的に、なずなはどこか気まずそう
にしている。

みことせりが、いつもの元気はどうしたんだと言ってやりたくな
るくらいだ。

(……ねえ、もしかして、なずなは紗希と知り合いだったの？)

(えっとね、わたしと紗希ちゃん、同じ習い事やってたんだよ)

どうにもなずなの態度から察するに、そこで何かがあったとみる
べきだろう。

せりは後でたっぷりと聞かせてもらおうことにした。

「なずな、どうかした？　なんか、気まずそうだけど？」

みこはみこで、そのままストレートに問いかける。

「んとな、同じ……」

「先輩と同じバレエ教室に通ってたのよ」

せりに心中で伝えながら、同じことを口でも言おうとして、かなりゆっくりな話し方になってしまい、それを見かねた紗希が結局それを繋ぐ。

「なずな、バレエやってたんだ……」

みこはつい意外そうな瞳を向けてしまった。

「こっ見えて、なずなは結構いい線いつてたのよ？」

せりがまるで自分のことみたいに誇らしげにする。

しかし当のなずなはというと、その表情を曇らせた。

なにやらせりにも話していない何かがあるようで。なずなの表情を曇らせるだけでなく、せりにさえ話せないということがどうもひっかかった。みこの視線は、自然とせりへと移る。

せりは、なずなの表情を確かめるまでもなく、直接繋いだ心から感情の揺らぎを感じ取ったらしく、顔に不安を浮かべていた。

「その……先輩。一応お伝えしておきます。あの人たちは、先輩がお亡くなりになられてすぐに、教室を止めました」

あの人たちとは誰のことだろうか。

いや、それよりもだ。紗希はせりでさえ知らないことを知っていることは疑いようがない。

二人は考える。

そうして、みこは、せりは、

せりだからこそ、伝えられないこともある。

あたしだからこそ、なずなは隠した？

同じ可能性に考え至った。

「……そっか」

なずなは、悲しそうな目をしていた。

「すっかり懲りて、心を入れ替えたみたいでした。だから、もう大丈夫です」

「紗希ちゃん」

「なんででしょう……?」

「ありがとう」

お礼とともに、なずなが控えめな笑みを見る。

凧の海を思わせる、どこまでも穏やかな笑顔。

紗希が華やいだ。

けれどそれは、みことせりに……特にせりにとっては、果てしない不安をもたらした。

死んでよかった。これで、あいつらも……。

せりは、なずなのそんな心の呟きを、聞いた気がした……。

……よくないわよ。そんなの、全然よくないわよ、ばか……。

そう悪態をついてみても、なずなからの反応は、何もなかった。

そんな折、ぴくつと猫みたいにみこの耳が動いた。みこは、はたと虚空を睨みつけ……。

やにわに全身から緊張を滲ませたみこは、ただ一言。

「くる」

直後、真昼に闇夜が訪れた。

第12話 6月10日 襲来するもの・その1

日は闇に食われ、辺り一帯が暗くなり何も見えなくなっていく。そんな中、みこは油断なく気を配りつつ、みんなの無事を確認する。

それと並行して、スカートのポケットから飴玉を四つ取り出すと、その内の一つを口に放り込みすぐに噛み砕く。それが、術の発動条件だから。

……命避術界、夢現まゆまゆを発動。

まだ闇が広がりきる前に、予め学校に仕掛けておいた術を発動し、この場にいる者以外の存在を敷地ごとごとっそり退避させる。

その後、みこの創った術界 様々な術を内包した特殊結界 の内で完成される、まもなく姿を現すであろう大黒蛇がこの場に在るために必要となる闇の結界。

これでこちら側は普段の世界から切り離され、みこの張った結界の内に新たに構成された、大黒蛇の闇の結界に捕らわれているのは、もぬけの殻となった学校という場と、みこの近くにいたもののみとなる。学校そのものが、みこの術によって構成された偽物だ。

せり、なずな、紗希の三人については、みこと一緒に結界に捕らわれてもらうことにした。

彼女らが校舎に戻っている間に、何者かの結界による隔離が成立されてしまったため、他の多くの生徒や教師の退避が間に合わない判断したからだ。

とはいえ、紗希が巻き込まれてしまったのは予定外だった。

「何これ、どうなってるの!?!」

紗希が悲鳴のように叫び、

「あわ、あわわ、い、いきなり真っ暗になったよ!」

なずなはどこか楽しそうだ。

怯えていないだけマシだが、好奇心のままに好き勝手に動かれてしまっっては、少なからず困る。

残るせりはどうなのだろうか

「なずな、大人しくして。紗希、大丈夫だからみこの指示を待つて」

みこは思わずにやりとした。

……さっすが、せりは落ち着いてるねえ。

おそらくは、せりの目がそうさせたのだろう。

予測の延長線上にあらざる先見の能力を宿すくらいだ。

なずなのような幽霊を見たりする他に、いろいろと見えてしまっ
ていてもおかしくはない。親から継いだということとは、せりにとっ
ては幼いころからそれが当然のことであつたはずである。

少なからずそういう人は、恐ろしい目に遭ってしまうのだ。その
経験が、せりをパニックに至らしめないでいるといったところか。

それに

「せりには周りが見えてたりするの?」

だめもとで、もしかしたらとちよっぴり期待も込めて訊いてみる。

「何も問題ないわ。あたし、目はいい方なの」

どこか面白そうな、冗談混じりの返事。

先見に靈視に、全く光源のない純闇の闇視とは。それはもはや、目がいいとかそんな次元の話ではない。光を必要とせずに物を見るだなんて、それはもはや通常の視覚ではない。

幽霊が見える程度ならば、そこに在るものを認識する力の問題でしかない。

結局、目に映っている情報を脳が処理できるかどうかなのだ。しかし、せりの場合は違う。目に光を映す必要がないのだ。みこの内心の驚きを察したのか、せりはくすりと笑い、

「あたしの目にとってはね、闇も光と同じ役割を果たせるの。変換できるのよ。……こんなときでもない限り使い道がないんだけどね……」

さらっととんでもないことを耳元で囁いた。

ともあれ、うれしい誤算であることには違いない。

だからみこは「受け取って」と、手にした飴玉を渡す。

「緑色のはなずなに。紫色のはせりに。黄色のは紗希に。飴玉、ちやんと舐めてね」

頷いたせりは紫色のそれを口に含み、視界を奪われたまま立ち尽くす二人にそれぞれ飴玉を手握らせる。

「あむ……うむ……あ、これメロン味っばい」

緑色、メロン味の飴には護りの加護と魂の質の隠匿を、

「ん、こっちはグレープフルーツね……。ちょっと酸っばいわ」

黄色、グレープフルーツ味の飴には身体と精神の保護の加護を、

「……ぶどうは、ちょっと苦手」

紫色、ぶどう味の飴には被いの能力と知識を、それぞれ一時的に付与する。

飴の効力は一日近くもつ。効果の強さは、事前にその力を込めた者 みこ に依存する。

せりと紗希に与えたものは、本人の体に強い影響が出るので効果を調整したものだ。

でも、なずなのそれは本人に直接影響がないことと、魂旨であるなずながどうにかされてしまっただけは、何のためにみこがいるんだという話になるため、非常に強力なものとなっている。

各々の感想を聞いて、みこはみんながちゃんと舐め始めたことを確信する。

「それじゃあせ……」

みこがそこまで口にしたその時だった。

「危ない、なずな!」

叫んだせりが、なずなに飛びかかったのを感じる。

しかし、その理由がわからない。そこにはなずなの傍には、みこたち以外にだれもいないはず。そう、いないはずだ。

でもそれは、みこがそう感じ取っているだけではない。

みこでは感じ取ることができないのか、又は、その存在に対してみこが捉え方を間違えているのか。

感覚を研ぎ澄まし、さらにその感知の種類の種類を拡大した。

……この感じは、呪霊！？ それに、この匂いは……なずな？
どうして？

あくまで通常時の比較でいえば、感知能力を嗅覚に例えると、
この母親の魅祓を人とするなら、みこは犬。

魅祓の感知能力は、通常時のそれでさえ、世界中でも一、二を争
うくらいに優れているのにもかかわらず、だ。

みこの感知能力は、公にはされていないが最高レベルと言っても
いい。

それなのに、微かにしかその気配を感じることができない。

その呪霊は、気配隠蔽の能力に恐ろしく長けていた。

……ただでさえ高い隠蔽能力が、霊の地力を何重にも強化するこ
とで増してる。でも、こんな、こんな強化の仕方って、酷いよ……。

呪霊に何者かの手が加えられた形跡を感じ取ったみこは、悲痛な
表情になった。限度を超えた強化は霊にとって猛毒に等しい。

「せり、そいつの動きを止めるから、その間に二人を連れて校舎に
入って」

鋭く指示をとばしたみこは、手を気配のする方向へ向けて振った。
霊的な衝撃波に弾き飛ばされた何かがフェンスを軋ませる。

「ぎっ……があっ……」

呪霊が獣の呻きを彷彿とさせる苦悶の声を上げる。

……ごめんね。

足先、手先、頭から体の中心に向かって、その気配が徐々にはつきりしたものになっていく。

直接、幾重にも、それも乱暴に刻まれた術という術、呪いという呪いを、みこは腕の一振りですし消し去ったのだ。

「今だよ！」

みこが叫ぶと、

「わかったわ」

せりの返事と共に、三人の気配が遠ざかっていく。

扉の開閉と気配の位置を確認し、無事に校舎へ退避したことを確認したみこは、

「……まあ、ここよりは安全だね」

まずはこれでよしと、小さく頷いた。

一応、偽装校舎はみこの領域だが、中に何もいないとは限らない。この呪霊に術を施した者がいる以上、絶対安全とは言い切れないのだ。

だからこそ、みこは対抗するための能力を与えたのだが……。

……これからのことを考えれば、せりとなずなにはいい経験になるかもしれない。けど、紗希は……。ごめんね、怖い思いさせちゃって。後で、ちゃんと謝らないと。

「とりあえず、今はキミをどうにかするのが先かな。まだアレが出てくるのには時間がかかるみたいだし」

みこはポケットからさらに、今度は白い飴玉を一つ取り出すと、それをひよいと頭上に放り投げる。

最高高度に達すると、それはひとりでに砕け散り、細かな粒子となったそれは、きらきらと光を放ちながら降り注ぐ。

……領域紋様術式・白明領域。はくめい

白く輝く紋様が屋上全域に広がり、周囲を足下から照らし始め、呪霊の姿が目にはつきりと映るようになった。

小柄な体躯。ほっそりとした起伏に乏しい体つき。短めの髪を頭の左右の両端に集めて作られた、ショートツインテールな漆黒の髪。くりくりとした大きな目が愛らしい。

その呪霊は、見た目だけでいえば中学三年生の女の子だった。

みこが通っていた中学校と同じ、巫女服とセーラー服をかけ合わせたような制服 通称『巫女セラ』 を着ているから、わかる。胸元にあるのと、髪を結う赤いリボン、三年生がつけるものだ。

ただし、本当のところはわからない。彼女がいつ死んだのか、いつから幽霊としてこの世を彷徨っているのかによる。

それにしても、どうしてこんなところに。

……なんで呪霊になんかになったの？ なんて、訊けないよね。私と同じ中学校なら、この娘こがこうなってしまった原因は、都守のせいかもしれないだもん。

呪霊とは、人を呪う幽霊のことである。

幽霊となったものの体は、自分の魂そのものとなっており、その体から出る血液 見た目が生前に依存しているが、正体は魂の持つ力の顕現である には、呪いたい対象に悪意を抱いた状態で付着させることによって、対象の魂を肉体といった防壁を透過して直接汚染する。これが呪いだ。

魂を汚染される　すなわち、呪われると、一般的には悪意の内容に沿った現象に見舞われやすくなる。最悪の場合未代まで祟られるが、それは滅多に無く、大抵はそこまで酷いことにはならない。しかし、幽霊の中には様々な能力　例えば炎を放つ　を操る存在もいて、そういう幽霊の場合は、いちいち血を付着させることなしに、より直接的な介入が為されることもある。この場合、被害は甚大なものになりがちだ。

能力の有無は、その魂による違いと考えられている。

「ひっ……」

怯えたように、後退しようとする呪霊の少女。

しかし、その背中がフェンスにすでにぶつかってしまっている。

足だけが、床の上を這いずるのみだ。

スカートの中の下着がちらちらと覗いて見えてしまうのも構うことなく、必死にもがき続ける。

表情から、どうしてどうしてと、疑問と焦りで混乱しているのが見て取れる。

「強化は全部きっちり剥がしたし、透過も封じさせてもらいました。だから、逃げようたって無駄です」

淡々と事実だけを告げる。

「こ、来ないで……」

手をこちらに突きだして、少女は拒絶の意を示した。

どうやら、完全に怯えさせてしまったらしい。一撃加えたのがまずかったのかもしれない。

抱きついてあげればよかったのかなと、ちょっと考えてみる。

……うん。それだと他の事態に対処できないよね。

「ああ、お願いだから怯えないで。もう痛いことしないから」

そう言っつて、両手を広げて見せる。

「や、いやぁ……」

何かされると思ったのか、ますます怖がられてしまった。

……はう。どうしようかなぁ……。

「その、ほんとに痛めつけたりしないからね？」

困惑も露わに少女に語りかけつつ、後ろに音もなく忍び寄ってきたそいつに肘鉄を打ち込む。

「う……があっ……！」

激しくフェンスを揺らし、重く柔らかいものが倒れる音がした。

「そのまま大人しくしておいてくださいな」

肘鉄に使ったみこの右腕は、肘から下を歪ませ、だらんとしている。

耐久力を超える力が加えられたために、肘から骨が砕けたのだ。でも、みこは顔色一つ変えずに佇んでいる。

手で押さえるような仕草もなく、呼吸も心拍さえ乱さない。

痛みを感じていないのかという不気味さに、

「ぐっ……。化け物め……」

見向きもされないそいつは我知らず毒づく。

そいつを完全に無視して、みこは太陽のあった方向を見やった。音がしたのだ。

ガラスを爪か何かでひっかくような、不快極まりない音が。

「大黒蛇さんのお出ましですか。でも残念」

空に入った一筋の亀裂を睨み据え、

「悪いけど、空腹を満たすことなく、被われてもらいます」

間もなく現れる相手に備えるかのごとく、左手で右腕を無理矢理支えて、亀裂に向かって突き出した。

そんなみこの凜然たる姿を、呪霊の少女がいつの間にか、目に焼けつげんとばかりに、その目をしっかりと見開いて見つめていた。

第13話 6月10日 襲来するもの・その2

校舎内に逃げ込んだ三人は、すぐにその様子がいつもと違っていることに気がついた。

光源がどこにあるかもわからない、青白い光によって照らされた、薄暗い階段。昼休みの時間帯にも拘わらず、嘘のように静まり返っている校内。

人の気配がまるでしないことに、紗希となずなは震え上がった。

青白い光が彼女らの不安を煽り、死者の国に迷い込んでしまったのではと、本気で思わせた。

なずなにいたっては、冗談どころの騒ぎではないため、ぎゅっとせりに前から抱きつく始末だ。

紗希の方も、せりの手を痛いぐらいの力を込めて握っている。

まだなにも起こっていないのに、早くも得体の知れない恐怖に囚われてしまった二人を、どう宥めたものかと、唯一落ち着いているせりは思い悩んだ。

……あたしだって、怖いとは思ってるんだけどな……。

他の二人がそれ以上に怖がっているために、妙に心が静まってしまっているようだ。

「二人とも、ここがそんなに恐ろしいところなら、みこが逃げ込めだなんて、わざわざ言わないわよ」

とにかく、二人を安心させるような材料を探して提示してみる。

……まあ、みこのいるところよりは安全っていうだけで、あたしたちにとっては危険な場所であることには変わりはないのだけれど。

二人の様子からして、これは言わない方がよさそうだ。

「でっ、でっ、でもー!」

むぎゅっ。

「く、苦しい、苦しいよなずな!？」

ところが、なずなはさらに抱きつく力を強め、

「そっそそそっそうよねねね!？」

紗希はもう呂律が回っていなかった。

……やっぱり、言わなくて正解ね。

はぁ……とせりは肩を落とす。それと共に下がる視線。
と、せりの目は嫌なものを捉えた。
それは影だ。

はっとなり、足下を警戒しつつも素早く天井を見る。

「くっ!」

なずなには抱きつかれ、紗希には片手を握りしめられた、非常に動きにくい中、せりはどうにか床に倒れ込むようにしてそれを避けた。

「……………!」

紗希が息をのむのがわかった。

それは、真つ黒な体をしていた。巨大なオタマジャクシみたいなものに、付け根から徐々に太くなっていき、象と同じくらいにまでその太さを増していく、異様に太い腕が生えている。

腕の全長は一メートルくらいだろうか。体を支えているその腕は、半ばほどにある肘とおぼしき間接で、ほぼ直角に曲がっている。

そしてなにより……。

頭すべてが口だともいうのだろうか。

人間なんて丸飲みできてしまえるほど、冗談みたいに大きくそれを開き、その中にある無数に枝分かれした細長い舌が仕舞われていく。

影の主はこいつだった。

天井を蠢^{うご}き、音もなくせりたちの頭上に回り込んだらしい。

無数の舌を槍^{やじらめ}雨のごとく突き出しながら、獲物に飛びかかる寸前でせりに気づかれたということか。

身を屈めて、そいつは再び攻撃態勢に移る。

だが、今度は避けられない。

そう悟ったせりは、なずなを渾身の力で引き剥がして階段に蹴飛ばし、庇うように紗希に覆い被さった。

その背中に向かって、突き出された舌が殺到する。

「せりーっ!!」

階段の縁に倒れ伏すなずなの絶叫が響き渡る。

そんななずなの目に映るのは、残酷なる黒。

青白い薄闇に染まった血飛沫の、その一滴一滴を、なずなは目しかと捉えた。

背中に突き刺さらなかった残りの舌が、せりの体に絡みついでいく。

「う……あ……いあ……」

それぞれが好き勝手な場所に突き立てられ、その度にせりの体が痙攣する。

耳朶に、首筋に、肩に、二の腕に、乳房に、お腹に、肘に、手に、脇腹に、お尻に、太ももに、膝に、ふくらはぎに、脛に、足首に、足の甲に。上から下まで貫かれる。

貫かなかった舌は、ぺちやくちゃと淫猥な音を立てながら、せりの血を、汗を、体を、執拗に舐めていく。

「止めてっ、止めてよっ！　お願いします！　お願いだから！　せりに酷いことしないでえっ！ー！」

なずながどれだけ懇願したところでそいつは蹂躪を、陵辱を、止めようとしない。止めるわけがない。

むしろ、見せびらかすようになずなにせりの体を向けつつ、舌でゆっくりと本体に近づけてせりの髪を掻き分け、黒い体軀をこすりつける。

……こいつ、遊んでるっ……！？

どろっとした粘膜のようなものがせりの体に纏わりつき、それは酸のようなものなのか少しずつ制服を溶かす。

肌も例外ではない。

雪の肌が徐々に赤く腫れ上がり、爛れていく。

「う……あああっんぐっむぐう！？」

せりが悲鳴を上げたことで、まだ息はあることがわかった。だがそれは、なんの気休めにもならない。

むしろ状況は悪化している。

せりが口を大きく開くの待っていたかのように、動かずに待機していた数十本の舌が集まったものが、その口内に勢いよく飛び込んだ。

「んっ、んっ！ んぐっ!? んんー!!」

喉にこつんとぶつかると、舌の束は入り口まで一度引き、また奥に突き出される。

一部の舌は口の中を好き勝手に暴れまわり、黒い異形の唾液らしきものを塗りたくる。

ぬるぬるとした気持ちの悪い感触に、せりはぞっとなつて身震いした。

息さえままならない苦しみと途方もない吐き気の中、せりは未だに動けないでいる二人を、ひたすら睨み続けた。

口を塞がれ、声が出せないから、ただ逃げろと念じた。

(やだ！ そんなの嫌だよ!!)

しかし、なずなは頑として動こうとしない。

(あなたたちがいると、こいつを倒せないの！ みこから貰った力が使えないでしょ!)

(へ?)

なずながきよとんとした。

気づいてなかったのかこの娘は。

というか、みこがこんな状況下でただの飴を渡すはずないだろうに。

何かあるとは考えなかったのだろうか。

おそらく、三人ともなにかしら能力を得ているはずだ。

とはいえ、こういうことに耐性のない紗希が動けなくなってしまうのは、仕方のないことだから、どうにかして助けなければならぬ。

でも、なずなは腹をくくっていないければならなかった。初めての事態だからと、そんなことは言ってもらえないのだ。

せりが動けないときは、自分で考え、自力で助かってもらわなければ。そうでないと、これから二人で一緒に暮らしていくことなんて、夢のまた夢だ。

……って、焦ってるわね、あたし。急にそんなのって普通は無理なのに。あたしだって、頭の中に浮かんでくる情報がなかったらわからなかったでしょうし。飴の種類が違うから、効果も違うと考えるべきだったわ。これからのことだって、みこに手解きをお願いしないと……。

(話はこいつを倒した後。わかつたらさっさと逃げな……)

「っんむっ……んあぁっ!!」

遂に鎖骨を粘液が溶かしにかかった。

緩慢に、けれど確実に溶かされている。

でかい口をしている割に、そのまま丸飲みにしないのは、獲物になぶる趣味でも持ち合わせているのか。やはり遊ばれていると考えてよさそうだ。

それにしても、昨夜のみこの儀式が幸いするとは思いませんでした。

あの痛みに比べれば、こんなもの屁でもない。慣れてしまえばこっちのものだ。

……痛いことには変わりない上、こちらは命に関わるというのが
困るところだけれど。

ただどそのおかげで、なんとかなすなには伝えられた。
後は、なすなが紗希を連れてちゃんと逃げてくれればいい。

……みこ、あなたが思っている以上に、紗希は怖がりさんみたい
よ。

ちらと奇跡的に両方とも無事な目を向けると、紗希は涙を流しな
がら、こちらを凝視していた。

見たくないだろうに、恐怖のあまり目を逸らせなくなってしまっ
たらしい。

……自分の体がどうなっているのかなんて、ほとんどわからない
けれど、結構酷いのかもね。ちゃんと治るのかしら？ まあ、治ら
なかったら、そのときはそのときよね。

「立って紗希ちゃん、逃げるよ！」

なすながすぐ傍まで寄って声をかける。

が、耳に入っていないのか、一切の反応がない。

……茫然自失 ？

なすなが懸命に声をかけ続けているのに、どうして

……しまった！

せりはつい失念していた。紗希はみこを介さないとなずなの姿を見ることはおろか、声さえ聞こえない。

(……ごめんなさい。あたしも人のことが言えないくらい迂闊だったわ……)

(どういうこと……ってまさか、わたしの声……聞こえてない!?)

(失敗したわね……。なずなだけでも逃げなさい)

(そんな……そんなの……)

(いい? 絶対に守らなければいけないのはね、なずなの魂なのよ?)

(そ、そんなの知らないもん!)

(聞き分けのないこと言わないで!!)

ごめんね。

厳しく言いながらも、心の奥底で、せりは謝っていた。

開かれた心から心へ、想いとともになずながなずなへと流れ込む。

(っ!)

(行きなさい!)

なずなが逡巡を振り切り、弾かれたように飛んでいった。壁を透過し、姿が見えなくなる。

……愛してるわ、なずな。さて、と……。

頭の中に浮かべるのは、飴を口にするまでは全然知らなかった情報。

そこから、相手を確実に倒せるものと、自分を治療し得るものを探し出す。

……ちょうどいいのがあるわね。

使うための力は授かっており、使い方と効果もはつきりとしているが、影響範囲まではわからず、せりは困った。これは、他の情報にも言えることだった。

困ったが、だからといってこのままこうしては、二人揃って死ぬまで、もしかしたら死んでもからこいつの遊具にされるだけだろう。

……後で影響範囲もわかるようにしときなさいって、みこに言わないといけないわね。

紗希も巻き添えにしちゃうかもしれないのが心苦しいけれど、やるしかない。

せめて、祈ろう。紗希に被害が及ばないように。

せりは覚悟を決めて、ぎゅっと目を瞑り

……これでも……、食らいなさいっ！！

解放。

『都守流・葬祓術式・逆壊葬復回』
そうはつじゆつしき きゃつかいそつぷつかい

術の発動の間際、せりの視界を、人間ほどの大きさの黒い影が横切った気がした。

しかし、朱色の術光に視界を奪われて確かめられず、光が収まり視界を取り戻したせりが目にしたのは、誰も何もいなくなった、屋上前の踊場だった。

「うっ……。紗希……？」

せりは床に倒れたまま、首を巡らせる。

「どこにいるの、紗希？　ねえ、返事をしてよ！」

どれだけ目を凝らしても、紗希は影も形もなかった。

……やっぱり、あたしが殺したの……？

「紗希いー！！」

せりの叫びは、青白い薄闇の中に吸い込まれていった。

「……………」

自らの呼吸と心音以外の音もない中、唇を噛みしめて身を起こす。見下ろした体には、傷一つない。

まだ突き立てられていたときの痛みは消えていないことから、傷は癒えても痛みは消えないなんてちょっと不便ね、などと術の感想を漏らし、自嘲気味に笑う。

衣類は当然のことながら修復されておらず、制服はぼろぼろだ。特に直に粘液に触れることとなった背面は、跡形もない。

さらには、舌に纏わりついていたり、飛び散ったりした粘液も少なくなかったらしく、前面も結構な部分が溶かされてしまっている。下着も例外ではなく、もはやしつかりと隠すだけの面積もない。唯一形が残っているのはニーソックスくらいなもので、それさえも所々穴が開いている。

……これは泣けてくるわね。……だからといって泣かないけれど、それにしても、裸ニーソだなんて、なんてマニアックなのかしら。でも、なずなは喜んでくれそうね……。

もはやその役割を果たせなくなった制服と下着を捨て、せりはふらふらと歩き出した。

どうせ、見られたとしても、相手は異形くらいなものだ。

こつこつというとき、下の毛があると気休めになるのだろうかなんて、ふざけたことを考えてみたりする。

火傷をしたようにひりひりとしていた背中が、僅かな動きにも特に酷い痛みを訴える。

馬鹿なことを考える余力があるのなら、さっさと行けと叱るように。

辛くて折れそうになる心を、せりは鞭でしごかれる気分というのは、こんな感じなのだろうか、また下らないことを想像して、気を紛らわすことで支える。

……行かなきゃ……。なずなと……。紗希のところへ……。

なずなと紗希の姿を求め、せりは歩き始めた。

第14話 6月10日 襲来するもの・その3

一人逃げ延びたなずなは、途方に暮れていた。

……どうしよう。せりも紗希ちゃんも、見捨ててきちゃった……。

適当な教室に入り込み、膝を抱えて座り込む。

溜め息ばかりが、口をついて出た。

せりにこんな自分を知られたら、絶対に心配されてしまうだろう。そのせいでせりの心に隙を作ってしまうようなことだけは避けよう。

そう考えたなずなは、心を閉じていた。

……嘘……。わたしは、せりがどうなったのか確かめるのが、怖
いだけ……。

どうすればいいんだろう？ 自分になにができるんだろう？

せりは言っていた。

みこはなずなたちに力をくれたと。

本当に、そうなのだろうか。

あれがなずなを逃がすための嘘じゃないだなんて、どうして言える？

だとしたら、今頃は……。

ぶんぶんと頭を振って不吉な考えを振り払う。

少しくらくらした。

「うーん……」

どうしたものか。

やっぱり、せりのところに戻ろうか。

みこが力をくれたのなら、自分にもできることがあるはずで……。考えていても始まらないとばかりに、何か飴を舐める前と変わった感じはないか探ってみる。

「あつう？ えーと、ええつとー……」

手を前に突き出してみたり、念じてみたり、なんかもう人がいないのをいいことに、それでもやはり恥ずかしいことを「なずなちゃん、へーんしーん！」とか、そんな馬鹿なことであっても、なにかかまわずに、いろいろやってみたりしている内、だんだん虚しくなっていた。

その結果、四つん這いになってうなだれるの図に行き着いた。

……うう。なにも起こらない。

せりの言っていたことは、嘘だったのではないか。

そんな考えが再び鎌首を持ち上げ始めた頃

教室の扉が、壁が、爆発じみた音量を伴って陥没した。

「！！！」

瞬時に顔が強ばる。

そこへ、今度は教室の窓という窓がびりびりと音を立てて震えだした。

……こっ、今度は何！？

と、窓へと意識が向けられる。

すると、そのタイミングを見計らったかのように、今度は先ほど

の音が、実は大したことがなかったと思えるほどの大音量と共に、扉が爆散した。

「ひゃうん!!」

あまりの衝撃に怯む。塞ぎ損なった耳が痛い。

砕けて舞い散る木屑を吹き飛ばしながら、不自然に隙間のある黒い津波が押し寄せる。

慌てて飛翔して窓際まで移動すると、震え上がってがってかちかちと歯を鳴らしながらも、それが何なのか見極めようと注視する。

見るんじゃなかったと後悔するのに、時間はかからなかった。

それは、せりを襲ったような奴らの群れだった。

不自然な空白も実は生き物らしく、黒いキャンパスの中を泳いでいる。太くて長い、何かが。

「に、逃げなきゃ……」

せりと紗希の身が危なくなるから上はだめだとすると、残るは下か背後 即ち外か。

迷っている間にも、じりじりと部屋の隅に追い詰められる。

安全そうなら外に逃げようと、様子を確認するべく窓を覗き込み

「ひっ!」

窓を割ろうとしたとしか考えられない、強烈な打撃が加えられた。なすなは顔が強張っていくのを感じた。

「な……なに……これっ……!!」

泣きそうな、弱々しい声で、疑問が口をついて出ていた。
手加減が感じられない一撃を叩き込んだ、それ。

窓にどす黒い色の手形を作り、あっという間に姿を消した、白い手。

しかも、黒い津波はもうすぐそこまで迫っていて、

……下しかない！

なずなが床をすり抜けた直後、教室は津波に埋め尽くされた。

「そんな……」

呆然と呟く。

なずなはその場へたり込みそうになった。

だが、それさえできない。さつきよりずっと数が少ないとはいえ、下の階の教室にも黒い生き物が蠢うごいていたのだ。

もう一階まで下りてきてしまったから、逃げ場は外か地面の中しかない。

外は得体の知れない何かがいるようだし、ここは潜ってしまうしかないだろう。

地中も安全とは限らないし、そもそも潜ることが可能かどうかも疑問であるため、これは試してみるしかない。

……うう、どうしよう！？

仮に潜ることに成功して身の安全も確保できたとしても、それはそれで問題があるので不安だった。

一度潜ってしまったら、その間は上で何が起きているのかわからなくなる。そうになると、出るに出不る状況が続くかもしれない。

地中だと真つ暗で前が見えないので、移動した場合には自分がどこをどう進んでいるのかさえ不明だ。

もしみこが校舎の中の異変に気づき、三人を探してくれていたとしても、この身が地中にあるは見つけてもらえないかもしれない。なずなが決心しかねて迷っている間にも、黒や透明の異形が確実に包囲を完成させていく。

……わたし、もうだめなの……？

とつとつ追い詰められてしまった。

黒い異形らが、次々に飛びかかってくる。

もうだめだつ、となずなは堅く目を瞑った。

「……………」

しかし、どれだけ待っても痛みも何も無い。

恐々と目を開く。

そこに、異形が飛びかかる。

なずなに飛びかかった異形は、接触する寸前に弾き飛ばされていた。

「どっなってるの……？」

そいつらがどんな手段で襲ってきてても、その悉くを阻んでいる。

……もしかして、これがみこの……。

「せりの言っていたことは、本当だったんだ！」

喜びも束の間、なずなはすぐに気づく。

「って、わたし盾にしかねないじゃん！」

それも、ここではあまり役に立てそうにない。相手が多過ぎる。屋上付近が一番マシだったのだ。

上の階の様子から察するに、相手となるのは一匹や二匹では済まないだろう。

少数ならともかく、多数の相手の注意を引きつける自信はない。つまり、自分だけが絶対安全……ということになるのだろうか。それでも、自分が囷になることで、数体でもいいから気を逸らすことができれば、せりの助けになるかもしれない。

そう思い立ったなずなは、早速せりを探そうとして、このままでは沢山余計なものを連れて行ってしまいかねないことに思い至り、また途方に暮れた。

いくら自分が安全だからといって、下手な移動をすればせりや紗希に敵が向かいかねないのだ。

安全をほぼ確実なものとして得たと感じたなずなは、ここにきてようやくせりの気配を探った。

その気配がゆっくりとだが移動しているのを感じ取り、なずなは考えた。

せりが捕まえられて、運ばれている可能性もあるのだ。

だから、どこを指しているのかを知るべく、少しでも手がかりを得る必要があると考えた。

もっとも、死んでいるという可能性も当然あるのだが、なずなは考えないようにはしていた。

気配は時折止まっては、ゆっくりと動いている。

階段を下って二階に。

そのまま廊下には出ずに、階段を下り続ける。

……こっちに近づいてきてる？

果たして語りかけたものか。
心を開いたままに迷っていると、気配が階段から一階の廊下に出
てすぐのところまで止まる。

……め……………さい…。も……………だ……。

今にも消え入りそうなほどに淡い、うたかたのような想いを受け
たなずなは、周りの異形もお構いなしに、そちらへ向かった。

「せりっ！」

階段前の廊下には、片膝をつき、肩で息をしながら、それでも群
がる異形と真っ向から対峙している、少女の傷だらけの裸身があっ
た。

それぞれ舌や爪や粘液やらで一斉に襲いかかった三匹の異形がせ
りの体を傷つけ、次の瞬間に朱光が煌めき、その立場を逆転させて
いた。

朱光が収まると、せりにたった今つけられたはずの傷がなくなっ
ている。

ところがだ。

せりの表情は、より険しいものになった。

……………どうして？ 今の傷はもう治ったのに。

確かにせりの体には無数に切り傷や刺し傷、痣や火傷のような跡
がある。

けれどそれを考慮しても、せりの表情の変化は急激に悪化してい
た。

……せめ……一匹……も……く。

なずなは、せりと異形との間に割って入ろうと、一息に突っ込んだ。

困ったことに、せりのいる場所までは結構離れている。

その間にも、異形はまた一匹、また一匹と、浅い傷を負わせては距離をとるようになった。

せりの消耗を待っているのだ。

どんな方法でやったのかまではわからないが、せりとて異形を何体か消し去っている。

とはいえ、やはり多勢に無勢だ。このままでは遠からずせりは…

…。
途上にある教室から、なずなに反応したらしい異形が一斉に飛び出し、押し潰そうとしてくる。

それを無視して、一心にせりの元へ向かう。

なんとんでもせりを助け出さなければ。

自分の得た能力はもうわかってる。

最悪、なずなが自身の身を盾にしながらせりを抱えて飛び続けられるのだ。

みこが来るまでの間、ずっと。

それにしても 遠い。

通かよっていた頃はそんなこと、一度たりとも思わなかったのに。

もう、後たつたの数メートルまで近づいたのに、まだなずなの手は届かない。

なずなの目の前で、せりがとうとう倒れ伏す。

この時を待ち望んでいた異形がせりを今度こそ蹂躪せんと怒濤のように押し寄せ、

「せりーっ！っ！っ！っ！」

必死で伸ばしたなずなの手は、まだ少し届かなかった。
勢い余って、なずなも前のめりに倒れる。
あとちよっとというところで、間に合わなかった。

……せり……いや……うぐ……。

涙で滲む視界の中、せりの体は黒い濁流に飲み込まれて。

「在るべき世界せかいに還れ」

落ち着き払った声とともに、校舎内を照らしている青白い光と同
一の光が、異形の塊にぶつけられた。

「えっ？」

影も形もなく異形が消え去っていき、せりだけが残された。

「みこのやつ……危うく二人死ぬところだ。……ん？ 一人はもう
死んでるか」

誰かがみこに対して悪態をついている。

「俺が戻ってくるまではここを動かない方がいい。その人を死なせ
たくないのなら、な」

その誰かは階段を下りきると、なずなやせりを一瞥することなく
そう言った。

校舎内を照らしている青白い色と同色の刀身の、不思議な形をし
た剣を、無言でその誰か この高校の制服を着た男だ は床に
突き刺す。

せりとなずなを内に含むような形で、青白い円が描かれる。
それを確認した彼は、

「残りを片付けて、もう一人をここに連れてくるから」

言いたいことだけ言って、去っていった。

あっけにとられたなずなは何も言えぬまま黙ってその背を見送り、次の瞬間にはもうどうでもいいとばかりに、せりに飛びついていった。

「せりっ！」

傷だらけの体を下手に動かそうとはせず、そのままでも見ることのできる範囲の怪我を確認する。

どうやら、直接命に係わるようなものはないようだ。

それでも、できるだけ早く病院で検査と治療を受けないと危険だろっ。

一切なずなに反応しない様子から、せりは意識を失っているようだ。

なずなはせりの手をそつと握り、「何もできなくて、ごめんなさい」と呟いたのだった。

どれだけ強く唇を噛みしめてみても、血はおろか痛みさえなかった。

途中で阻はらまれてるのだ。

自傷さえも許さぬこの力が、今のなずなには少しだけ疎うとましく思えた。

第15話 6月10日 襲来するもの・その4

刀身がその途中で六回ほど、小枝が伸びるかのように枝分かれして、枝分かれした先ですぐに剣先に向かって短い刀身が伸びる不可解な形の剣。形はとある物の模造品で『清、袂、還、断、鎮、滅、結』の七字が彫り込まれている。から、襲い来る黒い濁流に向けて青白い光の波が放たれた。

青白い光の波に、逆に飲み込まれた黒い濁流が、何の痕跡も残すことなく消失していく。

扉を開き、剣を振るっては、また次の教室へ。

繰り返してきたその作業も、ようやく終わりを迎えた。

……残るは、まんまとみこに誘い込まれた奴らか。

剣を手に、少年 翔雨はその足を体育館に向けた。

話は今日の午前三時頃にまで遡る。

翔雨がぐっすりと眠っていたところ、誰かさんからの電話で叩き起こされたのだ。

外国にいるわけでもないのに、こんな非常識な時間に電話をしてくるような相手を、翔雨は一人しか知らない。

翔雨はさっさと受話器を取った。

無視なんてした日には、本気で泣かれるからだ。

「……しようちゃん？」

相手はやはり、幼馴染の少女だった。

自信のない、気の弱そうな声。

長い付き合いだ。

遠慮の塊となっっている少女の様子がありありと想像でき、変な時間にかけてたことを気にしているらしいことが、その声でわかった。

「……みこ、こんな時間にどうした？」

眠気を悟られぬよう、努めて声を普段のものにして訊ねる。

「あのね、今日から一週間……ううん、三日間だけ、手を貸して欲しいの。お願いしても、いい？」

「みこにしては珍しいな」

本当に珍しい。

いつもはこちらから手を貸そうとしても、頑なに拒むくらいなのに。

そんなみこが翔雨の手を借りなければならぬような事態とは、一体何が起きているのだろうか。

可能性としては、『蛇さんが近々来ちゃうから大変だわあ』とかそんなことを、魅祓が言っていたことくらいだ。

魅祓が言うのと全然大変そうに思えないが、あの人が大変というからにはそれなりに大変なのだろう。

「その、大黒蛇が来たら私、身動きとれなくなっちゃうから……。その間、しょうちゃんには私の友達を守って欲しいんだ」

大黒蛇というのが何なのかはわからないが、魅祓が言っていたも

のと相違ないだろう。

それに、そんなことは知る必要がない。そいつはどうせみこが担当するのだ。まかせておけば問題ない。

だったら、知るべきことは守るべき相手　みこの友達と、その人たちを脅かす相手のことだろう。

みこの大事なものを守ることで、仕事に向かった彼女の後顧の憂いをなくし、全力を振るえるようにすることこそが、翔雨のすべき手助けだ。

「それで、人数は？」

「幽霊と合わせて三人ほど。一応何かしら力は貸与するつもりなんだけど、最近変なのにつきまとわれてるから、それだけじゃ危ないと思うの。特に幽霊の子は、なんとしても守り通さなきゃいけないって……」

幽霊と聞いて、少し厄介だなと翔雨は思った。

翔雨には、幽霊の声を聞くことはできるが姿までは見えないのだ。それにしても、なぜ幽霊までも守らなければならないのだろうか。死霊喰らいや魂喰らいなら、みこが力を貸与してしまえばどうとでもなるのである。生身の人間に貸与できる力よりずっと多くの力を、霊体の存在は受け入れられるのだから。

それは幽霊を狙う他の存在についても言えることだ。人間の術者でも例外ではない。

それでも、翔雨の手を借りようというのだから、余程重要なのだろう。

都守家の後継者が重要視するような存在となると……。

「幽霊、ね。つまりそいつが例の魂旨ってやつか。わかったよ、必要な情報を送ってくれ」

「いつも迷惑ばかりかけて、ごめんなさい」

受話器の向こうから聞こえてくるのは沈んだ声ばかり。

……まさか頭でも下げてるんじゃないだろうな？

謝られて、翔雨は自分も謝るべきこと謝っておこうと思った。下手をすれば電話すら繋がらない期間が、みこの忙しさ加減によって生じてしまうのだ。

朝一でいいかと思っただが、それでは忙しさを理由にはぐらかされそう。そうなら次のチャンスがいつ訪れるかわかったものではない。

話を聞いているとなんだかそんな予感がした。

「……みこ、俺も謝ることがあるんだ」

翔雨がそう切り出したところ、

「その……もしそれがお弁当のことなら、うっかり特製ハンバーグ入れた私が悪いから、しようちゃんが謝ることないよ？」

先に言われてしまった。

というか、なぜわかった？

どうしてこう、みこは何でもかんでも自分のせいにしたがるのだろうか。

疲れているのに無理してでも作ってくれた。大方そんなところだろう。

「……いいか、みこ。それは、争奪戦になることをわかっていなが

らさつさと避難しなかった俺が悪い。だからみこは悪くない。いつもありがとな。そして今回はごめんなさい」

みこのハンバーグが争奪戦になってしまうのは、ある噂が広まっ
てしまったせいで学年の男子から狙われるからだ。その噂とは……、
『あれは手ごねじゃなくて乳ちちごねハンバーグらしい』
一体、誰が言い出したのやら。

その噂の内容を本人が事実と認めていることが、一番問題な気が
しないでもない。

真実は翔雨も知るところだ。なにせ目の前で実演されてしまった
のだから。

それ故に頭が痛い。どうしてそうなった。

ちなみにみこのお弁当には、安全性と品質保全のためだからと、
本来の用途とはかけ離れたかたちで術まで施してあるので、夏場で
あっても一日やそこらじゃ腐るといったことがない。

「……………あうう」

みこはどうしていいかわからないといったとき、今みたいに呻き
にも似た声を上げる。彼女の戸惑う姿が目には浮かんだ。

その際、翔雨の耳は、受話器の向こうでした、声とは別の音を拾
った。

椅子が軋むような音。

その瞬間だけ、みこの息づかいが苦しそうになったのを、翔雨は
聞き逃さなかった。

「……………ついでに言っておくが、不眠不休の飲まず食わずでもある程
度は平気で、筋が切れたくらいならすぐに治る体をいいことに、凄
惨を通り越した訓練をするのと、自分を痛めつける自傷行為ってい
うのはな、まったく違うものだぞ」

目の前で言わなければどうせ止めやしない。そうと知りつつも、それでも翔雨は釘を差しておく。

みこの自傷癖は今に始まったものではない。

確か中学生になった頃にあることが積み重なって始まり、三年の時にあの事件が起きて以来、悪化した。

みこの二つ下の妹が亡くなった、あの事件が……。

最初の頃は、それはもう酷いもので、力づくで押さえる必要があったほどだ。

魅祓と共に、みこをこっそりと監視していなかったら、そのまま自殺していただろう。

死ねたかどうかは別として。

ただ、みこの宿命を思えば、あの時に止めてしまっただけなんじゃないか。そんな考えが浮かぶときも、たまにある。

……それも、もし死ぬことが叶ったのなら、の話だが……。

「……ずるいよしょうちゃんだけ……。どうしてわかるの？ 私はわからないのに、ずるいよ……」

「弁当のことをさらって先に言った人が、それを言いますか」

「だってあれは……」

それ以外に思い当たる節がない。

続いたであろうその言葉を、しっかり遮る。

「だってじゃない」

「……はい」

納得しかねるといふ気持ちが明らかかな返事だったが、そこは指摘しないことにする。

「え、えつと……それじゃあしょうちゃん。私、もう切る……ね？」

「わかった。それと、少しは休め。じゃあ、また明日な、みこ」

……電話があった、まさかその日にこうなるとはな。

体育館の中央に、これ見よがしに鎖で吊された見覚えのある一人の女生徒。確かみこの親友で、名前は空宮紗希といったか。を視界に捉えつつ、油断なく周囲に気を配り、この罠の作り手の急襲に備える。

いかに強力な武器とそれを扱えるだけの力を有しているとはいえ、体は所詮生身だ。

頭でも吹っ飛ばされた日には当然のように死ぬ。

だからこそ警戒は怠れない。

……入った段階では何の反応もなし。近づくか、それとも迂回して舞台に行くか、それとも……。

「……上、か」

そう口にしたときにはすでに、翔雨は剣を振るっていた。

……四、五、七枝解放。

「断て」

刃と刃の接触寸前で翔雨は小さく呟く。

直後に響く、かん高い耳障りな金属音。

上から襲いかかった幅広の刃を受け止めた。

すると、翔雨の持つ剣が容易く相手の獲物に食い込んで

「むっ！」

半ばほどまで到達した段階でそれに気がついた相手は慌てて距離をとった。反応速度は悪くないようだ。

そこでようやく相手の姿が明らかになる。

纏うは銀色のロープ。目深にフードを被っていて、口元しか顔が見えない。靴は履いておらず、足には代わりに文字がぎっしり書き込まれた包帯を巻いている。一見したところでは、武器は幅広の刃物のみに思えた。

……目を隠したままでやるつもりか。そうする必要のある術でも使うのか、あいつの能力に関係があるのか。それにあの包帯は……。

「相手は都守の巫女と聞いていたが、貴様……何だ？」

「確かにあいつは物理的に攻められると弱い。が、もしここに来たのが俺じゃなくてあいつだったら……今みたいなことした日には、あんた死んでるぞ」

相手の質問には答えず、善意から忠告した翔雨は突撃した。

「こちらには人質がいることを忘れたか？」

淡々と事実を告げる、冷たい声音。

余裕なのか、相手は構えさえしない。

……もしみこを狙ったの人選なら、残念だが……。

ずっと翔雨の目から感情の色が消える。

もう、俺には手も足も出ないだろうよ。

断で斬ることができないのは、物体に限らない。

術による現象も例外なく断たれる。

その射程は確かに刃の長さと同じだが、効果は刃が辿るはずだった軌道上にあるものにも及ぶ。

実際の刃で斬っていなくても、斬ることができるというものである。

代々霞家に受け継がれてきた宝刀。それが翔雨の持つ剣　白蒼はくそ
乃七枝である。うのななさや

七枝には、それぞれの文字に対応した能力が封印されていて、一
枝から順に、清、袂、還、断、鎮、滅、結の文字が、それぞれ彫ら
れている。

果たして、相手は斬られたことを認識できていただろうか。

……鎮痛及び体結を解除。名も知らぬ相手が声を上げる間もない。

そいつはいつ死んだのか、それさえわからずに倒れ、自らの血に
沈んだ。

初撃を防ぐ際、翔雨は四枝の断ち切る能力　断だけでなく、七
枝の結界を紡ぐ能力　結で斬った相手の体を結合させたままにし

た。

あたかも斬ることができなかった、というように見せかけるために。

そこに五枝の鎮める能力　鎮によって相手の痛みを鎮めることで、斬られたという事実を認識させずに斬ったのだった。

「こつもあつさりだと、逆に困る」

今の相手を倒した方法は翔雨の常套手段だ。

やろうと思えば生かし続けることも可能なため、殺してはまずい場合だったりしても勢い余ることがない。

「とりあえず助けるか」

釈然としないながらも、翔雨は女生徒に近づき、その鎖を外して床に寝かせた。もちろん、仕掛けられていた怪しげな術式はきつちりと解除した。

その術式は、みこが使うそれと僅かながらに共通する部分があり、そこから推測すると、使い魔でも飛び出す仕組みになっていたのかもしれない。畏としてはよくある代物だ。

「こんなに簡単なものか……？」

翔雨はまだ何かあるのではないかと、周囲に気を配った。

あまりにも簡単過ぎたため、これが畏でないと言い切れないからだ。

実のところ、今回の相手側には、翔雨が白蒼乃七枝を使っているところを見て生きて帰った者が、誰一人としていなかった。

それどころか、翔雨が戦力であること自体、まるで掴めていなかったのである。

だからこそ、あっさりと済ませられたのだった。

普段の翔雨はただの高校生で、みことは幼馴染という、それだけでしかない風を装っていて、その上、翔雨の専門は今のみこがどう頑張っても気づけないほどの隠密行動である。

様々な思惑の下にみこを狙う存在を、翔雨は数年前から秘密裏に処理してきた。

翔雨の家系　霞家もまた、都守や咲実のように特有の力を古くから受け継ぐ家であったことと、白蒼乃七枝がそれを可能としていた。

特に剣に頼っているところが大きい。というより、剣が便利過ぎるのであった。

翔雨のこの行動を知るのは、本人を除くと魅祓ただ一人である。余談ではあるが、特有の力を受け継いでいる家系というのは別に珍しい話ではない。

みこの家系では、受け継がれてきた力を持って余した人々を助けて報酬を得るといふ仕事も、年に結構な数をこなしている。

「さて、起きないことを祈るとしようか」

翔雨はしばし躊躇してから、やがて覚悟を決めて紗希を担ぐと、元来た道を急ぎ足で引き返した。

第16話 6月10日 襲来するもの・その5

誰もいない、異形さえいなくなった廊下で。

仰向けに寝かせたせりのために、なずなは膝枕していた。

せりに目を覚ます気配はない。

「……………」

静かだった。

こうしていると、夜中の学校に忍び込んでみただけなのではないかと、思えてしまうほどに。

話す相手もなく、なずなは自らの内に沈んでゆく。

さつきまでいたあの異形たちは、何だったのだろう。どこから現れたんだろう。紗希はどうしたんだろう。

みこはあんなのと何度も戦ったりしているのだろうか。せりはこんな危ない目に何度も遭ったことがあるのだろうか。

これから、こんなことが続いたとして、その原因が自分にあるのなら、自分には何ができるんだろう。どうすればいいんだろう。

嫌だった。

何もできなくて、ただ逃げただけの自分が。

あの時、せりが紗希を庇^{かば}った際、どうして自分が動かなかったのか。

とつくに死んでいるくせに、まだ生きているせりを守ろうともせず、気味の悪い学校の雰囲気^{すか}に負けて、せりに縊^{すが}ってしまった。

初めてのことから。

そんな言い訳は、こういったものには通用しない。ただ失うだけだ。大切なものを、奪われるだけ。

なずなは、それを痛感していた。

「せり……」

目を閉じれば、記憶に刻まれた映像がはっきりと頭に浮かぶ。見ている方も痛みを感じてしまいそうになるほどに傷だらけな、せりの裸身が。

制服はここに来るまでの間に、使い物にならなくなってしまったのか。

それとも……裸にされて、酷い辱めはずかしを受けたのだろうか。意味は薄いと知りつつも、今は自らの制服をせりの体に被せている。

「ごめんね……」

どちらにせよ、さぞかし苦しかったに違いない。

なずなより二つ年下で体も小柄な方なのに。

そんなせりに、痛くて苦しくて、辛い思いばかりさせてしまっている。

「迷惑ばかりかけて……」

それなのに、自分はどうだ。

死ぬ前も、死んだ後も、逃げて逃げて逃げ続けている。

そのせいでせりに悲しい思いをさせて。

そうしてきた結果がこのザマだ。

結局、自分が一番痛くないようにしているのだ。

最愛の人さえその手段にして。

せりはどんなに辛くても耐えられたのだろう。

なずなが耐えられないというだけで。

「最低だよね……」

なずなはゆっくりと視線を下に落とす。
目は閉じたままだったが、せりは確かに意識を取り戻しているようだった。

それ自体は、なずなにとって喜ばしい。

「せり！ 気がついたんだ……。その、もうちょっとだけ我慢して？ ここから出られたら、すぐ病院に……」

「痛いだけだから、平気。そんなことより」

せりの顔色はどう見たってよくない。呼吸も浅く、声も弱々しい。本人は平気と言っているが、なんとかぎりぎり我慢できるという状態で、実際は全然平気なんかじゃなくて、喋るのも辛いんじゃないだろうか。

だけど、遮るその言動は静かながらも有無をいわせない不思議な力があつた。

「まずは……そうね、聞かせてなずな。あなたがまだ、あたしに話していないことを」

せりの瞼が持ち上げられ、心の奥まで見通すような、透明な眼差しがなずなの目に注がれる。

なずなは澄んだ湖面を覗き込んでいるような、そんな錯覚に陥りながらそれを見返して……。

これは誤魔化すことはできないかと、ついに観念して訥々（とつとつ）と語り出した。

それは、闇の結界に包み込まれた空間を震わせながら現れた。

黒い。

夜の闇の中においてなお黒く、しっとりとした艶のある体皮をした、それ。

ドラム缶を百個ほど纏めたくらいの太さの体を持つ、巨大な蛇の頭が、ぬつと出でた。

何かが割れるわけでも、穴があいたりしたわけでもない。

何も無い空間から生えてきた。もしくは、そこにすでに存在していたものが、隠していた姿を現しただけ。そう表すべき出現だった。その圧倒的な存在感と、普通ならば立つことはおろか、息をするのもままならぬ圧迫感の中。

事実、闇の結界の内側に、みこのものでも大黒蛇のものでもない第三の結界　その効果は空間隔離　を張ったと思われる襲撃者と、襲撃者の手下にされているらしき呪霊が床に這いつくばって、虫の息の体を晒している前で。

ただ一人、みこは平静として身構えていて　。

「あー、前のより大きいや。これは素手だと厳しいねえ」

困っているのかいないのか。

構えることを止めてまで、肩を竦めて見せる。

圧迫感など存在していないかのような振る舞いに、襲撃者は愕然とし、呪霊は信じられないと、できるものなら首を振りたくなった。みこは胸元から、それぞれ文字とそれを綴る墨の色が異なる三枚のお札をおもむろに取り出すと、その内の一枚を右腕の肘に翳した。緑色で療癒と中心に大きく描かれ、縁にはミミズが這ったかと思えない、ひたすら文字を繋げたらしいものが綴られている。

……一週間もすれば治るから、ほんととはこれくらいじゃ使いたく

ないんだけどなあ。でも緊急事態だし、仕方ないか。

そのお札から、細長い糸のようなものが大量に飛び出し、その内の幾本かが肘に突き刺さる。その他の糸は肘を中心に巻きついてゆき、最後にお札が張り付いた。

向きを直し、ぎゅっと締まるその糸はギブスの代わりに肘周りを支え、その中に包み込んだ肘周りから腕を修復し始める。

向きを強引に修正され、そこに糸が締まるので、みこは激しい痛みに苛まれてしまう。

しかし、その代わり腕が十秒ほどで元通りになる。糸の消滅が修復完了の合図だ。

但し、負傷箇所が修復されてもその怪我の痛みは、本来の経過によることでしかなくなることはない。動かせば当然、無理に動かしたときと同じ痛みを味わうことになる。

そんなちよつと不完全な感じがある術だが、痛みしか残らずに他の副作用らしいものがないという、これはこれで完成された術だったりする。

瞬間治癒などということ自体が、そもそも無茶苦茶なことなのだ。そんな無茶苦茶な術は、普通は代償が大きく、安易に使えるようなものではないことが多い。

だからこそみこは、局所的な怪我を治療する際、痛いのさえ我慢できるのならどうとでもなるこちらの術　癒系残痛ゆしけんとうを採用しているのだった。

これは都守の一族には共通の傾向で、それ故に普段の鍛錬は痛みの中でも辛いものとなっている。痛いから動けません、では困るからだ。

腕が治ったところで、今度は弓らしき絵が描かれた上に、赤い文字で創とだけ記されたお札を左手に持つ。

右手には同じく創とだけ赤い文字で記された、こちらは背景として描かれている絵が矢のお札を、人差し指と中指で挟んで持つ。

「描かれし役割を成せ」

みこの言葉に従い、左手のお札がそこに描かれているものへと姿を変える。

命じるその声はちよっぴり緊張を帯びていたのか、堅い印象があった。

左手に弓、右手には矢の代わりにお札。

右手のお札に自らの力　　霊力やら呪力やら魔力やら呼ばれるよ
うな、そんな類のもの　　を込めて弓を構えると、そこには真紅の
矢が形成されている。

末端でお札と繋がっているそれを、引き絞り、狙いすまして
放つ。

解き放たれると同時ににお札から分離し、闇空に赤い閃光が迸る。

大黒蛇からしてみれば小枝みたいなものでしかないそれはしかし、
命中した瞬間に轟音を伴って天を煉獄へと変えた。

間近に太陽が現れたかのような殺戮的な光量に、動くこともまま
ならず傍観者と化した襲撃者と呪霊が、目を焼かれて一時的に視
力を失う。

□

『！

声なき悲鳴を上げてのたうつ蛇に向け、その正体を知るみこは罪
悪感を覚えつつも容赦なく次の矢を射る。

みこもまた光によって目をやられてはいたが、居場所を感じ取る
ことができる彼女にはそもそも見る必要がない。まして、相手は巨
大だ。みこからすれば的でしかなかった。

矢が命中する度に大黒蛇の大きさが少しずつ小さく
なっ
ていき、命中個所を中心に色が黒からやや濁りのある透明に変色
というより脱色　　してゆく。

相手はその巨体故、未だ体の半分も出現しきっていない。

そのため動きに自由がなく、接近して反撃することができない。元々からして口で食らう存在であるがために、攻撃手段として主に用いるのは口と、あとは蛇らしく胴体によるものなのである。

遠距離からの攻撃手段といえば、食らったものを背中中の排出溝から吹き出すことくらいしかない。簡単にいえば、クジラの潮吹きのような行動だ。

最悪それは、周囲への無差別攻撃となってしまうため、やらせるわけにはいかない。

しかしながら、大黒蛇がここに現れた理由は食らうためである。十分満ち足りているのなら食べには来ないはずで、つまるところ大黒蛇の体内には、攻撃に回せるだけのものがないのだった。

何もできずにいる相手に、みこは一方的な攻撃を繰り返す。何度も何度も、休むことなく射抜き続ける。

繰り返すほどに右腕が抗議代わりに激痛を訴えるが、そんなことは一顧だにしない。

ただちよつとだけ、額に集中や運動からくる汗の他に、別の汗が混ざっているような気がするけれど、やっぱりそれも気にしてはいけない。気のせい気のせい。

後から出てくる部分も射抜かなければならないため、今出現している部分をすべて射抜くわけにはいかない。加えて、頭は最後まで残しておかなければならない。

かといって、出現していくそばから射抜いていくくらいの勢いでなければ、後に反撃を許してしまう。

みこは痛み能耐えながらそれを考慮しつつ、最後の一時まで集中を切らすことなく、射抜き続けなければならないのだ。

相手が巨大であることが対処を比較的楽にはしたものの、それ故に長期戦にならざるを得ないという状況だった。

……うーん、最後までもつかない……？

終わりの見えない作業にみこは一抹の不安を覚えたが、呪霊の少女の存在を強く意識して、弱気になりそうな気持ちを奮い立たせた。

……いくらあの娘に見られてないからって、最後までもたせない
と本家の娘としては示しがつかないよね、うん。

そう、自分は 都守の後継ぎは、こんなことくらいできて当たり前でなければならぬのだから……。

第17話 6月10日 襲来するもの・その6

なずなが話をしてしている間、せりは口を挟むことなく静かに耳を傾けていた。

医師である父親とバレエ教室の先生である母親。

両親はどちらもお互いの教育方針を譲らず、日々言い争っていた。なずなが小学生だった頃の話だ。

そんな風に両親が言い争うのは嫌だったなずなは、どちらの言い分も実行した。大変な毎日だったけれど、それでも両親が仲良くなるのならと、彼女は懸命に頑張った。

なずなは勉強でも母に教え込まれたバレエでも優秀だった。

それはこの時点では幸運だったかもしれない。

しかし。

前々から、母親の指導する教室で、同い年くらいの娘たちとレッスンスンするということは、いらぬ誤解を生んでしまう可能性があった。先生の娘だから鼻肩ひしこめされている、と。

確かに鼻肩はあった。だがそれは、優遇とは逆の意味でだ。様々な要素で、なずなは他の娘以上の水準を求められていたのだった。

それに気づいた者は少数だった。

そんな誤解がすっかり広まってしまい、影でなずなは嫌がらせを受けるようになっていった。

鼻肩の意味に気づいていた少数の者の一部も、逆にそれが気に入らなず嫌がらせに参加していた。

高校三年の秋、有名なバレリーナだった母親のついで、真剣にプロを目指している娘の中から、一人だけ留学できるといった話になった。出発予定は三月だった。

一月後に選抜試験が行われ、選ばれたのは なずなだった。

試験の一部始終を見ていたほとんどの娘が、試験に参加した十人の内八人までもが、その結果に納得していた。

なずなは圧倒的だったのだ。

しかし、これをおもしろく思わない者がいたのも事実。

それは、よりもよって同じ高校に通う娘で、試験を受けた二人だった。

一人は自分と同じクラス。もう一人はせりと同じクラス。厄介なことに、どちらもクラスの女子の中心的人物だったのだ。

なずなは留学を辞退するよう迫られた。なずなが辞退すれば、二位だったクラスメイトのその娘が選ばれると考えたのだろう。

なずなは白状したくなつた。せりと離れたくないから、ほんとは行きたくなてないんだと。

だけど自分が頑張らないと、また両親が喧嘩してしまうから、行かなくちゃいけないんだと。

でもそんなことを言えば、かえって反感を買う結果になるのは目に見えていた。

どんな理由があるのかわからないけれど、その娘がどれだけ真剣にバレーに取り組んでいるか、普段の彼女から伝わってきていたから。

なずなの母親も、それを認めていた。もちろん実力もなずなには及ばないものの、充分あると言つてよかった。

そんな彼女だったから、すぐに気を取り直すと考えていた。

翌日、教室で会った彼女はしかし、思っていた以上に納得がいかなかったらしい。というより、どうしても信じたくないといった気持ち^{にじ}が、滲み出ていた。

余程の事情があるのだろうか。

だからといって、そんなことで結果が覆つたりなんかはしない。

その次の日から、なずなと口を利く者は激減した。

一週間ほどで、なずなはクラスどころか学年の女子で孤立し始めた。

元々、交友関係はあまり広くなかつたおかげで、あつという間の出来事だった。物が消えたり壊れたりするようになったのも、その

あたりからだった。

そんなある日、例のクラスメイトに呼び出された。指定された場所に行ってみると、取り巻き数名を伴った彼女にまた辞退するよう迫られた。

断ったら何をされるのか。だいたい予想がついたが、なずなは気にせず断った。

見事にボコボコにされるかと思いきや、彼女は意外な、けれど聞き捨てならないことを口にした。

『なら、咲実さんがどうなってもいいのね？』

気がついたときには殴りかかっていた。

顔に一発打ち込んでやったが、後はお察しの通りだ。多勢に無勢といったところか。

なずなは悩んだ。

辞退しなければ、せりを巻き込んでしまう。

でも辞退なんて、母親が許さないだろう。

下手をすれば間違いなく、また父親と喧嘩してしまう。

父親は、さほど乗り気ではないなずなにまでバレエをさせようとする母親を止めようとしていたのだから。

それは、今も変わっていない。

だからこそ、これを機になずなの好きにさせようとするだろう。

本音としては医師になって欲しがってはいたが表には出さず、なずなが成長していくにつれ娘の好きにさせようと考えようになっていた。

母親はその逆で、なずなが成長していくにつれ、その素質が自身を上回ることを確信していき、尚更バレエを続けさせようとしていた。

二人とも、なずなに一番いい未来を掴み取ってもらいたい一心なのはわかっていた。

恋人か、家族か。なずなにとって究極の選択だった。

結局なずなは、そのクラスメイトに卒業式の日までには辞退する

と伝えた。

本当は分かっていた。問題を先延ばしにただけだと。

それつきり、彼女は何も言っておなくなったが、最低限の会話以外はみんなに無視されることや、物の紛失などは終わらなかつた。

せりの方は無事なのか気になったので、こっそり二人で会うときに、探りを入れてみたりしたが、どうやら大丈夫らしかった。

そうして、とうとう辞退の話を母親に切り出せないまま、卒業式の日を迎えたなずなは、一人屋上へと足を運んだのだ。

すでに心は弱りきっていた。

屋上から下を見て、ふと考えた。

ここから落ちたら、死ぬだろうか。

『死んだら、楽になれるのかなあ……』

そんな、そこまで本気で思っているというわけではないけれど、ちよっぴり甘い考えに誘惑されながら、フェンスに背中からもたれかかると

『そんなに死にたいのなら、手伝ってあげます』

氷柱のような、鋭利で冷ややかな声。

それは、強烈な怒気と敵意を孕はらんでいた。

えっ？ と声を発したときには、なずなの体は宙に投げ出されていて……怖くて腰が抜けそうになる浮遊感を感じた次の瞬間、

『……』

目玉が飛び出そうな衝撃が頭部を襲い、頭が割れそうなほどの激烈な痛みを、実際の時にしては短く、体感にしては長く味わった後、

『……せ、……り……』

極寒の雪山で眠りにつくように、意識が薄れていった。せりの魂の絶叫が、微かに聞こえたような気がした。

「それで、病院で目が覚めたと思ったら幽霊になってたと」

話を聞き終えたせりは、ようやくすでに聞いていた話と繋がったなど、心中で頷いた。

「……うん」

なずなはすっかり気落ちしてしまっていた。

それはもう見ていられないくらいのもだったが、せりに目を逸らすつもりはない。

どんななずなでも受け入れる。それが恋人として当然の心構えというものだ。

しかし、これは困った。

……なずなが死んだのは、あたしのせいかもしれない。

せりは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ごめんなさい……」

「な、なんでせりが謝るのさ？」

「なずなが悩んでいたのに、あたしはそれに気づけなかったのよ？」
もう悔やんだってどうにもならないとわかっているつもりだった。
それでも、もし気づいていればという思いが捨てきれないから、
こんなことを口走ってしまったのだろう。

「そつ、それはわたしが隠してたからで……」

「……それはお互い様なのよ」

なずなが隠し事をしていたように、せりも隠し事をしていた。

「あたしもね、なずなと同じような目に遭ったの。どうせなずな
を妬ねたんだ誰かが、あたしを利用しようとしてるんだろつなつて、そ
んな予感がしたから黙ってたけど。まさか、そんなことになってる
なんて、思いもしなかったから」

「え？」

なずなの表情が一瞬固まる。

寒そうに身を震わせ、顔色が青ざめた。

せりが隠していたことの内容に、少なからぬ衝撃を受けたらしい。
まるで気づかれていなかったことに安堵するとともに、せりの胸
にはそれ以上の後悔が押し寄せた。

「そ、そんな……。わたし辞退するつて、言ったのに……」

衝撃から立ち直れないまま、なんとか絞り出されるなずなの声は、
耳にただけで無性に悲しくなるものだった。

こんななずなの声は、聞きたくなんてない。なずなにはいつものような、張りのある元気な声で話して欲しい。中学の頃、誓ったあの日の記憶が蘇る。

いつかの夕暮れ。控え目に響くフルートの下手くそな音色。

勝手に持ち出したせりのフルートを奏でる彼女なずなは涙を流して、せりの姿を認めるなり、今みたいな悲しい声でただ一言、『苦しいよ』とだけ呟いた。

せりは黙ってなずなを抱きしめ、泣き止むまで頭を撫で続けた。

……あの時誓ったはずだ。あたしは、二度となずなにそんならしくない声を出させないと。なのに、なんて様だ……。

なずなは声で泣く。涙を流しているときよりも、悲しい声のときの方が、よっぽど苦しんでいたりと、悲しんでいたりする。

それを知っているから、せりは余計に辛くなった。

「でも、まだその時はしなかったでしょ？ だから彼女たちは行動に出たのだと思うわ」

「ごめんね、せり。わたしのせい……」

「勘違いしないで。なずなを責めるつもりはないの。あたしが言いたいのはね、あの時ちゃんと二人で隠し事なんてしないで話し合っていたればよかったのねってこと」

「……ごめんなさい。ずっと黙ってて、一人で抱え込んで……」

「これからはさ、お互い悩んだりしたらちゃんと話そ？」

せりは体を蝕む苦痛なんてないかのような、穏やかな笑みをなずに送った。

コクンと頷くはずなの顔から温かな水滴が一つ、せりの頬に注がれたような そんな気がした。

「いい雰囲気になっているところ悪いが、そろそろいいか？」

そこへかけられる声。

同時に視線がそちらに動く。

二人の目に映ったのは、美珠高校の男子制服姿で、姿が見えなくなっていた紗希をその肩に担いだ少年だった。

少年 翔雨はとくに到着してはいたが、取り込み中らしいせりとなぜなの様子から、話に一段落がつくまですぐ近くの教室で待機していたのだった。

せりは警戒の眼差しを向けながらなんとか立ち上がり、いざとなったら飛びかからんとありったけの力をかき集めて身構えた。

せりの気配の変化を肌で感じ取ったはずなも、せりに寄り添うようにしながら、けれど今回はいつでも盾になれるように少し前に出る。

「二年六組の霞翔雨だ。みこに頼まれて外敵の排除に来たんだが…」

その様子を見てとった翔雨はみこの名前を出して警戒を解かせようとした。

しかし

「……信じられないわね。人の顔もろくに見ないで、窓の外へ視線を向けているのはどういふことかしら？」

「賢明だな。みこに力を借りたとはいえ、ここまであいつらの中を切り抜けたことといい、痛みに揺さぶられない集中力といい、さすがは咲実の血筋」

「質問に答えなさい」

「……信じてもらう必要はない。みこが肯定しない限りは、どうせ信じないだろう？ それとっておくが、好きで視線を逸らしているわけじゃない。自分の恰好をよく見る」

途端、なずなが思い出したかのようにせりを顧み^{かえり}た。

「せり、服！ 服！」

「え？ なずなまで何を言ってるの!？」

警戒しつつも自分の体を見下ろして 愕然となった。

……そういえば、あたしの服は溶かされてしまったんだっけ……
なんて、冷静に考えている場合じゃないわ！

顔を真っ赤にして手でとりあえず主要な部分を隠したところで、
今度はもう一つの事実にも気がつく。

「な、なずなの服は!？」

思い返せば、自分の意識が戻ったときには、すでになずなは下着姿だった気がする。

「せりにわたしの服、かけてたから……」

言われてちらっと足下を見ると、なずなの制服が床に散らかっていた。

立ち上がった際に落としてしまったらしい。

痛みを気を取られるあまり、布に肌が触れているという感覚があまりにも薄くて気がつかなかった。

「あ、ありがとうなずな」

「どういたしまして。……意味があつたのかはわからないけどね」

「いいのよ、そんなことは。それより」

せりは改めて翔雨を見る。

今のやり取りの間も、彼はずっと窓の外を見ていて、まるで攻撃してくる様子がない。

肩に担いだ紗希を人質にするでもなく、ただ窓の外を鋭く見ている。

心ここに在らずといった、そんな感じだ。

視線の先から考えると……屋上、だろうか？

……いや、今はそれよりも。

「あなた、とりあえず紗希を返してもらえるかしら？」

とにかく、せりは紗希が心配だった。

あの時、一体紗希の身に何があつたのか未だによくわかつてはいないが、紗希が無事であるかもしれないのなら、それを確かめたかったのだ。

「ああ、空宮さんのことを頼む。何かあつたとあればみこが泣くからな。様子を見てくれ」

意外なほどあっさり翔雨は紗希を返してくれるようだ。

翔雨は、不思議な陣のようなものの中に踏み入ってから紗希の体を丁寧に横たえると、ゆっくり後ろに下がっていく。

「……あなた、本当に味方なの？」

どうも敵意はおろか戦意がまるでない。ただ様子を見にきただけのような雰囲気だ。

「言っただろう、みこに頼まれたと。ところで、こちらも一つ訊きたい。隣に五月雨さんはいるのか？」

「わ、わたし!？」

名指しで呼ばれるとは思ってもよらなかつたのか、なずなの声は裏返っていた。

「ああ、言い忘れていたが、俺には声しか聞こえないんだ。それはさておき、五月雨さん」

「は、はい!？」

「窓に何か張り付いていたりしないか？」

「え、ええつと……」

異性に話しかけられるのが基本的に苦手であるなずなは、すっかり混乱しているようだった。

このままでは話が進みそうにないので、せりが訊いてみることにした。

どうしてせりではなくなずなに訊ねたのかも含め、どうにも彼の言っていることが気になったのだ。

「……あたしには、そうね、なんか変な感じがするわ。けれど“張り付いているものなんて見えない”わよ？ どうなの、なずな？」

「うん……いるよ。おっきな目玉に、腕が八つ生えてるの」

……なずなには見えるのね。あたしの目でも見えないのに、どうして……？ 彼は、それをわかっていたということ？

「どこにいるか、教えてくれないか？」

翔雨がそう問いかけると、なずなはごにごにとせりの耳元で呟いた。

思考を中断し、仕方ないわねと軽く息をついたせりは、なずなに言われた箇所を指し示した。

翔雨が右腕を窓に向けて振る。

すると、その手にはどこから出したのか、六箇所で枝分かれがある変な形の剣らしきものが出現している。

窓に当たる直前で、ぴたりと止められる刃。

「斬れた！」

なずなが驚嘆して声を上げた。

「……これでよし」

その剣は出現したときと同じように、腕の一振りで消えた。どういふ原理なんだろうか。

「ありがとう、二人とも」

「……ど、どういたしまして」

「あつう……」

やけに爽やかにお礼を言われて、せりはすっかり戸惑いを隠せなくなってしまうた。

なずなにいたっては混乱気味だ。

……変わった人ね。目つきは悪いけれど、悪い人じゃなさそう。

「それじゃ、俺は用事があるから行く。危険なものはないとは思うが、死にたくなかったらこの陣の中にいてくれ。じきにみこが来てくれるから、それまで空宮さんをよろしく頼む」

そう一息に告げると、翔雨は階段を駆け上がった。いった。

「……なにあいつ」

なずなが翔雨の消えた階段を、むすつとした顔で見つめていた。

……よかった。元気、戻ってきたみたい。

その傍らで、ようやく少し安心したせりはぽてんと座り込んだ。

第18話 6月10日 襲来するもの・その7

これでもう何射目だろうか。

途中からは射抜く個所を見定めなければならぬため、光で目が焼かれてしまわないよう威力を調整しながら射抜き続けているみこは、百四十を越えたあたりから数えるのを止めていた。

大黒蛇はその大きさを随分と減少させてはいる。

もう後一息と言ったところだろう。

しかし、むしろここからが本番だった。

小型になってゆくにつれ、濁った透明に脱色されればされるほど、狙える場所が、狙っていい場所が限られてくるのだ。

さらに、相手も身軽になるにつれて、矢を避けようと体をくねらせ始めている。それはつまり、体の大部分がこちら側に這い出ているということを示していて、比較的安全に倒せるタイムリミットが近づいていることを意味していた。

両腕が鉛の塊に変わってしまったらしい。

重くてなかなか思うように狙いを定められず、苛立ちが募る。

そんな中、それでもみこは集中力を片時も切らすことなく、針の穴に糸を通すかのごとき精密な射撃を、その華奢な腕を酷使して続けていた。

幼少期から休む日もなく続けてきた（というか強いられる）、過酷を通り越し拷問というのも生温い、凄絶なほどの鍛錬の賜物だ。傍から見ると虐待風景でしかないため、人払いといった下準備は欠かせなかったそうなの。

……やっぱり、手加減していると余計に疲れるねえ。だけど絶対に殺すわけにはいかないし……。

疲れると言えばもう一つ。大黒蛇の小型化が進むにつれて、結界

内に満ちた圧迫感が弱まり、襲撃者が動けるようになるのが時間の問題であるため、そちらの警戒もそろそろ開始しなければならぬのだ。

実は現段階で、既に多少無理をすれば動けるようになっていた。そのことにいつ気づかれてもおかしくない状況が、少し前から続いていた。

呪霊の少女の方はもう戦意を喪失しているから、大丈夫のような気がするので放っておいてもいいだろう。

……うーん。最低でも背中からグツサリかバツサリくらいは覚悟しとかなないといけないかも。それとも、こつ……首を捻ってこぎつ、とか。はう……嫌だなあ。きつと痛いだろうなあ。

確かに、普通の人と比べれば尋常じゃないくらいに丈夫な体をしてはいるが、みこだって痛いものは痛いのだ。おまけに、簡単には死なないようにできている。

別になさなみたいに苦痛に悦びを覚えるような性癖もないから、そんなのはできればごめん被りたいというのが、みこの本音だった。いくらなんでもなすなだつて嫌だろうけれど。

そんなことを考えながら、その内心などおくびにも出すことなく、無表情とはちよつと違う、いつもの笑顔よりの穏やかな表情で、みこは射抜き続ける。

それはそれで怖い光景であるわけだが。

やがて、射抜くべき場所は最後の一点　すなわち、頭部を残すのみとなった。

大黒蛇の大きさは、今や平均的な大人一人分くらいの太さで、体長は十二メートルほどになっていた。

地上では、同じような大きさの濁った透明のそれが、大量にうねうねしていることだろう。

生理的嫌悪をもたらすようなその光景は、幸いなことに誰の目に

も触れることはない。

校舎の中からは見えないようにしてあるし、この場にいる者だつて、その場から動かなければ視界に入ることもない。

だから大丈夫……と、思いきや。

「ひっ……ひああっ！」

襲撃者の悲鳴が響き渡る。

やはり気づいていたらしい。身動きなんてとづくにできるようになつていて、みこを確実にしとめんと、虎視眈々と術と策を練つて機を窺つていたそいつは、下の光景を目にしてしまったようだ。

気持ちはわからないでもない。

いつ頃からか、みこが射抜く度に大黒蛇の一部が剥がれ落ちては地面を轟と鳴らしていたのだから。

何が落ちているのか、それは畏ではないのかといった、いくつかの疑問と純粋な好奇心に、つい動かされてしまったといったところか。

しかし、そのお陰で最後の一発は後ろを気にすることなく放てる。どうせ表面上の姿を見ただけのくせに腰を抜かしているだろうから。

みこだつて始めて見たとき（当時十二歳）は悲鳴も上げられずに失神したものだ。あんなの二度と見たくない……本心からそう思つてはいるけれど、もうじき見る事になってしまつたわけ。

何せ、それにしかるべき処置を施すことがみこの仕事であるが故に、嫌だから見ないというわけにもいかないのである。

もう何度か見ているため慣れ（当代で慣れたなんて言った者はみこだけ）はしていても、ちよつと暗鬱な気分だった。

とはいえ、あれを見て一番衝撃を受けるとしたら、それはせりだろつ。

優れ過ぎた視覚であのような、混ざりに混ざつた災厄と激情のな

れの果て　　災^{さい}涙^いの柑^る埒^{じほ}　　を見れば、その瞬間に心が壊れて絶命
しかねない。

そうなれば、今度はショックを受けたなずなが魂旨の力を暴走さ
せてしまいかもしれない。

最悪、みこはなずなを　　なければいけないことになる。

……うん。せりにだけは絶対に見せるわけにはいかないから、手
早く処理しないとね。

みこと大黒蛇の成れの果ては、間に二十メートルほどの距離をあ
けてお互い睨み合い、その一瞬を待つ。

みこは相手が飛びかかってくるその時を。

蛇はみこが矢を放つその時を。

ぴくつとみこの耳が、さながら猫のそれみたいに動く。

その瞬間、弓は張り詰めていた緊張を解かれ、矢が放たれた。

待つてました。

そう言いたげに喜色を目に浮かべた蛇は、螺旋を描きながらみこ
の喉笛を噛み切らんと飛来する。

蛇の描く螺旋の中を通過して天へ抜ける矢。

それと入れ違いに、蛇の顎^{あぎて}がみこの喉へ迫る。

視力の回復した呪霊が、呆然と見守るその前で。

蛇を避け得ないのか、動こうとしないみこの命は花と散るように
思われた。

そんな、死を目前にしている状況であるのにもかかわらず、にこ
つと、みこは嬉しそうな顔をした。

直後、屋上の扉を突き破るようにして飛び出した影が、蛇の到達
寸前にみこの前に躍り出る。

影の手には青白い光を宿す奇怪な形の剣、白蒼^{はくそう}乃七^{のななせ}枝。

飛び出してきた影の正体は、翔雨^{しゅうう}だった。

蛇の頭に叩きつけられる剣の腹。

その腹から、一層強さを増した青白い光が噴出し、蛇は屋上の床を抉りながら転がって、ぎりぎり縁のところまで止まると動かなくなつた。

そこへすぐさま放たれる矢。

とつさに翔雨は白蒼乃七枝で目を庇つた。

天を煉獄へと変貌させていた、そんな初期の頃に比べればかわいらしい、それでも軽トラツクくらいは簡単に吹き飛ばす程度の小爆発が起きる。

辛うじて屋上に残っていた黒い蛇の体は、色を失いながら他の仲間元へ落ちていった。

「ありがとう、しょうちゃん。助かつ……へ？」

みこが言い終えるのを待たず、駆けつけてくれた幼馴染は無言でみこの柔らかな頬を摘むと、

「なんで動こうとしなかったんだ。間に合わなかったらどうするこの馬鹿みこ！」

ぎゅうつとつねったり引つ張ったりし始めたのだった。

どうやら、蛇が矢をかわして突っ込んできたところを叩き落とすくらい造作もないくせに、近づく翔雨の存在を知った途端に動かないことにしたのがお気に召さなかったらしい。

「いらいらいらいらいごめんらはいいいい……」

頬をつねられたりしていながらも、どこか幸せそうな顔をしているみこであった。

「おい、なんで嬉しそうなんだ？」

「だって私のところにも来てくれたんだもん」

「……ま、無事のようにだし、今はあいつを魅祓さんに引き渡してくるか」

頬から手を離しつつ、まんざらでもなさそうな翔雨が目で襲撃者を示した。

「それと、あの霊も……」

「じいー」

呪霊の少女へ翔雨の目が向くなり、みこは何か言いたげな視線を彼に送った。

「……なんだ？ わざわざ擬音まで口にして」

「あの娘の処遇は、私に任せてもらえないかなあと思ひまして」

「勝手なことしたらみこ、また魅祓さんにお仕置きされるぞ？」

そう。本来ならば捉えた襲撃者 どころかしらの刺客や呪霊などは、管轄地域の元締めを引き渡すことになっている。この辺りだと都守家だ。

引き渡されたものがどうなるかは、諸事情を考慮した上で決定され、その最終決定権は都守家現当主の魅祓にある。

ならばみこはどうなのかというと、高校入学を契機に大抵の場合においては事前に委任されるようになってい

しかし今回は、襲撃者や呪霊の処遇については委任がなされてい

ないため、魅祓に引き渡してから許可を貰わないといけない。
勝手なことをすれば、きつーいお仕置きが待っているのだ。

「はうつ！ 今月は確か……うう……一晩中三角木馬責めは嫌かも……」

「あの人にそんな趣味が……」

翔雨が苦い顔をして肩を竦めた。

そういえば、お仕置きでどんなことをされているのか、しょうちやんの前で言ったことなかったんだっけ？ と、みこは記憶を辿ってみる。

一昔前の拷問やら、激しめのSMチックなこと、それに、口が裂けても言えないようなとつても恥ずかしいことばかりが思い出され、気が滅入った。

拷問っぽいのは口にした記憶があるが、他は……恥ずかしくて言えるわけがない。

今回のはどちらかという拷問寄りだ。

明け方には股が裂けて腸やら何やらが零れ出ていることだろう。後始末がこれまた大変なのだ。

痛みだつて半端じゃない。木馬から逃れようと身を擦るのは自由なのだが、もし落下したらその先に待ち受けている、文字通り水面を覆う泥鱧じしやうさんの大群の中にダイブすることになる。泥鱧は魅祓が作りだす偽物だ。触れる幻といえはいいのだろうか。

どうせ落ちるのならば早い方がいい。

下手なタイミングで落ちようものなら、木馬よりも苦しいのだ。

時間が経てば経つほど股は傷つき裂かれていくため、最悪の場合腸を泥鱧に引き摺り出され、芋づる式に内蔵全てがごっそりと持っていかれてしまい、死にかねない。

そのため、内臓を引き摺り出されてしまうほどには傷が広がって

いない、午前一時までに落ちていない場合は、木馬に体を固定される。

そうなってしまつともう逃げられない。泣こうが喚こうが、お仕置き開始の午後九時から終了の朝六時まで、延々と耐え難い痛みを味わうことになる。

とはいえ、ぬるぬるうねうねの中で揉みくちやにされながら一夜を過ごさなければならぬのも、精神的にかなりきついものがある。息を継ぐのも一苦勞なのだ。

黒い悪魔こと、ゴから始まる四文字のなんとかさんでないだけまだマシではあるが。

泥鱧ランドからは、ちゃんと朝まで我慢して許しを得てからでないとはいけない。

もしも逃げ出そうものなら……想像するだに恐ろしい。

「みこ、どうした？ 顔色が悪いぞ？」

顔を青ざめさせガクガクと身震いし始めたみこを、翔雨が心配そうに覗き込む。

「えっ？ あっ、その、なんでもないです、ないないですよ？」

……考えちゃだめ考えちゃだめ！

あははーと下手くそな愛想笑いを浮かべて、みこは想像から逃避した。

「……一階の階段前で二人と幽霊が待つてるぞ」

ビビりまくっているくせに、意見を変えるつもりはないらしい。

そう悟った翔雨は、校舎の中で待機しているであろう三人の居場

所を告げると、泡を吹いて失神している襲撃者を捕縛して担ぐ。

「ああ、今日は俺たちみんな早退扱いにしておくから、全員家に帰れとのことだ。先に行って待ってるぞ。それと……その左腕の包帯についても訊きかせてもらっつからな」

白蒼乃七枝で結界を切り開くと、翔雨は生まれた隙間の中に消えていった。

「……ありがとう、しょうちゃん」

誰もいなくなった空間に向けて呟くと、「さて」と呪霊の少女に歩み寄る。

呪霊の少女は、放心したようにこちらを見上げた。

その目の前で座り込み、みこは目線を合わせた。

そこまで近づいて、鼻をひくつかせて少女の匂いを嗅ぐ。

「……うーん。やっぱりなすなの、魂旨の匂いがする。これはどういふことかな？」

一撃を叩き込んだ際にふと香った匂い。

その答えをようやく知り得たみこは小首を傾げた。

「な、なに……?」

呪霊の少女の声は消え入りそうだ。

「えっとね、私たちの中で背が一番高くて胸が一番小さい人と、君は前に会ったこと、ないかな？」

少女を怯えさせたくないみこは、できるだけ優しく語りかけた。

「い、一番背がた、高くて、一番胸が小さい……胸が小さい……。も、もしかして……あの幽霊？」

みこの思惑とは裏腹に、少女はますます戦々恐々としてしまった。さながら罪を暴かれた咎人の風情だ。まさにそうなのだが。

「そうそう、その幽霊！ それで、どうかな？」

「え、えと、ええつと、そつ、その……」

つうと目尻を伝って流れ始める涙。

「じゅめんなさい……」

そう言うつと呪霊の少女は急に泣き出してしまった。

よしよしと頭を撫でてあげながら、「会ったことあるんだね」と問いかけると、少女はこくと嗚咽を漏らしながらも頷く。

「それじゃあ、さ」

みこは、これを言ったらこの娘はどうにかなってしまうのではないかと、そんな心配を胸に抱いた。

だけど、それは確認しなければならぬ大切なことなので、訊ねないわけにはいかない。

「その娘を　なずなを屋上から落としたのは、あなた？」

殺した、とは言わない。フェンスを外した、とも。

落とした。

これが一番逃れられにくく、少しはきつさが軽減されていて、目的を達成できる表現だと思ったから、そう訊いたのだ。

なすなと出会った日。

大黒蛇接近の知らせもまだなく、学校で噂になる程度にしか特に影響を及ぼしていない幽霊にまで、忙しくて手が回らない日々の中で。

特に事件もなかったので放置していたこの件に、大黒蛇接近の知らせのおかげでようやく手を着けられた日に。

出向いた屋上は、人による他殺にしては澄んでいたし、自殺にしては空虚さも暗さもなかった。

みこが抱いたのなすなの死への感想は、人の手による他殺らしくもなく、自殺らしくもない。さらに、フェンスだって外れるような状態ではなかったようだから、事故ですらないというものだ。

なら、なすなはなぜ死ぬことになったのか。

可能性の一つとして、まだ死ぬつもりはなかったであろうなすなに気づかれることもなく、屋上からフェンスを外して落下させられる存在。

そいつは誰にも目撃されず、あの時そう遠くない場所にいたみにさえ、その存在を悟られるようなことがない。

動機は、自ら命を絶とうとする者に対する怒りなのだろうか？

死ぬ気はなかったにせよ、高いところから下を見ると、精神状態によつては少しくらい死を考えてもおかしくはないだろう。

みこはそれらの条件に当てはまりそうな人に、心当たりがあった。だからこそこんな考えが浮かび上がったのだが。

しかもその人は、なすなの匂い　魂旨の気配　を香らせている。

すなわち、目の前で泣いている呪霊の少女だ。

少女は訊ねられた瞬間より一層その身を震わせ、

「消さないで……お願いだから……」

懇願するようにそう言った。

「それを決めるのは私じゃないよ。念のためにもう一回訊くけど、本当にあなたが落としたの？」

「……はい」

それを決めるのは私じゃない。

みこのその言葉で、いろんなことを諦めたように少女は認めたのだった。

「わかった。それじゃあ、行こっか」

それに構わず、みこはひょいと少女を抱きかかえて立ち上がる。やはり右腕が猛烈に痛むが気にしない気にしない。

……ちよつと泣きそうなんですけどね。

「えっ？ えっ？」

困惑する少女を余所に、校舎の中へと足を踏み入れた。

目指すは三人がいるという一階だ。

みこは少女を抱えているとは思えない軽快な足取りで、階段を滑るように降りていった。

みこが一階に到着すると、そこには翔雨が張ったらしき結果と、その中にいる一応は無事らしい三人の姿があった。

「みんな大丈夫？」

どこか脳天気な感じのする声に反応して、

「みこ！」

なずなが声を弾ませ、安堵したような表情になった。

「お待たせーって、せりは早く処置する必要があるみたいだね。紗希は……気を失ってるのか」

目を配り状況を確認したみこは、ここでこのまま話すというわけにはいかないかと呟くと、

「ごめんね、自己紹介とかはもうちょっと待って」

腕の中の少女に微笑みかける。

「その娘は……さつき襲ってきた！」

みこが抱えている存在を目にしたせりが警戒して身構える。刺すような視線に、少女が縮込まれる。

「待ってせり。今は、待って。お願いします」

「……みこがそう言うなら」

みこに応じて、ふっと気を緩めたせりの顔が歪む。
そこへ、すかさずなすが心配そうに顔を覗き込む。

「せり、大丈夫？」

「……気を抜いちゃだめね」

自嘲するように笑って、大丈夫よとなぜかに返す。

「えっと、せりの傷の手当てもしないといけないし、せりの服だつて用意しなきゃだし、紗希もちゃんとしたところで寝かせてあげたいから、一旦家に行きますね」

みこはまくし立てるように告げると、

「道となりて彼の地へ繋げ！」

叫びながら屈み込み、片手で陣型の結界の縁を叩く。
叩かれた陣はその紋様を書き換えられ、暖かな淡い白き光で陣中の三人包み込み

「ちよ、ちよっと、これ大丈夫なの！？」

「わあっ、何これ綺麗！」

困惑するせりと喜ぶなすがの声と共に、三人の姿が目の前から消えた。

それを確認したみこは、自らが生み出したこの結界の領域全体術界の隅々にまで意識を向ける。

みこの展開した術界は、いつもの世界にあらざる場所、異次元とでもいうべき空間に位置する。

その術界が解除されてしまうと、そのままでは術界の中にいた存在はどこともしれぬ場所に飛ばされてしまうことになる。

そういう事態を防ぐために、術界を解除する際には各結界の中に取り残されたものがないことを、よく精査する必要があるのだ。

取り残されたものがいた場合、それをきちんと本来あるべき場所に送り届けなければならぬ。

そのような義務は、みこの属する世界の人間に対してしか存しないのだが……。

みこは義務とかそんなことは関係なしに、術界に巻き込まれてしまったり、入り込んでしまった存在はちゃんと送り届けるようしていた。

……誰か、死んでる……。しょうちゃんがやったんだろう……。また、私は他人に殺させた……。

みこは「ごめん、ちょっと寄り道するね」と腕の中の少女にすまなさそうに告げると、体育館へと足を運んだ。

そこで目にした斬殺死体に「どうして……？」と悲しげな視線を送り、その亡骸を元の世界へ転移させる。

それから、淡い白の光を放つ陣のところに戻った。

「さて、もうこの空間と無理矢理引き継いだ結界はいらぬから解除して……と」

みこは結界の解除と共に崩壊していく校舎から、結界が解かれたことよって見えるようになった窓を通して、外でうねうねしているそれらを指さし、

「間界まかいを渡りて我らが庭園へ」

鋭く命令を下す。

すると、大黒蛇であったそれらの体表に赤い光が宿り、輝きが強くなつたかと思つと、こちらもまた姿を消した。

「崩れちゃう前に家へゴー！」

やることを終えたみこは、腕中で少女が戸惑いそわそわとしているのを知つてか知らずか、ぴよんと三人を飛ばした結果だつたものに飛び込んだのだつた。

第19話 6月10日 日常への帰還・前編

都守の屋敷前に飛ばされた一行は、みこの私室に招き入れられた。昨夜から今朝は見かけなかった家の人も何人が帰ってきていて、その彼らがみことすれ違うとき、わざわざ立ち止まっては「お帰りなさいませ、みこ様」と一礼としていた。

みこが呪霊の少女をそうしているように、なずなに抱きかかえられてしまっていたせりは、その腕中で恥ずかしそうに身を振りながらも、目にしたその光景に改めてみこは名家のお嬢様なんだなと実感した。

みこは「ただいまです。昨夜はご苦労様でした」と微笑み返す、その一方で。

その笑みを困ったようなそれに変えて「あのっ、お願いですから、私みたいな子供にまで様付けはしないでください……」と、申し訳なさそうにぺこぺこ頭を下げている。

そんな光景に、せりはこの家におけるみこの立場と心との葛藤を垣間見た気がした。

呪霊の少女はというと、みこ以外の視線からは逃げるようにみこにくつついていた。あれほど怯えていたのに、今となっては他の人間の方が恐ろしいということだろうか。

なずなの方は、鼻の下を伸ばして、捕らえた得物を巢に持ち帰る獣のような気配を撒き散らしていた。

もしこの場にみこがいなかったらたぶん、せりは食べられてしまっていただろう。

その後ろから、先に来ていた翔雨しやううが呆れたような視線を投げかけながら、紗希あきを担いでいた。

部屋に入るなり、翔雨は紗希をベッドに寝かせ、みこはすぐさませりの傷の治療を癒系残痛といった治療術で済ませ、今回は問答無用で痛みを引き受ける。着替えは、とりあえず制服を渡した。

そうして、一段落つくのを見計らったかのようなタイミングでノックされる扉。

顔を出したのは魅祓みはらだった。

「か、母様！ どうし……お茶と羊羹ようかん？」

これに慌てたのはみこだった。

「ええ、そうよ。お茶くらい飲む時間はあるでしょう？ それよりみこ。呪霊の処遇を勝手に決めようとしているらしいわねえ？」

魅祓はたおやかな手つきでお茶と羊羹を配りつつ、にっこりとした満面の笑みをみこに向けた。

びくつと、前から抱きついてみこから離れようとしないうちに、呪霊の少女の体が跳ね動いた。

みこの背後の壁に背を預けていた翔雨が「すまん」と一言。それだけで、何があったかわかってしまった。

翔雨の立场上、魅祓への報告義務を怠るわけにはいかないから、それは仕方がないことだ。

「えっと……その……だめ？」

胸の前で人差し指同士を突っつき合わせながら、おねだりするように訊いてみた。

「フルコースの準備をしておかなくてはいけないようね」

他の面々もいることから省略されてはいるが、フルコースの前に入る言葉は当然、お仕置きだろう。

表情を変えることもなくそれを告げると、

「皆さん、ごゆっくり」

魅祓は部屋を後にした。

「どどどどどどじょうじょうちゃん！ 母様怒ってる！ めーっちやくちや怒ってるよー！」

みこは半泣きの表情で翔雨の顔を振り仰ぐ。

「……今なら、まだ引き返せると思うぞ。たぶん。きっと。もしかしたら」

「うぐっ！ そ、それはできない……あうっ……」

がくつと、観念したように肩を落とすも、「こんなことしてる場合じゃないよね」と、すぐに気を取り直し、抱きついたままの少女に語りかける。

ちゃんと腹は括っているようだ。

「私のことは知ってるみたいだけど一応、名前教えとくね。都守みこです。それから……」

みこは順に全員の名前を少女に伝えていった。

「それでは、まずはお名前を聞かせてくれるかな？」

「……白亜。七雪白亜」

畏縮してしまっているらしく、その声は小さなものだったが、な

んとか聞き取る。

「白亜……それじゃあ、はーちゃん！」

そこで、なずながもう我慢できないとばかりに口を開いた。

……うん。さっきからうずうずしているのは知ってたよ。

何せ女の子同士が抱き合っているのだ。

なずなが放っておくはずはないのである。

一体、なずなはどんな想像をしていることやら。

もし白亜となずなの二人きりだったら、襲いそうで怖い。

……ちよつと食べやすそうな感じだしね。

身を案じる視線を送ると、白亜は「へ？」と、ぼかんとしていた。幽霊は見た目と実年齢が一致するとは限らないが、これまでの様子を見る限り、見た目通り十四歳くらいの年齢といったところだろうか。

しかし、今のなずなの発言は、この畏縮しきった少女をまるで怯えさせなかったのには驚いた。

目が合うだけでびくびく震えるのに。それさえなかった。

「なずな、幽霊は見た目と年が合わないことが多いわ。はーちゃんなんて呼ぼうと企んでるみたいだけれど、もし年上だったらどうするの？」

まさになずなに言おうと思っていたことを、せりが告げる。

「はえっ？ はーちゃん、そうなの？」

まさか自分が死んだ直接の原因であるなどとは露とも知らないはずなは、白亜に首を傾げて見せた。

「え、えつと……今は十四、です……」

みこは目を丸くした。

たどたどしくも、みこに促されることなく、白亜が自ら答えたからだ。

ほらね、となずなはせりに片目を瞑って見せた。

もしかして年下と確信できる根拠を見出していたのだろうか。

白亜は恥ずかしそうに身を振り、みこに一層強くしがみつく。

どうしてこう、従姉妹といい白亜といい、近所の子供たちもそうなのだが、年下の子はこうもみこに抱きつくというか、しがみつくのだろうか。

……まったく。愛おしくてしょうがない。どうしてこんなにかわいいんだろうか。食べちゃいたい。

と、なずなみたいなことを考えている自分に気づき、他人のことをとやかく言えないなと内心苦笑した。

よくできましたとばかりに、白亜の頭を撫でる。

嫌がられるかと思っただが、白亜は目を細めて気持ちよさそうにしている。

まるでタルトみたいだと、みこは思った。

タルトとは、尻尾が二岐のネコのような生き物で、みこの友達だ。

「……それで、その娘をどうするんだ？」

黙って成り行きを見守っていた翔雨が、このままでは日が暮れる

ぞと、目でみこに告げる。

みこはそれに一つ頷くと、

「なずなど……それからせりに、大事な話があります」

白亜を庇うようにしながら、みこは白亜のしたことを、改めて本人に確認しながら、二人に伝えた。

なずなのもたれかかっていたフェンスを外して、なずなを屋上から落下させたのは、どうやら白亜らしいということを。

これに憤慨したのはせりだ。

「どうということよ!」

だが、詰め寄ろうとしたせりを、なずなが制する。

「待って、せり。みこ、続きをお願い」

「でもっ……!」

「お願い、せり」

なおも言い募ろうとしたせりに、なずなは悲しげな目で訴える。

「……っ」

せりは喉の奥から押し寄せてくる言葉を押し込めるように、唇を噛んだ。

「うーん。続きというか……理由かな。白亜ちゃん、どうしてそんなことをしたの?」

みこが訊ねると、白亜は口を閉ざしてしまった。

「はーちゃん、教えて？」

なずなが無造作に近づくと、みこから少々強引に白亜を引っ剥がすと、暴れる彼女をそっと抱きしめて宥める。

「大丈夫だから。わたし、怒ってないから。ね？」

なずなは愛おしげに白亜の頭を撫でる。端から見ると、まるで仲のいい姉妹だ。

……妹、か。

みこはどうしようもない寂しさを覚えた。我知らず、その手が拳を作る。

その背に、翔雨の心配そうな眼差しが注がれる。

「……死にたくない。生きたい。そう、心から強く願ったことは、ありますか？」

白亜がぼつりと呟いた言葉に、その意味するところを悟ったなずなの表情が一瞬凍りついた。

「そっか……あの時、聞かれちゃってたんだ……」

「白亜は……白亜はどれだけ願ったところで死ぬしかなかった！なのにあなたときたら、自分で自分を殺そうとしてた！死んだら楽になれる？ 実際はどうだったのよ！ ふざけないで！」

最初は辛そうに、絞り出すようだった。けれど、途中から白亜は、鬼の剣幕で訴えた。涙を湛えた目は血走り、なずなを貫くように睨み据える。

「……だから、はーちゃんは……。わたしが、許せなかったんだね……」

納得した。なずなはそう顔に浮かべながら、白亜の視線を正面から受け止める。

「……ごめんなさい」

白亜は視線を下に向けて言った。

「謝って済むことじゃないけど、ごめんなさい」

今度は面と向かって。せりにも同様にした。

「わたしは許すよ」

「いいよね？ とせりに目で訊ねる。」

「それはなずなが決めることよ。でも……あたしはまだ、その娘を許せそうにないわ」

それ以上に許せないのは、自分自身なんだけどね。そう、せりは自嘲気味に笑った。

「せり……」

なずなが何かを言いかけて、止めた。

大丈夫よ。あたしは、いつか自分を許せるようになってみせるから。

なずなの中でだけ広がる言葉。

そんな、せりの想いが心に染み込んだから。

「それより、みこと、その後ろの彼……霞君にはいろいろ訊きたいわ。どうやって学校からここまであたしたちを運んだのかや、あの黒いのが」

せりはちらっと翔雨の顔を窺う。

それに翔雨は頷いた。

「……。そうだな。みこ、空宮からみやさんはどうするっ」

「えっと……。紗希には、後で私から伝えとく」

「……わかった」

それでいいのか？

口ではわかったと言う翔雨の目は、そう物語っていた。

「それじゃあまずは、大黒蛇が元はどんなもので、今はどうなったのかから話そうかな」

「結局見なかったよね、わたしたち」

ねー、となずなはせりに寄りかかる。

「あたしは前に先見で見てるのよ。それで、その蛇は何なの？」

「あれは魂還するその時まで、ずっと見ないでいた方がいい。気分が悪くなるだけだ」

翔雨が思い出したくもないとばかりに、吐き捨てた。

「見た目はただ単に、山のように大きくて、川のように長い、黒色の蛇さんんだけどね」

「ははは……」というみこの苦笑が、見た目以外のところに気分が悪くなるような何かがあることを物語っていた。

「人が生み出してしまった不幸や災いを喰らい、幸いにして振り撒く神獣なんだが……」

「元々は、ちよつと濁りのある透明な体の蛇さんで、大きさも鰻くらいかな。首のところを掴んで、近くで正面から見るとかわいい顔してるんだけどね。ウーパールーパーだっけ？ あんな感じだよ」

これに、せり、翔雨、白亜が首を捻った。

想像しても、そこまでかわいいとは思えなかったらしい。翔雨なんかは頭を抱えていた。

「はい、しつもーんでーす。こんかんって何ですか？」

眠っている紗希を除き、唯一懐かしいねという反応を見せたとなずなが手を挙げた。

「あの、魂が還るべき場所に還ること……、です」

「そうなんだ。はーちゃんありがとう」

懐から返ってきた答えに、なずなは破顔する。

なぜか白亜は顔を赤らめて下を向いた。

みこには、照れているのはちよつと違うものが混ざっていたように思われた。

……というか、この二人はいつまでくっついてるんだろう……。時折なずなに向けられるせりの視線が、どこか物欲しそうなのです。

「……続けるが、大黒蛇は本来、変換装置なんだ。人にとって非常に有益な存在。神が遣わした幸いの運び手。その名を幸蛇さちへびという」

翔雨が一つ咳払いして、話を再開する。

「昔は人の数が少なかったし、不幸や災いの規模も小さかったからよかつたんだけど……。人間の技術が進歩するにつれて、その規模はどんどん大きくなって、幸蛇の処理能力を超えてしまったの。それでも彼らは役目を果たそうとした。その結果、変換できなくなつたそれらの持つ力に、逆に飲み込まれてしまった」

先程からそうしていたように、みこは翔雨の後を撃いだ。

「それで、あの大きな黒い蛇になってしまったのね……」

どこか申し訳なさそうに、せりは目を伏せる。

きつと、大黒蛇となった幸蛇を利用しようとしたことを、悔やんでいるのだろう。

「せり……」

せりの手に、なずなの手がそつと重ねられた。

「えつと、幸蛇……だっけ？ みこは鰻くらいの大きさで、色は濁った透明って言ってたけどさ。どうやって大きくなるかは想像がつくけど、どうして黒い色になるの？」

なずなが首を傾げる。頭の上に疑問符が浮かんでいそつだ。

「幸蛇の色が黒くなるのは、暴走した幸蛇が大量のものを無差別に取り込んでしまい、それらの色という色が混ざりあうためだ。濃ければ濃いほど、より大量のものを取り込んでいるという証だ。当然、大きさもそれなりのものとなる」

「一匹がそうになると、仲間がそれを助けようとするんだけど、処理が追いつけないとそれもまた食べられて、体の一部にされちゃうの。私が出したことは、そんな彼らの中に溜まっているものを、全部焼き尽くすこと。もっとも、食べられた幸蛇まで焼いてしまっただけは意味がないから、手加減はしたけどね」

「その……幸蛇は、どうしたの？」

せりが不安げに見つめるので、みこは大丈夫だと笑いかけた。

……実物を見せられるのならよかったんだけど、今は見せられるような状態じゃないからねえ。

「今はばらばらになった彼らを、彼らが最も好む環境の場所に移しておいたよ。溜まっていたものの大部分は焼いたけど、それらが含んでいた、幸蛇にとっても人にとってもよくないものは抜えていながら、まずはそれを抜つて、ゆっくりと一年かけて癒します。だから厄年なんていうのがあるんだよ。幸蛇にだって休息は必要なのです」

「ということとは、このままだと時が経つほどに厄年が増えるってこと？」

「幸蛇が大黒蛇になつちやう頻度もね。幸蛇は一定範囲ごとに決まった数があるんだ。だからあつちこつちで大黒蛇化なんてされたら、対処がすごく大変なんだよ」

みこや魅祓、祖母の命みことなら、一人で対処できる。

しかし、三力所以上で発生された場合、余った分には親戚や家入りして都守の巫女となった者の中でも特別に強力な力を持つ者が対処にあたることとなっている。

ただ単に討伐するのならば、大抵の相手はあつという間に片がつく。それがたとえ、人から神と崇められるものであつても、だ。

けれど、大黒蛇は討伐してはならないため、手加減を余儀なくされるのだ。それ故、どうしても時間がかかってしまう。

そうなつてくると、他の事件が発生したとしても、そこまで手が回らなくなつてしまう。

人手がもう少しあればいいのだが、これがどうにもならない。

鍛錬の開始時期に加えて、鍛錬の内容が正気の沙汰とは思えないほど過酷なので、家入りしたいという者がそもそも稀少にならざるをえず、大半の者があまりの辛さに道半ばで挫折する。

家入りを果たしたとしても、今度は命を落とす者がどうしても数

年に一人から二人ほど出てしまう。
なんとも頭の痛い話なのであった。

「……魂^{わたし}旨^つって大黒蛇からしたら極上の餌なんだよね？」

神妙な面持ちで確認するなずなに、みこは頷く。

「まさかなずな！？ もしものときは、自分が囷になろうだなんて考えてないでしょうね？」

なずなに向けられるせりの目つきが険しいものになった。
みこはなんとなく思いついて、じつくりとせりの顔を観察してみ
る。

すると、それがいかに迫力に欠けるものであるかがよくわかって
しまった。

「……というか、これはこれでかわいらしいよね。

「そうじゃないよ。わたしと一緒にいたら、せりも餌みたいなもの
なのかなって」

やはり、なずなはあっさりと否定した。

せりを心配して……というより、せりも自分と似たような立場に
なってしまうのだろうかと考えている風だった。

「魂還するにしろ、消滅するにしろ、その時でも二人一緒なら、ど
んな立場であれ、あたしは何も文句はないわよ。それともなずなは
……あたしと一緒にじゃ、嫌なの？」

寂しげな顔でせりに迫られたなずなは、

「わたしも、一緒がいい」

恥ずかしそうにそう言うと、頬をほんのりと赤く染める。
せりとなずなは相変わらずあつあつだなあと、みこは微笑んだ。

「……………」

黙ってそんな光景を眺めていた翔雨は、このまま放っておいたら、
三人とも話から脱線して戻ってこなくなる予感がしたので、

「……………次、いっていいか？」

遠慮がちに声を投げかけた。

そんな彼へ、白亜が同情するような視線を向けたのは、決して気のせいではなかったのだろう。

第20話 6月10日 日常への帰還・後編

「あたしたちを襲ってきたあの黒いやつが、異世界に住む普通の動物だっただなんて……」

「異世界というより、隣町と言う方がどちらかというより正しいんだがな。だが、世界がこの宇宙だけで成り立っているものだと思うっていた人間からしてみれば、異世界と言った方が理解しやすいだろう」

命の危機をもたらした相手が化け物ですらなかったことを知り、せりは愕然となった。

せりたちがあの校舎の中で見たのは、情熱食獣の『ムシ』と呼ばれる動物であり、黒いオタマジャクシのような姿をしていた方が雄で、動く太くて長い透明な体をしていた方が雌だそうだ。名前の由来は、オタマジャクシの別名である蝌蚪かどと蛇の字とに共通する部首からとられたのだという。

翔雨の話によれば、そいつらは感情が生まれたときに発生する何らかのエネルギーを主食としていて、雄は三十度から五十度くらいの温度を持つものに、種付けをしようとする習性を持ち合わせていたらしい。

幸い、繁殖期ではなかったらしく、せりは種付け“は”されずに済んだようだ。

どうしてそう言えるのかと彼女が訊くと、「生殖器でもある舌を口からなんて入れやしない。もしするきだったら、その……胎生の生き物に対しては……」だそうだ。

翔雨が口籠ったことで、どこに何をされるのか見当がついた。同時に、せりは少し申し訳なく思った。

「んー？ でもそれって、他の世界の生き物なんでしょ？ どうし

てわたしたちの世界に現れたりなんかしたのさ？」

なずながもつともな疑問を口にした。

「大方、大黒蛇が移動のために作りだした道に紛れ込んだらどうだろう。通常、道を作るときは外部から異物が混入しないよう、境結界^{きょうけつかい}……始点と終点を繋ぐ道とそれ以外とを隔てる一種の結界を張る。しかし、道を通るものが強いのなら、邪魔が入ることがないために、必要なしとして結界を張らないことがあるんだ。それに……」

翔雨が無言でみこを見やった。

「……な、なんのことかな？」

「お前がそういう態度に出るのなら、すぐにも魅被さんに報告させてもらうが？」

「はぐう！？ ごめんなさい……」

魅被に報告と聞くなり奇声を発したみこは、翔雨ではなくせりとなずなりに土下座した。

「え？ みこ、どうしたの？ なんで謝るの？」

「……どういうことなのよ？」

「その、実は……」

みこは観念して、白状した。

彼女が学校に仕掛けておいた結界と術式には、意図的に生み出さ

れた穴があつたのだ。

大黒蛇が出現したとき、みこは学校を敷地ごと結界で包み込み、外界と隔離していた。

そうして、今度は学校の偽物を作る術式を発動させ、同時に転移の術を用いて本物の学校とすり替えたのだ。

結果、本物の学校は結界から弾き出されて元の場所に戻り、偽物が結界の中に残ることとなる。

せりたちが逃げ込んだのは、この偽物の校舎だ。

その後、みこは更に術を発動させた。

自らが張つた結界に穴を開けて、近頃周囲をうろついていた怪しい連中を誘い込んだのだ。

襲撃者の存在は朝の段階から知っていたが、何も行動を起こさない上、大黒蛇がくるのも数日の内であつたこともあり、あえて放置していた。

しかし、大黒蛇の出現と共に呪霊が現れたことから、みこは襲撃者が動いたと考へのだ。

みこの思惑通り、そこから襲撃者は侵入した。けれど、それと同時に予定外のものが沢山入り込んでしまった。それが、ムシなのだった。

「要するに、あたしたちが死にそうな目にあつたのは、みこのせいってこと？」

「そうなります……。はい……」

みこはどんどん小さくなっていった。

「みこの支配領域に入った招かれざる相手は、本来の十分の一も力を発揮できなくなるとはいえ、素人に力を貸与して戦わせるとは驚いたよ。それもムシの大群相手に。いくらなんでも無茶をさせ過ぎ

だ。都守の名が泣くぞ?」

溜め息混じりに翔雨はぼやいた。

「だ、だって、まさかそんな大群だなんて……」

それに、みこは言い訳を口にしようとして、

「みこ……。それ以上言うようならいくらなんでも怒鳴るぞ?」

猛禽類を思わせる翔雨の容赦ない鋭利な視線に、みこはびくんと震え上がった。

「っ！でもっ、みんなこうして無事なんだし……」

それでもみこは言い募ろうとして……。

「みこっ!」

宣言通り、翔雨は声を荒げた。

「最悪、三人とも死んでいた。みんな無事だったから? なら、みこのベッドで眠り続けて目を覚まさないのは一体誰なんだ!？」

みこはもう、何も言えなかった。

……ごめん……。ごめんね……。紗希……。

唇を噛みしめ、込み上げてくるものに耐える。
大黒蛇に呪霊、襲撃者の相手で動けなくなり、誰一人守れなかつ

たから。

それどころか、自分の安易な考えでみんなを命の危険に晒し、紗希を傷つけてしまった。

拳句、あわよくばその事実を黙っていようとしていた。

翔雨の言葉は、そんな卑怯なみこの心に裁きの槍として突き刺さったのだ。

彼は滅多なことじゃ誰かを怒鳴りつけるようなことはしない。そんな彼に怒鳴らせるほど、みこは馬鹿な事をしたのだった。

「ごめんなさい……」

怒鳴られた際、怖くなって下を向いてしまったみこにはわからなかったが、静かに成り行きを見守っていたせりとなずなは、翔雨が苦しそうな表情をしているのを確かに見た。

怒鳴ってしまったことを後悔している。そんな顔だった。

みこはみこで、どうしてか翔雨に嫌われることに対する怖さをも抱いてしまっている自分の心に気がつき、激しく動揺していた。

叱られるのは当然だったが、その叱られたことに対するショックも絶大であり、それが動揺に拍車をかけていた。

「……人の世話を焼くのは一向に構わない。それは魅祓さんも認めてくれているだろう？」

こくと、みこは頷いた。

「なら、最後までちゃんと守り通せ。それと、何があっても切り抜けるだけのものを、彼女たちに授けるんだ。こうなったらもう、引き返せないんだから。な？」

ほん、と優しくみこの頭に手を置くと、翔雨はくしゃくしゃとそ

の頭を撫でる。

「はっ……………」

みこは子猫か何かになってしまったかのようだ。

「ね？ ね？ あの二人はどういう関係なのかな？」

そんな様子を眺めていたなずなが、思いついたかのようにせりに耳打ちする。

(わざわざ声に出すようなことじゃないでしょう？)

(や、だってさ、これだとはーちゃんに聞こえないじゃん)

(聞かせる意味はあるの？ それに、今する話でもないと思けど？)

(そうなんだけどさー。はーちゃんさつきから黙ったまんまだし、きっかけ作りたいなーなんて。どうせなら仲良くなりたいう、わたし)

(……………後になさい。後に)

「あの……………どうしたんですか？」

なずなが話しかけても無言のままのせりと、それにがっかりした風もないなずなどを見比べながら、白亜は怖々と小声で訊ねた。

「ん、後で教えてあげるねー」

軽いはずなの返事に、白亜は「はあ……」と困ったような顔を
した。

ちなみに白亜は、なずなにぬいぐるみのように抱きかかえられて
しまっていて動けないのであった。

そうこうしている内に、精神的な面においては意外と打たれ弱い
らしいみこも多少は立ち直ったようで、

「……そ、それじゃあ、今度はどうやってみんなをここに運んだか
だけどっ……」

何度も噛みながらも、移動に使える術があることを教えた。

今回用いられたのは、結道けつどうと呼ばれる結界と結界とを繋ぐ直通ル
ートを作り出すものであること。

ある結界から、座標のわかる別の結界が張られている所までの移
動時間を、実際に歩いたり交通機関を用いたりするよりも短縮でき
る術で、いわゆるテレポートみたいに瞬時に別の場所に移動するよ
うなものではないということ。

そうして一通り話し終わったところで、翔雨が魅祓に呼び出され
て退室していった。「まだみこに訊かなければならないことがある
のだが……」と言い残して。

それからしばらくして……。

「みこ、いいかしら？」

せりは居住まいを正した。

「せり？」

「ずっと訊きたかったんだけど……。どうしてみこはあたしたちに
いろいろしてくれるの？ 役目だからとか、そういうのは抜きにし

て、本当のところはどうなの？」

「それは……えーっとですね……」

「もう一つあるの。あの日……なずなが死んだ日、あたしを助けてくれたのはみこよね？」

せりがそう思った理由は声だ。

あの日せりが聞いた声と、みこのそれとは、あまりにも似ている。おまけに、みこは不思議な力を使う。

離れたところで目撃したみこが、そこから何らかの力を用いたのかもしれない。

そう考えれば、寸前でフェンスの軌道が逸れたことと、ただ落ちたにしては損耗が激しかったことにも納得がいくのだ。

そのみこは、返事の代わりに悲しげな笑みを浮かべた。

「……あとちょっと早ければ、なずなも助けられたんだけどね」

せりは無言でみこに近づいた。

なずなにするような優しさで、みこを抱きしめる。

「もう……みこが気に病むことじゃないってば」

「せり……」

抱きしめられたみこは、思わず涙が出そうになった。

「ありがとう、助けてくれて。その……ずっと、お礼を言いたかったの」

その様子を眺めていたなずなは、

「そうだったんだ……。せりを助けてくれて、ありがとう」

二人の会話から、自らの死がせりの命さえその時に奪いかねなかつたことをようやく知った。

「……わたしのせいで」

乾いた呟き。

それは誰にも聞き取れないくらい小さなものだったが、

「それは、違います……」

肌でなずなを感じられる位置にいる白亜の耳には、当然届いてしまっていた。

「はーちゃん……」

自分を責めそうになったなずなに、白亜が辛そうにしながらも告げる。

「悪いのは全部白亜です……。白亜が落とさなければ、こんなことにはならなかったのに。一時の感情を抑えられなかったせいで、みこ様の負担にもなってしまった……」

なずなは白亜を抱く腕に力を込めた。

「私が二人におせっかいするのはね、せりを助けて以来忙しくてそれっきりになっちゃったから、ずっと気になってたんだ。そうした

ら、なずなは噂になってるし、せりはなずなと話してたし……」

「……そういうことなのね」

「でもこれからは、友達としてお手伝いさせていただきます！ 迷惑かな……？」

迷いを含んだ、不安げなみこの眼差し。
なずなは、はっとなった。

「そんなことない！ せりだってそうでしょ？」

「むしろこっちが迷惑かけてばかりで申し訳ないくらいよ」

「二人とも、ありがとう……」

みこは目尻から零れた涙を、指でそっと拭った。

「それはこっちのセリフでしょ。あ、そういえば……」

みこが助けしてくれたと考えるに至った原因は、事件の日に聞いた
声。

その言葉の中に、タルトという食べ物の名前があったことについて、せりは訊きたくなったのだった。

「せり、どうかしたの？」

「ねえみこ。タルトって何なの？」

「……タルト？」

なずながどうして食べ物の名前が出てきたのと、疑問の声を上げた。

「えっとね、タルトは食べ物の方じゃなくて、私の友達のことだよ。いつでも会えるわけじゃないから、機会があったら紹介するね」

気にすることはないのに、みこは申し訳なさそうにしている。

「それじゃあ楽しみにしてるわ」

だからせりは、できるだけ明るく返した。

「ところでさ、みこ。わたしもお願いがあるんだ」

話に区切りがついたところで、なずながさっと切り出した。

「お願いって……?」

「あのね、はーちゃんのことなんだけど」

「……白亜ですか?」

いきなり名前を挙げられ、白亜は戸惑いを隠せない。

「……とりあえず、言ってみて?」

「えっとね、これからどうなるのかなーって。聞かせて欲しいんだ」

なずなが心配そうに白亜を見やった。

その白亜は下を向いてしまう。白亜が震えていることに気がついたのは、直接触れ合っているはずなだけだっただろう。

こんな話をすればこうなることは予想していたが、けれど、それ故にはつきりさせておかなければならないのだ。

白亜のため……もとい、なずなのために。

「うーん、それは白亜ちゃんによるかな。魂還したいならそうするし、こっちに残りたいのなら都守の管理下に入ってもらわないといけない。こっちに残る場合、被害者であるなずなが許したとはいえ、処罰しないわけにもいかないから、ちよっとした罰も受けてもらうことになるよ。どっちにするかは白亜ちゃんに決めてもらおうかなって、考えてます」

すぐには決められないだろうから、考える時間をとりあえず三日あげるねと、白亜に微笑みかける。

「そっか、そうだね。はーちゃんが決めることだよね……」

「残念そうね、なずな」

「だってせり、こんなにかわいいんだよ!? わたしのものにした
いよ……」

「……本音が出たわね」

浮気はだめよと言わんばかりに、せりはなずなを睨んだ。

「うぬっ……。ああ……わたしのハーレム計画が……」

この世の終わりみたいなの顔をして、大袈裟に嘆くなずな。

みこはどつ反応したものと迷って……やはり苦笑することにした。

序章 都守の巫女と魂旨の幽霊 了

第21話 7月25日〜26日 少女鍛練

7月25日。

本格的に夏場を迎え始め、連日の気温も三十度を当然のように超える日が増え始めた、そんな八月も間近という頃。

都守神社の境内、一般人立ち入り禁止区域。その中に存在する近的専用の弓道場にみこたちの姿はあった。

どこから運び込んできたのか、的の手前にぽつんとドラム缶が置かれている。

その上には空き缶が一つ、寂しげに存在していた。

一方、ドラム缶から十メートル離れた位置に、せりは一人佇んでいる。

その傍には心配そうにななずなの姿があった。

後ろから二人を見据えているのは、みこと白亜だ。

みこだけでなく、せりも、なずなも、白亜までもが巫女服姿だった。

数日前、みこが冗談のつもりで『着てみる?』などと言ったところ、なずなが目を輝かせたため、それならばと用意したのだった。

せりと白亜は、どちらかというとなずなの巻き添えだ。

なずなが二人の巫女服姿も見たいと子供みたいにごねてしまったのである。

といつても、本人らもやぶさかでない様子だったから、少なからず興味はあったのだろう。

深呼吸を繰り返したせりは、手にした一枚のお札に全神経を集中させていった。

体中の血液をそこに集めるような、そんなイメージ。

製紙過程でみこの血を染み込ませてある薄桃色のお札は、せりが注ぎ込む力を受けてそこに記された術式を起動させる。

お札そのものを力の塊として撃ち出す、最も基本的な射撃系術式だ。

白い光を放ち始めるお札。

それは解放の時を今か今かと待ち望んでいるからだろうか。

お札が放つ光が蝋燭ろうそくの火さながらに妖しく揺らめく。

「貫け！」

狙いを定め、せりはその力を気合いの声とともに解き放った。

お札が一条の白い光の弾丸となりて迸る。

光の尾を引いて駆け抜ける弾丸は標的たる空き缶を掠め、すぐ後ろの的に中あたつて音もなく霧散する。

「ああん、おいしい！」

傍で固唾を飲んで見守っていたなずながくやしがる。せりはふうと肺に残っていた空気を吐き出した。

「せりさんすごいです……。たった三週間足らずで葬祓術の基礎をここまで……」

少し離れた、後ろの位置からかけられる白亜の称賛に、せりは苦笑で応えた。

「まだまだだね……。こんなんじゃ、二人で生きていけないわ……」

そう自嘲気味に呟くと、額の汗を白衣の袖で拭う。

「そうでもないよ。一月もかからずにここまでできるようになるなんて、私も思ってたんだから」

はい、とみこがミネラルウォーターの入ったペットボトルを手渡した。

「ありがとう、みこ。……そうなの？」

頷くみこを目にしなから、せりはカラカラ渴いた喉を潤し、

……生き返るわね。

心底そう思った。

みこに水分摂取までもを制限されているからだ。

渴きで死にそうだと思っても、そんな胸中とは異なり、体というのは意外としぶといもので、未だに暑さや渴きで倒れるようなことはなかった。

せりは有り難いような、そうでないような、複雑な気分を味わっていた。

みこが大事に至らないよう、ぎりぎりのところで調整してくれている、ということなのだろうけれど。

見上げた空では、その下で暮らすものなどお構いなしに、太陽が今日もはりきって照り輝いていた。

それは、七月に入っすすぐのことだった。

放課後、教室から誰もいなくなっった頃。

一人残って今日出された課題に取り組んでいたみこは、同じく課題に取り組みそれを終わらせたせりに相談を持ちかけられた。

「その……みこ？」

「どうしたの？」

大黒蛇の危機が去った後、みこはせりと紗希に話せることをすべて話した。

その結果として二人はみこの下、幽霊やムシやらそういったものと相対した際の対処法について、指導を受けることになった。もちろんなすなもだ。

「あたし、このままじゃいけないと思うの」

その指導は、それこそ個別対応塾と同じような具合で行われていた。実技も少しはする。

優しく、ゆっくり、丁寧に。

みこは手取り足取り指導していった。

これだけでも、いざという時の対応に雲泥の差が出るのだ。

それをわかっているからこそ、かえってせりは焦ってしまっているのだろう。

いつまた大黒蛇のような厄介な相手が現れるとも限らない。

そんな状況にあるのに、荷物にしかならない己が嫌だ。そんな気持ち、滲み出していた。

「だから、お願いします。あたしを……」

そこから先は、聞かなくてもわかる。

「ねえ、せり」

「……？」

「やっぱり、強くなりたい？」

「はい……」

「そんなに改まらないでよ。いつも通りがいいな」

「え……あ、うん」

なずながすぐ傍にいないと、せりはほんとに大人しい控えめな少女になるんだなあと、みこはその変貌ぶりに、表には出さなかったが驚いていた。

なずなの気配は……と探してみると、屋上で待っているようだ。

「何のために強くなりたいのかは……訊くまでもない、か」

みこはしばし考え込んだ。承諾するかどうかを悩んでいるわけではない。

どう鍛え上げればいいのかを考えているのだ。

すでにせりの体には都守の血と術式がある程度染み込んでいる。

術式を受けた彼女の体はその血から情報を吸い出し、より優れたものへと変化を遂げているはずだった。

それらは本来、なずなどの接触を可能にするためのもの。けれど、その能力だけを器用に与えられたというわけではない。むしろ余計なものの方が多い。

ならば、その余計な部分を使わない手はないだろう。

みこの能力的な力を分け与えられたようなものであるから、特定

分野の力に限れば、せりの努力次第で、都守の血筋でないものが術を修めた場合よりもずっと強力なものとなるはずだ。

根拠はある。せりは遺伝的に、目と脳に係る特有の能力も宿しているからだ。

大黒蛇襲来の際、力を貸与されたせりは、特に問題なく術を使えたという。それはつまり、せりの能力とみこの力は相性がいい可能性が高いということを示す。

できれば専用の儀式を行って全情報を与えたいところだが、都守に入るもの以外にそうすることは許されない。

加えて、その儀式は途方もない苦痛を伴う。本来なら一週間。せりの場合だと六日間ほど。生きているのが嫌になるくらいの痛みに耐えねばならない。

「うーん……」

みこはせりの体を上から下までじっくりと観察する。

それから

「え？ ちょっと？ い、いきなり、何？」

ぺたぺたとせりの体のあちこちを、みこは触り始めた。

指、掌、腕、胸、お腹、太腿、ふくらはぎ等々……。確かめるように、動かせるところは動かして、揉めるところは揉んでみたりする。だからといっておっぱいを揉んだりなんかはしないけれど。

「み、みこー!？」

くすぐったそうに身を擦るも、せりはされるがままでいてくれた。みこの突然の奇行に、どうしていいのかわからないだけなのかもしれない。

「ちょっと腕に力入れてもらえる？ 全力で。その次は足ね」

「え、ええ……」

なぜこんなことをするのだろうか、首を傾げながらもせりは従った。

一通り確認し終わると、

「これは太くならないように気をつけながら、しっかりみつちりと鍛えないとだめだねえ」

みこは「どうしょっかなー」と、ちょっぴり楽しげに呟いた。

「え……それじゃあ、鍛えてくれるの？」

「うん、いいよ。でもね、最初からかなりきついものから、後悔しても知らないよ？」

「覚悟は、できてる」

こうして、せりはみこの家に泊まり込んで鍛錬に励むことになった。

当然のごとくなまもついてきてしまったのだが、そのおかげで二人に黙ってこっそりと護衛する必要もなくなり、みことしては少し気が楽になったのも確かだった。

……さて、何日で音を上げるかな……？

みこにとって、それだけが気がかりだった。

それから三週間ほど経ち、本日に至るというわけだ。

期末テストなどを終えた今、学校はすでに夏休みに入っていた。

兎にも角にも基礎が大事ということで、この三週間はずっと肉体的精神的トレーニングをこれでもかというほどやらせていた。もちろん、手加減はしている。

身内に 都守の巫女に なるのならともかく、外部の人間にまで死んでしまうのではないかと思うほどの、拷問よりも辛い鍛錬に耐えろと要求するのはあまりに酷だ。

そもそも、きちんと儀式を受けた者でもない限りは本当に死んでしまうからできないが。

その代わり、泣き叫んだり失神したりするくらいのこととは当たり前なものとして、その辺の情け容赦は一切ない。それくらいのこともしなければ、想定される相手に対抗することはできないからだ。

基礎体力が伴っていなければすぐに疲れ果ててしまうし、状況を把握したり術を使うのには、精神的な強さというか冷静さがなければ話にならない。

最も重要なのは集中力で、特に術を行使する際にはどんなときでも欠かせない。きちんと集中して制御しなければ、思いもよらないことが起こり得るためだ。

それで痛い目を見るのが自分だけならばまだいいのだが、そういうことの被害というものは、他人にまで及んでしまいがちなのである。

術の扱いは慎重かつ丁寧にしなければならない。

誰かを守るうという者が、その誰かを傷つけてしまっただけは全く笑えない。

……先月の私みたいな感じにね。

みこは内心でつい自嘲してしまった。

「それじゃ、先週までの鍛錬の成果も見届けたことだし、今日も頑張ろうね、せり」

「……う、うん」

内心を押し殺し、朗らかな笑顔を浮かべて見せるみこに対し、せりの顔色はかわいそうなほどに青ざめていた。

深夜。

自身の役目もこなしつつ、本日のせりの拷問……もとい鍛錬の監督を終えたみこは、自らの鍛錬を始めるため、一人屋敷を出て、屋敷から敷石が続く山林の中へと踏み入った。

視界は漆黒に塗りつぶされ、耳は梢のざわめきや生物の声を否応なく捉える。

木の陰から誰かがこちらを覗き込んでいるというわけでもないのに、妙に体にまとわりつく視線を感じたり、肩に冷たい何かが置かれたり、何かに足を捕まれたりしたような気がしなくてもない。

……あう。私だって、怖いものは怖いんだよね……。

当然それらは気のせいであって、みこが勝手に想像してしまって

いるだけだ。

もし本当にそうだったら、みこにわからないはずはないのだから。目的の場所に慎重に歩を進めながら、みこは思いを巡らせる。

……ほんと、よく逃げないでいられるなあ……。

修行を申し込まれたあの日から、せりは一度も弱音を吐いたりしていなかった。あまりにも辛い鍛錬に、都守に入家した人のほとんどは一週間後には退家している。

術の流出を少しでも防ぐため、最初の一ヶ月は仮鍛錬期間としている。当然のことながら、その間に儀式は行わない。鍛錬も手心が加えられている。

しかしながら、並の覚悟ではそれに耐えることさえできないのが現実だ。

だからこそ、みこは感心していた。

まだ妹が生きていた頃は、みこだって弱音くらいは吐いていたものだ。

妹が亡くなってからのみこは、弱音を口にしなくなり、悲鳴を上げることも少なくなった。一番の変化は、鍛錬以外であまり泣かなくなったことだ。

ことあるごとに泣いていた、まさに泣き虫だったみこのその変化は、周囲の人を驚かせるとともに、その表情を沈痛なものにした。

……人は急には変われないっていうけど、心に与えられたショックがあまりに甚大だったら、急変しちゃうことも、あるんだよ？

……って、いけないな、こんなんじゃない。

みこが沈んだ気分していると、家の雰囲気も悪くなるから無理にでも笑っているよう、母より嚴重に注意されていることを思い出し、気持ちを切り替える。

みこでさえ内心に制約がかけられていることを考えると、魅祓はどれほど自分の心を殺さなければならぬのだろうか。それを思えばこれくらい平気だと、みこは自分に言い聞かせた。

……それにしても、昔の私を見てみたいだよ、せりつて。

夕飯の後、疲れた様子のせりは、すぐに部屋へと引き上げたから、今はぐっすり眠っていることだろう。

せりの成長は目覚ましい。本当にきつい鍛錬の開始時期を早めてもいくらいに。

だからこそ、眠れるときはしっかりと眠って疲れを癒しておいてもらわなければ。

……やっぱり、守りたい誰かが……なずながいるから頑張れるのかな？

自然と口元に浮かぶ微笑み。

そうしている内に、目的の場所へと辿り着く。

穏やかならざる音色を奏でるのは滝。

五人くらいが並んで滝業を行える程度の幅で、高さは十メートルほど。

空中の何も無いところから、水が吐き出されていた。

その滝の水は、その下にある滝水が溜まってできた池へと注がれ、下流に流れることなく、池底の滑らかな岩に吸収されている。

この場所は開けているため、月や星々の光が届くので、山林に比べれば明るい。それでもかなり夜目が利かない限りは何も見えないが。

みこは、邪魔になるからと巫女服を脱いで適当な岩の上に畳んで置き、お札を一枚だけ持って、その池に歩を進めた。

闇色に染まった水面はゆらゆらと、一つの生物であるかのごとく

蠢めいている。こちらを飲み込むべく、息を潜めてじっと待ち構えているような気がして、不気味な雰囲気だった。

今はそんな状態に映る池も、水は澄みきっているので昼間ならば水底ははっきりと見える。

透明度が高く非常に綺麗な水なのだが、その中に住まうものもいなければ、この水を飲みにやってくるものもない。

その理由は、この水が触れたものの魂までもを凍てつかせてしまいうようなほどに、冷たいからだ。実際、紛れ込んだ魂が凍てついてしまっているところを、みこは助け出したことがある。

“零度を下回っても氷結しない”この世のものならざる水。

周囲に何の影響も及ぼさないことが、その異常性をこれ以上なく物語る。

しかも、この池では浮力が意味を持たない。岩が水を吸い取ろうとする力が働いているため、常に体は下へと引っ張られてしまいうのだ。

マイナス百五十度までなら計測可能の特別な温度計を入れてみたら、見事に一瞬で凍りついて砕け散るような水温。仕方がないので専門家に依頼してみれば、匙を投げられた。

……というかこれ、こっちの空間での限界温度を突破してるのに、存在できてるんだよね。

ここは生者死者といったことを問わず全ての存在を凍えさせる、凍水地獄と呼ばれる拷問場所だった。

しかし、ここを鍛錬場所として使うものが稀にいる。

もつとも、こんな場所で鍛錬をしようなどと考える物は、千三百年の歴史を持つ都守といえども滅多にいない。

つまりみこは、そんな酔狂な部類の人間ということになる。

その原因は祖母の命と母の魅被だ。

素質が歴代でもずば抜けていたのをいいことに、とんでもないス

パルタ教育を施され、幸か不幸かそれに耐えてしまった結果が今のみこである。

そのせいか、親族に顔を合わせるなり無言で優しく抱き締められることが、みこには多々あった。辛くなったらいつでも家にいらっしやいと言われたことは、数知れない。

最初の頃は、足先を浸けるのにも苦勞したその水の中を躊躇いなく進み、滝の正面に。

下へと働く力で歩くことも困難であるという、そんな事実をまるで感じさせない軽い足取りだった。

飛沫がこれでもかというほどに降りかかり、流れ落ちる水の勢いがみこを阻む。

唇なんて片足を突っ込んだ段階でとつくにチアノーゼを起こして紫になっているし、体もがたがたと震えが止まらない状態だ。どんどん顔色も悪くなっていつている。

水に浸かった手足の末端は、凍傷を引き起こし始めていた。

といつても、ここは死を通り越してしまうので壊死することはなく、壊死していないのであれば、みこの自然治癒力だと数時間で完治する。生来の力を鍛えれば鍛えるほど、自然治癒力も向上しているのだ。

だが、たとえそうだとしても平気というわけではない。

それでもみこは自然な表情のまま、苦悶の声一つ上げないでいた。今のみこは、あまりに冷たいがために“凍死を通り越して命が凍止してしまう”はずのところを、術を用いて体の凍止と崩壊を防ぎ、無理に動いている状態だ。

手にした水の中に浸かっていながら全く濡れていないお札へと、尋常ならざる集中力でかき集められ注がれるみこの力がそれを可能にしている。

お札が水に濡れていないのも、みこが水を退けているからだ。

そうしないと、お札に綴った術式が起動しなくなる。

気を抜いてお札を濡らし、術が解けてしまえばそれまで　凍止

だ。

心の乱れが、永遠に冷たい水の中で凍え続ける悪夢へと直結する。誰かに助け出されない限りは、本当の意味で死ぬことも、狂うことも許されない。

本来ならば、ただ突っ立って術を維持するだけでも至難の業だ。そんな極限に身を置いて、みこはその中で一人舞う。

一つは祀りし神へと捧げる舞を。一つは荒ぶる魂を鎮める舞を。一つは迷える魂を導く舞を。

今日はこの三つの舞の練習を朝までする。

八月の末には、神社でお祭りがあるからだ。それは、儀式の日でもある。

パフォーマンスとしての舞と、儀式としての舞に加え、奉納の舞。様々な舞をみこは覚えなければならない。

奉納と儀式の方の舞はより洗練するのだが、お祭りのパフォーマンスとしての舞は毎年少し変わるので、それを覚えるところからしなければならぬ。

……別にこんなところでもすることもないんだけど、いい鍛練にもなるんだよね、これ。

しかしその前にやることがある。いつも欠かさずやっている肉体的精神的トレーニングと、余計な思考を振り払うことだ。

前者は、ここでやると筋力は増えずに体の扱いだけが上達するため、余計な筋力がかからないので思う存分する。後者はその手段として、みこは滝に打たれることを選んでいく。これならこの場所でも可能だから、移動したり道具を用いたりする手間も省けて、時間の節約になる。

……すっごく気持ちいいんだよね、滝に打たれるのって。まあ、嘘だけど。ここのいいところっていえば、泣いてもばれないって

ことくらいかな……。

正直、ここの滝に打たれるのは嫌だった。痛い、寒い、辛い、の三拍子と吐き気といったその他諸々。

少し前までのみこは、どれかに気を取られれば、きっと死ねるんじゃないかと思っていた。

……だったらよかつたんだけどねえ。今となつては、死んじやうようなら困るけど。

十五歳の春頃、問答無用でここの水の中に放り込まれたときは、死んだ方がマシと思つたこともあるにはある。

あまりの辛さに、まるで集中することもできず、術なんて当然のように発動させられなかつたみこは、瞬く間にその動きを止め、生ける氷像と化した。

それからみこは、二週間ほど放置されてしまったのだ。

……あれは本当に辛かつたなあ。

拳句に、その状態をカメラで撮られてしまい、救出された後にその写真を見せられた。

そこに写っていた己の様子の、なんとも情けないこと。

とても他人に見せられるようなものではないため、今は封印している。

燃やそうとしたら魅祓に「次はもっと辛いところに放り出してあげましょうか？」と、にこやかに脅されたため、止むなく現物をこの世に残すこととなった。

今にして思えば、燃やしておけばよかつたと思う。もちろんネガも。

特に脅かされるようなことも、怒られるようなこともしていなか

ったのに、結局はもっと辛いところとやらに放り出されてしまうな
どとは、この時のみこは思いもしていなかったのだから。

あれはそう、写真を燃やそうとした時からおよそ半年後に。

……痛っ　う！

嫌な過去を振り返ったがために集中が乱れ、危うく凍止しかける。
痛みにも助けられたようだ。

……危なかった……。うう……。一応、体も慣れてきたし、そろ
そろいいかな。

胸中でそう判断を下し、ぐっと前を向いて滝を見据えたみこは、

「よし！」

一つ頷き、気合を入れた。

躊躇ったり休んでいられるような無駄な時間は、あまりない。

みこは鍛錬を開始した。

第22話 7月26日 朝の来訪者・その1

鍛錬から戻り、大半をまかされている家事を一通りこなしたみこは、自室で机に向かっていた。

まだ体は冷えきっており、体は小刻みに震えている。暖まるまでは今しばらくかかるだろう。

ペンを走らせる手もかじかんでいるが、いつものことなので気にせずに夏休みの宿題を片付ける作業に勤しんでいた。

こういうのはさっさと終わらせておくのに限る。

せりにも宿題の方を先に片付けるように告げてある。朝の涼しい時間の内にする方がはかどるだろうと思いい、宿題やみこによる授業には午前中の時間を充てていた。

どうせ暑いのならいっそのこと、汗が瞬時に蒸発するような灼熱の空間とかでやらせてもいいのだが、そこだと問題集やらがいつか炭になってしまいうだろうから止めておいた。

精神と集中力を鍛えるにはいい方法だと思ったのだが、いかにせん準備に手間がかかるのだ。

灼熱の空間のような場所では汗が瞬時に蒸発するので、汗などを気にしなくてもいいところなどはみこにとって非常に喜ばしく、ここでの鍛錬はいつになっても辛いけれど、そういう点においては気に入っていた。

とはいえ、どうせ本格的な術を授けた後は、そういう空間を含む、いるだけでも辛い地獄のようなところで練習させるのだから、そう急ぐ必要もないだろう。

「まあ、そこまでせりが頑張れたら、だけどね」

ふうと一息ついて、ペンを置く。

……あんまり待たせるのも悪いよね。

扉の方へと視線をちらり。

「……入ってもいいよ？」

みこがその声をかけると、遠慮がちに扉がゆっくりと開かれた。

「みこ……」

そこにいたのはなずなだった。

……いつか来るとは思ってたけど、どうしよっかな……？

「そんなところにいないで、座らない？」

とんとん、と自分の太腿を叩く。

妹や従姉妹がやってきたときによくやることだ。

なずなの場合、こっちの方が喜ぶと思ったからそうしたのだった。

「いいの？」

いつもなら飛びついてきそうなところだが、今日のなずなには少し躊躇う様子が見られた。

……どうしたんだろう？　なんか、妙に大人しい……。

なずなが動こうとしないので、みこは扉まで歩み寄ってその手を引いて座ると、腿の上に乗つけた。

「つーかまーえたっ！」

みこの方から、なずなを抱きしめる。

「……ごめん、みこ。嬉しいけど、今はそんな気分になれなくて……」

やんわりと言うが、けれど行動ははっきりしたもので、なずなはさっと身を離してしまった。

……うーん。これは重症っばい？

どうしたものかと頭を悩ませるみこの正面で正座したなずなは、真剣な面持ちで口を開いた。

「わたしってさ、魂旨なんだよね？」

以前にも訊かれた問い。

みこは怪訝に思い、なずなの意図を予想してみる。

「……そうだけど、それがどうかしたの？」

「魂旨って、すごい力を持ってるんだよね？」

「それは……そうだけど……」

なずなの目は、力に取り憑かれてしまう人と同じ色をしていた。

……だめだ。今のこの娘じゃどんな力であっても耐えられない。

「せりがあんなに頑張ってるのに、わたしは見てるだけ……。わたし、もうそんなのは嫌なの！」

「だめだよ、なずな。傷つけてしまいかもしれないけど、はっきり言うよ？ 魂旨の力はとてじゃないけど、今のなずなじや扱いきれない。それは私でも母様でも同じなんだけどね」

なずなが視線とともに、がっくりと肩を落とした。

心底残念そうに。見ていてこっちまで辛くなるくらいだ。

彼女の気持ちはみこにもわからないでもない。

年の離れた妹や、二つ年下の従姉妹を見ていると、そう思っただけだから。もちろん、今は亡き妹に対してもそうだった。

だからこそ、知っていた。

……母様も、そんな風に思っているのかな……？

残酷過ぎる鍛錬に必死で耐える幼いみこを傍ですつと見守ってくれていた、魅^{みはら}祓の厳しい視線に思いを馳せながら告げる。

「降りかかる火の粉を払うこと。目の前の障害を取り除くこと。戦うっていうのはね、そんなことだけじゃないんだよ？」

なずなが、「どういふこと」と、真っ直ぐだった瞳を揺らした。

「なずなの戦いは、耐えることだよ。どんな姿を見せられても決してせりから目を背けずに、見届けること。ただ無事を祈るしかないっていうのは、自分が傷つくよりも辛いことだってあるんだよ。それは……なずなならわかるよね？」

「あ……」

思い当たる節があったのだろう。
なずなはそんな体験をしたことを思い出しているようだった。
それはもしかしたら、ムシの大群に襲われたあの日のことかもしれない。

「待つことも立派な戦いです。せりの帰る場所は、なずなのところなんだから。なずながいるから、せりは頑張れるんだよ？ だから、ちゃんと支えなくっちゃだめじゃない？」

みこは優しく諭すように話す。

でも、これだけでなずなが納得するとは微塵も思っていない。
だからとある提案をしようと考えたのだが……。
それよりも先に、なずなが意外なことを口にした。

「魂旨の力を使うのがだめって言うなら、わたしも修行する！」

「……へ？」

みこは我知らず呆けた声を出してしまった。

よもや魂旨の力をこつこつと蓄積するとは思いもよらなかつたからだ。

それにしても幽霊が修行とは……どうすればいいんだろうか？

「ごめんなずな。ちょっと調べさせて。どうすればいいのかわからないの」

正直に言い、みこは本棚にある一冊の古い本を手取る。
ずっしりとした重みが手に伝わる。

単純な重さもあるが、この本には筆者たちの想いと試行錯誤の果

てに積み重ねられてきた知識が詰まっているために、余計重く感じるのだ。

「……うえ……わけわかんない文字がびっしり……」

自分が読むわけでもないんだから、そんなに嫌そうな顔をすることもないだろうに。

霊符やら今は失われた古語やら外国語といった、様々な言語で綴られた中身を覗き込んだはずながら顔をしかめる。

気持ちはずからなくてもないけれど。

中には文字なのかどうかさえ怪しいものだってある。今や失われて久しい、古の言葉もだ。

命みことや魅ま祓はらに教わりながらそれを読み解けるようになるのにどれだけ苦労して、どれだけ酷い目にあつたことか。

苦い思い出を頭の端に追いやつたみこは、ページを捲めくりながら話し始める。

「なずなは今、霊体とか幽体、魂体とか言われる状態だから、せりみたいに体から鍛える必要がない。……というか、そもそも鍛えるべき体がないわけで……」

「それじゃあ、わたしの場合どうなるの？」

「私やせりの場合、普通にやるとどうしても体を通す形が多くなっちゃうんだよね。体があるから、当然なただけ。体を通すってことは、精神と魂への負荷も効果も弱まってしまうの。だから、長く積み重ねないといけない。でもなずなの場合、直接魂に働きかけることになる。そうすると、効果も高くなってより早い成長が期待できるんだけど……」

「えっ、それっていいことじゃん！」

やったね！ と喜ばずなを、みこは複雑そうに見つめた。

「なずな、喜ぶのは早いよ？ 本当に大切なもののためなら、どんなに辛くても頑張れるって言う人は結構いるけど、実際それって並大抵のことじゃないんだからね？ そう心に決めていながら、挫折して無念のままに死んでいった幽霊^{ひと}を、私は何人も見てきた」

「みこ、なんで今そんなことを……？」

「効果が高い反面、負荷も直接加えられる。だから、例えばせりと同じことをなずながやった場合、なずなが受ける苦しみや感じる辛さは、せりのそれを上回る。なずな、よく考えてみて？ 泣きながら歯を食いしばって、吐いたり気絶したりしても、それでも耐えて頑張っているせりを見ていることさえ耐えられないのに、自分がそれ以上の状態に耐えられるのかどうか」

「う……。み、みこはわたしが耐えられないって言いたいのか！？」

なずなは不満も露わに取り乱した。

「よく考えてって言うてるの。鍛錬つてすつごく辛いんだからね！ ……だからちゃんと考えて、それでも頑張りたいと言うのなら、面倒見ます」

みこは気を悪くすることなく淡い笑みを見せると、パタンと本を閉じる。

……えっと、魂旨としての力と当人の魂の力は別物であるが、魂

にまで影響を及ぼすほどのことを行う際には、相互干渉の恐れが完全には断定できていないから、念のため魂旨の力と当人の魂との間に干渉遮断織隔離式封印かんしょうしゃだんおりのくりしきぶういん 『干無領』かんむりょうを施すべし……か。

みこは読みとつた情報を整理し、必要な術式やら道具やらを頭に思い浮かべる。魂旨だけでなく、幽霊や物の怪といったものと親密に関わった先人たちが、後世のためにと自らの経験等を集めて綴った、大切な本の写し。

みこが読んでいたのはそんな本の内の一つ。
その本を本棚に戻しつつ、なすなの返事を待つ。

「……みこ……訊いていい？」

「とりあえず、どうぞぞ」

「みこはさ、いつから鍛錬続けてるの？」

「えつとね、物心つく前から動かされてたみたい。覚えてるのは三歳からかな。それから、ずっとだよ。最低限耐えられる基準を満たしたら、次の段階に次の段階について感じて、どんどんエスレートしていったよ。泣き放題に吐き放題、倒れ放題に不眠不休。トドメとばかりに食事抜きときた！ だから、その……あんまり思い出したくないです。ちなみに、せりにさせてるのは五歳くらいの頃のメニユーです」

嫌な過去を思い出したせいで、無意識に渋面を作っていた。
もつとも、最近の記憶の方がずっとえげつないのだが。

「……嘘、だよね……？」

なずなは少なからぬショックを受けた様子だった。

素直に聞き入れてしまった彼女に対し、というか少しは疑おうよとみこは思ってしまう。

話した内容に嘘偽りはない……ないのだが……。

なずなは他人を疑うことをあまりしないようなので、みこは少しばかり心配になった。

……せりが一緒じゃなかったら大変なことになりそうだなあ。

「信じられないことかもしれないけれど、困ったことに家は、そんな常軌を逸したようなことをする家系なのです」

「みこ……」

「そんなかわいそうな子を見るような顔をしないでよ、なずな。別に人柱として生き埋めにされるわけでも、生贄として怪物に捧げられるわけでもないんだから」

私は平気だよ、と明るく笑いかける。

「……どうしてみこは笑っていられるの？ どうして耐えられるの！？」

「どうしてって訊かれるとちょっと困っちゃうんだけど、主な要因は母様が私を見て辛そうな顔をするのが嫌だったから。それとも一つ。私と関わったせいで何度も死にかけた幼馴染の男の子に、迷惑かけたくなかったから。私だって吐いたり気絶したりは茶飯事だったよ。辛かったから、家出だっけしようとしたことあるんだよ？」

……まあ、母様にもその男の子にも、未だに多大なご迷惑をおか

けしてしまっているわけで。うう……面目ない……。

「……みこが？」

「なんでそこで意外そうにするかな……。私だつて辛いものは辛いんだからね？ そりゃあ、ちょっとどころじゃなく人間離れしてるけど……。そんな反応されちゃうと、やっぱり傷つくよ……。」

つい口走ってしまった最後の方は、声が尻すぼみになったから、なずなには聞こえていないだろう。そう思いたい。

……大丈夫だよな？

「え？」

案の定、なずなは首を傾げていた。

「ん、なんでもない。それより、なずなの覚悟は決まった？」

「わたし、もう自分から逃げたくないんだ。みこ、お願いします」

「……わかりました。それじゃあ今の内に色々測っちゃうから、裸になつて」

そうなずなに指示して、みこはおもむろに脱衣する。

「……じくじ」

みこの裸身に息を呑んだなずなは、我に返るや喉を鳴らし、上から下まで舐め回すような視線を向ける。

「ほら、なずなも脱いだ脱いだ」

いやらしい邪な念が籠もっているように感じられる視線に晒されても、みこは不快に思わなかった。

ちよっぴり恥ずかしいが、そういった恥ずかしさには慣れていないので、いちいち気にするようなものでもない。

何せお祭りでは、きわどいにも程があるくらいのひらひらとした露出の多い衣装を下着もなしに身に纏い、大勢の人の前で舞を披露しなければならぬのだから。

舞の動きも衣装も舞台までも考慮し、計算し尽くした上で術まで用いて行われるため、絶対に女の子として隠すべき部分を見られることはない。

しかし、たとえそうだとわかっていても、精神的にかなりきついものがある。

お祭りの宣伝ポスターに使われる舞の写真なんて、どう見たって穿いてない。

結果として、最前列には大きいお兄さんたちが陣取り、血眼になって腰や胸を凝視したりしている。

みこが足を大きく振り上げたりするタイミングに合わせて無数のフラッシュが焚かれた時なんかは、あまりの羞恥心から泣きたくなる。すぐにでも帰って部屋に閉じこもりたくなることもあった。

みこだって、年頃の女の子であることに変わりはない。

確かに、男の人はそういうものだから仕方ないよねと思っているけれど、やはり恥ずかしい。

せめて、絆創膏くらい貼らせてくれたっていいのに、といつも思う。

それならば、そこまで無理をせずとも平気な顔をしていられる。

……あう……思い出したら寒気してきた……。

メイド服とか、ロリータファッションとか、スクール水着とか、体操服ブルマとか、下着の代わりに絆創膏だけとか、そういう姿を見られるのとは、なんか違うんだよね……。

下着してたりして、隠すべき場所がちゃんと隠されてるからかな？ でも巫女服や浴衣、着物とかのときは、ショーツとかの下着しなくても、襦袢だけで平気なんだけどなあ……。

ほんと、何でだろ？

もちろんその舞は、本来の儀式的意味を持つものでも、昔からの伝統的なものでもなく、完全に地域振興のための集客目的のものだ。するようになったのは母の魅祓の代からだという。

手段としてはとても褒められたものではないが、年々減る一方だった客足を取り戻すには、それくらいの華でもなければ、なかなか思うようにいかないのも事実だった。

批判の声もあがってはいるが、その人に実際に見に来てもらうと、そういう人でさえ虜にしてしまう魅力が確かにあった。

その舞とは別に、ちゃんと千早や装身具を身に着けた、それこそ昔からの舞も行う。こちらも今となっては知名度も上がって名物となっている。

みこととしては覚えなければならぬものが増えて少し大変だ。

「……え？ あ、う、うん」

じーっとみこを眺めていたはずだが、やがて満足したのか自分の衣類を消し去った。

「それじゃあ、立ったままするのもなんだし……」

みこはベッドに座り込み、

「おいでー」

猫か何かにするみたい到手招きする。相手がレスだとしても、女の子同士だからずいぶん気楽なものだ。

「ナ、ナニヲスルカナー!？」

途端になずなは目を爛々とさせ、ご馳走を前にした興奮からか、どこか妖しい雰囲気になり、舌なめずりしながら倒れ込んでくる。

四つん這いになって覆い被さり、みこの足の間に自らのそれを割り込ませて股を開こうとしてくる。

言葉遣いも変になった。

……わわっ！ 垂れてる。涎垂れてるって！

押し倒されたみこは、お腹やら胸元にぼたぼたと涎を落とされ、身の危険を感じた。

肉食獣に捕まった気分とはこういうものなのだろうか、みこは頭の隅で考える。

そんな状況であってもすることに変わりはないが。

「ん……」

みこはなずなの首に手を回し、ゆっくりと迎えるように顔を近づけて、唇と唇とを触れ合わせた。

「んん!？」

なずなが驚愕し、くぐもった声を上げる。

だが、もう遅い。

なずなの口内へと舌を滑り込ませ、彼女の舌を刺激する。
見事にみこの舌という餌に食いつこうとしたタイミングで、なず
なの舌を自分の口内へと引きずり込む。

「ふぁ……んっ……」

その舌を舐り、たっぷりといじめにいじめて、なずなが恍惚とし
てきたところを見計らい、思いつきり吸う。

その間、お返しとばかりにおっぱいをしこたま揉みしだかれてし
まった。

感度が良過ぎるために、胸を弄られるのにはどうしようもなく弱
いので、揉まれたりなんかするだけでも洒落にならない。

とはいえ、一月くらいならうんと気持ち良くされ続けてもなんと
か平静を装って耐えられるように訓練はしてある。

鍛錬のついでに拷問の訓練もやってしまおうということで、そう
いう気持ちのいい意味でのものだけでなく、部位も胸に限らず、触
手責め、スライム責め、電気責め、火責め、焼き印責め、氷責め、
氷水責め、ドライアイス責め、乳裂き器責め、針貫責め、焼き針貫
責め、クリップ責め、洗濯ばさみ責め、ピアス責め、巨大クラゲ責
め、ナメクジやムカデといった各種虫責めに蛇といった爬虫類責め
等々、枚挙に暇のない、およそ考え得る碌ろくでもない責め苦の数々を
体験済みだ。

死なないように慎重に行われたとはいえ、麻酔もなしに解剖され
たこともある。

それ故に、大抵のことはもしされたとしても「大丈夫だよ？」と
微笑みを浮かべられる程度には平気だ。

正確には我慢できるだけなのだが、平気だ。きつと……多分……。
それもこれも、心を折られないようにするためだとか。

捕まえられて拷問され、それに屈して機密情報を漏らさないよう
にするための措置。

簡単には死ねないからこそ生じる問題だった。

拷問は非効率的なやり方だと聞いたことがあるけれど、するところは今もするらしい。

みこのような頑丈な娘が相手だと、気兼ねなく^{なぶ}嬲れるということもあるそうだ。

「んあ……っ」

「……ぷはっ！」

お互い、息が苦しくなってきたので口を離す。

「みこ……すごく……上手だね……」

艶っぽい声で名前を呼ぶなずなの目は、とろんとしていた。今のディープキスで味わった快感に酔いしれているらしい。

少しばかりやり過ぎてしまったかもしれない。

せりと何度もしているせいなのか、なずながのらりくらりとみこの誘導をかわすものだから、長引いてしまったのだ。

婿として迎え入れる相手がどんな性癖の持ち主であっても、みこがその人の希望に応えられるようにするために、男と女の結合行為のようなこと以外の一部の性技は練習中なのだ。

果たして本番で上手にできるのかについては、自信がない。どの道、あまり上手じゃない方がいい人もいるだろうから、あんまり上達してもいけないという。難しいにもほどがあるだろう。

「ね……なずな。お尻、こっち向けて？」

「ん……？」

首を傾げたかと思うと、

「わかった」

一体、何がわかったのだろうか。

にこーっと嬉しそうな表情で甘く囁くなずなに、一抹の不安を覚えた。

たわわに実った二つの果実を名残惜しげに見つめながらも、なずなは体の向きを変える。

「キスしてる間、あんなに愛撫したのになんともないなんて……。みこって……実はわたしよりも経験者？」

みこの女の子の場所をうつとりと眺めているなずなが、それが予想していた状態に未だ至っていないことについて疑問の声を上げた。どうやら、みこが答える最中にもなずなは手を休める気はないらしく、なずなはみこの太腿の外側と裏側を指ですうと撫で上げつつ、内側は半ばから付け根の辺りまで、舌を這わせて何度も往復する。

「私ね、色々と仕込まれてるんだ」

ぞくぞくするのを堪えながら、みこは懸命に言葉を紡いだ。

頼むから大人しくして欲しい。

度重なる訓練のせいで、結果的に触覚が敏感になってしまった体は、それがもたらす快感を余すことなく甘受してしまう。

顔色や声音、体に変化がないように見えても、みこは確かにくすぐったさや快感を感じている。

抑え得ないとはいえ、ぴくぴくと体が痙攣けいれんしたように動くことが、それを明確にしている。

「みこ……?」

なずなが「何で我慢するの?」と言いたげな視線を寄越した。
やっぱりというか、どこか不満そうだ。

「……そりゃあもちろん、快樂に溺れてしまつたら、目的が果たせないからですよ」

なずなの引き締まつた小振りなお尻に手を添え、優しく撫でる。

「あつ……」

びくつと震える反応が、ちょっと面白い。

お目当てのものを得るために、みこは行為の本番を開始した。

なずなには悪いなと思いつつも、みこは行為の間、声一つ上げることなく淡々とするべきことをこなした。

魂の還る場所から分かたれて一つ一つになった魂は、それぞれが何らかの性質を有している。

その性質は、先人たちの研究のおかげで、魂汁とでも言うべきものの味によって判別が可能だ。

魂汁とは、人間だったら気持ちよくなつたら出てくるそういう液体と言えなくもない。魂汁の見た目は生前のものと何ら代わりはない上に、出てくる場所も同じだからだ。

幽霊の場合は、そういう液体の代わりに魂汁がでるのだ。

精神が異様なまでに高揚すると、それと密接な関係にある魂も高

揚する。そうになると、魂の持つ力が僅かながら外へと染み出てくることがあるのだ。

その力は、霊体から染み出る間に液体という形態に変換され、そうなって現れたものを魂汁と呼んでいる。

みこの目的は、最初からそれである。

このような行為に及んだのもそのためだ。

女の子同士であっても、こういうのはやはり抵抗がある。

こういった本番は、実は今まで誰ともやったことはないのだが。

誰かさんらのおかげで目にする機会はあつたけれど。

目的を達したとはいえ、このまま終わっては中途半端なために、なずなの収まりがつかないだろう。

みこは容赦なくなずなを攻め立て、ことを終えたのであつた。

「な、なんで、みこ、平気なのさ……？」

ぜえぜえ肩で息をしながら、なずなが恨めしそうにこちらを見る。

「や、そう言われても」

ベッドで荒い息をつきながら、体に力が入らず起き上がれないでいるなずなを尻目に、みこはさっさといつもの巫女服姿に戻っていた。

片手には、なずなの魂汁が入った小瓶を持っている。より細かな分析をするためのサンプルだ。苦勞した甲斐もあつて、十分な量を確保できた。

なずなに全力で攻められた上、快樂の一番上に到達することもなかったので、精神的な面では平気とはとても言えた状態ではないが、どうやらそう見えてしまつらしい。

みこは小瓶の液体を僅かばかり指で掬い、それを口に運ぶ。

……それにしても……。さすがは魂旨……。甘くて口当たりがよくて、おいしい……。後味をすつきりにしたホワイトチョコレートみたい。甘味系統は攻撃向きではなく、補助に適してるんだっけ。

みこが味を吟味し、大まかな性質を把握していると、

「……うー、ずるいい……」

それを最後に、なずなは疲れてしまったのか、眠りについてしまった。

「あれま寝ちゃった」

みこは苦笑をこぼすと、ふとその表情を和らげた。

「今はゆっくり休んでね、なずな……」

いい夢でも見ているのか、幸せそうな彼女の姿を、みこは眺める。眺めて。

「お次の方、どうぞ?」

くすつと控えめな笑顔を浮かべ、僅かばかり開かれた扉に向かって声をかけたのだった。

第23話 7月26日 朝の来訪者・その2

髪を結んでいるものと胸元のリボンが三年生を示す赤色なのは、生きていれば今頃は中学三年生として生活していたであろう自分を、服を生み出す際に思い描いているからだろう。

巫女服とセーラー服をかけた合わせたような独特の衣装、通称巫女セラに身を包んだ白亜が、そこにいた。

「……あの、その、邪魔をするつもりはなかったんです」

「ごめんなさい！ と白亜はいきなり頭を下げる。

「大丈夫だよ。ちょうど終わったところだから」

みこは白亜を安心させるべく、にこーっと笑いかける。

それから、手招き。

引き寄せられるように、白亜は一步一步、躊躇いがちにしながらもこちらに向かう。

ある程度のところまで、みこの方から抱きしめに行く。白亜は負い目があるからか、こうでもしないと必要以上に寄ってくることさえ、あまりしてくれなくなっていた。

……あの日はあんなにくっついてくれてたのに。

「なぜなさんは、いいんですか？」

みこのベッドで眠るなずなは、夢の中で至福の一時を過ごしているのか、小さな声でせりの名前を呼んだり喘いだりしながら、身を^{よじ}擦ったりしていた。

いつものことなので、今では白亜すら気にしなくなっている。

「今はぐっすり。ちょっとやそつとじゃ起きないだろうから、大丈夫」

「そう、ですか……」

「それで、白亜ちゃん、今日はどうしたの？」

体を離し、中腰になって目の高さを合わせる。

「その、白亜は……みこ様の家にて、ほんとにいいんですか？」

不安そうに揺れる瞳が、こちらを見つめていた。

「誰かに何か言われたりした？」

「いえ、皆さん忙しいのに、白亜を気遣ってくれるんです。でも、白亜は何もお返しできなくて……」

申し訳なさそうに、白亜は沈んだ声で告げる。

「家の手伝いいっぱいしてくれるから助かってるって聞いてるよ？」

それこそ、あんなにいい娘なのに呪霊だったの？ と、みこが家の人から幾度となく問い詰められてしまっくらいに。

「うっ……確かにそう言っていたんですけど……」

素直に受け止めていいものなのかと、白亜は悩んでいるようだった

た。

お世辞に聞こえてしまうというのもあるだろうけれど、それ以上に白亜が持つ罪悪感がそうさせているらしかった。

なずなを殺したという、後ろめたさがあるからだろう。

なずなはまるで気にしていないようだし、せりも白亜に対して辛く当たったりもしていない。

しかし、白亜にとってはそれが逆に辛いのだ。

誰も彼女を咎めない。誰も彼女を責めたりしない。

ただ一人、白亜自身を除いて。

「白亜ちゃん。白亜ちゃんは罰を受けたし、もう誰かを呪ったりする呪霊というわけでもないんだよ？」

……やってしまったことに取り返しはつかないし、罪は罪だけど……。

うーん。それを痛感しているからこそなんだろうなあ……。

「それと、何度も言ってるけど、みこ様じゃなくて、みことか、みこお姉ちゃんとか、お姉ちゃんとかでいいって。みこ様だなんて、くすぐつたいし、他人行儀だよ。もう家族みたいなものじゃない、私と白亜ちゃん」

「で、ですが……みこ様は都守を継がれるお方……。白亜はずっと憧れていました。なんて強い人なんだろうって」

静かに目を閉じ、白亜は吐息とともにそう漏らす。

やだなあもう。そんなこと言われちゃったりなんかしちゃったら、少なからず照れちゃうんだよ？ などと思ったり思わなかったり。

「心は滅法弱いけど。それと、頭も少し」

他の人からどう思われているかはともかく、みこは実際、その通りだと思っている。

どこか抜けているところが多々あったりするし、それに……。

……妹がいなかったら……みさがいなかったら、私は鍛錬漬けの日に耐えられなかった。でも、みさはもういない。私はみさにとつて、いいお姉ちゃんではいられたのかな……？

「とてもそうとは思えないのですが……」

白亜は納得がいかないといった表情で、か細い首を子犬か何かのように傾げていた。

そういった仕草の一つ一つが、実に愛らしい。

……白亜ちゃん、かわいいなあ。

白亜が家に来てからというものの、妹が増えたみたいだなと、みこは常々思っていた。

亡くなった妹を想うあまりに、沈んだ気分になりかけたが、白亜のおかげで和むことができた。

「そつえば……。ねえ、白亜ちゃん」

「はい……何でしょう？」

「白亜ちゃんってさ、いつから家の系列の学校で鍛錬してたの？」

「八歳の頃から、だったと思います。母子家庭だったんですが、母が失踪してしまい、親戚をたらい回しにされていたところを、拾わ

れて……」

「家は強制してないはずだけど、どうして辛い道を選んだの？まさか、無理矢理させられたりしてないよね！？」

「ち、違います！ 白亜はそのままだと、そう遠くない未来で死んでしまうところだったんです。体も弱くて、外を走り回ったりすることも簡単ではありませんでした。でも、都守の入家儀式を受ければもう少しの間は健康な状態で生きられると……。その、儀式のおかげで白亜の死期は遠ざかりました。白亜はせめて生きている内に、少しでもいいから役に立ちたかった。生きる時間を、居場所をくれた都守の方に恩を返したかった。だから、しなくてもいいと言われていた鍛錬に参加したんです。ですが結果は……恩返しどころか、白亜の死体処理という、余計な仕事を増やしてしまいました。何の役にも立たないまま、時間切れで……。白亜はさっさと消えるべきだったんだって、死んでからようやく知りました。そしたら今度は白亜はどうして生まれてしまったんだろうって、そう考えるようになって、だんだん自棄になって……。その拳げ句に、生きる意思を失いつつあったなずなさんを殺した……」

自嘲の笑みを浮かべる白亜に、みこは何も言えなかった。

下手な慰めは口にすべきではないし、叱ったりするようなものでもない。

どう声をかけたものか、みこは悩む。

その一方で、そんな顔はしないで欲しいと思っていた。

彼女にはまるで似合わないのだ。

みこが想像するに、同じ笑顔なら、はにかむような笑顔が白亜にはよく似合うのではないだろうか。

……見てみたいな。白亜ちゃんの、そんな顔。ううん、それだけ

じゃない。楽しそうな顔、嬉しそうな顔、気持ちよさそうな顔、幸せそうな顔……もっと、そういう表情を見せて欲しい。

そのためには、どうするのが一番いいだろうか？

「それでもこっちに残ったってことは、白亜ちゃんはまだやりたいことがあるんでしょう？」

「それは、そうなんですけど……」

「もしよければだけど、聞かせてくれない？」

白亜は迷うように視線をさまよわせ、

「その……笑いません？」

大丈夫なのかな？ 危険じゃないのかな？ といった風に警戒混じりの視線を向ける。

その様子はみこに何らかの小動物を思わせた。

「笑わないよ。約束する。もし約束破ったら、殴りかかって思いつきりボコボコにしてくれていいからね。もちろん、私は一切の抵抗を放棄します」

「そ、そこまでは……」

「私は本気だよ？ 試しにグーパーパンチしてみる？ 顔でもお腹でもいいよ」

「し・ま・せ・ん！ ……その、白亜は……友達が、欲しいんです。白亜は人見知りだから、全然できなくて……。白亜が死んだとき、

心から悲しんでくれた人、いなかったから……。白亜のために泣いてくれるような、親友が欲しいんです。身勝手な話ですよ。自分のことしか、考えてない。こんなんだから……」

「普段の白亜ちゃんを見てると、むしろ自分のことは後回しにしてる気がするんだけどなあ。うーん……なんかさ、友達のためなら、友達のお願いなら、何でもやっちゃいそうなタイプだね、白亜ちゃんって」

「否定は、しません」

白亜が悲しげに目を伏せる。

……うーん。心配だなあ。

そう思うと同時に、耳が異音を捉えていた。

どたどたと廊下を走る。そう、これは足音だ。それも、みこのよく知っている。

いつの頃からか毎度毎度繰り返されてきたことであるため、みこにはこの後の展開が容易に予想できた。

このままでは、みこも白亜も突き飛ばされてしまっただろう。

「ねえ、白亜ちゃん」

「……はい？」

「伏せて！」

「え？」

「早く！」

「は、はい」

突然みこに指示された白亜は、何が何だかわからないまま、とりあえずそれに従う。
すると、

「みこねえさまー！ー！ー！」

白亜の背後、扉の方からみこを呼ぶ声と、騒がしい大きな足音がこちらに向かっていく。

「普通にっ！」

伏せる白亜の正面、みこは半身になって構え、

「来なさいって！」

その右腕をうんと引き絞って、

「何度言えばっ！」

扉をぶち破らんばかりの勢いで、文字通り部屋に飛び込んできたその何者かに向け、

「わかるのかなっ！？」

叫びとともに、その拳を叩き込んだ。

「ふぐつ……つ……うあつ……！」

おへその辺りに、腹を突き破ろうとするかのような強烈なパンチをもろに受けたその人物は、体をくの字に折り曲げ、目と口を大きく開き、みこの細腕一本でその体を支えられていた。

みこは袂り込むように入っていた拳を引き抜くと共に、白亜の隣にその人物を落とす。

床に転がったその人物は、陸に打ち揚げられた魚みたいに口をぱくぱくさせながら、その体を丸めて殴られたお腹を手で押さえる。よく見ると、ぴくぴくと痙攣^{けいれん}している。

普通に考えて、内臓の一つや二つは潰れていてもおかしくはない。そもそも、死んでいるだろう。それくらいには威力のある一撃だった。

そんなことにならなかったのは、ひとえに相手が丈夫な体をしていたためだろう。

「ごめんね、白亜ちゃん。いきなり怒鳴るような感じで言うて。もう立っていいよ」

みこは優しげに微笑んでみせる。

「え、えつと……その……大丈夫、です」

あまりの出来事に、顔を青くした白亜はぎこちなく返事をした。その体が少し震えているようにも見える。

確かに、初めて今の光景を目の当たりにしたのなら、怯えるなどという方が難しいかもしれない。

「痛い……痛いよ……うう……」

床に転がった人物はお腹を押さえたまま目に涙を浮かべて、聞いた者が同情せずにはいられないような、悲痛な声で呻く。
みこは、それをまるで意にも介していない風に装った。
よくあることなので、毎回気にしてはこちらの身が保たないのだ。

……うう。そんな目で見ないでよ……。

いくらなんでもやり過ぎですという、白亜の非難するような視線が胸に痛い。

「紹介するね。この娘は、従姉妹の……」

「未那夜さん、ですよね？」

白亜は、床に転がる人物　みこをそのまま一回りくらい小さく（バストは大幅にポリウムダウン）したような感じの少女を見ながら、言葉の先を継いだ。

未那夜は、白いサマーセーターに、紺のミニスカート、白のオーバーニーソックスという格好だった。

艶やかな黒髪は、みこの真似をして背中の中半ばくらいまで伸ばしている。

スカートとソックスの間に覗く太腿ふとももがやけに艶めかしい。

「そうそう未那夜ちゃん。……あれ、もしかして知り合い？」

「同じクラスになったことがあって……」

「なるほどね。ほら未那夜ちゃん、立ちなさい」

「は、い……」

みこに命じられ、未那夜は絞り出すように返事をする。

「私以外の人がいるときは、痛いのちゃんと我慢しないとだめだよ？」

「はうう……こないだの怪我の痛みも治まってないのに……」

ぶつくさぼやきながら、緩慢な動作で立ち上がるうとする未那夜に向け、

「んー、もう一発いつとこっか？」

みこはにこやかに告げる。その意味するところは『さっさと立て』だ。

「これより痛いのだあ……！」

今にも泣き出しそうな表情をしながらも、未那夜は痛みを堪えて立ち上がった。

「表情はどうするの？ 私、ちゃんと教えたよね？ どんなに痛くても、それを顔に出しちゃだめだって。平気ですって、笑って見せてごらん？」

優しい口調で伝えながらも、みこは容赦なく二発目を加えようとする。

そこに、両手を広げた白亜が立ち塞がる。

「あの……白亜からもお願いします……」

足を震わせていながらも、懸命に未那夜を庇う。

……白亜ちゃん……。

怖いからだろうか。

白亜はぎゅっと目を瞑り、歯を食い縛っている。

……ごめんね、白亜ちゃん。せつかくだから、ちょっと試すよ？

「んー、そうだなあ……。白亜ちゃんが身代わりになるのなら、いいよ？」

「ね、ねえさま!？」

みこの提案に驚愕した未那夜が声を上げた。

「……わかりました」

緊張から、喉を鳴らして唾液を飲み込んだ白亜は、静かに頷いた。その顔からは血の気が引いている。

「それでは、このくらいで」

よろしい、と満足そうに頷き返したみこは、白亜のお腹へと鋭く拳を打ち込んだ……ように見せた。

「か、は……っ!」

……あれ？

みこは内心で首を傾げた。拳は服をぎりぎりですくめる位置でぴたりと止め、お腹には到達していない。

風圧だけで吹き飛ばすようなことはできないし、力を衝撃波として放つてもいない。

にも拘わらず、白亜はお腹を押さえて背を丸めてしまっていた。

「白亜ちゃんも鍛錬してたからには、これくらいでお腹押さえちゃいけません。両手は体に沿うように。ほら、背筋伸ばしてごらん？」

釈然としないながらも、みこは普段通りを装う。

だが、白亜にまで指導してしまっているあたり、まるで装えていない。

……あ、あう……。な、なんか大事なことを隠してるみたいだね、これは。

「……っ」

従う必要はないのに、白亜は健気にも言葉通りにした。

「うん、いい娘だ。白亜ちゃん、ちゃんと鍛えてたみたいだね。よく我慢できました」

みこはそつと白亜の身を抱き寄せ、

「えっ!？」

その頭を撫でる。

「あ……」

白亜が息を呑んだ気がした。

……何も言ってくれないからだよ？

みこは何食わぬ顔で、白亜の痛みを勝手に引き受けてみた。

……う、ん？ この感じは……なるほど、呪霊だった頃に施された術式の後遺症かな……？

あの日、襲ってきた白亜へ一撃だけみこは攻撃した。その際、彼女に施された術式は確かに纏めて消し去った。

とはいえ、その後遺症まで拭い去ることはできない。

……これ、この感じ。早く治さないと白亜ちゃんの魂が腐くさりたままままになっちゃう。そんなことになったら、白亜ちゃんの魂はどんどん穢れて……こちら側の領域に悪影響を与える存在になっちゃう！

そうになると、みこは白亜を抜わなければならなくなる。

白亜の魂は強制的に魂還し、白亜という存在はなくなってしまっただろう。

……くっ！

気を抜くと、意識が痛みで塗りつぶされそうになる。

体中が悲鳴を上げているようだった。

内側から炸裂させられているような痛みに、外側から焼け爛れていくような痛み。

全身がそれぞれの痛みを訴えている。
特に、白亜と触れ合っている箇所が酷い。

……これはもう死痛のレベルだねえ。白亜ちゃんにはかなり辛いんじゃないかなあ。白亜ちゃんがもし死んでなかったら、死んでるところだよ、これって。

正直な話、みこでもはつきり辛いと思えるほどだった。
そんな痛みとわかった以上、理由もなく白亜に返すわけにはいかない。

……それなのに、白亜ちゃんは我慢してたんだよねえ。よく耐えられたもんだ。

白亜の頭を撫でながら、みこは考える。

……パンチは寸止めだったのにあんなに痛がるなんて、悪いことしちゃったなあ。

近付いてこなくなったのは、そのままでも辛くて、触られたりなんかすると、体を蝕む苦しみが増えるからだだったのかな……？

もしみこの推察の通りだとすれば、白亜はずっと我慢しっぱなしだったということになる。

……おかしいとは思ってたけど……。あれだけ痛がるってことからすると、相当辛かったんだろうな……。

それにしても、いつから白亜は苦しんでいたのだろうか。

自壊しかねないくらいに、術で力を増幅されていたのだから、その代償の苦しみは普通の人の想像を絶するものはず。

都守の屋敷に戻る頃には、白亜はみこにしがみついていた。

何かと触れ合えばその苦しみが激化することから、まだあの時点では発症していないと考えられる。みこが頭を撫でた際は、白亜は気持ち良さそうにしていたのだから。

あの日の白亜に、そのような演技をするだけの余裕はなかったはずだ。

……一体、いつから……。どうして何も言ってくれなかったんだろっ。

今のみこにかかれば、白亜の後遺症を治療するのだって造作もないことだ。ちょっとばかりみこが頑張れば、それで済む話なのである。

だからこそ、何か困ったことがあれば、どんなことでもいいから気軽に相談してくれと言っておいた。

苦しいからなんとかしてくれと、一声かけてくれさえすれば、みこは喜んでなんとかするつもりだった。

どうやら、白亜からすればみこはまだまだ話にくい存在らしい。もっとこちらから積極的に話していればと、みこは自責の念にかられた。

一応、みこの見える範囲に白亜がいた場合は、それとなく様子を窺っていたのだが、無駄に終わったようだ。

……私……また、気づけなかった。

実の妹が苦しんでいることにさえ気づけなかった阿呆^{みこ}には、そんなことなどできやしないのだろうか。

……それとも、痛くて苦しいってことを口にしないのは、その苦しみは自分への罰だと思っっているせいなのかな？

だとすれば、勝手に痛みを引き受けたのはまずかったかもしれない。

「……こうしてうじうじ悩んでも進まないよね。これは白亜ちゃんと後でじっくり話し合うとして……。」

「いいなあ……なでなで……。」

白亜の頭を撫でていると、未那夜が羨望の眼差しを白亜に向けて、自分にもしてくれとばかりにこちらへちらちら視線を送ってきていた。

「……すごく物欲しそうです、はい。最後に撫でたのっていつだったかなあ……。」

「ところで未那夜ちゃん。今日は遊びに来たの？ それとも用事？」

「あ、うん。えつとね、お母様とお父様が、しばらく……最低でもみこねえさまの夏休みが終わる頃までは、仕事で家を空けることになったの。普段ならばくも連れて行ってくれるんだけど、今度のは危険だからだめだつて。それで、もし一人でいるのが辛いなら、私たちが帰ってくるまでは本家のお世話になりなさいって。」

「そっか……。それじゃあ私か母様が鍛錬の監督をすることになるね。」

「……うーん。せりになずなに未那夜ちゃんもか。母様は忙しいから家を空けることが多いし、家にいる間くらいはできるだけ休んで、自分のために時間を使って欲しいからなあ。」

となると、答えは一つかな。私がお姉ちゃんらしく、ちゃんと面倒見ないとね。

そう結論を出したところで、それにしても、とみこは思う。

……魅羽夜叔母様みはやおばあさまが未那夜ちゃんを置いていくだなんて、どんな仕事なんだろう。魅羽夜叔母様は、命いのちお祖母様おばあさまと母様を除けば都守で一番なのに。未那夜ちゃんだって、もう自分の身くらいは自分で守れるし……。

「みこねえさま……?」

伸ばした人差し指を顎に当て、みこは思案し始めた。

みこの様子に、来てはまずかつただろうかという不安を抱いてしまった未那夜は、ついすが継るような声を出してしまっていた。

そのことに気づいた未那夜は、そんな自分を許すことができずに、唇を食い破らんばかりに噛み締めようとする。

「だめだよそんなことしたら。せつかくのかわいい唇が台無しになっちゃう」

ちゃんと様子の変化を見ていたみこは、即座に未那夜を止めた。

……ま、私が不眠不休で頑張ればいいだけだよね。

「ごめんね、いきなり考えだしちゃって。そんな心配そうな顔しなくても大丈夫だよ。私が考えてたのは、他のことだから。だから……いらつしゃい、未那夜ちゃん」

未那夜を招き、片方の手で抱き寄せる。

「みこねえさま……」

心から安堵した未那夜は、ぎゅっつとみこに抱き付いた。頬をみこの体に押し当てて、幸せそうな表情でゆっくり感触を楽しむようにすりすりする。

激烈な痛みをみこに与えてしまっているとは知らないままに。みこにとっては苦痛からの解放よりも、幸せそうな未那夜の方がずっと大事なので、そのための痛みならば甘んじて受け入れる。

……けど、この状態で鍛錬するのは遠慮したいような……。

さすがに、鍛錬中は泣いてしまうかもしれない。それも、見るからに辛そうな表情で。

なにせ四六時中、どこで何をしても軽く拷問されているようなものだからだ。

そこへ加えて、身内でさえ目を背けたくなるほどの凄惨な鍛錬とくれば、さしものみことと普段の様子ではいられない。

泣いてしまったり、表情を取り繕えなくなるだけで済むのなら随分いい方だ。

「それじゃあお部屋用意しないとね。荷物はどこ？」

「とりあえず玄関脇に置いてきたの」

「なら、先にお部屋かな。白亜ちゃん、お部屋の用意するから、手伝ってもらってもいい？」

「あ、はい。白亜でよろしければ、お手伝い致します」

「……あの、みこねえさま？」

それじゃあ行くこうとなつたところで、未那夜がみこの服の袖をくいくい引っ張った。

「どうしたの？」

「ずっと気になってたんだけど、その娘……白亜ちゃんって……。ぼくの知ってる、死んじゃった白亜ちゃんにそっくりなんだけど……」

未那夜の見つめる先、白亜は「どうかしました？」と首を傾げている。

「家の中だからわかり辛いけれど、白亜ちゃんは幽霊だよ」

「幽霊……ということは、本人なの……？ あの、白亜ちゃん。ぼくのこと、覚えてる？」

「未那夜さんのことなら、白亜はちゃんと覚えてますよ？」

孤立しがちだった白亜のことを、クラスが変わってからもよく気にかけてくださいました、と嬉しそうに白亜は相手を崩した。

未那夜は見惚れてしまったのか、白亜の笑顔に釘付けた。

ややあって、白亜を捉えて離さないその両目から、ぼろぼろと涙が溢れ出す。

「あの、あのね。……ひつく……。えぐ……。あれ、ぼく……。なんで？」

何の前触れもなく泣き出され、みこも白亜も焦りを覚えた。
未那夜自身、どうして自分が泣いているのかわからないでいる様子だ。

「み、未那夜さん!？」

「未那夜ちゃん!？」

激しく動揺し、みこはどうしたものかと考える。

「うわーん!」

未那夜はいきなり白亜に泣きついた。

「えっ、えと、あの……!？」

白亜が助けを求めるような視線をみこに向けてくる。

「未那夜ちゃん、急にどうしたの?」

とにかく原因を知らなければという思いから、みこは訊ねた。

「……白亜ちゃんなの」

未那夜は、もう離さないとはかりにぎゅっと白亜を抱きしめ、

「……告白する前に死んじゃった、ぼくの好きな人は……白亜ちゃんなの」

衝撃的なことを口にした。

「は、白亜……ですか……!？」

白亜が目をまん丸に見開いて、ぱくぱくと口を動かして声にならない声を漏らす。

そりゃあそつだろう。

まさかこのタイミングで生きていた頃の知り合いに告白されることになるとは、誰が予想できようか。

しかも女の子である。

みこだつて驚きを隠せなかったのだ。

好きだとはつきり言われてしまった白亜の内心は、計り知れない。ただ、みこには思い当たる節がないわけではなかった。

「去年の暮頃だつて、私に泣きついてきたの。あの時に言つてた娘つて、白亜ちゃんのことだつたんだね」

好きで好きでたまらない娘がいる。

けれど、もうどう接していけばいいのかわからないつて。

思い切つて告白しようとその娘を訪ねてみたら、どこにも見当たらずに。

探し回つて、一度帰宅したところにその死の知らせが届いた。

『どうしてあの娘が死なないといけないの……?』

そう言つて、あの日の未那夜は今とは違う涙を流していた。

都守の力や術を授かり得るのは、女の子だけである。つまり、鍛錬と義務教育の双方を施す学校というのは、必然的に女子校となる。女の子しかいないところで生活していると、こういう恋愛感情を抱いてしまう娘は、少なからずいる。

そう、未那夜のように。

大抵は一時のものであるのだが……どうやら彼女はそうでなかったらしい。

……でもこれって……どうなんだろう？

未那夜とて都守である。

そうである以上、子孫を残さなければならぬという義務がある。都守に生まれたがために課せられる義務だ。

女の子同士では、奇跡でも起きなければ子供はできないだろう。それ故に、どれだけお互いに愛し合っただけでも、結ばれることは原則として許されない。

このままでは、どちらも望まない結末を迎えることになるのではないか。

みこにはそんな気がしてならなかった。

未那夜が自分の気持ちに折り合いをつけられるようになり、その上で真に理解のある相手と結ばれない限りは。

運良くいい相手が見つければいいのだが、そうでなければ、未那夜は辛い選択を迫られることが予想された。

とはいえ、それは白亜が未那夜とくっついたらの話である。

一方で、白亜はどうだろうか。

白亜がどうしてこちらに残ったのか。

その理由を知ったみことしては、白亜の求める相手として、未那夜は十分その条件を満たしていると思われた。

友達ではなく恋人である点で異なるけれど、それをよしとするかしないかは白亜次第だ。

未那夜は白亜が死んでも思い続けているし、白亜の死を悼んで泣いていた。

白亜が知らなかっただけで。

もし未那夜と白亜が、お互いにもう少しだけ近い存在になったら、白亜は未練を残すことなく魂還していただろう。

そう考えれば、少なくとも白亜の願いは叶えられるのではなからうか。

おまけに、未那夜ならば幽霊に対しても普通の人と同じように接することができるのである。

白亜にとっては悪い話ではないだろう。

となるとやはり、一番問題になるのは未那夜だ。

どの道、みこは見守るしかない。

どんな結末になろうとも、二人に任せるより他はないのだから。

……任せるしか、ないんだよね……？

「白亜ちゃん……好き……」

気持ちを抑えられなくなって興奮状態に陥った未那夜は、熱い吐息とともに言葉を吐き出す。

潤みがかった熱っぽい目で瞳を覗かれた白亜は、

「え、えっ、ええーっ!？」

もつどうしていいのかさっぱりわからないといった様子で、未那夜とみこを見比べている。

「白亜ちゃん、まずは事実を受け止めよっか？」

「あ、は、はい……!」

「返事とか気にしないで、とにかくこれだけは頭に入れて。未那夜ちゃんは、白亜ちゃんが、恋愛対象として、好きなの」

細かく言葉を区切り、一字一句はつきりと言葉を紡ぐ。

みこが区切るその度に、白亜は復唱しているのか口を動かし、こくこく頷いていた。

「未那夜ちゃんは『好きだった人』じゃなくて、『好きな人』って言ったから、まだ過去のことにしてないのね。つまり、今も白亜ちゃんのことを慕い続けてるってことなの」

「白亜が、慕われてる……？ えっと……未那夜さん？」

白亜が自信なさげに、頼りない視線を未那夜に送る。
その瞳は、今の未那夜には刺激が強すぎた。

「あ、あの！ は、白亜ちゃんさっさえ、よろひければ、結婚ひてくたしやい!？」

「未那夜ちゃん落ち着いて！」

いきなり段階をすっ飛ばそうとする未那夜を、みこは窘めようとしたのだが……。

「れ、れも！」

お風呂に入って上気したみたいに顔を赤くした未那夜は、どんどん呂律が回らなくなっている。いくらなんでも興奮し過ぎだ。

もう少し時間を置いて落ち着かせなければ、どうにもなりそうにない。

……だめだこりゃ。

内心で深い深い溜め息を吐いたみこは、額に手を当てた。

第24話 7月26日 朝の来訪者・その3

咲実^{さくみ}せりは困惑^{こんぱく}していた。

今日の宿題のノルマを達成したので、いつの間にか姿が見えなくなっただけ、心で呼びかけてみても返事をしないはずを探しに行こうと、あてがわれた部屋の扉を開いたのだが……。

果たしてそこにいたのは、呆れたような顔のみこだった。

みこの視線の先では、ほとんど困り果てたといった表情の白亜^{はくあ}が、みこと似た少女にくつつかれて頬擦りされていた。

みこの呆れ顔の原因は、どうやらそれらしい。

「ええつと……？」

せりは怪訝^{けつげん}そうに首を傾げてみせた。

「あれっ、せり。今日の分の宿題、もう終わったの!？」

みこはせりの姿を認めると、驚いたように口元に手を当てた。

その下では、みこの形のいい唇が円を描いていることだろう。

みこの反応を見るに、彼女は成績順位をまるで意識したことがないのかもしれない。

……さすがは学年一位。下なんて眼中なしですかそうですかこのやろつ。後半は冗談^{じやうだん}だけねど。

イメージ通りと言われたり、もしくは意外そうにされたりと、その反応は人によってまちまちだが、せりの成績は非常によく、学期毎に廊下の壁に張り出される学年ランキングでは毎回上位五位以内に名前が載っている。

先見でズルをするようなことはもちろんしていない。そもそも好きなように使えない上に、試験の問題が見えてしまったりするようなこともなかったからだ。たとえ使えたとしても、そんなことをしたってなんにもならないので、やっぱり使わないだろう。

「ちゃんと終わらせたわ。それで、みこはどうしたの？」

「ほら未那夜ちゃん、白亜ちゃんから離れて」

せりが訊ねると、みこは白亜にくつついている少女にそう指示した。

未那夜と言らしい少女は、いやいやと駄々をこねるように首を左右に振る。

その様子は、せりにくつついて離れようとしないうときの、どこかの誰かさんを思わせた。

要するに甘えん坊モードのなずなのことだ。

自分も他人のことをいえた立場ではないのだけれど、それはこの際気にしない。

「みこも大変ねえ……。その娘、妹さん？」

せりはつい苦笑を浮かべていた。

「こんな状態だけど、紹介するね。この娘は従姉妹の未那夜ちゃん。私たちの学年とは二つ下だから……。白亜ちゃんと同じ年になるのかな？ 今日からしばらく、家に泊まることになったの。仲良くしてあげてね」

みこは、動こうとしない未那夜を白亜ごとせりの前に立たせた。

白亜が居心地悪そうに身を擦る。

それに気づかないせりではなかったが、何も言わなかった。

もう気にしなくていい。

そう言ったところで、余計に気にするようになってしまうだけだからだ。

白亜が深い反省の色を示していることは、とつくに承知している。彼女がどれほど自身の行いを悔いているのかは、そこからある程度窺い知ることができた。

なによりも、他ならぬなずな自身が彼女のことを許したのだから。今となっては、せりにはそれでよかった。

……おばさんやおじさんはそうもいかないでしょうけれど。だけど真実を話したところで、信じてもらえるかしら……。

いけないいわねと、せりは思考に沈んでいこうとする意識を浮上させ、改めて未那夜を見る。

みこと魅祓ほどではないとはいえ、未那夜は見れば見るほどみこに似ている。

みこをちよつど一回りくらい小さくすれば、こんな感じになるのではないだろうか。

ここまで似ているとなると、親が一卵性の姉妹であることが推測された。

みこが大きい方だからもしやと思ったが、さすがに胸はまだ発育途上らしく、なだらかな丘だった。

その丘も、数年の内にすくすくと育って、みこのようになるのだろうか。

この場になずなが居たら「実りの秋の到来まだ？」などという変態的なことを口走りかねなかっただろう。居なくてホツとしたような気がしないでもない。ちよつと寂しいけれど。

……かわいいいわね。抱きしめさせてもらえないかしら？

さすがはみこの従姉妹というべきか、その美貌にはせりさえ心を乱されてしまうくらいのものだった。きつと無意識のうちにも、多くの男子諸君を虜にしてしまっているに違いない。

「あたしは咲実せり。みことは一緒のクラスよ。よろしくね、未那夜ちゃん」

せりが微笑みかけてみても、白亜に夢中ですりすりしているらしく、未那夜からは返事も何もない。

好意を寄せられていることは確かであるが故に、邪険に扱うこともできないらしい白亜は助けを求めて視線をこちらにやったりみこにやったりしている。

その途中で未那夜を気遣う視線まで混ぜ込んでいるものだから、律儀だなとせりは思う。

「みくなくよくちゃん！」

いいかげん見かねたみこは、怒っている時にする笑顔を浮かべてその名を呼んだ。

迫力とは無縁のかわいらしい魅力的なその表情も、何も知らない人が遠目から見ればそう思えるだけであって、笑顔の意味と後々のことを知っているものからすれば、それは世にも恐ろしい鬼の顔でしかない。そもそも目が笑っていないのだ。

未那夜のそれは、触ってみればきつとふにふにとした感触が手に心地いいだろう。

膨らんだおもちみたいに柔らかそうな未那夜の頬が、みこの両手でぎゅむつと挟まれる。

未那夜のちよつと面白いことになった顔は、強制的に向きを変え

られてしまっ。

結果、みこの怖い笑顔を至近で正面から受け止めることとなった。それでようやく我に返ったらしい未那夜は、

「え……？」

きよろきよろと視線を巡らせ……せりを視界に捉え、ようやく認識した。

……周りが見えなくなるなんて、よっぼど白亜ちゃんが気に入ってるのね、この未那夜って娘は。

「こんにちは」

とりあえずせりは手でも振ってみせた。

「あ、あれ……。ぼく、もしかして……、やってはならないことを、みこねえさまの前でしてしまった気が……」

「未那夜ちゃん、後でお姉ちゃんとたっぷり“体でお話”しましよっか」

「ひいっ」

みこに言い寄られた未那夜は色を失っていた。

特に気分を害したりはしておらず、未那夜を見ていて懐かしささえ感じていたせりは、

「みこ、そのくらいにしてあげて。あたしは気にしてないから」

いつの間にか、そう口にしていた。

なんとなくだが、このまま放っておいたら未那夜はとんでもない目に合されるのではという、そんな予感がしたのだ。

「ごめん、せり……。そういうのって、未那夜ちゃんにもよくないと思うから、それはできないよ……。これでも家として叔母さんの一人娘を預かってる立場だから」

みこは本当にすまなさそうに言うので、せりは困った。

これはむしろこつちが謝るべきだろう。感情に流されて勝手なことを言ったのは、せりなのだから。

「みこが謝ることじゃないでしょ。あたしの方こそごめんなさい、無理言つて」

「そ、そんなあ……」

二人のやりとりに、未那夜がこの世の終わりを見たような顔をする。

「……未那夜さん、その……挨拶はちゃんとすべきだと、白亜は思いますよ？」

遠慮がちな、それこそ小鳥が囁くみたいに小さな声で、今まで黙っていた白亜が口を挟んだ。

「あ……。う、うん。そうだよな」

白亜に促された未那夜は居住まいを正し、「まずは、とんだ失礼を働いてしまい、申し訳ありません」と頭を下げ、

「初めまして。都守未那夜と申します。どうかよろしくお願いします、ええっと……せりねえさま」

今度は美しきお辞儀を披露してみせた。

……ごくり。

はて、今この娘はなんて言ったんだろう。

生唾を飲み下しながら、せりは今耳にしたばかりの言葉を脳内でリピートさせる。

『せりねえさま』という、その六文字を。

……なんだろう、すごく胸の中がくすぐられているようなこの感じ……。ねえさま、か。悪い気はしないわね。ふふ……。

「せり……?」

黙ったまま何も言わないせりの眼前に、みこが手を翳^{かざ}してひらひらさせた。

「えっ！ あっ、いや……。べ、別に妹に欲しいなあとか、お持ち帰りしたいとか、そんなことを考えてるわけじゃないからね!？」

気づいたときには、口を滑らせた後だった。

……あ……。しまった……。

なんとということだ。完全に油断していた。

「……あ、うん。だいたいわかったよ」

みこはわかるわかと、しきりに頷いていた。

照れてしまった未那夜は両手を頬に当て、「お持ち帰りしたいだなんて、そんなあ」と甘くとろけている。

「……っ！」

「こういうことをさらつと真顔で言えるなずなの凄さを、せりは改めて思い知ったのだった。

どうしてこうなってしまったのだろうか。

白亜はすぐ隣に腰掛けている上機嫌な少女の存在を気にしながら自問していた。

その少女 未那夜は、白亜の手の上に自らのそれを包むように重ねて、同じ空間にいる今この時間を楽しんでいるようだった。

ベッドやテーブルといった、比較的よく使いそうな家具が数点設置されているだけの質素な室内。

床に敷かれた絨毯くらいしか飾り気のないその部屋は、いくつか物を持ち込むことを前提とした客間で、現在は白亜が使わせてもらっている。

『何か欲しいものがあつたら用意するから、遠慮しちやだめだよ？』と、みこは言ってくれているものの、迷惑をかけた上にお世話にまでなってしまうって、これまた迷惑をかけ続けている白亜としては、わがままなんて口が裂けたって言えやしなかった。

その結果、部屋には飾り気も生活感もあつたものではないという

現状ができあがったのである。

みこに連れられて買い物に行くこともあり、その度に色々なものに目がいつてしまうけれど、誘惑をひたすらに振り払っているのだ。みこは優しい。

もちろんそれは白亜に対してのみというわけではなく、誰に対しても言えることだ。

叱るときは叱るけれど、滅多なことでは怒ったりすることはなくて、いつも愛情に満ちた眼差しを向けてくれる。

実の姉のような気さえしてくるくらい。

何度『お姉ちゃん』と呼びそうになったことか。

喉まで出かかったその言葉を飲み込んだ回数を書いたとすれば、手足の指の数なんかじゃ全然足りないだろう。

どんなに変な相談であっても、それを笑うことなく真剣に考えてくれるし、合間を縫っては気にかけてくれる。

白亜が何かを欲すれば、みこは喜んでそれを無償で与えようとしてくれる。

だからこそ、甘えてはいけないと白亜は自分を律していた。

「ねえねえ白亜ちゃん」

「は、はい!?!」

どうしてこうなってしまったのかと、過ぎてしまったことを何度も思い返していた白亜は、未那夜に呼びかけられ、急に意識を現実へと引き戻されて声を裏返らしてしまった。

「ぼく、白亜ちゃんの好きなものが知りたいんだ。教えてくれる?」

「は、白亜の好きなもの……ですか?」

「うん！」

一呼吸置いて返事をする、未那夜が眩しいくらいの笑顔を見られる。

みこのそれというより、なずなのそれに近い笑顔。

面立ちは似ているけれど、未那夜が見せる表情は、みことはまったく違っていいほど別物であることに白亜は気がついた。

未那夜が見せる、未那夜だけの表情。溢れんばかりの好意が籠こもつたその表情は今、白亜のためだけに向けられている。“白亜のためだけに。”

そう認識したとき、白亜は奇妙な感覚に襲われた。

「あ……」

不思議な感覚だった。

心臓の鼓動が、いきなりはっきり聞こえるようになって。

胸が、かぁと熱を生み出して。

どうやっても、未那夜から目を離せない。

「白亜ちゃん？」

どれくらい、そうしていたのだろう。

「どうしたの？」と首を傾げた未那夜の表情が怪訝そうなものに変わってしまう。

するとどうだろう、その途端に白亜の胸に込み上げてくる衝動があった。

もう少し、もう少しだけでいいから、さっきの笑顔を見せて欲しい。

「み、未那夜さん……」

「よかった。白亜ちゃんったら急にほんやりするんだから、心配したよ？」

「え、えと、大丈夫です。なんでも、なくはないけど、ないです！」

「それじゃあどっちだかわかんないよ？」

「えっと……」

……も、もう一回さっきの笑顔を見せて下さいだなんて、は、恥ずかしくて、言えないです……。

どうやら自分は、未那夜の笑顔にすっかり魅せられてしまったらしい。

彼女に質問攻めにされる中で白亜に理解できたのは、ただそれだけだった。

「はあ……」

ぼてん、と白亜はベッドに倒れ込んだ。

みこに呼び出され、未那夜は行ってしまった。出先から帰ってきたらしい魅^み被^はに挨拶^{ごあいさつ}をしてくるそうだ。

ようやく解放された白亜は悩ましげな顔で深い息をついた。本当に、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

そう、それはまだ数十分前のことでしかない。

「部屋、どこにしようか？」

せりと別れた後、みこがそう切り出すなり未那夜はこう言ったのだ。

「みこねえさま、白亜ちゃん。その前にね、白亜ちゃんのお部屋見せてもらってもいい？」

思えば、ここでオーケーを出さなければよかったのかもしれない。しかし、この時の白亜には後にこんなことに……未那夜と相部屋になるだなんて、想像できなかったのだ。

……どうしてこうなってしまったのでしょうか……。

何回目とも知れない、内心での溜息。

別に、未那夜といることが不快というわけではない。

なのになぜ、相部屋ということになってから、急にもやもやとした微妙な気持ちになってしまっているのか。

白亜には自分の気持ちがさっぱりわからなかった。

そもそも、未那夜と部屋を同じくするのは嫌なことなのだろうか？

……うつん、違う。嫌じゃない。むしろ……なんだろう、これ？
くすぐりたい……のかな？

白亜の部屋を見た未那夜の反応を思い出す。

「みこねえさま、どうして白亜ちゃんの部屋はこんな状態なの？
なんかこの部屋、寂しいよ」

部屋に飾り気がない理由を知らない未那夜は、やや咎めるような口調でみこに問い質していた。

「えっと……白亜ちゃん？」

困り顔のみこより説明を求められ、白亜はこくと頷いた。

みこが言ったところで、今の未那夜が素直に聞き入れてくれるとは思えなかった。

「みこ様は欲しい物があつたら用意してくれると言ってくれました。でも白亜はその……特に何もなかったのだから」

言葉に耳を傾けながら、話す白亜の顔をじっと見つめていた未那夜は、少しの間考え込むような素振りを見せ、

「……決めた。ぼく、白亜ちゃんと同じ部屋にする！」

まさにこの状況を生み出した言葉を発したのだった。

「いいよね！」という、未那夜の期待に満ちた視線を向けられた白亜が、つい反射的に頷いてしまったためでもあるのだが。

……自業自得、ですよね……。

それに、あまり過ぎてしまったことを後悔しているわけにもいかない。

……白亜は後悔しているからこんなことを考えてしまっているのでしょうか？ 本当は、もっと別のことで……。

だめだ、どれだけ考えたってすっきりしない。

白亜はぶんぶん頭を強く振って思考を振り払った。
一つのことにごだわり過ぎて、他のするべきことを疎かにしてしま
うわけにはいかない。

白亜には寝る時間までに解決せねばならない重大な問題があるの
だから。

それは

「この部屋にベッドは一つしかないのに、未那夜さんはどうするつ
もりなんでしょうか？」

相部屋を所望した本人がその用意を断ってしまったため、腑に落
ちないながらも白亜とみこは何か考えがあるのだろうと、あえてそ
のままにして様子を見ることにしたのだ。

一度はそれを受け入れた白亜であったが、時間が経つにつれ、ど
んどん不安が胸に押し寄せてきていた。

何か、嫌な予感がする。自分の身に危険が迫っているような、そ
んな予感が。特に、貞操的な意味で。

「何だか、体が震えてきました……」

自分を抱くように、両腕を体に回す。

部屋の扉がノックされたのは、そのすぐ後だった。

初めは未那夜が戻ってきたのだと思ったが、彼女ならばノックな
んでしないような気がする。

「白亜ちゃん、ちょっといいかな？」

白亜の思った通り、ノックしたのは未那夜ではなかった。

この声の主は、今の白亜にとっては“お姉ちゃん”に等しい、あ
の女性　みこだ。

「は、はい、どうぞー!」

心細かった白亜にとって、みこの登場はありがたいことこの上な
かった。

「お邪魔します」

そう告げて扉を開いたみこは白亜の様子を見るなり、

「どうしたの？ 何かあった？」

流水のような動きであったという間に白亜の元に移動した。

白亜は優しく抱き起こされ、みこの温もりに包まれた。

みこによって与えられる安心感に、白亜の震えが止まってゆく。

……ありがとう、お姉ちゃん……。

口には出せないから、代わりに心の中でそっと呟く。

それからしばらくの間、白亜はみこの温もりに包まれていた。

第25話 7月26日 朝の来訪者・その4

腕の中にある確かな温もりを感じながら、みこは物思いに耽る。^{ふけ}
試しに未那夜と二人きりにしてみたことは、失敗だったのだろう
か。

白亜と一対一でおきたい話があったので、未那夜がいない今の内にとまって来てみれば、その白亜は小柄な体軀を震わせていた。

……未那夜ちゃんが何かしたのかな？

真つ先に思い浮かぶのは、未那夜がいきなり唇を奪おうとしたり、強引にキスから先の行為までを求めて襲いかかったのではないかということ。

だがそれは、非常に考えにくいことだった。

白亜を想うあまり暴走気味であったとはいえ、いくらなんでも想い人にそんな真似はしないだろう。

白亜の部屋に泊まるなどと言い出したのも、あの部屋の状態をどうにかしたいと思ったからに違いない。

白亜が頼めないのなら、未那夜のがままにしてしまおうという腹なのだろう。あの娘の考えそんなことだ。

ただ心配なのは、ベッドを一つにした理由だ。

ほぼ確実に一緒に寝たいがためだろうが、そのときにこそ物事の順序をすつ飛ばして一線を越えたがるのではなからうか。

あの娘も相当溜め込んでいるはずだ。

……大丈夫だとは思っけれど、念のため後で釘を刺しておこうかな。

「白亜ちゃん、少しは落ち着いた？」

震えについては完全に治まった白亜に問いかけると、

「……………」

彼女は無言で首を控えめに振った。

「そっか……。それじゃあこうしよう」

白亜の顔を胸に埋められるよう、体を正面に持ってゆく。彼女が胸に飛び込んできたところなるだろうという状態だ。

息が詰まらないよう、白亜に回した腕は単に添える程度にする。

生前の記憶やイメージの影響で、幽霊となっても、呼吸器を塞がれたり体を圧迫されたりすると、息苦しさみたいなものを感じるからだ。

「！」

当の白亜は驚きも露わに、ばたばたと身を離そうともがく。

「……………白亜ちゃん、こういうのは、嫌？」

すると、動きが急に大人しくなった。

……………よかった。嫌ってわけじゃないみたい。

「……………そのままでもいいから、聞いてくれる？」

「……………はい」

胸元から、くぐもった声で返事があった。
ちよっぴりくすぐつたい。

「私の部屋でのことなんだけどね、パンチは寸止めにしたのに、どうしてあんなに痛そうにしてたのかなーって」

何か言葉があるかもしれない。そう思ったみこは、しばらく待った。

けれど、何も話してくれそうになかったので、一人で話を続けることにした。

「私はね、能力を強化されていたときの後遺症のせいだと考えてます。これ、あってるかな？」

「……………」

白亜は無言のままだ。

「できれば、白亜ちゃんの口から聞きたいなーなんて、思っているわけでした」

調べようと思えば調べられることだが、みこはできればそうしたくなかった。

別にみこが調べたからといって、肉体的　　白亜の場合は霊体だが　　な苦痛や不快感といったものを与えるようなことはない。

ただ、無断で自分の体を精査されたら、精神的な不快感を覚えずにはいられないかもしれない。

まして、本人が意図して口に出さないようにしていることを調べるのである。

それは他人の心を勝手に覗き込むようなものではないだろうか。

そんな真似を、みこはしたくなかった。

そう思っているからこそ、白亜から直接聞き出したいのだった。

……といっても、やむをえないときは躊躇わないんだけどね……。

しばらく待っていると、返事の代わりに白亜の腕が背中に回される。

他人のことを言えたものではないが、ちょっとしたことで折れてしまいそうな、みこ以上に華奢なその腕には抱き寄せようとする力が込められていた。

もつと、もつと。

そういう風に、みこをより求めているように感じられた。

みこは腕の中に抱いた存在を、より一層愛おしく感じた。

白亜の方から積極的に触れようとしてくれたのは、あの襲撃の日以来のことだからだ。

強く抱きついてこれれば、そうされた分だけ激しさを増した痛みがみこの全身を駆け巡る。

しかし、今この瞬間だけはその痛みさえも幸せの一要素でしかなかった。

「やっと、やっと白亜ちゃんから触れてくれたね」

そつと白亜の頭に手を触れ、優しく撫でる。

我が子を慈しむ母を描いた絵画を思わせる、そんな光景ができあがっていた。

「お姉ちゃん……」

「え？」

……白亜ちゃん……今、私のこと『お姉ちゃん』って……。

みこは己が耳を疑った。

「お姉ちゃんって、呼んでもいいですか？」

顔を上げた白亜が、濡れた瞳を向ける。

今にも泣き出してしまいそうな、そんな顔だった。

拒否されたりしないだろうかという不安と、みこだから大丈夫だろうという安心とが複雑に絡まり合い、白亜の胸を締め付けているのだろうか。

大丈夫だよと、そう伝えたくて、みこは穏やかな微笑を湛^{たた}えてみせる。

「うん、もちろんだよ」

みこには断る理由など、どこにもありはしない。

安堵したからなのか、白亜が放心したようにこちらをぼーっと見つめている。

ややあって、我に返ったらしい彼女は若干躊躇しているのか口をもごもごさせ、何事かを言わんとする。

「お姉ちゃん、その、も、もう少しだけ、こうしていてもいいですよ
うつか？」

ちゃんと白亜から話しますから。

少し恥ずかしそうにしながら、白亜はそう哀願した。

「よゆやく素直になってくれたね」

みこはうんうんと満足げに頷いた。

「え!?! えと、あの、その……」

戸惑う白亜の様子が、本人には悪いけれど、ちょっと面白かった。

「白亜ちゃんたら、いつつも我慢ばかりしてるんだもん。少しくらい相談してくれたっていいんじゃない? それとも……、私ってそんなに近寄り難いかな?」

できる限り柔らかな雰囲気を出せるよう努力して、小首を傾げて見せる。

「い、いえ、そんなことは……ない……です」

どうにも自信無さげな様子の白亜に、少しばかり悪戯心が働いてきてしまった。

「うーん、ほんとかなあー?」

わざとらしく、おちゃらけたように疑問の声を上げたみこは、「ほ、本当です!」という白亜の真剣な表情を真っ向から受け止めて、何度か瞬きを繰り返し

「それじゃあこうしちゃおう!」

「えむぐ!?!」

ぎゅむっ! と音が鳴りそうなぐらいに、白亜を強くきつく抱きしめる。

白亜の顔がポリウム十分な胸に再び沈み込む。

「ん〜！ ん〜！」とくぐもった悲鳴が聞こえるけれど気にしない。

しかしそれも束の間のこと。

「もう、お姉ちゃんのいじわる……」

白亜はどこか嬉しそうに呟き、みこに身を任せてくれた。

『 はずななら私の部屋で眠っちゃったよ』

みこからはずなの居所を聞き出したせりは、一目その様子を見よ
うとみこの部屋を覗き込んだ。

……本当に寝てるわね……。それもぐっすり。気持ち良さそう……。

「はずなー？ 入るわよー？」

彼女を起こしてしまわないよう、小声で告げてから部屋に踏み入
る。

「どっつして裸なの……？」

ベッドを揺らさないよう慎重にはずなの傍らに座り、安らかな寝
息を立てるその寝顔をなんとなく眺める。

そこから視線をつなじへ、肩へと、体の方にゆっくりと動かし、無防備に晒されたなすなの裸身を、ここぞとばかりにじっくりと観賞する。

みこの下で鍛錬に励み始めてからというもの、それ程なすなの夜を過ごせていないのだ。

そのせいか、お互いの欲求を少しでも満たそうと、隙あらばいやいややるようになってしまった。

今となっては抵抗感もすっかりなくなり、どんだめな娘になりつつあることを、せりはどこか他人事のように感じていた。

なすなが愛おしいから、あたしまでどんどんいやらしい娘になってしまっただ。

せりは胸中でやつあたり気味にそんなことを呟きつつ、頭髪の毛先から足の爪の先まで余すことなく眺めに眺め、すうすうとささやかな寝息を立てるなすなの顔に視線を戻す。

その顔に浮かべられているのは、ほのかな微笑み。

どんな夢を見ているのだろう。

少なくとも、悪い夢ではなさそうだ。

見ているだけで、心になすなを愛おしく思う気持ちが溢れるのを感じていたせりは、あることに気がついてごくりと喉を鳴らした。

なすなの唇が少し開いている。

それも、ちょうどいい具合に。

……キス、したいな……。

不意に湧き上がる欲求。

それに突き動かされるがまま、せりはそつと顔を近づけてゆく。

……寝てる、わよね……？

なんだかとても悪いことをこそそそやっているような気分になっ

て、そわそわして落ち着かない気分だ。

……大丈夫、大丈夫よ……。そうよ、まずは……。軽く、ほんのちよつと、触れ合わせるくらいなら……。

起こしてしまわないよう、細心の注意を払いながら、ゆっくり、ゆっくりと……。

小さくした吐息が熱を帯び、それは慎重にするが故に焦らされたことで、さらに気持ちが昂っていることを如実に物語っている。

……あと少し、もう少しで……。

鼻孔をくすぐるなずなの匂い。

目的の唇はもうすぐそこ。なずなの寝息を鼻先に感じ、そんな至近に愛しき人の顔があることを改めて実感。心拍は更に上昇。

心臓の激しい鼓動でなずなが起きてしまうのでは？

そんな不安を抱きながら、しかしそれさえせりの欲求を掻き立ててしまう。

顔まで夕焼けのように赤くして、いよいよというところで目を閉じて……。

「ん……ふう……」

羽でくすぐるかのように、ちよんと唇を触れ合わせた。

唇を離すときも、触れさせたときと同じようにゆっくりと身を引いた。

……あたし、寝てるなずなに、キス、しちゃった……。

なずなの柔らかなその感触を想い、指で自らの唇をなぞる。

これなら、もっと、してもいいかもしれない。
まるで起きる気配もなく、眠り続けているはずなを見ると、そう
思えてならなかった。

……もう一度、もう一度くらいなら……。

爆発しそうなくらい荒れ狂う心臓。

体は熱病にかかったかのように火照り、きゅっと胸を締め付けら
れているかの如く息が苦しくなる。

このままではいけないと、気持ちを鎮めるべく胸に手を当てて深
呼吸をして、荒くなりそうな呼吸を僅かばかり安定させる。

そうして心の準備を整えたせりは、意を決して再びなすの唇を
奪おうと慎重に迫る。

……ん……あと、少し……。

やっぱり、最後までなすの顔を直視していられずに、目を閉じ
る。

そうしないと、我慢できなくなってしまつから。

さすがに、発情期の猫みたいになあなあとこんな朝っぱらから盛
るつもりはない。

そんなことをして体力を消耗すれば、今日の鍛錬に耐えられなく
なつてしまつ。

だから、キスで我慢だ。

ついに、再び唇と唇が触れ合った。

その瞬間。

「ん　　っ!？」

何が起こったのか、状況を理解するのに数秒の間を要した。

一瞬のことだった。目でも回しているのか、頭がくらくらする。驚愕に見開いたせりの目が映すのは、なずなの顔のアップ。それはいい。キスしようとしていたのだから、顔と顔が至近にあることに何の問題はない。

気がつけば、せりの体はなずなの隣に不自然な形で寝そべっていた。

そのときになってようやくせりは、なずなに猛烈な勢いで引き倒されたのだと悟った。

なずなの唇の感触が離れる。

いつ目を覚ましたのか。

半身を起こしたなずなが、こちらを見下ろしながらにこりと甘い笑みを浮かべていた。

「な、な、なな……なずな……!? お、起きてた……の!？」

「起きてたも何も、キスされたら目は覚めるものだと思うよ?」

「違うわなずな! それ違うから! それ何かの物語だから!」

「いただきまーす!」

「ちよ、ちよっとまっ ひゃあ!…!」

嬉しそうにいただきますと宣言したなずなは返事も待たずに、迷うことなくせりに覆い被さったのだった……。

第26話 7月26日 朝の来訪者・その5

たぶん、お姉ちゃんの言った通りだと思います。

みこの隣に寄り添うようにちよこんと座った白亜は、そう切り出した。

「あの人たちによって施された術式をお姉ちゃんが掻き消してくれ
たとき、白亜の中から何かが抜けていく感覚があつて、それまであ
つたどうしようもない胸の苦しさ、綺麗さっぱりなくなつたんで
す。これで、白亜は解放されたんだって思いました」

もう育つことはないだろうその薄い胸に手を当てながら、白亜は
記憶を掘り起こしていた。

「最初は何かを強い力で持ったり掴んだりすると、少し痛む程度で
した。それくらいなら、強く力めばそんなこともあるだろうって、
あまり気にしてなかったんです」

でも……と、白亜は首を小さく横に振った。

「それから二週間くらい経った頃でしょうか。ある夜、ベッドに横
になつてしばらくすると、体の下にした方がだんだん痛くなつて。
寝返りを打てば今度は反対側が。その夜の内に、どんな寝方をして
も痛むようになって、その内シーツに触れただけでも痛くなり始め
て……」

その日から、何かが体を内側から突き破つてくるような痛みと、
外側から熱線で溶かされていくような痛みを感じるようになりまし
た。そんな日がしばらく続きました。生前に行っていた鍛錬のおか
げか、痛くてもどうにか普通に過ごせていたんです。ちゃんと夜だ

って眠れていました。でも、だんだん痛みが酷くなって、ここ数日は眠れなくなりました。

お姉ちゃんが痛みを引き受けてくれるまでは、ドアのぶに触れただけでも、手首から先が爆発して弾け飛んでしまったんじゃないかって思えるくらい、痛かったです」

それはつまり、なぜ白亜の方から近付いてきてくれないのかにつき、疑問に思いはしたが碌すっぱ考えることなく、訪ねてきた白亜を安易にしっかりと抱き締めたというみこの行為は、愛情を伝えるどころか、白亜に耐え難い苦痛を与えてしまっていたということになるわけで。

一体、それがどれほどの痛みをもたらすのか。

都守の常軌さえ逸した、凄惨極まりない鍛錬を乗り越えてきたみこでさえ、辛いと思える痛みだ。

白亜があの瞬間に、どれだけ苦しんだのか。

なまじその痛みを体験しているだけに、どう謝罪したものかと悩んだ末、みこは思い切って白亜の前にうつむき跪くと、土下座して床に額を擦り付ける。

「ごめんなさい！ 私、そうとは知らずに抱き締めちゃって……」

そんなことを突然されてしまった白亜は、

「え！？ あ、あつ、あのっ！！ すみませんすみませんそんなつもりじゃないんです！！」

と、大いに慌てふためき、ぶんぶんとかぶりを振った。

「それでも、です。私が白亜ちゃんに暴力を奮ふるつたみたいなものだもの。せめて謝らせてください」

そのままの体勢を維持したまま、みこはお願いした。

「えっと、あのですね。それは白亜が何もお姉ちゃんに言わなかったからそうなってしまったのであって、お姉ちゃんのせいじゃありません。ですから、その、確かに痛かったですけど、それは白亜の責任です。それに……」

「それに……？」

「確かに痛かったです。とつても。でも、それ以上に嬉しかったんです。だから、痛みを堪えられたんです。えっと……だから、その、白亜が言いたいのは……そのことについては気にしないで欲しい、ということですよ」

「……………」

ゆっくりと、みこは顔を上げる。

「あつう……わかりました。白亜ちゃんがそこまで言つのなら」

「そうです。というわけで、本題の方を進めて下さい」

ほっと一息ついて胸を撫で下ろす白亜を見ながら、みこは彼女の隣に座り直す。

「ええっと、じゃあ話を戻すね。白亜ちゃんのその痛みの原因は、無茶な力の使い方をしたせいで、白亜ちゃんの魂が傷付いてしまっているからなの」

「魂の傷って、ある程度は自然に治癒されるんじゃないんですか？
白亜はそう教わりましたけど……」

教わったこととは違うんですねと、白亜が首を傾げた。

「うん。その傷は本来なら自然に回復するものだけれど、白亜ちゃんのは、限度を超えた強化術式による影響を受けてしまっているから、その限りではないんだ。ちょっと体触ってもいい？」

「あ、はい、どうぞ」

「ちょっとくすぐりたいと思うけど、我慢してね？」

みこは断りを入れると、遠慮なく白亜の衣服の広い袖口から手を差し入れる。

白亜がびっくりして体を瞬時に浮き上がらせかけたが、そこは鍛錬していた過去を持つだけに、ぐっと我慢してくれたようだ。

滑らかで触り心地のいい素肌の上を、そっと撫でるように進んだみこの手は、おへその辺りで一旦止まり、そこを中心として円を描く。

何かを感じ取ろうとしているのか、みこは目を閉じて真剣な表情で意識を手先に集中させている。

「あ……………」

その間、白亜は妙なくすぐったさに一生懸命耐えていた。

「うーん……。やっぱり、魂の傷口にその影響が残っているみたいだねえ」

やがて、みこは潜り込ませていた手を戻した。
くすぐったさから解放された白亜が、ふっと肩の力を抜いた。

「えっと、どのような影響なのでしょう？」

「術による強化では、術がその魂に合ったものでないなら、強力なものを施してはいけないっていうのは白亜ちゃんも知ってるよね？
相性が悪いと、それはその魂にとって毒になるから」

「あ、はい、習いました。その毒性は、術の強さに比例するんですよ」

「その通りです。それでね、魂っていうのは常に安定した状態であるうとするんだけど、その毒性さんはそれを阻害してしまうのです。魂は本来なら自然に回復にしようとするんだけど、白亜ちゃんのは毒性に邪魔されていてそれができないでいるんだ。ここまでは、呑み込めた？」

「大丈夫です、お姉ちゃん。つまり、毒性を取り除けばいいわけですよ？」

「今の話だと、そういうことになるね。ところがどっこい、今の白亜ちゃんの場合だとそうはいかないのです」

「他にも何か問題があるんですか？」

「白亜ちゃん、魂の受容力の話は聞いたことある？ 魂には術を施せる数に限度があつて、魂によってその数は違つていう話。それを超えた量の術を施されると、魂が耐えきれなくなって傷付いてしまふんだ」

「その話は確か、『そこまで君らが術を使ったりするようなことはまずないだろうから、今は置いておく』って、省略されたような」

「ん？ その言い方って……そのまま再現したの？」

白亜の言い方は、どこかで聞いたようなものだった。

「はい。先せ、……お師匠様の言葉そのままです」

先生ではなく師匠と呼べ。

そんなことを言う人物に、みこは心当たりがあった。

「もしかして白亜ちゃん、最高鍛錬クラスにいたことある？」

「体調を崩してしまった最後の一年間以外は、ずっとです。びっくりしました。一年目からあんな……あんな恐ろしい目に……」

何を思い出しているのか、白亜の顔からみるみる生氣が失われていった。

白亜はすでに亡くなって幽霊と化しているので、生氣という言葉の方はどこか変な感じがしないでもない。

「ただ、生き活きとした幽霊がいたって不思議ではない。」

「なすなだって元気っ娘なのだから。特にせりと一緒の時は幸せオーラ全開だ。」

「よっぼど怖い思いをしたのだろう。」

「がくがくと露骨なまでに震える白亜の頭を、みこはよしよしと優しく撫でる。」

みこの聞いたところによると、最高鍛錬クラスという、特に優れた素質を見出された娘が集められるクラスを受け持つ指導者は、鬼

畜だとか悪魔とか言われているらしい。

その先生とは顔見知りのはずなのだが、そんな風に呼ばれるような人はだっただろうかと、みこは首を捻った。

「そんな恐ろしそうな人じゃなかったような……」

記憶を掘り返してみても、それらしい思い当たるような出来事はなかった。

みこはというと、学校 都守が管理する小中一貫校 では、児童もしくは生徒としての席を持つてはいたが、普通の学校でもそのような授業以外では妹と共に隔離され、祖母と母によって鍛錬漬けにされていた。

隔離されることなく他の娘たちと同じように鍛錬を受けることもたまにはあったが、そういうときは大抵、新しい鍛錬の方法や基本的な力の使い方について、お手本として招かれているという意味合いが強かった。

鍛錬が一番きついクラスだったとうこともあるのかもしれないが、みこのあずかり知らぬところで、白亜の心に恐怖を植え付けるような何かが行われた可能性もある。

いささか信じ難いことではあるのだが。

……また今度、何があったのか訊いてみようかな……。

「そうですね……。お姉ちゃんは、白亜たちとは比べ物にもならない鍛錬の日々を送っているのですから……。白亜には恐ろしくて堪らないことでも、お姉ちゃんからしてみれば、大したことではないんです、きつと」

そう言われてしまうと、確かにそうかもしれないなあとみこは思えてしまった。

恐ろしいと思ったことなんて、すでに数え切れなくらいにある。それなのに、白亜の感じたそれを一欠片さえ理解できないことに、みこは寂しさを覚えてしまうのだった。

「うーん。わからなくてごめんね、白亜ちゃん」

心から申し訳なくて、みこはつい沈んだ声を出していた。

そこでようやく、白亜は自分の言葉がみこを傷付けてしまいかねない内容であったことを認識した。

「は、白亜ったら、また……。ごめんなさい、お姉ちゃん。どうか気にしないで下さい」

「ん、大丈夫だよ。ごめんね、気を使わせちゃって。話の続き、しようか」

「はい。今の白亜の状態ってその……要するにこういうことですか？ 白亜の魂は、白亜の受容力を超える量の強化の術を施され、耐えきれなかった白亜の魂は傷付いた。その強化の術は強力な部類に入り、白亜の魂とは相性が悪くて、白亜の魂にとっての毒となった。その毒性は、白亜の魂の回復を阻害するものだった……」

「それであつてるよ。それだけで済んでいたら、毒を除去してしまえばいいんだけど……。白亜ちゃんの魂の傷は、呪霊じゅれいになっている間に受けたものだよね？」

「はい、その通りです」

「人を呪わば穴二つ。呪いの力の行使があつたかを問わず、呪霊へと堕ちた魂は、その呪いの力の影響を自分も受ける。それは魂を穢けが

れさせ、蝕^{はじむ}んで、腐らせてしまう。

白亜ちゃんは呪霊でいた期間が短かったから引き戻せたけれど、ある程度蝕まれてしまうと被^かうしかなくなってしまうの。

そういう蝕まれ過ぎた魂のことを、その姿がどろどろぐちゃぐちゃとした風になっていく様子から、腐った魂……腐^{くさ}魂^{たま}って呼んでる。腐魂の話、これは白亜ちゃんも知ってるよね？」

「周囲に呪いや穢れを、その存在が消滅するまで、その存在の意思とは無関係に撒^まき散らす存在……です」

そのような存在に自ら進んでなろうとしただけに、白亜の口振りには、口の中に嫌いな食べ物をたんまりと詰め込まれてしまったみたいに、苦しさで溢れていた。

「……ただの確認のつもりだったけど、白亜ちゃんに酷なことしちゃったかなあ……」。

「呪霊じゃなくなったときから、穢れも少しずつ消えて、蝕まれる前の状態へと戻っていくんだけど、傷が治らないのと同じように、さっき言った毒が邪魔しちゃっているわけです。白亜ちゃんの痛み的一半は、呪いや穢れに蝕まれているのが原因。両方を取り除いて初めて、白亜ちゃんは痛みから解放されるの」

「それは、どうすればいいのでしょうか？」

「まずは白亜ちゃんに残っている呪いや穢れ、それと毒を私の体に移します。あとは私が浄火水槽^{じょうかすいそう}の中に身投げして終わり。浄火水槽ってわかるかな？」

「お姉ちゃんの言う“じょうかすいそう”はわかりません。少なくとも

とも、白亜の思い浮かべた“浄化水槽”とは違うような気がします」

「浄火水槽っていうのはね、浄化の炎をジェル状に変換したものの、通称『浄火ジェル』がたっぷりと注がれたプールです。浄化したいものを放り込むだけでいいから楽なんだよね。ただし、燃えないようにしないといけないけど。中はぬるぬるであつあつだよ」

みこはどこか楽しそうに語る。

肌に伝わる浄火ジェルの感触のことを、そこそこ気に入っているためだ。

浄火水槽の難点はただ一つ。楽しむ余裕があまりないこと。今のみこでは四時間が限界だ。

それ以上は熱さと痛みに耐えられない。

限界を迎える前に、体に重りを付けて全身を浄火ジェルに沈める必要があつた。

そうでもしないと、まだまだ未熟なみこは自分の意思でその中に留まっていることができずについつい飛び出してしまふ。

浄火ジェルの中に身を沈めれば当然、呼吸はできない。だがそれについては問題はなかつた。

相応の苦しみが待つてはいるが、窒息死などということはみこの体がさせてくれないためだ。

辛くて悲鳴を上げてしまったとしても、口の中に浄火ジェルが入り込んでくるのでその声はくぐもつたものになり、そうなるとその声は浄火ジェルの中から外に届くだけのものにならないため、誰にも聞かれてしまふ心配がない。

「それって、お姉ちゃんは大丈夫なんですか？」

白亜が心配そうに見上げる中、

「私は生身でも大丈夫だよ。ただ、次の日はベッドで寝たきりになつちやうけどねえ」

みこは安心させようと微笑んでみせた。

「そのどこが大丈夫なんですか！？ お姉ちゃんがそんなことになるのなら、白亜が自分で入ります！！」

浄火水槽の辛さを知る由もない白亜が、胸の前でぐつと握り拳を二つ作って訴える。

「うーん、そうかなあ？」

白亜の目の中に真剣という二文字が記されていてそうなくらい真剣な眼差しを真つ向から受け止めながら、みこは惚けたように首を傾げる。

「別に死ぬわけじゃないし、寝たきりになるのは次の日だけでその翌日にはもう私ぴんぴんしてるから、気にしなくていいよ？ あと、白亜ちゃんが浄火水槽に入ったら、燃え尽きて最悪の場合は消えちゃいます。そもそも、生身で入って無事で済む私がおかしいんだよ」

恐ろしいことに、その辺の小石や粗大ゴミを浄火水槽の中に放り込んでみたところ、じゅうっとフライパンで肉でも焼いているかのようないい音を奏でながら跡形もなく燃え尽きてしまった。

それなのに、魅^{みほり}被に言われるがまま浄火水槽の中へと、戦々恐々としながら片足を入れてみれば、灼熱と激痛に襲われはしたものの足は無傷だった。

どうしてなのかと問いかけても、魅被はにこにこ笑ってはぐらかすばかりで、未だに不思議でならない。

わかつているのは都守の血筋の者と、その者が時間をかけて防護術を施したもののだけが燃えないということ。

いつ「どうしてみこちゃんは燃えてしまわないのか、それがわかるまではその中から出さないから、そのつもりでねえ」と魅被に言われるのか、みこは時折思い出してはびくびくしている。

……なんだか、近いうちに言われそうな気がするんだよね……。

ちなみに、ゴミ処理に利用できないかという話を持ちかけられたこともあつたらしいが、門外不出の術であることと、よからぬことを企むものに悪用されるリスクを避けるという名目のもと、丁重にお断りしたそう。

「あつ……、さすがに焼け死にたくはないです」

もう死んでますけど、という小さな咳き聞こえたような気がした。

「わかりました。なんでその程度で済むのかとか、大丈夫の基準がめちやくちゃだとか、色々と言いたいことはありますけど……。それでその、どうやって白亜の体から穢れといったものを移すんですか？」

「それは簡単だよ。痛みと同じように吸い取るだけから、私が白亜ちゃんに触ればいいだけなの」

「お姉ちゃんは簡単って言ってますけどそれって、力を精確に扱えるだけの制御技術とそれを支える並外れた集中力、それに高位の術式を用いて初めて為せることだと伺いましたよ？」

「まあ、そんなんだけどね」

事実を指摘され、みこは苦笑を浮かべた。

白亜の言う通り、痛みを移すことも、今回の吸い取りも、本来ならばみこの言うようにただ触ればいいというものではない。

しかし、みこは触るだけで白亜の痛みを自身へと移すことができる。

「お姉ちゃん。お姉ちゃんなら制御技術も集中力も十分だと思えますけど、術式はどうしているんですか？」

力の行使には基本的に術式が欠かせないとされている。都守でも一部を除いてそう教えられる。

力の制御技術や集中力という条件は満たしているとしても、術式はどうしているのか。

先に相手に術式を仕掛けていたわけでも、予め術式を込めた飴やお札といった道具を用いているわけでもない。

それ故に、そこだけは白亜の知識では説明がつかなかったのだらう。

「白亜ちゃん、そもそもさ、私たちが力を使うときに、どうして術式や術式を受けた他の何かが必要になるんだと思う？」

「術式がなければ、力はただのエネルギーでしかない………ということではないでしょうか」

「うーんとね、半分正解……かな。力は力ではないっていうのはある意味そうなんだ。霊力に術力や呪力、巫力や魔力といったような決まった名前を持たないのはそのせい。私たちの力は今言ったような力でもあるけれど、だからといってどれか一つの性質しか持つ

ていないわけじゃないんだ」

「……どうということですか？」

「使い手の構築次第で火力にもなり得るし、風力にもなる。水力としても発現させられるし、重力だって紡ぎ出せる。それが力なら、およそ考えつく限りの性質を持っているとっていい。私たち都守が宿す力は、そういうものなの。」

でもね、いくら様々な性質を力が持っていたって、その力を使う人がきちんと自分の思い描いた通りに力を導けないと意味がないんだ。そこで術式がでてくる。術式っていうのは、簡単に言うと力の設計図なんだ」

「術式が、設計図？」

「その力がどういう性質のもので、どんな効果を持っていて、どのような形でそれが表れるのか。力を発現させる際に決めておかなければならない不可欠な要素と、それを実現するための力の導き方、それらが術式には記されているの。だから私たちは術式に従って力を注ぐだけでいい」

「ということは、術式に記されていることを自分であつという間に済ませつつ力をちゃんと導けるのなら、術式は必要ないということなんですね」

「そういうこと。私の場合、痛みを自分に移したり呪いや穢れを吸収したりする、身代わりになる術は、術式がなくても使えるんだ。その他の力や術については、ほとんどが今の状態だと無理です」

「たぶんですけど、大体わかった……ような気がします」

「じゅめんね、私ってば説明下手で……」

「そんなことは……、その……、ないと思い、ます……よ？ きつと……」

先程までとは打って変わって、白亜は一切みこと目線を合わせようとせず、視線をあちこちにやり、何度も噛みそうになりながら言葉を紡ぐ。

どこからどう見たって無理をしていた。

どつやら嘘は得意でないらしい。

「白亜ちゃん、そんな気を使わなくてもいいから……」

「でも！ そ、そうですよ！ 下手なのではなくて苦手なだけですよ……」

……つづつ！

ちくつと、小さな棘がみこの心に突き刺さった。

「えっ、えっと、普段そのようなことを説明する機会がないから下手なだけで、れ練習すれば……！」

おまけとばかりに棘もう一つ。

……あう……。よ、要するに下手なことなんだね……。

「白亜ちゃん！ も、もう無理にフォローしようとしなくていいから気にしないでえ……」

なおも言い募るつとする口垂を宥めるのに、みこは数分の時を要したのだった。

第27話 7月26日 朝の来訪者・その6

今し方の言い合いを含め、みこと話している間に慣れてきたのか、並び座る二人の間の距離はいつの間にかほとんど零ぜろになっていた。

それだけではない。

白亜はくあはみこに寄りかかり、体重を預けるに至っている。彼女はしばし無言で時を過ごすつもりらしく、何か言葉を発する様子はない。目を細め、口元を綻はこばせたその表情から察するに、心地いいのだろうか。

堪能していただけているようであり。みこはそんな白亜を見ていたくて、もう少しだけそっとしておくことにした。

あまりのんびりしていると、妹が生き返ったみたいだ。

こうしていると、妹が生き返ったみたいだ。そんな想いが胸中に生まれた瞬間、

……っ！

その胸を、鋭い痛みが雷しかずちのごとく貫いた。

……私、最低なこと、してるのかな……？

途端に、自分のしていることはどうなのだろうかと不安になって、肩の辺りに確かにある白亜の“重さ”を感じながら、己の心を探る。心の底へ底へと、より深い場所を目指して意識が沈んでいく。

そこにいたのは自分と白亜を含んで三人。もう一人は、今は亡き妹のみさだ。

……みさ……。

それは白亜を迎え入れてからというものの、ふと浮かび上がったは消えてを繰り返しているもの。

肯定するにせよ否定するにせよ、どちらにしたって、これといった確証が得られない、そんな難題。もしかしたら、現実から目を背けているだけかもしれないし、実はそうではないかもしれない。

……私は、白亜ちゃんにみさを重ねて、“みさの代わりにしてしまっている”のかな……。

少なくとも、みさが生き返ったみたいだななどと思ってしまう程度には、重ねてしまっているのだろう。

だからこそ、みこは白亜のことをみさの代替物として見てしまっているのではないかと、そういう扱いをしまっているのではないかと、自らの行いを恐れていた。

そんなことはないつもりでいるけれど、はっきりとそれを否定できないところがあるのも事実なのだから。

……これからは、もっと気をつけなくっちゃ……ね。

『お姉ちゃん』。あの娘みさと同じように、そうやって白亜に呼んでもらえたことで浮かれていた自分を、みこはこの時ようやく自覚したのだった。

それから、数分ほどして。

みこが白亜に話すべきことは、一応話したはずだ。

痛みの原因を取り除かなければ、いつか近い将来に都守が被うべき対象となってしまうということ。

痛みの原因を取り除くには“ちょっとした”代償があるものの、

それは白亜が払うものでもなく、除去作業は容易に済ませることができる作業であること。

どうするのかは白亜次第だ。

みこととしては、今すぐにでも痛みの原因をこの身に移して浄化しておきたいところなのだが、だからといって勝手な真似をするつもりはなかった。

それ故に、訊ねなければならない。

どうして？ と。

「さて、そろそろ本題に入ろうかな」

これからする問いかけは、白亜をこの手で被わなければならないという結末を約束させられかねない。

みこはそのような未来を望んでないし、考えたくもない。

押し隠した内心の不安や緊張が声に滲まないよう、努めて軽い調子で口にした言葉は果たして、それをきちんと成し遂げられていただろうか。

「いままでの本題じゃなかったんですか!？」

それなりに重大な内容が含まれていただけに、白亜の驚愕する様子は予想以上のものだった。

普段から声量が控えめな彼女にしては、意外なほど大きな声を出していた。

こんな風に発声することもできたんだと、みこは新しい発見を嬉しく思う。

「そういうわけじゃないよ？ これからするのが本題中の本題ってだけで」

苦笑いしながらそう答える。嘘は言っていない。

それにしても、今日はやけに苦笑しているような気がするなあと、みこは頭の隅っこで考える。

……気のせいかな？

「そんなに大事なことなんですか？」

余程の重大事項だろうと考えたのか、白亜は一言一句聞き逃すまいと緊張の面持ちでこちらを見つめた。

「少なくとも私は、一番大事なことの一つだと思ってるかな」

そんな白亜を愛おしいと感じつつ、どこまでも正直な気持ちを告げる。

「お姉ちゃんが一番大事だと思うことって……」

みこが見守る中、うーんと思考を巡らせること数分、白亜はギブアップとばかりに助けを求めるような視線を向ける。

どこか申し訳なさそうな白亜のその目に、みこは木漏れ日のような優しい笑顔を映す。

「それはね、気持ちだよ。き、も、ち」

両掌を豊満な胸に軽くあてがい、そつと瞼を閉じる。

どこにあるかもしれない、けれどその存在は確かなものとして感じるこのできるそれを、「ここにちゃんと在りますよと示すように」

「気持ち……」

呆然とした眩き。どこか思い詰めているとも解釈できる、白亜の思案顔。

そんな顔をされてしまうと、これからする問いかけを躊躇してしまわずにはいられない。喉元にまで出かかっていた言葉が詰まる。

口を開く寸前だったため、危うく言葉もなく口をぱくぱくさせてしまつところだった。

気を取り直し、みこは心なしか重くなつた唇を開き、普段の調子を装って訊ねる。

「白亜ちゃんは どうして痛いのを我慢してたのかなーとか、その原因を取り除いちゃってもいいのかなーとかね。白亜ちゃんは どうしたいのか。私が訊きたいのはそういうことなのです。白亜ちゃんの本気の気持ちを、聞かせて下さいな」

一度止まってしまうと二の句が継げなくなりそうだったので、一息に言い切った。

「それは……」

やはり白亜は口ごもった。

予想していた反応だったので、みこに落胆の色はない。

元より、そうすんなりいくとも思っていない。白亜にだって、話したくないことや話にくいことはあるだろうし。こころはじっくり腰を据えて根気よくやろう。

未那夜が戻ってくるまで、まだしばらくの猶予ゆづりがあるだろうから。

「待つからね、私。白亜ちゃんが話してくれるまで、待つから」

白亜を急かすわけでもなく、みこはその身を時の流れるままに任

せた。

静かに刻々と過ぎゆく時間の中、みこは隣にいる存在に常に気を配りながらも、どうにも手持無沙汰だったので、なんとなく視線をゆっくりとさまよわせていた。

私物がないせいなのか、どこか寂しい感じのする白亜の部屋。

中庭が覗ける窓のカーテンは、好きなデザインの物に変えようねと言ってみたのだが、今も最初から用意されていた味気のない白い物のまま。

絨毯やシーツや枕にしたってそうだ。何度みこが見に行こうと誘っても頑なに断るし、ならばとカタログを見せても『白亜にはもつたいたないですから』の一点張り。

あまりしつこいと逆に迷惑だろうとは思いつつも、かといって遠慮の塊としか思えない白亜を放っておくこともできず、みこは日々どうしたものかと考えている。

室内に置いてある数少ない家具である机やタンス、布の掛けられた姿見に、せめてもの彩りとして飾られた観葉植物。それらを含め、部屋の手入れだけはしっかりしているらしく（個々人の部屋はその使用者に清掃などの全てが委ねられている）、塵一つないと言いたくなるくらいに綺麗だった。

……寝るだけの場所にしてたのかな……？

みこは何をしている時でも、白亜の気配を追い続けていた。

一応は監督対象ということになってるので、常に居所を把握していなければならぬということもあつたのだが、それ以上に、ふ

とした瞬間に消えてしまふんじゃないかと、不安だったのだ。白亜には、そんな危うさがあった。

白亜の気配の移動歴と家の人 “家族” の話を考慮すると、彼女が部屋にいるのはみんなが寝静まっっている間だけで、基本的にどこか手の足りなさそうなところを探して歩いてみたみたいだし、痛みが酷くなったと言っていた頃からは、苦しんでいる姿を見られないようにするためだったのか、山道へと散策に行ったりしていたようだ。

……白亜ちゃん、ぬいぐるみとか好きかな……？

今度プレゼントしてみようか、などとみこが考えていると……。

その時は、意外と早く訪れた。

「……？」

みこが肩から肘の辺りに感じていた、白亜の重さが失われる。

ついに話す気になってくれたのかなと、期待と不安と小さじ一杯分くらいの好奇心をブレンドした視線を、それらの存在を白亜に悟られぬよう注意しながら向け直した。

彼女は表情を見られたくないのか、できるだけ表情が見えないよう顔を俯かせていた。

言葉を探しているのか、静寂の時間が僅かに流れる。

やがて。

「白亜はなずなさんを殺しました」

ぼつりと、不意に呟かれた言葉に、いや、言葉よりもその声に、みこの肩はびくりと跳ね上がりそうになった。

白亜の呟く声音は、感情を微塵も宿してはおらず、まるで心を感じ

じられないものだった。

そこにあつたのは、ただひたすらに無機質な冷たさ。

声は、抑揚もなにもあつたものではない、機械音声の方がまだマシと思えるくらい平坦さでもって、みこの耳に届けられた。

白亜の異変を察知したみこが何かを言うより早く、

「白亜は呪霊で、人殺しです」

彼女はさらに言葉を重ねる。こちらを一切見ようとすることなく。

どこまでも冷たく。

どこまでも淡々と。

顔を覗き見てみると、どこか虚ろとも取れる眼をしていた。それ以外は、無表情なお面を被ったかのようだった。

みこは薄ら寒いものを背筋に感じながらも、身動きするのを堪え、黙って耳を傾ける。

どういふつもりなのだろうか、半ば混乱気味の頭で考えながら。

「白亜は罪を犯しました。だから、それ相応の罰を受け、罪を償わなければなりません。たとえ、この魂が魂還して、白亜という存在が消えてしまうことになっても」

そこまで口にしたところで、白亜は震え始めた。

太腿の半ばより手前、足の付け根に近い場所に置かれた握り拳。

その甲に、透き通った雫が一滴、また一滴と落ちていく。

みこはそれを目にしてようやく、白亜が心を殺そうとしていたことを理解した。

まるで逆だ。みこが言った事とまるで正反対のことを、白亜はしようとしていた。

「でも、魂還するのは……消えるのは怖いです。まだ消えたくない

です。生きたいです」

体と同じく声も震わせながらも、あくまで淡々と告げようとしているのか、絞り出されたその声はやや掠れていた。

もう死んでくせに、生きたいだなんて馬鹿馬鹿しいですよ
ね。

堪え切れなくなったのか、涙声でそんなことを言い、白亜は自嘲の笑みを浮かべた。

……やめてよ……。そんな顔、しないでよ……。

自分がどうにかなったわけでもないのに、みこは息が詰まりそうになった。

赤々とした灼熱の鉄棒を口から差し入れられているかのようだった。

「白亜は身勝手です。自分は一方的に殺して、未来を奪って。もしかしたら訪れていたのかもしれない、幸せな時間の、その可能性さえ潰したくせに、自分は生きたいだなんて望んでいるんです」

もう取り繕う気もないのか、みこに向き直った白亜は、自分を嘲る歪な笑顔を浮かべたままに、

「痛みを……、痛みを、返してください」

決定的な言葉を口にしたのだった。

同時にぎゅっと瞑つむられた目の瞼まぶたの隙間から、洪水のように涙が溢れ出した

「

」

白亜に何を言われたのか、数刻の間、みこの脳はその理解を拒んだ。

凍水地獄で凍止した時と同じくその身を氷像のごとく硬直させること、たつぷり十秒ほど。

自嘲の笑みを浮かべながらも泣いている白亜の視線から目を逸らすことなく、

「本気で、そう言ってるの……？」

やっとの思いで口を動かした。

唇は、からからに乾いていた。

小さな頷きをもって為された返答が、事態が望まぬ方向に向かっているという現実を、容赦なくみこに突き付ける。

「それだと白亜ちゃんは、腐魂に……なっちゃう、よ？ 消されて、消えちゃうんだよ……？」

隠し切れない動揺が声を震わせた。

「はい。なので、お願いします。もし白亜が腐魂になったら、容赦なく葬抜してください。できるだけ惨たらしく、たつぷりと時間をかけて」

そつと開かれた瞼の下、白亜の濡れた瞳は不思議なほど澄みきっていて、凧いでいた。

全てを悟って、ここではないどこか遠くを見ているような、そんな気がしてくる目だった。

「……まさかとは思うけれど、なずなを殺した罪を、自分が消える

「ことで償おうだなんて考えてない？」

「……………」

白亜は無言だった。代わりに、小さく顎を引いた。肯定の意だった。

「命には命を、か……。ご遺族の方は、そう思うかもしれないね……。でも、なずなは悲しむよ？」

「なずなさんだって、本当は恨んでるに決まっています。あの時は、お姉ちゃんの前だったから許すって言っただけで。白亜なんて、きつと消えてしまえって、憎まれていま」

「 違っつー!! 」

白亜が言い切る直前、思わぬ方向から鼓膜を破かんばかりの大音だいおん声が響き渡った。

二人してびくつと身を竦めた後、恐る恐る声の発信源、すなわち部屋の入り口へと視線を向けると、そこにはいつになく険しい表情のなずなど、その後ろで前のめりに倒れこんでいるせりと未那夜みなよの姿があった。

「どうやら扉の前で聞き耳を立てていたらしい。」

「しかし、一体いつから？」

みこが呆気にとられて一言も発することができないうちに、ずんずんとなずなは部屋に踏み入り、白亜の正面に腰に手を当てて仁王立ちになった。

扉の方を見ると、せりも未那夜もぼかーんとしている。あちらも状況についていけているとは言い難い様子だった。

「はーちゃん！」

怒鳴っているようにさえ聞こえるほど強く白亜を呼ぶなずな。

「は、はいっ！」

小動物な白亜はなずなの剣幕に圧倒されるがまま、背筋をぴんと伸ばして応じた。

「よく見てて！」

何を　　という間もなく、なずなは自らの髪を纏めてポニーテールにしている白いリボンをするりと解いた。

漆黒のヴェールがなずなの背に広がる。

思いの外^{ほか}長いその髪は、せりのそれを上回っていた。

「せり、リボン一つ貸してくれる？」

なずなの要求に素早く無駄のない動作で応じたせりの手から、解かれたばかりの赤いリボンが一つ渡される。

なずなはそれらを使って、白亜の髪形を真似するように髪を結いていく。

ことここに至って、みこはあることに気が付いた。

……………え？ ……錯覚じゃ、ないよね……………？

なずなが顔つきを引き締め、ショートかロングかの違いこそはあれ髪形を同一にしたことによって、彼女の顔に誰かの輪郭が重なっていく。

そんななずなのすぐ隣で、せりは「はあ……………」と溜め息をついて

いた。やれやれねえと言いたげな顔だった。

せりがあまり驚いているように見えないのは、普段の有頂天な表情とはまるで違う、そんななずなの真顔をもよく知っているために、白亜の顔になずなの面影があることなど、とっくに気がついていなかったのかもしれない。

なずなには失礼な話だが、素の表情とせりと一緒にいるときによく見せる嬉しそうなデレデレの表情は、人が変わったかのような印象を相手に与えがちなのだった。

「え、ええーっ！ みこねえさま、これってどういうー!？」

さらにその後方からは、未那夜が説明を求めるような視線をみこに送りつつ、とてとてとこちらに歩いて来ている。

どういふこともなにも、みこだって今更になって気付かされたのだ。説明のしようがない、というより、見ての通りなのだろう。

「な、なずなさん……どうしてそんなことを……?」

一人だけ理解していない様子の白亜が、困ったようにこの場にいる面々を見渡した。

「白亜ちゃん、鏡見てみようか」

みこはそう促すと、姿見の前にきよとんとしたままの白亜と珍しく平静的なずなを並んで立たせ、一息に布を取り払った。

「っ！ー!」

「……………やっぱり、そうなんだ」

口を両手で押さえ、声にならない驚愕の声を上げる白亜。
ずっと知りたかった答えを得て安堵するように、静かに深呼吸を
一つするなずな。

その両者は、少なくとも血の繋がりを感じさせる程度には、どこ
となく似たような顔形をしていた。

こうしてある程度落ち着いている二人を並べてみて初めてわかる、
類似した雰囲気。

誰も口を開こうとしない中、沈黙を破ったのはなずなだった。

「わたしのお母さんの妹さん……叔母さんの嫁入り先の名字が、七
雪だったんだ。叔母さん、子供のことで旦那さんと喧嘩して、離婚
したんだよ。それでも、七雪の姓のままにしたって聞いてたから」

「……どういう、ことですか……？」

恐ろしい事実を知ろうとしている。そのことに気が付いたらしく、
白亜は立っていられないのか、へなへなと座り込んでしまった。

そこへ、

「はーちゃんのお母さんってさ、七雪莉亜ななゆきりあって名前じゃない？」

きつと、なずなには追い打ちをかけるつもりはなかったのだろう。
けれど、それが止めとなってしまったようだ。

なずなのその問いが耳に届いた時、とうとう白亜はその場に倒れ
伏し、気を失ってしまったのだった。

「白亜ちゃん！」

みこは慌てて駆け寄り、なるべく動かさないようにしながらすく
にベッドに寝かせた。

第28話 7月26日 朝の来訪者・その7

四人の視線の先、青い顔で眠る白亜はくあが意識を取り戻すのは、いつ頃だろうか。

目が覚めた後、彼女はどうなってしまうのだろうか。

この場の誰もが同じ不安を抱えているためなのだろうか。

誰一人として、口を開こうとする様子はなかった。

衝撃の事実を告げたなずなは、ベッドの脇に膝立ちになり、白亜の顔を覗き込むようにしている。

なずなの目は、我が子を慈しむ母のようでもあり、妹を想う姉のようでもあった。

どこかで見たような、そんな視線。

せりに送られるものとはまた違う意味で愛情に溢れるそれは、要するにみこが妹や未那夜みなよに向けるものと同じだった。

なずなの手が、そっと白亜の頬に添えられる。

愛おしげに数回優しく撫でられても、当然ながら白亜はくすぐったそうにする様子もない。

それから程なくして、ちょっと二人きりにしてもらってもいいかなど、なずなが言った。

全員、無言で視線を交わし、

「……………行きましょ」

せりの言葉を皮切りに、未那夜、みこ、せりの順に退室しようとする。

その去り際、扉の辺りでみこが口を開こうとしたところ、

「その娘のこと、任せたからね」

みこが言わんとしていたことと同じようなことを、せりがなずなの背中に投げかけた。

なずなの「ん」という短い答えに満足したせりは、

「ほら、ぼーっとしない」

「う、うん……」

言わんとしたセリフを取られて、ついその場に立ち尽くしてしまつたみこの背を押すように、そそくさと退散していった。

廊下に出た三人は、白亜の部屋の前で立ち往生しているわけにもいかないということで、せりの部屋に場所を移した。

ベッドの近くにあった椅子に腰を落ち着かせたせりが、ふうと息を吐いた。

「ねえ、せり。白亜ちゃんが従姉妹だつてことに、なずなはいつから気づいてたの？」

ベッドに控えめに腰掛けたみこが、先程から訊きたかつた問いを発した。

その膝の上には、未那夜がちよこんと座っている。みこが凄絶せいぜつな痛みをその身に宿していることを、彼女は未だ知らないためだ。

「確信はしてなかったみたいよ？ 出会ったあの日からずっと、なんかどこかで聞いたような……って首を捻ってたくらいだし」

本人の真似を交えながら、せりはどことなく諦めたように言った。

「それってつまり、勘つてことなんじゃあ……」

みこは顔をひきつらせた。もし違っていたらどうなっていたらう。

いや、そもそも本当に従姉妹同士なのかまだきちんと確認できたわけではないため、なずなの勘違いという可能性も少しはあるわけ。

みこは、なんだか頭が痛くなってきたような気がした。

……あはは……。気のせい……。だといいなあ。

白亜の返事次第では、頭を痛めずに済むのだが。彼女の母親が、本当になずなの言う七雪莉亜ななゆきりあであるのならば。

「全くの無根拠ってわけでもないわよ？ あたしが似てるかも、って思ったんだもの。少し前のことだけど、なずなにどうしてはーちやんをあれ以上責めなかったのかって訊かれなければ、絶対に言うつもりはなかったけれど。なんだかなずなを責めてるような気がしてきちゃうのよね……」

みこの内心を見透かしているのか、せりは肩をすくめながらそう言った。

それから、なずなに訊かれた時のことを思い出したからか、せりは拗ねたようにむくれる。

ちよつと失礼な言い方もしれないが、体が小柄な方であるせりがそうすると、そんな子供っぽい仕草にも違和感がなく、むしろ似合っていて可愛らしかった。流れるような長い黒髪がそれを更に助長していた。

これでふりふりのドレスやローリータでも着ていれば、お伽話に出てくるちよつぴりわがままなお姫様みたいに見えることだろう。そんな少し浮世離れた魅力が感じられた。

……これはなすが惚れてしまうのも無理ないなあと妙に納得している場合じゃなくてですね。

ふと思い浮かべてしまった情景を打ち消し、

……それはそれで、あてにしちゃまずいような……。

内心で呟きつつ、みこは苦みの成分が当社比三割り増しの苦笑を浮かべた。

結果オーライであることを祈るしかない。

そうしていると、くいくいと袖を引かれた。

「みこねえさま、白亜ちゃんは消えたりなんかしないよね？」

視線を落とすと、膝上の未那夜が体を捻り、みこを見上げていた。再開を喜んだのも束の間、また想い人を失ってしまうのではないかという不安から、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

「未那夜ちゃん……」

かける言葉が見つからず、みこはただ名前を呼ぶしかなかった。

今の彼女に必要なのは白亜その人なのであって、安易な慰めの言葉ではないのだから。

そのように考え、余計なことを口にしようとしないうみこことは逆に、せりはきっぱりと言い切る。

「未那夜ちゃん、心配しなくても大丈夫よ。あの娘だつて消えたくないって言ってたじゃない。だから、なすなに任せておけばいいわ」

なすなへの絶対的な信頼からか。

それとも、すでにせりは白亜のいる未来を見たからか。それは、どこか確信めいた響きを孕んでいた。

……にしても、せりたちは一体いつから話を聞いてたんだろ？
いくら家の中だからって、扉一枚隔てただけなのに気づけないなんて、気を抜き過ぎだよ……。はうう、また母様にお仕置きされちゃうよお……。

みこの内心をよそに、それより……と、せりは続けた。

「あなたが心配すべきなのは、あの娘の純潔をなずなに奪われないかどうかよ」

確信に満ちた口調で、好きなんですよ？ と、せりは片目を瞑つむつた。

「ど、どうしてそれをせりねえさまが!？」

教えた覚えがない事実を指摘され、つい未那夜は動揺してしまっ

た。
カマをかけられていたとしたら、まさに相手の思惑通りとしか言
いようのない迂闊な反応だった。

もっとも、それは未那夜が自身の恋心を隠すつもりでいて、せり
があえてそれを知ろうとしていればの話だが。

「わかるわよ。むしろ気づくなと言う方が無理な注文ね。扉の前で
聞き耳を立てているときにしても、やけに真剣に耳を澄ませている
し、部屋に入ってからなんて、みこと話している時でさえちらちら
とあの娘の方を見てたもの。あれじゃあ、あなたのことが気になっ
て仕方ありません！ って宣言してるようなものよ?」

「は、はうっ！」

ピストルか何かで撃ち抜かれたわけでもないのに、未那夜は胸を押さえて蹲ひざまった。

反応が大袈裟なのは、照れ隠しのつもりなのだろう。

少し下を向いた横顔を覗くと、頬に朱が差していた。

照れてるところもかわいいなあと、みことせりは我知らず口元を緩めていた。

「あ、そうだ！」

と、不意に顔を上げた未那夜が何かを思い出したようにポンと手を打った。

「どうしたの？」

みこが訊ねると、

「みこねえさまに、魅み被は様じからの伝言と預かり物があるの」

「伝言と……預かり物？ 何だろう？ とりあえず、伝言を聞かせてくれる？」

「うん。えっとね、『凍こてし雪原ゆきと焦熱しやうねつの洞窟どうくつ、及び常闇とこやみの湖の使用を許可します。せりちゃんにはまだ少し辛いかもしれませんが、十分鍛錬に耐え得ると判断しました。但し、それらの領域に踏み入る際には、先日みこちゃんが用意した巫女服の着用を義務付けます。領域から出るまでは、絶対に脱ぐことのないように。さもなければ、せりちゃんの命はないものと思ってください。なずなちゃんには、

封印を施した後に、せりちゃんと同様にして各領域に連れて行き、そこで指導してあげてください。指導内容の詳細は文に認しためておいたので熟読するように。もしなずなちゃんが逃げ出すようなら、せりちゃんを人質に取ってでも、最低七十二時間は我慢させなさい』
だって」

はいこれと言いながら、未那夜は一枚のお札をみこに渡した。
その物質をお札へと変換し、物の持ち運びを容易にする。これは、そんな術式によってお札に姿形を変えられたものだ。

このお札に対応する力を注げば、たちまちその姿形は一通の手紙になることだろう。

しかしこれを寄こした魅祓のこと。単に力を注いだところで何も変化は起こらないであろうことは、想像に難くない。

通常の場合、力を込めれば勝手に変換の術式が起動するようになっていたのだが、おそらくは何かしらその作用を阻害するような仕掛けが施されているのではないかと、みこは考えた。

「ありがとう、未那夜ちゃん。それにしても、母様かあさまったらどうせならまとめて手紙に書いておいてくれればいいのに、どうしてわざわざ伝言を……」

そう言う間にも、みこはあれこれ思案しながらお札を手紙の姿へと戻していく。

一枚二枚と、その姿を再構成していくうちに、どういう妨害が為されているのかが見えてきた。

どうやら再変換の術式が一枚ごとに異なっていること。更に、それらには一定の法則に基づいた欠損があるということ。

法則に気がついてしまえば、どうということはない。

途中からいきなりパターンが変わるといふ、ある意味予想通りの展開に多少苦労させられながらも、みこは再構成済みの手紙の文面

に目を通しながら、残りを再構成していった。

「なんとなくなんじゃないかなあ？ 魅祓様、ぼくを見てにやにやしなから『もし、もしもちゃんと伝えられなかったら、……わかっていただけますね？』って言ってたもん」

その時の魅祓が怖かったのか、未那夜はぶるっと身震いすると、ぎゅっとみこに抱きついた。

「ぼく、魅祓様に脅かされないといけないような悪いこと、何かしちゃった……？」

心当たりがないのか、未那夜はしきりに首を捻る。なぜかその様子は、みこの体に頬を押し当て、すりすりして甘えたいというだけのようにも見えた。

「よしよし……大丈夫だから。未那夜ちゃんが何かしたからとか、そういうわけじゃないの。単純に、母様はいつもそんな感じなのです。だから安心して？」

「……それは余計に安心できないんじゃない？」

よしよしとあやすように未那夜の頭を撫でるみこに、すかさずせりがつつこんだ。

「ぎくっ……！」

そのタイミングがあまりに見事だったので、思わずみこは本音を漏らした。

しまったと、みこがそう思った頃にはもう遅い。

……や、別にそこまで隠そうとは思っていないけど、ねえ。

「……ねえさま？ 今、ぎくつて言った！？ 確かに言ったよね！？」

「必死の形相で見上げる未那夜。
ただならぬ気配を感じつつも、

「な、なんのこトかなあ……？」

……あは、あはははー。私には、なんのことやらさっぱりわからないですよ？

あさつての方向に視線をやり、みこはあくまでもシラを切るうとしました。

「ねえ、なんで向こう見るの？ ぼくの目を見てよ！ みこねえさまってばあー！」

ゆっさゆっさと体を揺すられる。

その拍子に、まだ読んでいない手紙の一枚がはらりと宙を舞い、せりの足下へと降り立った。

それに気づくことなく、未那夜の様子を見ようと視線を僅かに動かす。そこには予想外の光景があった。

どうしたというのだろうか、未那夜の目には今にも零れんばかりの涙が湛えられていた。

「み、未那夜ちゃん！？ え、ちょ、ちょっと、なんで泣きそうなの！？」

「だって、だってえ……。ねえさまがそんなこと言うからもつと怖くなっただもん……」

妹分の涙に激しく狼狽するあまり、みこは落下した手紙に気づきそうにない。

そんなみこに代わって、せりが足下の手紙を拾い上げた。

そこに書かれていた文章に目を通してみると、感嘆せずにはいられないほど美しく丁寧な字で書かれていたのは、みこが監督すると未那夜が甘えてしまうので、未那夜の鍛錬の監督は魅祓がするというもの。どうやら事前に、おそらくは未那夜のお母さんからそうするよう頼まれていたようだ。

まさにその通りに未那夜は甘えてしまうのだろうなどと、目前で繰り広げられている光景から、せりは一人で納得した。

「みこ、落としたわよ」

せりは何食わぬ顔でタイミングを見計らって渡す。完全に傍観者モードだ。

「え、あ、うん、ありがとう」

せりから、落としてしまったらしい手紙を受け取り、素早く視線を走らせるみこ。

「……あ」

意識せずそう口にして、口を開いたままの間の抜けた表情をすることたつぷり数秒。

錆びついた機械がぎしぎしと動くような、ぎこちない動作で未那

夜を直視する。

「も、もしかして未那夜ちゃん……。母様が鍛錬の監督するって知ってたりする？」

こくこくと、何度も頷く未那夜。頷いた拍子にぼろぼろと零れる雫。

目に湛えられた涙は煌く尾を引く流星のように、あっという間に流れ去り、その名残として染みになる。

どうやら、知らぬ間に未那夜の心に追い打ちをかけていたらしい。

……うーん。知らないよりかは、知っていた方がいいと思うんだけど、未那夜ちゃんはそうじゃなかったんだね。悪いことしちゃったかなあ？ だけど嘘ついてもねえ……。

何もそんなに恐れることはないだろうに。

そう思っていた時期が、みこにもあった。

ところがだ。魅祓の監督の下で鍛錬した巫女の何人かと話してみると、どうやら記憶を意識的に封印しているかのような様子が多く見受けられた。

皆一様にその日のことを思い出したくないと言うのだ。おまけに複雑な色の目を向けられた。憐れんでいるような、悲しんでもいるような、慈しんでいるような、不思議がつているようなにも見え、尊んでいるとも受け取れるような、幾つもの想いが入り混じった目を。

そんな目を向けられて、それだけにご容赦下さいと何度も頭を下げられてしまっっては、それ以上踏み込むだなんて真似はみこにはできなかつた。

仕方がないので、みこは一体どのような鍛錬をさせたのかと魅祓に直接問いかけてみれば、帰ってきた答えは『普段みこちゃんがど

れだけ頑張ってるのか、わかってもらおうと思って』というものだった。

詳細を聞いても一切話してくれそうになく、真相は未だにさっぱりわからない。わからないが 彼女らにとって、それが悪夢のよくな出来事であったことだけは疑いようがないだろう。

「え、えっとね、未那夜ちゃん」

「ね、ねえさま？」

涙目で見つめられ、嗚咽混じりに呼ばれると、なぜか罪悪感が胸に溢れてくる。

「うう……。その、頑張って……。ね？」

苦笑しながらそう言い、ね？ というところで首を傾げて見せた。

「……………」

言葉の代わりに、未那夜の涙が滝になった。

翌日、空が明るくなり始めた早曉ツキアケの時分。

静まり返った屋敷へと、過度に音を立てないよう気を遣いながら帰ったみこを待ち受けていた人物がいた。

みこが鍛錬している間に目を覚ましていたらしいその人物 白

亜は、みこの姿を見て口を開きかけたまま、言葉を発することなく

固まってしまった。

凍水地獄から帰ったばかりのみこの顔色は死人のように悪く、まるで雪山で凍死した人間がそのまま動いているみたいだったからだ。

「ん……？ おはよう、白亜ちゃん。目が覚めたんだね」

果たしてうまくいったかどうかはわからないが、みこはいつものように微笑みを浮かべてみせた。

白亜は黙ったままだった。何も話してくれないとなると、ちょっと困る。

「ええつと……怖がらせちゃったかな？」

無理をしていることが見え見えなみこの微笑みに苦いものが混じった。

自分が今どういう状態なのか、みこも把握しているつもりだった。きつと、酷い顔をしていることだろう。ちょっとしたホラーのようだ……というのはい過ぎか。

何せ、白亜の痛みを引き受けたまま、ただでさえ辛い鍛錬に臨んだのだ。

痛みを引き受けた当初に予想した通り、泣いたりもした。

さすがに表情を完璧に取り繕うだけの余裕もなく、家では滅多に見せることのない疲れた表情を、白亜の前に晒してしまった。

もう少し力の扱いが上手だったら、下がってしまった体温だってそう時間をかけることなく元に戻すこともでき、顔色もマシなものにできていただろうなど、みこは己の未熟さを感じずにはいられなかった。

だから笑みだけは絶やさないようにと思っているのだが、実際はこの通り。

なんて無様なんだろう。そんな、何度も味わった思いが胸中に渦

巻いた。

白亜は何と言っているのかわからないという風に、言葉を探して視線をさまよわせた。

結構シヨックだったのだろう。

「その……こんな状態でごめんね？」

みこが謝ると、白亜は軽く電気でも流されたかのようにびくつとなった。

「あつ、いえ……あの……」

次の言葉がつつかえてしまったのか、口をもごもごさせる。

やけに緊張しているように見受けられる面持ちからして、口ごもってしまった理由は、みこの有り様に驚いたというものだけではなさそうだ。

みこの様子がその一因になっていることは、否定し難いが。

「うんとね、私に何か言いたいことがあるんじゃないかなーって思ってるんだけど、どうかな？」

そういうわけもあり、みこは助け船を出すつもりで訊ねた。
すると、

「あ、後でいいですー！」

咄嗟とつぱにという感じでそう口にした白亜は、素早く踵かかとを返した。

「ああつ、待って、白亜ちゃん待って」

走り去ろうとするその背中に慌てて呼びかける。

無視して行ってしまふかと思ったら、どうやら呼び止めることに成功したらしい。声に反応して、白亜がぴたっと動きを止めた。

その隙に白亜の真後ろまで近付く。

肩に手を乗せようとして、一旦伸ばしかけた手を引っ込める。

冷え切った手をそのまま置くのはどうだろうかと逡巡した後、巫女服の白衣の袖越しに触れることにした。

驚かせてしまわないよう、とんとんと軽く叩いてから、白亜の肩に優しく触れる。

このままぎゅっと抱き締めたいところではあったが、今の体温でそうすることは憚られた。いささか冷た過ぎる。

「今でも大丈夫だよ？ 私の部屋、行こ？」

「で、ですが……」

振り返ることなく、白亜は躊躇いを口にした。心なしか、俯いて
いるように見える。

「いつものことだもん。何も心配いらないよ？」

「いつものことって……、毎日そんな風になつてしまつのですか？」

「これでも都守の本家の長女だからねえ。後継ぎ候補の筆頭だから、鍛錬にしたって何にしたって、一番辛く厳しいのですよー」

悲観的に取られてしまわないように明るく告げる。白亜ならそう
思いかねないからだ。

「それなのに、どうしてお姉ちゃん白亜みたいなのにも優しくし

てくれるんですか？」

「それはね、好きだからだよ」

何の迷いも躊躇いもなく、みこはそう断言した。

「え？」

何を言われたのかわからないといった風に、白亜は固まった。

「だからね、好きなの。大好き。私さ、白亜ちゃんのこと好きだよ？ 未那夜ちゃんの言う好きとは違うけれど、それでもやつぱり、白亜ちゃんのが好き。母様も好き。父様も好き。お祖母様も好き。お祖父様も好き。妹も好き。未那夜ちゃんも好き。しょうちゃんも好き。紗希も、なずなも。せりも好き。家族みんなも好き。みんな大好き。だから優しくありたいの。好きな人に優しくするのは、そんなに変な事かな？」

「えっと、それは……。……そうであって欲しい、です」

「よかった。それじゃあ、いこ？ もし嫌だったら、ちゃんと行ってね？」

「っ。……はいっ」

白亜の声は震えていて、今にも消え入りそうなほどに小さなものだった。

もしかしたらそれは、泣いていたからなのかもしれない。

部屋に戻ると、みこと真正面から向き合った白亜は意を決したように口を開いた。

先日までとは打って変わった力強い目つきに、みこは「おや？」
と思った。

何か確たる想いを胸に秘めているような、はっきりとした目的に
向かうべく前を見据える瞳をしていたからだ。

なずなと二人きりにしていた時に、何かあったのかもしれない。
幽霊同士だからこそ起こりうる意思疎通というものがあるのかもしれない。

それくらいしか、意識を失っていたはずの白亜がこういふ目をす
る理由が思い浮かばなかった。

「お願いします。白亜を助けて下さい……」

そうして深く、深く頭を下げる。

……そんなことしなくてもいいよって言っても、聞き入れてくれ
ないんだろうなあ。

この点について、みこはもはや諦めの境地だった。

「わかりました。それじゃさっそく……っていきたいんだけど、色
々と手続きとか連絡とかスケジュールの調整もしないといけないか
ら、どんなに早くても明日になるけど、いい？ もちろん、痛みは
私が預かっておきます」

「はい、それで構いません。あの、それから……」

「どうしたの？ よければ言ってみて？」

白亜は気持ちを鎮めるように、大きく息を吸いゆっくりと吐き出
した。

そして、

「白亜も鍛えて欲しいんです。生きていた時に目指していたやり方で、償いがしたいから……」

そう言っつて、白亜は再び深く頭を下げたのだつた。

それから二日後。

白亜に残っている穢れや毒といった有害なものをその身に移したみこは、浄火水槽に身を投じた。

その際、魅祓にたつぷりといじめられ、結局一日中浄火ジェルに沈められてもがき苦しむことになった。

浄化の方は二時間で済んだというのに、嗜虐しゃく的な笑みを浮かべた魅祓によつて出させてもらえなかつたのだ。

出ようとするたびに蹴落とされ、出たと思つたら投げ込まれを繰り返すことになるとは、一体誰が予想できたであろうか……。

次の日、ぐったりとしたみこの姿を見て、未那夜と白亜が二人して大泣きしたのは言うまでもない。

第29話 夕刻の襲撃者

浄火水槽から引き上げられるなり自室へと運ばれ、ベッドに横たえられたみこは途方に暮れていた。

体が動かない。

熱いとか苦しいとか痛いとか、確かにちょびつとだけ辛いけれど、そんなものはどうだってよかった。

せめて片腕でも動かせられたなら頭を撫でられるのになあ、なんて。

泣きじゃくりながらみこに縋^{すが}りついて離れない二人の少女を感じながら、そんなことを思っていた。

神経系の一部の機能が熱で麻痺しているのか、首から下を動かすための感覚がないのだ。痛みと暑さ、ベッドの感触や二人分の温度などはちゃんと知覚しているというのに。

おまけに喉も焼かれてしまって声すら出せやしないときたものだから、どうやって慰めたものかと困っている。

……何も泣かなくても……。私は平気なのに。

それだけ身を案じてくれているということなので、ありがとうと
言いたいところではある。

それでも、みことしては二人にはそんな泣き顔をして欲しくなかつた。

どうせ泣くなら、嬉し泣きがいいなあとか思っていたり。特に白
亜には笑って欲しかった。

みこが白亜の都守の巫女見習い復帰を魅^{はく}被^あに申請したこと。

それが今回の必要以上に浄火水槽へと沈められるに至った原因だから。

体はおろか指一本動かせないくせに平気も何もないだろうアホみ

じ。

翔雨^{うしゅう}が居たなら、きつとそうツッコミつつ頭を撫でてくれたんだろつなと、ちよつと逃避的な妄想を試してみる。あの幼なじみは何だかんだ言いながらも、みこの気持ち^{きもち}を汲んで接してくれる。それにどれだけ助けられていることか。

……はうう……。なんか、胸がそわそわするのは、なんでなんだろつ？

しかし実際、体はともかく頭はすつきりしているし心だつて元気なのだ。

毎回のことながら、どうして体はついてこれないのだろう。

……母様にもつと沈めててもらった方がよかつたかな？

浄化が済み、水槽から出ようとしたところをいきなり蹴落とされ、何事かと顔を上げてみればそこには『試させてもらうわねえ、みこちゃん』と言つて微笑む魅^{みほろ}被^ひがいて、これから自分が何をされるのかを悟つた時は、それはもうぞつとしたけれど。

魅^{みほろ}被^ひならば一日どころか一月は軽く漬かつていられるし、出てきてもピンピンしている。それなのに娘の自分がこれとは、なんとも情けなかつた。

と、そこまで思いを巡らせたところで、はたと気づいた。

やけに、静かだ。

視線を動かすと、視界に収まるものがあった。

……二人とも、かわいい寝顔してるなあ……。

どうやら二人とも、泣き疲れて眠ってしまったらしい。

未^{みなよ}那夜は鍛錬を終えてから来たので、身も心もぼろぼろだったは

ず。白亜だつて、一睡もせずずっと付きつきり。そんな状態で二人は見てくれていたのだから、そうなつてしまつのも無理からぬことだった。

……こんなに心配してもらえるなんて私、幸せ者だなあ。

二人の寝顔に目を細めながら、しみじみとみこは胸中で呟く。しかし、その表情を少しだけ曇らせる。

……でも、いいのかな？ 私が幸せでも。あの娘は……妹は、こんな私を許してくれるのかな？

ねえ、みさ……。

みこがすっかりダウン(?)してしまっている頃。

暑さも峠を超え、気温がゆるゆると緩慢ながらも下がりはじめた夕方。

まだまだ蒼々として明るいはずだった空は数刻前までの晴天が嘘のように、その色を不気味な紫色にしていた。

雲一つないその空に太陽の姿はなく、かといって月が出ているわけでもない。

天にある光源は紫色の空そのものらしく、妖しげな光が地上を照らしていた。

地面に異なる色の、青白い色の光輝が出現したのは、空が変貌を遂げてから間もなくのことだった。

舗装された道に不意に奔った青白い光は複雑怪奇な紋様を描き、その光を陽炎のように立ち上らせた。

まるで、紫色の空に抗うかのように。

その光輝は見る者の状況次第で、幻想的であるとも不気味であるとも思わせる不思議な雰囲気を感じていた。

青白い光が描いた紋様は、人除けと、その陣の中で起きた事象の影響をその内に封じ込める、そんな二つの効果を兼ね揃えた結界の一種。

そんな結界の中で、一風変わった得物同士が打ち合わされていた。一方は、現在の最大射程はおよそ四メートルと元の刀身の五倍ほどに及ぶ、複数個に分割された刀身を伸縮するワイヤーで繋いだ剣

蛇腹剣だった。

その変幻自在の斬撃を向かえ打つのは、こちらも風変わりな一品。刀身がその途中で六度、小枝が伸びるかのように枝分かれしていて、枝分かれした先ですぐに剣先に向かって短い刀身が伸びる不可解な形の剣。すなわち白蒼はくそうのななせ乃七枝だ。

相手の刃をことごとく弾きながら、霞翔雨かすみょうは奥歯を噛みしめた。とある事情により、いつもより少しばかりやり辛いからだ。

蛇腹剣を振るっているのは、あの日の学校に現れた銀色のローブを纏う集団の一人。

いや、そもそも一人と言っているのだろうか。

胸の膨らみや肩幅、曲線的な外見的特徴からして女性、いや、少女というべきなのだろうか。しかしながら、その身をローブに包んだそれには腰より下の肉体が存在せず、何の手品か空中に上半身のみを浮かべている。

一見すると人外としか思えない。だが、翔雨でも目視可能ということ、少なくとも幽霊ではないはずだ。

背中に流れる漆黒に、ごくありふれているはずのそれに、なぜか既視感を覚えた。

ふざけたことにピエロのお面を被っていて、素顔は不明だ。

その肉体と相まって、そいつの存在が一層不気味になっていた。鞭のように襲い来る蛇腹剣をいなし、流れるように斬り込む。すると、ピエロ面は軽く身を引いて間合いを取りながら、蛇腹剣を翔雨とは見当違いの方向に振るう。

「ッ」

短く舌打ちした翔雨は自らの刃の軌道が無理矢理変えて蛇腹剣を打ち据える。

力の方向を逸らされた蛇腹剣は大きく弧を描きながら元の長さに戻っていく。

無理に刃の軌道を変えたために体勢を崩した翔雨は、青白い光を灯した刀身から同色の衝撃波を放ち、バランスを取ると同時にピエロ面を牽制しつつ後退する。

……面倒だな。

蛇腹剣が穿つはずだった方を、僅かに視線を動かして見やる。

買った物帰りだったのだろう。投げ出された手の先に、中身をぶちまけたカバンや袋がある。

そこで気を失って倒れているのは、翔雨も知っている人物 空から 宮紗希みやさきだった。

翔雨はこの、みこにとって大切な友人を守るべく、ピエロ面と対峙しているのだった。

こうなったのは、別に翔雨が巻き込んでしまったわけではない。

みこが大黒蛇を浄化した日より、都守の家によって銀色のロープの集団について本格的に調査が開始され、魅祓の依頼により翔雨はそれに従事していた。

せりが自分を鍛えてほしいとみこに頼み込んだのは、それから数日後のことだった。

銀色のローブの集団について調べていく内にはつきりしたのは、みこを狙っていることと、その手段として魂旨を　　なずなを求めているということ。

それなのに、どうして紗希が巻き込まれているのか。本来ならば、みこは裏方に徹してこっそりとなずなを護衛するはずだった。ところが、せりから鍛錬の依頼を受けたことにより、彼女に付きつきりになってしまった。

当然、せりがいるところになずながいるわけで、目的を達成するために必要な手段が、よりにもよって敵の本拠地に、その目的と共にあるという状況に、彼らは陥ってしまったのだった。

まさかあれだけの目に遭った少女が、それでも立ち向かおうとするなどとは思ってもよらなかったのだろう。

わざわざ変な生物　　あの日、なずな以外には見えていなかった目玉に手が生えたものは、調べた結果、銀色のローブの集団によるものだった　　を寄越して監視した結果がこれとは、敵ながら哀れだった。

いや、これはむしろ、せりが胸に秘めている、なずなに対する一途な想い　　愛　　がそれだけ強いということだろう。

そうなってしまうと、直接的な手段に訴えることは難しい。

だからこそ、紗希が狙われた。巣から出てこない獲物を誘き出す餌として。

紗希はみこの親友であると同時に、なずなのかわいい後輩でもあり、せりの良き友人だ。つまり、三人全員と親密な関係を持っている。

そんな存在が単独で離れたところにいるのなら、これを狙わない手はないだろう。

だからこそ、翔雨は気が進まないながらも紗希を監視していた。

翔雨とて男だ。健全な男子高校生だ。

そんな彼が同年代の女の子を見張るといっものは、一歩間違えればただの変態行為でしかない。

それ故に、配慮しておかなければならない点が多々あり、気苦勞が絶えなかった。

それに、だ。翔雨にはすでに心に決めた人物がいるのであって、どうにも他の異性に張り付くというのは、やましいものが何もなくとも後ろめたくてしょうがない。

翔雨がもう勘弁してくれといい加減辟易してきたところに現れたのが、今まさに翔雨が対峙しているピエロ面の怪人だった。

ある意味感謝してやりたい心地ではあるが、敵は敵だ。

『ありがとう。では死んでくれ』とばかりに瞬殺してやりたいところではあつたが、そうはいかないのが現実だった。

相手だつて馬鹿ではない。当然ながら予測されていることを前提として刺客を送り込んできているはずで、そうであるのならば、このピエロ面はそれなりに力を有しているということになる。

見た目に悪ふざけを感じたからといって油断するわけにはいかない。

むしろ余計に警戒する必要があるだろう。

翔雨が監視に当たることになった理由は、もともと監視等に向いている能力を継承していることに加え、白蒼乃七枝という非常に強力な武器を有しているため、戦闘能力においても一定の水準を満たしている判断されたのだ。

つまり、可能ならば殲滅することが望ましいということ。

もちろん優先すべきは紗希の身柄であるから、無理をする必要はない。

だからといって簡単に逃がしてくれるとも思えないが。

相手の得物が得物なだけに、紗希をその射程圏外へと逃がすのは難しい。

背に庇えばかえつて危険と判断し、相手と自分との直線上には置かないようにして、双方を視界に収められるよう位置取り、試しに何度か斬り込んでみたが、今のところ傷一つ負わせられていない。

すでに第四枝の能力たる『断』 刃が辿るはずだった軌跡上の

ものを、有形無形問わず断つ力　は発動させている。しかし、手
応えもなければ、相手が断ち斬られる様子もない。
ということは、七枝ななさやの力が相殺ないし無力化されている。もしく
は、このピエロ面は七枝の力の影響を受けない存在ということだ。

……もし後者だとしたら、まずいな……。

相手の剣を捌きながら再び隙を見つけて斬りかかる。先程と同じ
光景が繰り返される。

ピエロ面は紗希に凶刃を向けるため、それを庇う必要のある翔雨
は直接斬撃を叩き込むには至らない。

こちらが力尽きるのを待っているのだろうか。

出会った時からピエロ面は蛇腹剣による物理的な攻撃を幾度とな
く繰り返してはいるものの、大して動きもしない。

見た目からして、物理的手段以外に相手には方法があるはずなの
だが、今のところそのカードを切る様子がない。

翔雨ごとき、剣のみで十分ということか。

……さて、どうするか。

このまま様子を見続けているというわけなもいかない。
攻めるか、退くか。

……退くためにも、攻めてみるしかないか。

今は何よりも、紗希を目の前の脅威から遠ざけなければならぬ。
相手を倒すに当たって、何が起こるかわからない以上、紗希をこ
こに置いたままにいるわけにはいかない。予期せぬ事態に備えて、
まずは彼女を避難させておく必要があった。

……いつまでも見切っていられるというわけでもないからな。

打って出ることになった翔雨は相手の刃を弾き返すと、おもむろに両手をだらんと下げて無防備な体勢になった。

ピエロ面がそんな隙を見逃すはずもなく、そこへ容赦なく繰り出される蛇腹剣による斬撃。

飛来する刃が翔雨の命を刈り取らんと襲いかかる。

翔雨はそれに反応することなく刃を受け入れ 霞のごとく掻き消えた。

「……………」

刃が空を切ったことにも無言のまま、ピエロ面には特に慌てた様子もなく、ただ静かに佇むのみ。

表情は面に隠されて見えないが、あまり驚いていないように思われた。

そこへ、至近に唐突に出現した翔雨が正面から襲いかかった。

刃と刃がぶつかり合う。

鏢迫り合いに持ち込もうと、翔雨は力で押していく。が、相手とてみすみす思うままにされるわけもなく、程なくして力の方向を逸らされ、刃を弾かれてしまう。その瞬間、翔雨の姿は再び霧散。

今度はピエロ面を左右から挟み込むように、“二人の翔雨”が斬りかかった。

斜め後ろへと素早く身を退いたピエロ面に、今度は真後ろからまた“別の翔雨”が横薙の一閃を振るう。

これにもぎりぎり反応したピエロ面は、振り向きながらなんと蛇腹剣でそれを受け止める。その間に先の左右からの二人の翔雨はぶつかり合い、弾け飛んで霞となり、そこからさらに“新たな翔雨”が飛び出して斬りかかった。

再び背後を取られたピエロ面は、防御は間に合わないと判断した

のか前へと進み出る。

またもや振り向きざまに蛇腹剣を、今度は紗希に向かって振るう。延伸する刃はあっという間に紗希へと迫り、しかしそれは紗希の前に現れた“また別の翔雨”によって阻まれる。

紗希を襲おうとした刃が宙を舞い、持ち主によって引き戻されていく。その過程で、“どこからともなく湧いて出た翔雨”が自らの刃を相手のそれにひっかけて絡みつかせる。

ここにきてようやく動揺するそぶりを見せ、ピエロ面が一瞬だけ硬直した、まさにその瞬間。

前後左右から四人の翔雨が同時に、横薙ぎ、袈裟掛け、逆袈裟、刺突、それぞれの攻撃を見舞った。

……
逃がさんっ！

己の得物を放棄して上空へと逃れたピエロ面に向かって、その真上から本物の翔雨が刃を振り下ろした。

天を仰ぎ、驚愕に息を呑むピエロ面。身を守るための刃はその手になく、身かわす猶予も残されてはいない。

「斬　　！」

直接命中した刃は青白い光を一際強く輝かせ、強烈に、けれど風鈴のような澄んだ音色を響かせながらピエロ面の面を切り裂き、そのままそいつを頭から縦に一刀両断した。
真っ二つに裂けたピエロ面だったものを、翔雨は注意深く見守った。

これで倒すことができているのなら、それはそれでかまわない。
だ　　。

……おかしい。あっさりし過ぎている。この程度のはずが……。

断ち割ったはずの面も、まだそいつの顔に張り付いたまま。血を撒き散らすわけでも、内臓をぶちまけるわけでもなく、消滅するでもない、ピエロ面の残骸。

下半身の部位はやはり見当たらず、上半身だけが転がっている。翔雨が警戒すること、およそ数分。

早く紗希を今よりは安全な場所へと退避させたいところではあったが、目の前に転がるその存在がそれを許してはくれなかった。

……なんだ、この威圧感……。これはまるで、あいつの……。

翔雨は我知らずの内に身構えていたことに気づいた。

カタカタとピエロ面が揺れ始めたのは、そんな時だった。

面が顔から剥がれて路に落ち、からんと空き缶が転がるような軽い音を立てた。

「なっ！」

面の下に隠されていた半分だけの顔を見た翔雨は、心臓を鷲掴みにされたような錯覚を覚えた。

知っている。その顔を知っている。忘れようもない、忘れられるはずがない、その顔は。

にいつと、半分ずつの顔がそれぞれの唇の端を吊り上げて笑った。

「霞の葬剣そつけんが一つ、霞幻かげん……。びっくりしちゃったよ。前は二人までしか増えなかったのに、今は何人まで増やせるの？」

聞き覚えのあり過ぎる声。いつも聞いている声。いや、いつか聞いている声。翔雨の中で、ある少女の記憶が次々と掘り起こされていく。

「そんな、馬鹿な……あの娘は、お前は……」

声が震えるのを抑えられなかった。唇が戦慄わななき、それだけを口に
するのにさえ苦勞した。

「ふふつ、嬉しいなあ、私。二年の内に、ううん、“何年かけたか
なんて、わからない”よね。でも、随分と強くなっただね、翔雨
さん」

二分された顔で心底嬉しそうに笑ったそいつの、“翔雨もよく知
っている少女”の顔をしたそいつの縦二つに裂けた体がお互いに
引かれ合い接合していく。まるで、斬られたことなどなかったかの
ように、元通りの姿を取り戻す。

放棄され、路に転がっていたはずの蛇腹剣は、いつの間にか主の
手元に戻り、その色を紫に変色させていた。

同色の煙のようなものを立ち昇らせるそれは、尋常の代物ではな
いことが明らかだった。妖剣か、魔剣か。それとも、聖剣か神剣の
類か。

「これなら、少しは期待してもいいよね？」

そう言っつて刃を構えた少女　みさは、不敵に微笑んだ。

暑さとは別の要因から生じた汗が、翔雨の頬を伝い……落ちた。

それが、始まりの合図だった。

第30話 彼女の伝言

1

ヒュン、というような空気を鋭く裂く音色が響いたと認識したのは、間近に迫った刃を弾いてからだだった。

引き戻されていく刃を見送りながら、翔雨は背中に冷たい汗が流れるのを自覚した。

みさがいつその刃を振るったのか、手元の動きを捉えることさえかなわなかった。

……速い上に、重いとくるか。

たったの一撃。その軌道を逸らしただけで、手が痺れを訴えていた。

そんな一撃を防ぐことができたのは、その刃が誰かさんそっくりな太刀筋をしていたことに加え、その動きには大幅な制限がかかっていたことによる。

地面を除いた、周囲にある物に気を使っているとしたか思えない、建造物に一切触れないという制限が。

家や電柱といった物が斬れない、などということはあるまい。あの刃に宿る力をもつてすれば、建ち並ぶ家々など豆腐のようにスパッと切り裂いてしまうことだろう。

伸縮自在の蛇腹剣という変わった得物でありながら、その伸長する刃でもって通常の刀が如き太刀筋、それもいくら血を分けた姉妹とはいえ別人の太刀筋を再現してみせるとは、一体彼女の身に何があつたのか。

そもそも、今翔雨が相對しているのは本当にみさなのか。

みさは実の姉の　みこの手によって殺されたと、みこからも自分が殺めたと伝え聞いている。

なら、目の前にいるこいつは、みさの姿をしているこいつは何者だというのか。みさの名を騙り、みさの声で話し、みさの記憶もおそらくは持つであろうこいつは、やはりみさなのか。死者が生き返ったとでもいうのか。

確かに、みさの遺体は未だに見つかっていないため、生きていたという可能性もある。

だが、みこが嘘をつくなど、翔雨にはどうしても思えなかった。くだいようだが彼女は確かに言ったのだ。泣きじゃくりながら、みさは死んだと。

「あーっ！　翔雨さんまたお姉ちゃんのこと考えてるでしょー！」

身構えはするものの自分からは動こうとしない翔雨を、どこかむっとした子供っぽい顔で見つめていたみさが、風船のように頬を膨らませた。

そんな愛くるしい表情を見ても、今の翔雨には苦笑を浮かべる余裕すらなかった。

気を抜けば、一瞬で命を落とすことになる。
無反応な翔雨に肩を竦めたみさは、

「ま、いいけどね。ねえ、翔雨さん。翔雨さんが本気でこないなら……」

続きは、耳元で囁かれた。

「ほんとに死ぬよ？」

「っ！」

翔雨の胸を、凶刃が貫いた。
直後、翔雨の体が霞のごとく霧散した。
しんと静まり返る戦場に翔雨の姿は最早なく。

「……あーあ、逃げられちゃった」

刃りを見回し、紗希の姿さえ見当たらないことを確認したみさは、
全く残念そうには見えない様子でそう呟いた。

なぜなら。

不意に、みさは唇の端を吊り上げ、にいつと笑みの形を作った。
仕掛けておいた罠にお目当ての獲物がかかって歓喜する獣のよう
な、獰猛な笑み。

「だと思った」

漣なみのみから濁音を濾過ろかしたような涼しげで鮮やかな音色を奏でながら、
伸縮自在の刃が踊る。

それは、真上から奇襲を仕掛けようとしていた翔雨を正確に捉え
た。

「くっ！」

実体を形成しようとしていた矢先、すぐに霞へと変じることが叶
わぬ翔雨はそれを七枝ななさやの刃で受けるしかない。

そこに蛇腹の剣が蔓つるのように絡みつき、みさによって恐ろしいほ
どの力で引き寄せられる。

見た目に反した臂力じりきりは、みこで慣れている翔雨の予想を遙かに上
回っていた。

このまま地面に叩きつけるつもりなのか、それとも武器を奪い取

るためなのか、あるいはその両方。判断は一瞬。

「戻れ」

翔雨の声に応じたのか、はくそうのななや白蒼乃七枝が手品のようにその姿を変えた。

掌に乗る程度の小さなキーホルダーのような状態へと。

蛇腹の剣の拘束から逃れて宙を彷徨い始めたそれを素早くキャッチし、獲物を失った刃が次の軌道を描くより先、引き寄せられていた時の勢いそのまま、みさへと突っ込んだ。

「ハッ」

霞へと身を変える間もなく、翔雨は立ち尽くすみさの隣に身を屈めた低い姿勢で降り立つなり、体を反転させて鋭い呼気と共に足払いを仕掛ける。

ピエロの面を被っていた時のとは異なり、確かにそこには足が存在している。はずだった。

みさが笑う。クスクス、クスクスと。込み上げてくる笑いを堪えるように。

「!?」

翔雨は本日何度目かの驚愕に思わず目を見開く。

一切の感触がない。いや、違う。足をすり抜けた。

驚愕はそれとして、それでも動きを止めることなく弾かれたように飛んで距離を取り、しゃがんだ姿勢のまま再び白蒼乃七枝を顕現させようとキーホルダーを持つ手を軽く振ろうとして、固まった。

視界に捉えていたはずのみさの姿が瞬時にかき消えている。だか

ら固まった。無論そういうわけではない。
なぜなら。

「つーかまーえったっ！」

耳元で聞こえたそれは本当に楽しそうだった。
首筋にかかる吐息。後ろから胸に回された華奢な腕。
背中に感じる柔らかな感触と僅かな重量。

「忘れたの？ 翔雨さんからじゃあ、“幽霊”の私には触れられないんだよ？」

背後から、みさが抱きついていていた。

「くっ……」

振り返ることさえできない。

そもそも、認識さえできなかった。

はつきりとわかつているのは、この少女がこちらに合わせて手加減していたということ。

もし、もしもみこが襲われでもすれば、力を制限されている今の彼女ではまずいかもしれない。まして、相手は肉親。みさが敵陣営にいるのであれば、みこにとって酷なことになる。

できるのなら、どんな手を使ってでもここで……。そんな思いを胸に、翔雨はあえて問うた。

「本当に、みさ、なのか……？」

どの道することは一つなのにこんなことを訊いてしまうあたり、自分にも相当に躊躇いがあるのだなと、内心の苦笑を押し隠す。

……恨まれるかもしれないが、それでも……それでもあいつにも
う一度あんな思いをさせるのだけは、ごめんだ。

「むう、その様子だと絶対お姉ちゃんのこと考えてる。わかるんだ
からね、そういうの。まあ、それはそれとして、生者とか死者とか
お構いなしに一方的な干渉ができるのって、この世界にはそんな
いないと思うんだけどなあ」

肯定するわけでも、否定するわけでもない物言い。

見た目も声も同一で、その特異性質さえも備えているとなると、
翔雨は彼女の存在を偽物と否定する材料を持ち合わせてはいなかつ
た。

現にみさは、幽霊に直接触れることも、そもそも視認することも
できないはずの翔雨の目に映り、触れている。

「ふふつ、納得してくれた？」

「さあな」

迷いはないと言えはうそになる。しかし、ここではっきりと肯定
されなかったことが、少しだけ気休めになる。

「むー、何よその反応。まあいいや。あつ、そうそう、私は別に翔
雨さんをどうこうしようだなんて、思っ
てないから安心してね」

耳元の甘い囁き。おそらく本気で言っているのだろう。

彼女からすれば、ちよつとじゃれてみたといったところか。

本来ならば、とっくにこちらが始末されているだろうから。

それだけ、舐められているということでもある。それが、命取り

だ。

翔雨は意を決した。

「それが刃を向けた奴の言うことか？」

感情を殺した、平坦な呟き。

「うあ？」

背中 of 柔らかな感触とともに、呻く声が離れていく。

みさはよろよろと数歩後退し、自らの胸から背中へと突き抜ける白蒼乃七枝と翔雨の顔を不思議そうに見比べながら、

「……………？」

平然と首を傾げた。

ややあつて、合点がいったとばかりにほんと手を打つ。

「そっか、持つ向きを反対にして顕現けんげんさせたんだねー」

まるで苦しむ様子も何もなく、全く効いていないとしか思えないみさの様子に、

……………馬鹿な……………！

逆手に持った七枝を引き抜くこともできず、翔雨は言葉なくただ呆然とみさの声を聞いているしかなかった。

「んしょっと」

刃の先から何かが抜けていくのがわかった。
確かめるまでもなく、みさの体だ。

翔雨は恐る恐る振り返えろうとして、頭を掴まれた。

「あー、今振り向いちゃだめ。結構グロいよ?」

そのまま強引に振り向こうとしていた顔の向きを戻される。

一体、みさはどういふつもりなのだろうか。

「よし、もう大丈夫。ちょっと血塗れかもしれないけど、それは許してね?」

言い終えるや、頭を押さえていた手が離される。

振り返った翔雨が目にしたのは、今しがたあつたであろう傷からの出血に塗れて^{まみ}はいはいるものの、傷一つないみさの姿だった。

「翔雨さん、忘れちゃいけないよ。私、お姉ちゃんの妹なんだよ?
そう簡単に殺せるわけじゃないじゃん。まして、今の私は……んぐ!」

穏やかに微笑みながら嬉しそうに告げるみさが、突然口元を押さえて黙り込んだ。

喉を何度もこくこくと動かし、まるで何かを呑みこむような仕草をししばらく行った後、その間は息ができなかったのか、少しばかりはあはあと酸素を求めて喘^{あえ}いだ。

白蒼乃七枝に貫かれてなお平然としていた彼女らしからぬ反応だ。

「……みさちゃん?」

あまりにも不自然な様子に、翔雨は思わずみさを呼んでいた。昔のよつに。

……彼女の中に、何か“いる”のか……？

まだ多少は息苦しそうにしているものの、その瞬間みさが口元を弛めて笑ったのを、疑問を抱きながらも翔雨は見逃さなかった。

「ははっ、嬉しいなあ。やっと、やっと名前を呼んでくれたね……。だけど、もう時間切れみたい」

みさがそう言う間に、その笑みを寂しげなものに変えた彼女の体が薄れ始めて……。

「何だ、何を言っている。時間切れとはどういうことだ？」

「お姉ちゃんに伝えて。近いうちに会いに行くって。そして、私を……して……」

翔雨の問いかけに答えることなく、ただ言伝を残して 消えた。

「……退いた、か……」

翔雨に様々なわだかまりを残して、みさは去って行った。

……考えるのは後だな。まずは退避隠蔽しておいた空宮さんを彼女の家に運んで、戻って魅祓さんに報告してからだ。

前者の行為に気を重くしながらも、翔雨はその場を後にした。

家にいる者は皆、もう出かけるなり眠るなりしただろうか。

……そろそろ動けるはずなんだけど……。

みこが自分の体の微妙な感覚の差異を感じ取ったのは、もう夜更けになってからだった。

聞こえるものといえば、屋敷周辺の森林に住まう生き物たちの息吹が遠くに感じられる程度のもので、至っていつも通りの静かな夜だった。

未^{みなよ}那^な夜^よも白^{はく}亜^あも、せりもなずなも、この屋敷で眠る皆も、ちゃんと安眠できているだろうか。

今日もどこかで夜更けに仕事をしている同僚の巫女たちは、皆無事でいるだろうか。

そんな願いや心配を胸に秘めつつ、みこは自分の体が動くかどうか、手を開いたり閉じたりできるかどうかといったことよって確かめていた。

「んっ……」

予想通り全身に感覚が戻ってきていることを確認し終わると、依然として自らを蝕^{むしば}んでいる身を焦がすような熱さと痛みを堪えながら、誰も見ていないのをいいことに、おっかなびっくり体を起こした。

より大きな痛みを我慢できるからといって、それより弱い痛みを感じなくなるというわけではないのだ。痛みが少ないにこしたことはない。

そおっとそおっと、動けるようになったからといって、調子に乗って動けば鋭さと激しさを増すであろう痛みに怯えるかのごとく慎

重に身を起こす様は、とても他人に見せられたものではない。

というか、厳しい厳しい母に見つかろうものならば、きつーいつらーいお仕置きが待っていることだろう。いずれは都守の家を継ぎ、巫女の長となる本家の長女ともあるう者が、これしきの苦痛を平然と受け入れられないようかどうか。

凄惨な拷問とも言える鍛錬に耐える幼き後輩達に、また、止まることなくエスカレートするそれを続けながら仕事をこなしている年下の同僚や先輩巫女達に、示しがつかないでしょうと。それを言われてしまうと確かにそうなのだが……。

……今は誰にも見られたりしてないから問題ない……よね……？

そんな風に、ちよっぴり甘いことを考えてみる。

「みーこーちゃん？」

やっぱり甘い考えだった。思った次の瞬間には、この状況で最悪の相手に見つかってしまったのだから。

そのいやに優しい声があった瞬間、中途半端に身を起こした地味に辛い体制で一塊の氷像となった。声色が優しいから余計に怖い。

その声は他の誰のものでもなく、母の魅^{みほ}祓^{はらい}だった。

「か、かかつ、母様、どういったご用件でしょうか？」

やたらと噛みながら訊ねつつ、ぎこちなく首を部屋の扉へと向けると、僅かに開いた隙間からこちらを静かに見つめる視線があった。まずい見られてたどろしよ何されるんだろう怖い嫌い嫌だ嫌だ、なんてことをみこは割と本気で思った。

「こっそり様子を見に來ただけのつもりだったのだけれど……。今

のはどういつつもりなのかしら、ねえ？」

にっこりと、いつものような笑顔で問いかけられ、

「え、えーっと、これは、そのう、はは、ははは……」

何を言おうとしてもしどろもどろになるのは明白だったので、笑って誤魔化せないかなーなんて、

「あらあら、そうなのみこちゃん。笑って誤魔化そうだなんで、そんなにお仕置きされたいのねえ」

思ったけれど当然そんなことが通用するはずもなく、

「ひいひい、ごめんなさいごめんなさい」

みこは自分の体の状態も忘れ、ベッドの上で姿勢を正すなり土下座した。

そうしてから、実感として遅れてやって来た痛みなどに苛まれる。突発的に動いたがため、その痛みの激しさたるや、体の中に十分に熱せられた火かき棒を抉りこまされてぐちゅぐちゅとかき回されているような気分だった。

だが、たとえそれがどんなに辛くとも、この苦痛を表に出そうものなら、こんなものとは比較にならない思いをしなければならぬ事態に陥りそうなので、絶対にしない。

どうせもうしばらくすれば治まるというのに、わざわざ苦しみを長引かせるような真似をすることもないだろう。ある意味では鍛錬になるとはいえ、できれば避けたいというのが本音というものだった。

そうしている間に魅祓はみこのベッドにまで近づくと、その頭に

手を伸ばしてゆっくりと撫でた。

「冗談ですよ。安心なさいな。今この場にいるのは私とみこちゃんだだけ。他の人にはしばらく近づかないように伝えてあります。だから、ね、顔を上げなさいな」

促され、みこは内心ビクつきながら徐々に面を上げていく。

元の正座姿勢に戻ったところで、

「あつ……」

頬にキスされた。

次いで、緩い抱擁を受ける。

「母様……」

嬉しかった。不意を衝かれたせいもあって、目の端に涙が浮かんでしまった。

「ほらほら、正座なんてしないで楽になさい。まだ辛いのでしょ
う？ 今夜は、といつてもあと二、三時間くらいしかかないけれど、
無理に我慢しないで普通にしている構いません。そのために人払いをしたのだし」

一旦抱擁を解くと、魅祓は隣に腰かけた。

促されるまま、ぺたんと座りこんだみこの頭に再び魅祓の手が伸びてきて、下手な刺激を加えて痛みを与えてしまわないよう細心の注意を払った繊細な手つきで、再び撫でられる。

僅かに痛みが増したが、その増えた分の痛みを上回る心地よさが到来し、みこは気持ち良さそうに目を細めた。

「ほう……。でも、ほんとにいいの？ やっぱり何か条件とか、裏があるんじゃない？」

みこの頭をそつと撫でるついで、やや乱れているその髪を、手櫛でできる限り丁寧に整えながら、「私のせいとはいえ、ずいぶん疑り深くなったわねえ」と、気持ちよさそうに頭を撫でられつつも警戒を怠らない愛娘に、魅祓は内心で呟きながら苦笑を浮かべた。

「うーん、そうねえ。無い、と言ってあげたいけれど、全くそうじゃないというわけでもないの。実は、みこちゃんに伝えないといけないことがあるのだけれど、その……内容がね、みこちゃんにとって喜ばしいものとは言い難いのよ……」

いつになく言い淀む魅祓は、話すべきか迷っているような印象だった。視線にも明らかに気遣わしげな色が混ざっており、そんな様子に不穏な気配を感じ取ったみこは、どこか息苦しさを覚えた。

胸がざわついて仕方がない。まだどんな内容なのかわからないのに、既に落ち着いていられない感覚だった。きつと碌ろくな話じゃないんだらうなあと思いつつも、そのざわざわとする気持ちを押し殺して、みこは口を開く。

「要するに、悪い知らせがあるってことだね。それも、普通の女の子として聞かせるってことは、本家の巫女としての立場で聞かせるには、つまりその話に耐えろというのは、あまりにも酷だって母様が判断するくらいの」

話している内に、みこの表情は魅祓が怪訝に思ってしまうほど、穏やかなものになっていく。

落ち着かない不安気な様子は次第に鳴りを潜めていき、少女へと

戻りつつあったみこの心は、都守の巫女としてのものへと切り替わる。

「みこ……ちゃん……？」

この母にしては珍しく、娘の様子に戸惑っているようだった。ということは、よもやこんな態度をみこが取るとは全く予想していなかったわけで。

……うう……私ってそんなに頼りないのかなあ。

なんて、母の様子にちよっぴり落ち込んでいたり。

だからといって、みこはそんな素振りを欠片も見せることなく顔には強気な笑みを浮かべ、

「母様、私は大丈夫だから。そういう情けや容赦は私のためにならないって、お祖母様がいつも言ってるじゃない」

本当は数時間でも普通の女の子（DMなため、ある意味で普通とは言い難いが）でいられるのであればそうしてたいくせに、あえて強がってみせた。

妹を失って以来、みこはこういった強がり続けている。

自分がまだまだ弱いのは百も承知だが、だからといって逃げるわけにはいかない。そんなことをしたら、弱いままだから。強くなれないから。

もう妹を失った時のような、守れない悔しさや、自分の力不足で大事なものを失う悲しさは、二度と味わいたくない。

だから、みこは多少無理をしても、強がって立ち向かう。それが、妹や母に対してできる一つの償いの形だと信じて。

そう、これは償いでもある。

妹は元より、当時の魅祓はみこ以上に悲しんでいたのに、そんな母を支えようとするとするどころか、そんなことにも気づかず^{ふいふ}に鬱ぎ込んで、傷口に塩を塗る^ぬようなことをしてしまったのだから。

「母様、話してくれるよね？」

その辺りの娘の心情など、実はとっくにお見通しな魅祓は躊躇わざるを得なかった。

「みこちゃん、あのね……………」

何か言おうとして、魅祓は声を詰まらせた。

「母様？ どうしたの？」

魅祓が何か言いたげに口を開くもそれを閉ざしてしまったので、みこは首を傾げた。

心配そうに見つめるみこの視線の先で、魅祓は思考の海に沈んでいたのだ。

いつそのこと、みこには知らせず内密に処理してしまおうか。そんな考えが、魅祓の脳裏に再来していた。再来というのは、ここに来るまで何度もそう考えていたから。二人の娘に、余計な辛い想いをさせたくない。

そう思っ^て何が悪い。ただでさえ、この家に生まれた者の宿命として、非道な仕打ちを受け入れなければならないというのに。

しかし、内密に処理することが許されないことも、魅祓には分かり切っていた。本日の夜 日付で言えばもはや昨日と言うべきか

の彼からの報告通りならば、彼女は言ったのだ。

みこに宛^あてた伝言として、『近い内に会いに行く』と。

だとすれば、姉妹は必ず出会っ^たらう。

みさの気持ちだつて、汲まなければならぬ。

そう、話すべき内容は他でもない、まさにみこの妹　みさに関する事なのだった。それも、みこに知らせるには残酷すぎる内容だ。実の妹に、『して』と願われるという……。

そうとは知らずに、みこは無理にでも笑顔を見せている。

愛おしくて、抱きしめてあげたかった。しかし、そんなことをすれば、あえて欲求を飲み込んだであろうみこの気持ちを踏みにじることになってしまう。

となると、今魅祓にできることは一つだった。

これも、初めから分かり切っていた。

それでも、悩まずにはいられない時があるという、これはそういうものだった。

「……そう、そうよね」

魅祓がようやく二の句を継いでくれたのは、数分経ってからだった。

「ふえ……?」

それでもみこにはちんぷんかんぷんだったので、困惑してしまう。

「ごめんなさいね、待たせちゃって。お母さんらしくなかったわね」

「え、いや、うん、それはいいんだけど」

まだ戸惑い抜け切らぬみこに対して、その原因たる当の本人は、

「ふふっ、ありがとう、みこちゃん。お母さん、みこちゃんのこと

信じてるから」

なんてことを、まるで心の中の霧が晴れたかのような、どこかすっきりした清々しさを感じさせる雰囲気でもって、

「……わ、わかってるもん、そんなこと」

面と向かって真顔で言うものだから、みこはつい照れてしまった。ちよっぴり頬が赤くなっているのはご愛嬌だ。

……やった！

「……やった！」

胸の内で上げたはずの歓声を、現実でも微かな小声とはいえ口にしてしまう程、喜び隠し切れぬみこに、

「まあまあ、これしきで赤くなっちゃって、可愛いんだから」

今だけはいつも通りの厳しさを孕む^{はら}それとは違う、純粋な微笑みを送る。

立ち向かおうとする娘へのエールとして。

「そっ、それより早く何の話なのか教えてよ」

「ええ、そうしましょうか。話というのはね」

夜は静かに更けていき、やがて朝へと表情を変えていく。

運命の歯車は誰にも知られず、音もなく回り続ける。ただ一人を除いて……。

第31話 狙われた少女は……

カーテンの隙間から差し込む日の光の眩しさで、からみせ空宮紗希は目を覚ました。

「ん……」

瞼を擦りながら、

「……暑い」

肌にまとわりつくような熱気に顔をしかめつつ、まだすっきりしない頭でぼんやりと考える。

……あれ、ここは……？

目だけを動かして状況を確認する。

視界にあるのは見慣れた光景。

壁に掛けられた制服。勉強机の上に置かれているのは、密かに思いを寄せている相手にして親友、みことのツーショットを飾る写真立て。勉強机の隣にあるのはPCデスクとデスクトップパソコン。

クローゼットには普段着等の他、憧れの先輩であったはずなの死後しばらくして辞めた、バレエで使っていた物なども収納されていることだろう。眩しさを堪えて窓に目をやれば、淡い桃色のカーテンがあり、はたまた視線を部屋の中央に向ければ、本来の用途の他に開脚等の柔軟で散々足の下敷きにしてきたクッションが二つ転がっている。

なんていうことはない、考えるまでもなく自分の部屋だった。

……待つて、これはどういうこと？

一秒毎に覚醒していく頭が重大な欠損に気がつく。

昨日　もしかしたら数日前かもしれないが　の買い物に行つてからの記憶がない。

それなのに、気がついたら自室のベッドで寝ていた。いつ着替えたのか、外出したとき着ていたはずの服ではなく、いつも寝間着として着ているシャツとショートパンツ姿だった。

「どうして……」

外出当時、両親は仕事で最低でも数日は留守にすると出て出かけていった。

家にいるのは一人娘の自分だけ。

何事もなかったが故、今までは対して恐怖を感じなかった家に一人という状況が急に恐ろしく思えてきて、暑いと知りつつもシーツを頭から被った。

一体自分の身に何が起こったのか。

考えただけで恐ろしかった。暑苦しい状況なのに寒気がした。

なによりも紗希を怖がらせたのは、自分の知らない間に、何者かによつて着替えさせられたということ。

下着姿を見られただけならまだしも、裸にされていたり、それ以上のことをやられていたら……。

こんなことは、今まで一度だつてなかった。

割と最近の出来事の中に似たような経験があるけれど、その時はみこがいたから同じようでも別物だ。

そう、異常な出来事が起きたときは常にみこが絡んでいた。そんな時は必ずみこが付きつきりできてくれた。

紗希の身に何が起こったのかや何をされたのかを、きちんと説明してくれたいし、ちゃんと慰めてもくれた。それまでの緊張から解放

され、恐怖を拭い去りたかつた紗希は、みこに目一杯甘えてしまったのに、彼女は嫌な顔一つせず受け入れてくれたのだ。だから昨日までは、まだ完全には言えないまでも、これまで通りの暮らしに心身ともに戻っていたというのに……。異常な出来事が発生したのにも拘わらず、みこがいない。

「怖い……怖いよ、みこ……」

無性に会いたくなくなった。慰めて欲しかった。

みこに会えば安心できると、そう確信した。

居ても立ってもいられなくなって、紗希はベッドから出るとさっさと着替えようとして……。

「みこに会っただし、ちゃんと磨いとかないとね」

その前にシャワーを浴びることにした紗希であった。

どうせ道すがら、汗をしこたまかくことになるのだけれど。

……なぜかみこの汗は、とてもいい香りがするのよね……。あれはどっついつことなんだろう……？

みこに訊いても元々こんなだよとしか答えてくれないし。

不思議よねえと首を傾げながら部屋を出ようとして、ふと勉強机の上にはやはり覚えのない物があることに気がついた。

「これは……書き置き？」

飾りつ気のない質素な感じのする便箋には、こう書かれていた。

「空宮紗希様へ。お目覚めになられましたでしょうか？ 大変驚いているものと存じますが、既に危難は去りましたので、どうか安心くださいませ。誠に恐縮ですが、体の洗浄及びお着替えの方をさせていただきました。当方で精査したところ、軽い擦り傷が数カ所程度見受けられましたので、勝手ながら治療もさせていただきました。その他に怪我はないようです。お目覚めになられるころには、すべて完治しているものと思われます。何かご不明の点がございましたら、下記までご連絡下さい。

都守神社巫女スタッフ派遣サービス
者件依頼者 都守みこ

本件責任

追記

みこ様より伝言を預かっております

紗希へ

できることなら、紗希がこの手紙を目にしなくて済みますように。もし、もしも読むことになったのなら。

紗希はきつと、とても怖い思いをしたんだと思います。

私が助けにいけなくてごめんなさい。

治療とか着替えとかも、気がついたときには済んでるかもしれない。特に着替えについては、色々と不安だとおもいます。

でも、安心して下さい。それらの処置を施すのは、紗希も知っている私の従姉妹の末那夜ちゃんです。

だから、変なことをされていることはないと思います。

もしこの手紙を読むことになってしまったなら、連絡して下さい。

それと、もしよければ家に来て下さい。

本当は私がそっちに行くのが筋なのですが、今は長い間家を空けるわけにはいきません。ですが迎えに行くことはできるかと思いません。

だから、その……ひ、一つだけなら、何でも要望に応えますので、それで許してください。

あ、だからって数を増やそうとするのはなしだからね！

え、えと、とにかく、連絡お待ちしています！ みこより』

紗希は言葉なく立ち尽くした。

……無理しちゃって。ほんと、どうしてみこってこつなのかしら。なんでみこが謝るのよ……。

それに、何でも要望に応えるって。そんなこと言われたら、甘えちゃうじゃない……。

紗希はおもむろに携帯をひっ掴むと日付を確認し、

「よかった、昨日の今日みたい」

気を失っていた期間が昨日だけであることにほっとしたのも束の間、ある番号をコールした。

数コールしない内に相手が出た。

まるで、かかってくることを知っていたかのような早さだ。

「あ、もしもし紗希？ おっはよー！ 大丈夫だった？ 気分はどう？ 手紙見てくれたー？」

電話越しなので少し変に聞こえるけれど、それでも好きな人の声であることに違いないわけで。

その声を耳にした途端、紗希は自然と頬が緩むのを自覚した。わざとらしいほど底抜けに明るい声だった。

実際にその通りなんだろうかと、紗希は思った。

元氣付けようとか、そんなことを考えているに違いない。

「おはよう、みこ。手紙は見たよ。でもあんまり気分がよくないから、そっちに行ってもいい？」

「うん！ いつでもいいよ。道中危ないので、時間教えてくれさえすれば、すぐに迎えに行っちゃいます！ ついでに泊まってく？ 紗希、今は一人なんでしょ？」

「ん……みこがいいなら、お言葉に甘えちゃう」

「オツケー、決まりだねっ！ あ、そうだ。ご飯のことなんだけどさ、お昼と夜のリクエストはあるかな？ 何でもこいだよ！ 私、紗希のために頑張っちゃうんだから！」

紗希のためにと聞いた途端、胸がドキリとした。

体の熱さとともに込み上げてくるのは、紛れもない喜びだった。

紗希は喜びのあまり、興奮を抑えきれなかった。

だからだろうか。

「そうねえ。夜は久しぶりに、みこ特製のハンバーグが食べたいな。胸でこねてくれてもいいのよ？」

なんていう、普段ならば恥ずかしくて口にできないようなことを、半ば以上に本気で口走ってしまったのは。

普通そんなことを言われれば気を悪くしてしまいそうなものなのだが、

「ふふっ、それじゃあそうさせてもらいます」

みこはむしろ嬉しそうだった。

「いやー、実はメニューに困ってたんだよねえ。助かります」

嬉しそうな理由はどうやらそれらしい。

『胸で』のくだりに触れていないのはまさか、本当にそうしてくれるつもりなのだろうか。

「あのね、みこ。自分で言うておいてなんだけど、ほんとに胸でこねるの？」

紗希は、よもや学校でのあの噂 かすみ 霞に渡されるお弁当に時々入っているハンバーグは、手ごねではなく乳ごねらしい が事実であるとは思っていなかった。だからこそ、思い切って言うてみた。欲望丸出しで。勢いつて怖い。

何度かみこと一緒に料理をしたことはあるし、作っている姿を眺めていたこともあるけれど、そんな変態的な調理方法を取るような素振りにはなかったのだ。

というか、そんな娘であって欲しくない。でももしそうだったらそれはそれで受け入れないとね好きなんだしとかなんとか考えてみる。

要は、みこがみこならそれでいいのだ。

「え、紗希の分はそうするつもりだけど……？」

きよとんとしていた様が目に浮かぶような、心から不思議そうに思っている声だった。

どうやら本気らしいみこの態度から、噂は真実だということが窺い知りえた。

「いや、そのね。自分で言っておいてこんなこと言うのも変なんだけどさ、それってどうなの？」

「どつって……」

「普通に考えて、胸でなんてこねないでしょ」

「うん、確かにそうなんだけどね、手でやるより胸でやった方が愛情一杯にならないかなあって思って。やっぱり変かな？ っていうか引いちちゃった……？」

「変ね。ついでに言えば変態ね。でも引いてはいないわ」

「そ、即答ですか。しかも変態って断言されたあ……」

引かれてないことがせめてもの救いだよう、うう。

携帯の向こうから、ほっとしたような、小さな啖きが漏れ聞こえた。

……聞こえてるわよ、みこ。

変なことをする割に、結構相手の反応を気にしているらしい。

だったらしなければいいのに、と紗希は思ったのだが、同時にこ
うも思う。気にしながらも、それをあえてするところがまたかわい
い、と。

そんな変態的な奇行 割と散々な言い分である すら、みこ
の場合は魅力になる。

思いつ切り身内鼻頂だけど、この場合はそれでいい。さすがに親
しい相手にしかないだろう。

「えつと、一応確認するけど、胸でこねたりしちゃったのは食べた
くない？」

「食べたいな。みこが作ってくれるんだもの、食べたくないわけが
ないじゃない」

……というかみこ食べたい（性的な意味で）。

なんて、とても口にできたものではないセリフが胸中では続いて
いた。

「よかったあ。それじゃあ、紗希の準備ができたらもう一回連絡し
てくれる？ 護衛も兼ねて、私が迎えに行くから」

「それはありがたいんだけど……」

こんなときだ。一人で出歩くのは心細かった。
だからみこの申し出はまさに望むところなのだが……。

「やっぱり巫女服なの？」

「え、そうだよ？」

当然のように肯定したみこは、何か問題でもあるのかとばかりに
語尾に疑問符を付けた。

巫女としての仕事に行くならまだしも、護衛も兼ねているとはい
え、友人の家に向かうときでさえ巫女服 仕事着 というのは
どうなのだろう。確かに仕事と言えばそうなのかもしれないけれど。
よもや自分を狙ったのが、みこくらいの力がなければどうに

もならない相手だということ、紗希が知るはずもなく。まして、みこが普段の仕事で着ている巫女服は、着用者の身を守るべく、大量の術式などにより強化された一種の鎧のようなものでもあることなど、知る由もない。

そのため、

「そう、なんだ……」

……みこの私服姿を拝める数少ない機会なのに。

紗希は少し残念に思う。

「あー、その、ごめんね、紗希。まだまだ用事もあるから、着替えるわけにもいなくて」

そんな紗希の胸中を察して、みこは心底申し訳なさそうに釈明した。

「うっん。こっちこそ、無理言っでごめん。みこは忙しいのにな……」

「ほんとにごめんね。それじゃあ、また後で」

「ええ、また後で連絡するわ」

通話を終え、紗希は名残惜しげに携帯を眺めた後、せつせとお泊まりの準備を始めたのだった。

第32話 行先

紗希紗希との通話の後、みこは二人を　せりとなずなを自室へ招いていた。

紗希のことはもう説明済みで、今はもう一つの件について切り出したところだった。

即ち、凍てし雪原しゅうねつと焦熱の洞窟、及び常闇とこやみの湖という三つの鍛錬場所を、どこから利用するのかということだ。

「え、この三つから選ぶの?」

戸惑うような声を上げたのはなずなだ。ちょっと嫌そうにしているのは、気のせいではないだろう。

みこととしては、気持ちはわからないわけではないので、咎とがめるようなことはしない。

なずなの長いポニーテールがいろんなものを軽く無視して、はてなの形を取っている。

果てしなく無駄な方向に行っている気がしなくてもないが、自身の霊体の扱いは日々順調に上達しているようだ。

「どれからするのか、悩みどころね。暑いのか、寒いのか。それとも、暗いのか。ところでみこ、一ついいかしら?」

そんななずなの懐で、後ろから包み込むように抱かれているせりは、真剣な顔で考えていた。

当然のごとく、体の前に回されたなずなの手に自らのそれを優しく重ねている。

「何なりとどござ?」

せりに応じたみこは、そんな二人の様子にもすっかり慣れてしまい、呼び出した当初から二人がその体勢であることにも特に何かを思うことなく、むしろ自然なこととして受け入れていた。

「暑い寒いはなすなも感じてしまうようだからいいとして、問題があるのはあたしよね。あたしの場合、暗いのはどうなるのかしら？ 多分普通に見えちゃうわよ？」

せりの言うことはもつともで、彼女の視力をもつてすれば、いかなる闇をも見通せるだろう。

だからこそ、鍛錬はより過酷で時期尚早なものとなってしまった。

「そのことなんだけどね、せりって見たくないものを自分の意志で見えなくすることはできる？」

訊ねられたせりは一瞬口ごもり、目を伏せて力無く首を横に振った。

「……今のあたしじゃ無理ね。あたしはまだ、自分の能力をちゃんと制御できないもの……」

自分の能力もろくに扱いきれない。せりがそのことに不甲斐なさを感じているのはみこも知っている。

残念ながら、せりの能力については、みこではどうすることもできない。厳密に言えば、ある程度はどうかできるのだが、その能力がせりの……咲実さきみの血筋で脈々と受け継がれてきた固有のものならば、それこそ親に指導してもらうのが適当だ。

幸い、みこの母こと魅祓みはらいは、せりの母親とは古くからの知り合いと聞いている。魅祓に取り次いでもらい、一度こちらから伺って、

鍛錬方法を教わるのもいいかもしれない。

欲を言えば、直接せりを指導してもらえれば……。

なんてことを思い描きながら、ひとまずは明確なことに基づいて決められるところを確定させることにした。

「うーん、そうなると湖は最後だね。はい、これで二択だよっ」

少々強引だが、こうでもしないと大変なことになる。主にせりが。

「えっ、どうして？ 最初はそこにしようかと思ってたのに。

せりは見えるから、その分簡単で楽なんじゃないの？」

疑問の声を上げたのはなずなだった。

常闇の湖が、真つ暗闇の中にある湖というただそれだけの場所だったなら、もっとも意見なのだが……。

残念ながら、それだけで済むような甘い場所ではない。暗闇の中には色々と精神衛生上よろしくないものがある。正しくは、棲すんでいるとすべきか。とにかく、バリエーション豊とよかな何が蠢うごいている、言わば巣窟そくくつである。

「ところが、そうはいかないのです。あのね、なずな。見えない方がいいものだって、あつたりするんだよ？」

優しいな微笑を浮かべる一方、二人がどんな反応を示すのか想像して、

……二人にとっては見えなくても嫌なものだろうし、それが何かなんて知りたくもない、っていう風になると思っよ、うん……。

どう考えても地獄絵図だったので、内心でこっさり合掌する。

思い出さなくてもいいのに、初めて湖に沈められた当時の記憶が脳内で自動的に再生され、みこは吐き気がしているような錯覚を味わった。

「見えない方がいいものって……。一体その湖に何があるのよ？」

訊ねたせりの顔色は心なしか青い。

こういうときのみこは、冗談や脅しを口に行っているわけではなく、あくまで事実を語っているだけなのだとは知っているからだだった。

普段ならみこは親切に仔細を包み隠さず伝えるのに、あえてそれをしないことの意味。

それはつまるところ、せりたちを待ち受けている未来は、どうしようもなく残酷なものだということに他ならなかった。

「グロいよ？」

「……え」

「……え」

みこの一言を受けた二人は、呆然と少し間をおいたかと思うと、我に返ったかのように同時に発声していた。

訊ねられた瞬間から、微笑を満面の笑みへと一新させたみこは、そんな二人を前に思う。

……あ、やっぱりハモった。

一緒に暮らしてみて気づいたのだが、この二人は実に息が合つらしく、割とよくハモる。それこそ双子みたいに。

知ったら後悔しかしないと思うよ？　と言わんばかりの意地悪な

笑みを維持したまま、続く二人の反応を待つ。

母親譲りのその笑みには、表情からは想像できない、言い知れぬ威圧感があった。

「う……。そつち系、なのね……」

明らかに気が滅入っているらしい苦い顔をしながら、それでもせりの好奇心は萎えきっていないのか、

「ぐ、グロいといつても、いろいろあると思うのだけれど、具体的にどんなグロさなの？」

……あー、これ話しちゃっていいのかなあ。せりは慣れていそうだけど、本人的には苦手みたいなんだよねえ。困ったな……。

「耐性にもよるけど、慣れてない人なら確実に吐きます。泣きます。錯乱します。慣れてても、かなり嫌です。私だってそう。それが何かを知ってしまうと、見えなくても嫌です。むしろ余計に嫌かも。それでも知りたい？」

間違っても湖に存在するものに結び付くようなことのないよう慎重に言葉を選んでみれば、まるで具体性に欠けてしまった。

もうちよつとマシな言い回しはできなかつたのかと自分でも思う。配慮しなければならぬものと言えはもう一つ。

“湖”とは言ったが、“何の湖か”は一切口にしていない点を、せりに気づかれやしないかが心配だった。

そこにあるのがただの水だなんて、どうして断言できるだろうか？

「えっ、いや、あの、その……」

「その時が来たら嫌でも知ることになるから、まあ楽しみにしててね」

「嫌な予感しかしないんだけど……」

げっそりしたように、せりは力なくがっくりと肩を落とした。

深い溜め息をつくその様子が悲痛に思えてならない。

「ま、まあ、せりなら大丈夫だよ。裸同然の格好にされて、触手で腕とか貫かれたり、体だけじゃなく口の中まで粘液まみれにされたりしても、ムシ相手に立ち向かえたんだし」

「あ、あれはそうしないと殺されちゃうじゃない！ みこの言っていた通りなら、危うく苗床にされるところでもあったのよ！ 幸い、そういうところには入れられずに済んだからよかったけど……」

せりは縋るすがように、重ねたなずなの手を握る。

このトラウマを植え付けてしまった過失から罪悪感を覚える一方で、その程度で済むといいんだけどねえと、みこはせりのこれからを案じた。

……それに。たとえ立ち向かえるだけの知識と力を持っていて、死を目前にしたとしても……。うつん、するからこそ、怖くて動けなくなっちゃう娘の方が多いと思うんだけどなあ。

誰もがみんな、立ち向かえるとは限らないよね。逃げることさえ難しいのに。

少なくとも、正式に巫女として認められたばかりの娘や見習いの娘たちの多くはそうだ。

姿も形も様々な得体の知れないものを相手に、多くはその相手の

陣地に自ら乗り込んで対峙しなければならぬ。それがどれほど恐ろしいことなのか。

幼いころから、およそ人のいるべきところではない場所へと放り込まれたりしていたみこには、それが痛いほどよくわかる。

恐怖を堪えて立ち向かうことができるせりのような娘だって平気というわけではない。だから心配だった。肉体的な傷はみこがどうにかできる。けれど、心の傷はそうはいかない。現にみこは、せりの心の傷跡を癒し切れていない。それができるのは、なずなただ一人だろう。

そのなずなはという。

「ああ……、あの時はこんな余裕なかったけど、今思えば触手に絡みつかれるせりも可愛かったなあ。胸とか根本のところから搾るように巻き付かれてて凄かった」

残念ながら、自分の妄想の世界に旅立っていた。

……ほんとに大丈夫なのかなあ……。はあ……。

緩やかだった抱擁が、せりにぎゅっとしがみつくかのようなものになり、彼女の首筋に己の顔を埋めるように押し付ける。

胸一杯にせりの香りを吸い込んだなずなの吐息は満足感に溢れていた。

頭の中では、恐怖となる要因全てが除外され、なずなにとってとつともなく都合のいい光景が繰り広げられているに違いない。

みこは、なずなの相変わらずの溺愛ぶりに呆れるような、安心するような、複雑な心境に陥った。

「……なずな、残念だけど二度とごめんよ。やられる方は堪ったものじゃないんだから。とつても痛かったのよ？」

困った顔を梅の花のように赤くしたせりが、ちょっと拗ねたように言った。

みこには「そこはちゃんと慰めてよね」と言っているように思えた。

「うう、ごめん、つい……。その、触手みたいな気持ち悪いのじゃなくてさ、縄とかで縛るのは……。どう？　痛くしないからさ」

「なずな、あたしに亀甲縛りでもする気？」

「……………」

……………あ、生唾飲み込んだ。

成り行きを見守っていたみこは、なずなの喉の動きを見逃さなかった。

「それ、かなり見たい。それでもって、いっぱい愛したいです」

「……………」

「……………だめ？」

なずなの甘えるような視線を、真っ向から受け止めること数秒。はあ、とせりは観念したように息を吐く。

「仕方ないわね。丁度いい物がないか、今度二人で見繕いに行きましょ」

「やった！」

「盛り上がってるところ悪いんだけど、話戻してもいいかな？」

放っておいたら相当マニアックな話になり收拾がつかなくなりそうだったので、みこはそう切り出した。

今すべき話ではないというものと、朝っぱらからそんな話をするのもどうなんだという、二つの感情が混在していた。

……好きな人と一緒だったら、私もあんな風になるのかな？

二人の会話を中断させる一方で、密やかに思う。

「あ、あの……七雪ななゆき白亜はくあ、ただいま参りました」

凍てし雪原か焦熱の洞窟か。そうやって訊ねるよりも、夏と冬ならどっちが好き？ と訊ねた方が早い気がしたので、それを口にしようと口を開きかけたところ、扉の向こうから控え目な声が聞こえた。

「あ、白亜ちゃん。施術は終わったんだね。どうぞ、中に入ってください」

みこが声をかけると静かに扉が開かれ、なぜか開いた隙間から身を滑り込ませるように入室する白亜。

なずなを見て気まずそうに視線を泳がせ、その先でせりの視線とかち合い、居心地悪そうに視線を逸らし、最後にみこを見て覚悟を決めたように一つ頷いた。

小声で「よしっ」と聞こえたような気がしたが、言ったであろう当人は聞こえてはいないだろうと思っっているようなので、反応しな

いことにした。

幼さを残しながらも、意を決したその顔は凛々しく、それでも可愛らしかった。「膝上どうぞ？」というみこの申し出を断る段階で、間もなく凛々しさは欠片も残らず吹っ飛んでしまったが。

じゃあせめてとみこに言われた通り、遠慮がちに隣に腰かけた白亜の表情は心なしが気落ちしてしまった風に見えた。

「あれ、なんで白亜ちゃんまで呼んだの？」

白亜を見て不思議そうな顔をするなずな。

「えっとね、今日から白亜ちゃんも鍛錬に参加させようかなって」

その答えに、なずなは一瞬目を見開いたかと思うと、

「そっか……」

次の瞬間には表情を和らげ、笑みへと一変させていた。

「随分と急な話ね。どういう風の吹き回しなの？」

そう言うせりは、訝いぶかしげに白亜をじっと見つめる。

その目つきは、何かを見極めんとしているみたいだった。

「白亜が頼みました。その、邪魔にならないようにしますので、どうか御一緒することを許してはいただけないでしょうか？」

今度こそせりの視線から逃れることなく、白亜はしっかりとそれを受け止めた。

「あたしのことなら気にしなくてもいいわ。それに、決定権はみこにあるもの。いちいちあたしの顔色なんて考えなくていい」

「で、でも……」

「いい？　なずなを殺したことは一生許せないわ。でもね、だからといって、あなたをどうしようしよとか、何かをやらせようかとか、そういうつもりは一切ないの。あなたはあなたの好きなようにすればいいのよ」

やや突き放すような、せりの無関心を装った物言いを、

「そういうことだから、負い目とか感じる必要はないんだよー？」

なずなはすかさずフォローした。

「あの、ありがとうございます。せ、せりさ……」

白亜は明らかにほっとしたような表情を見せ、

「　　ただし」

「……………え？」

そのまま固まった。

顔には、再び不安の色が見え隠れし始め、

「いくら従姉妹だからって過度になずなといちゃついたら……わか
ってるわね？」

「……は、はい」

せりの満面の笑みを前に、こればかりは唯々諾々とするしかないことを、白亜は悟ったらしかった。

みこの目から見ても、白亜はもう死んでいるというのに、その死んだはずの相手をもう一度くらいなら当たり前のように殺してしまいたいそうな、そんな予感を抱かずにはいられない恐ろしい笑みだった。

……な、なんで私まで寒気がするんだろ……！？

なずなのこととなるとなりふり構わないところは、せりらしいというかなんというか。

「あ、あはは……はは……」

みこは苦笑を禁じ得なかった。

それから程無くして。

みこにより手渡されたそれと浴槽を交互に見つめるせりとなずな。浴槽にはたつぷりとよく冷やされた水が張られ、水面にはぶかぶかと手の平サイズの氷が浮かんでいる。

場所をお風呂場へと移したみこたちは、みこ以外は服を脱いで裸になっていた。白亜はともかく、髪の毛の長いせりとなずなは、お風呂に入る時と同様に髪をアップえりあしにしている。

普段見えないせいか、襟足えりあしが露あらわになったせりは格別なまに艶めかしい気がする。

二人でお風呂に行く都度、なずなが興奮した様子なのはそのせい
か。

せりだけは生身なので、ある程度体をほぐしてもらっておいてあ

る。そうしなければ体にとても悪いためだ。

にこやかにみこが見守る最中、なかなか決心がつかずに動けないでいる二人を尻目に、湯船の冷水を塗るように、手でぺたぺたと肌に付着させて体を慣らし始める白亜。

努めて無表情を装っていることがありありとわかるくらい真剣な様子で下準備を終えると、お次はなんの躊躇ためらいも見せることなく、せりやなずなと同じく手渡されたそれを 風呂桶 で湯船の中身を掬すくい取り、足先から順に体にかけて始めた。

顔には出さないものの、肌に痛いくらいにまで冷やされた水を浴びるのはやはり辛いらしく、足を生まれたての小鹿のようにふるぶると小刻みに震えさせながら、それでも動きを止めることなく水をかけていき、ついには頭からかぶった。

ふーっと細く長く息を吐くと、

「お先に失礼します！」

はつきりとした口調で宣言し、氷の浮かぶ浴槽へ身を沈めた。

肩まで浸かる頃には震えが一層激しくなったものの、何度か呼吸を繰り返す内にそれは収まり、

「はふう……」

肺に溜まっていた空気をゆっくりと吐き出した白亜は、ゆっくりと潜った。

「っはぁ！」

しっかりと全身を冷水に浸け込んだため、体は芯から冷え切って感覚的には辛いはずなのに、冷水から顔を出した白亜はみこを見て微笑みを浮かべた。

「お姉ちゃん、これでいいんですよ？」

確認する白亜に、みこも笑顔で応じる。

「うん、オツケーだよ。さあ、出ておいで」

慌てることなく落ち着いた所作（おし）で湯船から出てきた白亜を、みこはバスタオルで包む（くる）と、そのまま丁寧に全身の水滴を拭い始める。

「え？　ちょ、ちよつと、お姉ちゃん？」

白亜が恥ずかしそうに身を擦（よじ）るけれど、それくらいで抜け出させるつもりは毛頭ない。

「じ、自分でできます、できますから！？」

「ーからーからと、結局みこは着替えまで手伝ってしまった。

……だって可愛かったんだもん。しょうがないよね。

心中で言い訳しながら、できあがったそれを満足げに見やる。

いつもとは違う自分のその姿を確かめるように、体を捻ったり、袖をつまんでみたり、くるっと緩やかに回ってみたりと、感嘆の吐息を漏らしながら嬉しそうにしている白亜の巫女服姿を。

「うんうん。よく似合ってる！」

「あ、ありがとうございます……」

照れて顔を俯かせるその仕草が、初々しさも相まってこれまた愛らしい。

そう思う一方で、愛らしさの中に落ちている微かな影を、みこは見逃さなかった。

「どうしたの？　もしかして、気後れしちゃってる？」

「……白亜なんかがこれを着るなんて、許されるんでしょうか……」

訊ねると、不安げな眼差しがみこを見上げた。

……これが人を殺した幽霊の目なの……？

覗き込めば底まで見通せるほど透き通った湖面を思わせる、澄んだ目をしていた。

今のその湖面は、静かに、微かな揺らめきを見せていた。

それこそ、本当にこの娘がなずなを殺したのだろうかと、そんな思いを抱かせるほどに。

……これが、この娘本来の性質なのかな。

「かわいいから許す！」

胸の内は晒すことなく、見上げてくる白亜があまりにも可愛かったので、みこは思わず抱きしめていた。

「まっ、真面目に答えて下さい！」

恥ずかしさから、耳の先まで顔を真っ赤にした白亜の抗議に、聞こえないふりをする。

耳元で叫んでいるのだから聞こえないはずはないのだが、聞こえないと思ったら聞こえない。

「うう……」

観念したのか、白亜の抵抗がなくなった頃を見計らい、囁くように語りかける。

「うんとね、白亜ちゃんなら、着てもいいんだよ？ ううん。白亜ちゃんだから、着てもいいの」

「白亜だから……？」

「償い、するんでしょう？ だったら、いいんじゃないかなあ。白亜ちゃんならわかると思うけど、家の鍛錬うちって拷問よりも酷いし」

「……が、頑張ります」

「うん、いい返事だ」

満足げに頷いたみこは、

「でも無茶だけはしちゃだめだからね？」

白亜の頭を愛でるように撫でた。

みこと白亜がそうしている傍らで、完全に置いてけぼりになったせりとなすなはお互いに顔を見合わせ、

「ねえなすな。年下の娘があんなに平然を装ってやってのけたのに、あたし達ときたら、何してるのかしらね」

「うぐつ。それを言われると、この中で一番年上のわたしは胸にグサリとくるものがあるよ……。でも、あれ凄く冷たそうだよ……。？
はーちゃん凄いなあ」

「そんなこと言ってる場合じゃないわ。さっさと済ませましょう。
本番はこの後なんだから」

自らを奮い立たせ、せりは桶に水を掬う。

その後のことを考えると手が止まりそうだった。

あえて思考を放棄して、何も考えず足に水をかける。

「ひあっ！」

あまりの冷たさに、小さな悲鳴を零す。

「お、思ったより、へ、平気、じゃ、じゃない……」

むしろその逆だったが、せりは強かった。

この後に向かうという凍てし雪原は、こんな程度では比べ物にならないというので、これくらいで挫折するわけにはいかないからだ。

白亜がやってきた後、夏の暑さにうんざりしていた事もあり、先に寒い方にしようということになったのだ。

「これじゃあ凍えちゃうわね」

冷水をかけながら、震える声で隣にやってきたなずなに話しかける。

「うぐつ……」

なずなはというと、桶に水を汲んだはいいが、まだ葛藤かっとうしている様子だった。

「そうね……………」

せりはその様子を見てなにやら考え込む。
結論は割とすぐに出た。

「ね、ねえ、なずな。せつかく、だし、塗り合いつこ……………しましょ？」

桶を差し出しながら、思いついたことを口にする。

自分で考えておきながら、いざ口に出してみると恥ずかしくて、言葉が後ろの方になるにつれ、声がどうしても小さくなってしまった。

せりの場合、なずななどの身長差から、なずなの顔を見るにはどうしても見上げるような形になる。

普段なら自然と上目遣いになるのだが、顔から火どころかマグマが噴き出そうなくらいに恥ずかしい気持の今は、まともになずなの顔を見ることができず、視線は下に行ってしまうがちになる。

それでもなんとかして目を向けようと頑張った結果、下から上へ上から下へと、ちらちら視線は行ったり来たりになって……………。

その姿は、なずなにはとても魅力的に見えていた。

「……………」

ぼーっと、呆けたようにせりを視界に入れたまま動かない。
生唾を飲み込むように、ごくりと喉が動く。

「えっと……、なずな……？」

どこか困ったような色混じりの、心細さを宿すせりの瞳が、返事を求めてなずなを見つめる。

「……へ？ あ、ああ、うん。それ、いい考えだねっ」

心ここにあらず。そんな状態から、なずなはようやく我に返った。

「ぼんやりしてたみたいだけど……」

大丈夫なの？ と、なずなの顔を近くでまじまじと観察する。

「ちゃ、ちゃんと聞いてたよ。ただね、せりがあまりにも、その……かわいかったから。しょ、しょうがないよ！ だって……」

しようと思えばキスできるくらいの距離にせりの赤面した顔がある。

幽霊になっても胸がドキドキする。その感覚を改めて味わいながら、なずなは思う。思っ、伝える。

あんなことされたら、見惚れちゃうよ。

続きはせりの心に直接届けられた。

「なずな……」

「せり……」

どちらからともなく距離を詰め、口づけた。

長い接吻の後、いい雰囲気のまま完全に自分たちだけの世界に入り込んだ二人は、お互いの体に冷水を塗り合って体を慣らし始めた。いちいち動きがいやらしく、特に手つきは愛撫している用にか見えない。興奮して荒くなる息遣いだけならまだしも、びくんとどちらかの体が跳ねる度に発せられる声も、嬌声きょせい紛いのものというか嬌声そのものだったので、

「白亜ちゃんは見たり聞いたりしちゃ駄目だからねー」

これは教育上よろしくないなど、みこは白亜を再び抱き寄せ、その顔を自らの豊かな双丘に、彼女が苦しめない程度に埋もれさせて視界を封じ、力で聴覚も一時的に封じた。

未那夜のことがあるとはいえ、白亜はまだそういうことを知るべきではないだろう。

特にこの二人のものとなれば、生真面目なところがある白亜には刺激が強すぎる。

「……………！」

いきなり抱き寄せられ、同時に聴覚を奪われた白亜は、最初は何かと息を呑んだものの、暴れることなく大人しくしていた。

頭の中では、抱き寄せられる前に見えた衝撃的な光景がぐるぐると渦巻いていて、思考が停止してしまっていた。

白亜はただただ、いい香りを胸に吸い込みながら、ぬくぬくふにふにな感触に身を任せる。

二人が冷水に浸かって頭を冷やして目を覚ますまで、みこは諦め顔で、白亜を守るように抱き続けていた。

第33話 雪原

そこは白と灰色の世界だった。

真綿のような真っ白い雪が、薄灰色の曇り空からしんと降り注いでいる。

みこは空を見上げると、舞い落ちてくるそのいくつかを手のひらで受け止めた。

花卉にも似た新雪が儂く溶け去ってゆく様を愛おしそうに見送り、手のひらに向けていた視線を水平に戻す。

果てのない地平には、膝丈ほどに降り積もった雪と今も降り注ぐ雪くらいしか目に入るものはなく、生き物の気配もしなかった。

あとは、微風。

灰色の空の下、雪だけがみんなから取り残されてしまったような世界で、微かな風だけが慰めるように雪を撫でていた。

雪に埋もれた素足に纏わりつく冷気は、少女たちを静かに苛さいなんでいる。

仲間が踏みしめられたことに、周りの雪が抗議しているかのよう。

……ここも相変わらずだね。

寒さにも、凍えを通り越した痛みにも顔色一つ変えることなく、

みこは思う。

どこかもの悲しく、寂しい。

それは、かつて抱いた印象と同じもので。

寒さがその印象をより強固なものにしていた。

そんな心の動きさえ胸の内に秘めて、

「やっ……」

気持ち切り替えるように呟いた。

声と同時に吐き出された息は白い。

肺に吸い込まれる空気は冷え冷えとしていて、胸に痛かった。鼻なんてもつと痛い。もし口で呼吸したら、喉のどが酷いことになりそう。ここの気温は零度を“ちよつとばかり”下回っている程度だが、体温を奪われるには十分なものだ。

後方から聞こえる、二人の少女の悲鳴がそれを物語っている。

こちら側へ来る前に冷水で慣れさせたとはいえ、日中は三十度を超えるような場所からいつきにこんな所へと放り出したのだから、体感としてはここの気温以上に寒いことだろう。

それでも、ここはまだマシな方なのだが。

ここは入口のようなもので、少しでも環境に慣れるための場所ではないただの雪原だ。本当に用事があるのは、本来の姿を現したこの場所。それこそが凍てし雪原である。

だからせりには、手始めとして、これくらいは平気と言えるようになってもらう必要がある。

慣れない内はさぞ寒いことだろうなあと、他人事のように思いながら振り返る。そこには、案の定寒さに凍え、そのあまりに抱き合うせりとなすの姿があった。

寒い寒い凍えちゃうなどといったことを口々に言いながら、二人してがくがくと震えながらぎゅっとお互いをきつく抱きしめて離そうとしない様は、そのさらに後ろにいる白亜はくあに憐憫れんびんの情を抱かせたのか、彼女は憐れむような視線を二人に向けていた。

どんなに当人らが凍えて苦しもうが、それで病気になったり死んだりすることはまずない。そのための巫女服姿だ。色々と命を守るための術式が織り込まれている。

なすなに至っては、単に寒さを和らげるためだけに着てもらっている。

本当なら全裸といきたいところなのだが、入家儀式を受けていないせりでは体が持たない。

なずなの場合は、最初からそうだと厳し過ぎるためだ。

白亜が着ている巫女服は、一時的に鍛錬用の物へと調整されている。身を感じる寒さを、衣類としても一切軽減せず、特にこれといった防護機能も働いていない、ただの飾りのような物へと。

だからなのか、白亜は初めて着る巫女服の肌触りを楽しみたいと言つて、あえて下着も襦袢じゆばんもなしに白衣と緋袴を身に着けることを選んでいる。家でそう言われた時は止めようかとも思いはしたが、傍にいとすればみこの他はせりとなずなくらいなので、好きにさせることにした。

みこのそれは、むしろ余計に寒く感じるようになっていて、それは幽霊の二人が感じるそれをさらに上回る。ついでだから自分の鍛錬の足しにしようという腹だ。

せりはともかく、なずなはしばらく動けないだろう。なずなはこれが初めての鍛錬なのだから、無理もない。

そもそも動いてもらう必要はないけれど。

なずなには、しばらくの間はせりと同じ環境下で過ごしてもらうつもりだった。しっかりと、せりを見てもらうのだ。

いざという時、安全な場所まで運んだり応急手当てをしたりと、できることは色々ある。それでなくとも、傍にいただけでせりの心の支えになる。

それなのに、せりが傷を負ったり苦しんだりしているのを見て、その度に気を動転させ、冷静さを欠いてしまうようでは、かえってせりの負担になってしまふ。それは、なずなの望まないところだろう。それができるようになったら、いくつか術を授けるつもりだった。

なずなには、どんな環境下でも心に波風を立てることなくいられるようになることを、第一目標としてもらう。

白亜はといえば、胸の前で手と手を重ね合わせた立ち姿で、足を忙しなく動かしつつもしっかりと抱き合う二人を、先述したように見つめている。

一見すると平気そうに見えるが、不意にくしゅんと小さなくしゃみをした。よくよく見ると微かに震えている。やはり彼女も寒いらしい。

それでも文句一つ言うことなく寒さに耐えているのは、さすがは元巫女見習いだった。

ブランクがあることに加え、幽霊になって肉体の殻を失ってしまった今の彼女にとっては、ここの寒さでも相当辛いはずなのだ。それこそなすなのようになって、何らおかしくはない。

単に抱きつく相手がいなかっただけとも考えられるが、それにしでは誰かの温もりを求めているような気配は見受けられなかった。

みこは、未だに動けそうにない二人組は力尽きて大人しくなるまで放っておいて、先に白亜を呼び寄せることにした。

こちらで何日過ごしても、出入り口は入ったときの時間に定義されているため、普段の世界では一秒たりとも時間の経過はない。かわいそうではあるが、せいぜい凍えてもらおう。

「白亜ちゃん、こっち来てもらえるかな？」

「あ、はい」

みこが呼びかけると、ざくざくと雪に足を踏み入れ、控え目な大ききの足跡を残しながら、この程度の雪など何の障害にもなっていないとばかりに、家にいるときと変わらない歩調で歩み寄ってくる。冷たい雪の大地の上に素足で立っているため足は相当痛むだろうに、それをまるで感じさせない。

浮遊すればそれらを完全に無視できるのだが、ここもまたみこの屋敷と同じく、幽霊は浮いたりものをすり抜けたりすることはできないようになっていたため、それは叶わない。

「……なんででしょう？」

すぐ傍までやってきた白亜は、みこの指示を求めて微かに首を傾げた。

「見たところ大丈夫そうだけど、白亜ちゃんは辛くない？」

「少し寒いですけど、これくらい平気です」

答える白亜は、普段と変わらない声色を保っていた。ちよつと触るよと一声かけてから、か細い肩に手を添える。

みこの手へと、白衣越しに伝わる温度と微かな震え。無理に震えを抑えようとして変に力んでいるかと思えば、その逆で、むしろ余分な力を抜いてリラックスしている。

背筋もぴんと伸びていて丸くなっていないことから、彼女の言葉通り、寒いとは思っているものの、別段無理をしているわけでもなさそうだった。

手が胸元にあるのは、これからどういったことをするのかかわからないという不安から、無意識にそうしているのだろう。鍛錬前の少女たちには、よく見られる光景だ。

この様子ならば、さっさと次の段階に進んでも問題はないだろう。

「そっか……。それじゃあ、もっと辛くしてもいいかな？」

拒否する権利を与えるつもりはないが、あえて問いかける。反応次第では、励まそうと思っていた。

「大丈夫です。ここは確か、入口ですよね」

「白亜ちゃん、ここに来たことあるんだ？」

「境界の向こう側に連れて行かれて、猛吹雪の中で基本鍛錬をした後、力を使って自分で雪を溶かして出てきなさいって、雪だるまにされました」

都守においてはよくあることのひとつとはいえ、白亜も割と酷い目に遭わされたようだ。

なんてことのないような言い方が、かえって気にかかる。

……そういえば、白亜ちゃんはほとんど最高鍛錬クラスにいたんだっけ。ということは、前に白亜ちゃんが言っていた“お師匠様”に連れてこられたのか。

「白亜ちゃん、本当の凍てし雪原にも行ったことあるんだね」

「はい。でも、あれって本当に雪なんでしょうか？ あの雪って、見た目だけですよね。吹雪の中にいる間は、ごく浅くとはいえ肌は切り裂かれ続けましたし、弾こうとしたら異様に硬くて痛かったです……。ほんの小さな結晶一つ一つが氷の礫つぶてみたいで、生半可な力じゃ全然溶けてくれなくて。雪だるまにされた時はこのまま一生、生き埋めにされたままになるんじゃないかって、怖かったです」

さすがに、そんなことはないみたいでしたけど。

最後はちよつぴり恥じらしいの笑みを浮かべ、しばし懐かしむように目を閉じた白亜は手を優しく擦さすった。弾いた際の痛みを思い出したのだろう。

不意に咲いた白亜の笑みに、みこは心を少なからず乱されながらも彼女の問いに答える。

「硬かったり溶けにくかったりするのは、凍てついてるからだね。見た目は雪だけど、ごく薄い氷でコーティングされてるんだよ。薄

い割には簡単に砕けたり溶けたりしないんだけどね。私たちの知ってる氷とは少し性質が違うものだから」

それからねと、一息ついてみこは続けた。

「どうして肌が裂けちゃうのかというと、風で宙に舞っている間に雪同士がぶつかり合っているとね、段々削れてって鋭くなるからなの」

「そんな中で鍛錬なんてさせますか普通……？ 目に当たったらどうするんですか！」

「ここから向こうに行く前、手で目元を撫でられたりしなかった？」

「……え？ 目元を……」

白亜は一瞬きよんと固まったかと思うと、難しい顔をして記憶を探り始めた。

「そういえば、もしかしてあれが……。だからあの時……」

小さな呟きの内容からして、どうやら心当たりがあったらしい。

「怪我したら困るところには、指導役の巫女がちゃんと防護術をかけるよう取り決めてるから、その人が違反しない限りは大丈夫だよ。それと、見習いの内は滅多にないけれど、正式に巫女になったら、防護術なしでわざと傷つきながら鍛錬するっていうのも、結構あるんだ。場所については……言わなくてもわかるよね？」

「……そうでした。安全対策とか療養体制はしっかりしていますけど、その代わりとばかりに酷いことされるところでした、ここは」

そんなことを言っておきながら、白亜は笑顔だった。

疑問が氷解したということだけでこんな表情をするだろうか？

そんなことを考えずにはいられないほど、その笑顔は朗らかなものだった。

白亜の笑顔の理由も気になる。けれどそれ以上に、これからこの笑顔が壊れてしまうような　　しまうようなではなく確実に壊れることを、白亜にさせなければならぬのかと思うと胸が痛んだ。

「そういつわけだから、これから白亜ちゃんを酷い目に遭わせようと思います」

……自分で言っておいて悲しくなってきたよ。なんで辛い思いをさせないといけないのかな。

そう思うのならば今すぐ取り止めればいいのに、みこにはそれができなかつたし、するつもりもなかつた。

白亜がこんな嫌だと、もう帰りたいと願っているだろうか？

まだ、そのような素振りは一切ない。そんな印象を受けるような行動も取っていない。

彼女が望んでここにいるのだとすれば、みこの勝手にそれを妨げていいはずがない。

……私があの娘に強いる苦痛の方がよっぽど辛いもん。これくらい黙って耐えないと……。

「うーんとね、その前に一つ確認します。その雪から出てくる鍛練はちゃんと最後までできるようになった？」

みこは胸の内を悟られてしまわないよう苦心しながら言葉を紡ぐ。

表情から声色、頭から足先までしつかりとコントロールしなければならなかったため、日頃からそうしていても意外と難しい。

「はい、なりました。その……これから、するんですか？ それなら、向こうへ行きます」

白亜があっさりと言ったところまではいいものの、彼女は問いに対する返事も待つことなく、本来の凍てし雪原へときびきびとした足取りで向かい始める。

よもやそんな反応をされるとは思ってもみなかったみこは面食らった。

「う？ あ、あの、白亜ちゃん？」

「……？ お姉ちゃん、どうしたんですか？」

呼びかけてみると、「行かないんですか？」とばかりに、振り返った白亜に首を傾げられる。

「いや、その、あのね、あまりにも素直だから戸惑っちゃって。もう少し嫌がるかなって、思ってたんだけど。白亜ちゃんが前に来た時より、身を感じる冷たさや寒さが強くなってること、気づいてるよね？」

「大丈夫です。全部、わかってますから」

「え？」

くすつと悪戯っぽい笑みを残し、白亜は一足先に凍てし雪原への境界を越えた。

その背を呆然と見送り、

……もしかしなくても私、見透かされちゃってる？

ほんのりと頬を赤く彩りながら、みこはその後を追いかけたのだ。
った。

第34話 凍てし雪原 白亜

境界を越えた先は薄暗かった。

空を覆い隠す雲は黒に近い灰色で、その向こうにあると思われる何らかの光源の光を、ほとんど拒絶している。

たったそれだけの情報を得るのに、白亜は数十秒もの時間を費やした。

勢い勇んで飛び込んだのはいいものの、外部からの侵入者を排除せんとばかりに吹き付ける猛吹雪の大歓迎を受けた白亜は、たちまち頬や手足の露出している部分をスパSPAと切り裂かれた。

衣装が巫女服であったことが幸いしてその範囲はごく狭かったのだが、それ故に雪に切り裂かれるという現実を思い出すのに幾らかの時間を要した。

……わ、忘れてました……。今お話したばかりなのに……。このままだと、目が酷いことになりそうです……。

雪が目には直撃すれば、運が悪いと痛いでは済まされまいだろう。それにこんな環境ではあつという間に乾燥して、目を開けていることさえ厳しい。

憧れの人の下で、憧れの衣装を身に纏って鍛錬ができるとあつて、少なからず浮かれていた意識を現実に対処するべく切り替える。

素早く目を腕で庇^{かば}った白亜は、過去にかけてもらった防護術をしつかりと思い出して“再現”した。

力の性質、効果、表出する形。力を発現させる際に決めておかなければならない不可欠なこの三要素については身をもって経験していた。とはいえ、それを実現するための力の導き方までは知らなかった。

そんな状態であるのにも拘^{かかわ}らず、術式もなしに術を再現するとい

うことは、目的地の名前だけを頼りに知らない町を地図も持たずに歩くような行為に他ならない。

いくら施してもらった経験があるからといっても、自身に施された術を再現するなど余程のセンスがあってもそう簡単には成しえないことだった。

自分が達成したことの困難さなどには気づいた様子もなく、白亜は目元にあてがっていた腕を下ろし、目を凝らした。

地上に近ければ近いほど密度をぐんと増す吹雪のせいで、周囲は数メートル先さえ見渡せない。

吹き付ける雪をよくよく観察してみると、淡く光輝いているようにも見える。

雪を包んでいる薄氷そのものが白く発光しているようで、こんな吹雪の中ではなく、遠くからこの場所を眺められたのなら、さぞ美しい白銀の景色を拝めるのではないだろうかと思う。

先の雪原とは違って、足下は半ば凍てついた雪が積もり固まっているため、足が埋まってしまふようなことはないものの、迂闊な一歩を踏み出せばすてーんと転んでしまいそうだった。

今まで以上に冷たいからといって、しっかりと地に足を付けることを怠ればそうなってしまうことは明白で、この上を歩いたり走ったりするには否応なく足の裏全部を使って掴むようにしなければならぬ。ただでさえ強烈な吹雪で体勢を維持するのが難しいので、尚更だ。

まだ固まる前の舞い降りたばかりの雪に至っては、足の裏にちくちくと刺さって痛い。角度によってはぐさつとくる。

そんな足場事情のために、転んだらもっと痛い思いをしなければならぬこともはつきりしている。そのため、足の裏の痛みは甘んじて享受するしかない。

先程までとは比較にならないほど厳しさを増した寒さ。容赦なく体に吹き付ける吹雪。歩くまでもなく痛む足の裏。

白亜は寒くて痛くて泣きそうなのを堪え、努めて平気そうな顔を

装い、抑えようのないくらいがたがたと震える体で、それでもしっかりと屹立^{きつりつ}してみこの到着を待った。

そう待つことなく、待ち望んでいる人は向こう側から姿を現した。みこは何一つ術を自分に施すことなくやってきたらしく、吹雪にされるがまま手や頬を切り裂かれる。

そうやって自己主張する吹雪をまるつきり無視し、足場の悪さなど感じさせない足取りで白亜のところまでやってくると、

「

何かを言わんと口を開きかけ。

結局何も言わずに、優しい微笑を見せた。

「あの、お姉ちゃん？」

白亜が怪訝に思って訊ねてみても、意味深に笑むばかりで答えはくれなかった。

「それじゃあ、始めよつか。ここに連れて来た目的は霊体の扱いを鍛えるためじゃないから、基本鍛錬はしません。その代わり、たっぷり雪漬けになってもらいます。白亜ちゃんが前にここで手に入れた凍雪の資質、死んだ時に休眠したそれを再び活性化させるために」

吹雪の中にあっても耳にしっかりと届くみこの声。

追求したところでどうせ答えは返ってこないだろうと白亜は判断し、それについては止めておくことにして、

「やっぱり埋められちゃうんですね」

少しでも平気そうに見えるよう、ぎこちないながらも頑張って笑顔なんかを作ってみる。

お姉ちゃんどころか母親のようにすら思えるこの優しい女性の心の痛みが、少しでも薄れるように。

「そうです、雪の中に埋めちゃいます。そうするにあたって、最後の確認です。……本当にいいんだね？ 拒否してもいいんだよ？」

一瞬目を見開いたかと思うと今度は逆に目を細めて応じたみこは、最後の確認と言って真面目な顔になると、念を押すように訊ねた。もしここで嫌だと言え、どうなるのだろうか？

何事もなく連れて帰ってもらえたりするのだろうか。それとも、頑張ろうねと応援してくれるのだろうか。

……どんな反応が返ってくるのか、試してみたいような。

ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ、好奇心をくすぐられた。

「冗談で言ってしまうおつか……」。

そんなことを確かに思いはしたが、白亜はもう心に決めているのだ。

「いいに決まっています。情け容赦なくやってください」

よろしくお願いしますと、丁寧に頭を下げる。
するとみこは、

「いいのかなあー？ 冷たいよー？ 痛いよー？ 暗いよー？ 苦しいよー？ 怖いよー？」

脅かすつもりには軽すぎる物言いで告げながら、白亜を中心

とした円を描くように歩く。一人くらいなら大の字になって寝転がれる程度の範囲のところを。

「ふざけないでくださいね？」

その間、ずっとこちらをにやにやしながら横目で見ていたので、一体どういっつもりなのかと、白亜はジト目で正面に戻ってきたみこを迎えた。

さっきまでとはみこの様子が違うことも気になった。きっと無理して明るく振る舞っているのではないかと疑いたくなる。

……疑う……？ ううん。きっと、そう。だって、こっちに来る前、お姉ちゃんは……。

「い、ごめんね。そっ、それじゃあ、その場で横になってもらえるかな？」

みこの謝罪を耳に入れながら、指差された自分の足元を見る。

足下周辺の雪だけが、土を耕たがやしたかのような状態になっていた。

みこが今しがた歩いたばかりの円の内側だった。自分の立っている場所さえそうになっている。

いつこんなことを行ったのか。それはわかりきっているものの、まったく気づけなかった。ただ普通に歩いていたようにしか思えなかった。足の裏に違和感はなかったし（そもそも冷たさと痛み以外の感覚が薄れ過ぎている）、音もなにもあったものではなかったからだ。

「い、いつの間……」

「ほら、せっかくほぐしたのに、早くしないと固まっちゃう」

白亜は釈然としない気持ちを抱えたまま、言われるがままその場に横になる。

顔に降り注ぐ雪が痛い。防護術のおかげで目だけは無事だ。

防寒機能を、衣類としてのそれから封じられているため、実際に素肌で寝転んでいるのと同じ冷たさが襲いかかる。

巫女服越しに伝わる冷気に、「ひっ」と小さな悲鳴が漏れ出そうになった。

……ふ、普通に寝転ぶのではなく、そつと寝転べばよかった……。

そう思っても後の祭り。

しゃきしゃきのかき氷とでも言えばいいのだろうか。そんな地面に半身を埋もれさせ、一層身を震わせる白亜に次なる指示が下る。

「それじゃあ、まずは足を広げてもらえるかな？ 肩幅くらいでいいから」

足を広げさせて何をするのか想像はついていないが、どれだけ嫌な予感にしてもここまで言われた通りにするしかない。

足を開いたことよってできたスペースに、雪をこっそりと押し込められていく。

緋袴の中に頭から突っ込んだみこは、運び込んだ雪を白亜の素肌の上に振りかける。

まずは下腹部から帯のあたりに。

いきなりだった。合図もなにもなく、遠慮も容赦もない。

「……！」

白亜は跳ね上がりそうになる体を必死に押し留め、声は出さない

と歯を食いしばった。

目の端に涙が浮かんだが、それを気にしている場合ではなかった。休む間もなく雪は服の中へと運びこまれ、帯のところまできつちりと詰め込まれる。

その動きを抑えてはいるものの事実上では悶え苦しむ白亜をよそに、下腹部から脇腹はしつかりと雪で覆われた。無論、背中側にも雪が入られている。

そこから足先へ向かって雪がかけられていくわけだが……。
お尻を包み終わり、凍てついた雪が秘部へと被せられた瞬間、

「ひあつ！」

とうとう堪え切れなくなつて、我慢していた悲鳴が小さく上がった。

他の部位とは比べ物にならない苦痛に、目の端に浮かんでいた涙が零れ落ちる。

体に沿うように伸ばしていた手に力が入り、ぐつと握り拳を作る。そんな白亜を一顧^{いっこ}だにせず、太腿から膝まで、膝から足首までと、みこは無言のまま雪で覆つていく。

袴の中が終わったのか、今度はその上に雪を被せていく。

いよいよ下半身がほとんど埋められ、もはや自力でここから脱出することなど力を使って雪をどうにかしない限りは不可能という状態になる。

急激に奪われていく魂の温度。生身の体であればそうなっていたであろう現象が、霊体にまで引き起こされる。

白亜は顔面蒼白になりながら、首だけを僅かに起こして埋められた下半身へと視線を向けた。

これでもう、逃げられない。

そう思うと、どれだけ辛くても大人しく埋められるしかないんだなあという、どこか諦めにも似た感情が湧きあがってくる共に、

埋められてしまうことへの恐怖も強くなった。

表情を取り繕うこともできない白亜は泣きそうな顔のまま心中で嘆息し、この身を全てみこに任せてしまおうと目を閉じて首を下ろそうとした、その時。

その顔が、別の恐怖で塗り固められた。

「や、やめ」

反射的に叫びかけ、

「言ったよね。情け容赦なくやってくれさうって、言ったよね」

みこはその叫びをどこまでも平坦な、しかしそれ故に冷徹な響きにも思える声音でぴしゃりと遮り、

「」

こちらを振り向くこともなく、その手にした物を白亜の足の甲へと 思い切り振り下ろした。

足の周囲に飛び散る少量の鮮血。

足先までしっかりときれいには伸ばされた可愛らしい足。その甲を何かが貫いていた。

白い輝きを薄氷の内に秘める、この地に一時も途切れることなく振り続ける雪によってできたそれは 氷柱だった。

「いあ」

白亜は目を見開き口も限界まで開いて喉が割れんばかりの勢いで絶叫した。

それでも、暴れそうになる体は必死の思いで抑え込む。

ただでさえ耐え難い苦痛の中にあるのに、このような追撃が加えられるなどは露とも思っていないかった。生前に行われた鍛錬ではこんなことはされなかった。

となると、原因はおそらく自分で言った言葉だろう。情け容赦なくだなんて、言うべきではなかった。

洪水のように溢れてくる涙を拭うこともできず、熱い、これだけは熱い呼吸をただ繰り返す。

追撃はまだ残っている。そこらの雪を固めて作ったらしい氷柱は、みこの傍にまだ三本は転がっているのが見えた。

それらがどこに突き立てられるのか。容易に想像がつく。両手両足だ。

……白亜はここで磔はりつけにされるんですね……。

せめてもう片方の足に氷柱を突き刺す前に、息を整えさせてもらえればと思った。

貫かれた足の痛みに少しでも慣れるための時間が欲しかった。

けれど、そんなものを見こが与えてくれるはずもなく、

……やっぱり、そうなります、よね……っ！

続けざまにもう片方の足の甲にも、氷柱が振り下ろされた。

「あぐっ、うっ……あああああああっ、いあああああああああああああああ！？」

それが本当に自分の声なのかわからないような、獣の咆哮とも聞こえる悲痛な叫び声が雪原に響き渡る。

骨をも貫くおぞましい感覚が全身を駆け巡り、許容限度を遙かに上回る激痛が視界を一瞬真っ黒にした。

失われた意識が瞬時にして引き戻され、激痛と極寒の海へと再び放り込まれる。

ついには体も抑えていられなくなって、涎よだれを撒き散らすことにも厭いとわずぶんぶんとして首を振って暴れる。

下半身はずつしりと積まれた雪が重石の代わりに果たして自由が利かず、それが白亜の動きを大きく制限していた。

みこは相変わらずもがき苦しむ白亜に関心を払う様子もなく作業を続け、足先まできつちりと雪に埋め終えた。

すると今度は白亜の腰より多少上の辺りに馬乗りになり、

「前、はだけさせて」

あえて自分ではせずに、そう指示を出した。

「は……、はい………」

白亜は震える手を持ち上げて、白衣をはだけさせた。

露わになった胸元へと、雪を乗せたみこの手が迫る。

その手は白衣の中に潜り込み、帯のところからきつちりと雪で覆っていく。

……痛い……。冷たい……。寒い……。

冷え切ったみこの手が肌を掠める度にびくんと背中中で跳ね、雪を置かれればぎゅっと目を瞑って悶絶する。

それを何度も繰り返し、何時間とも思える責め苦の果てに白衣の内うちに雪を纏った白亜は、もう虚ろな目をし始めていた。

……生きていたときより、ずっと辛いです……。

目の端からとめどなく流れていく涙。だらしなく半開きになった口には、涎の跡。

涙と鼻水と涎と雪でぐちゃぐちゃになった泣き顔。

呼吸する度に上下している胸は、その運動を徐々に低下させていた。

……耐えないと……。これくらい、耐えないと……。

ぼんやりとした思考でそんなことを思っている内に、いつしか首まで服の上から雪が被せられていた。

残るは肩から先と頭部。おまけに、氷柱が二つ。

それが終って、ようやく始まりだというのに。

白衣の袖の中に詰め込まれていく雪。二の腕に触れるそれが白亜を震え上がらせる。

体はもう震えることすらできないけれど、それでも震えていると思っただ。

両の腕が白衣ごと雪に埋められ、手のひらの真ん中を氷柱で貫かれる。

どんなに痛くても、雪に埋もれてしまった体ではもがくこともできず。くぐもった悲鳴が口から零れただけで。

その口も、雪で塞がれる時が訪れていた。

その段階に至ってようやく白亜の顔をしっかりと見つめたみこは、ふつと優しい顔になって、

「ああ……こんなに汚れちゃって……」

家に置いている物と同じ状態に保たれたタオルを懐から取り出し、白亜の顔を丁寧に拭いた。

「あ……。あ……。う……」

白亜がお礼を言おうとしても口からはうまく言葉が出てこず、代わりに意味をなさない呻きが漏れただけだった。

こんな状態とはいえ、思うようにならない自分の体が恨めしかった。苦しみとは違う意味で涙が零れた。

白亜の言葉にならない言葉を汲み取ったのかはわからないけれど、みこは大丈夫だよと言って微笑んだ。

「それじゃあ、顔も埋めるね。これ、啞えて」

口元に運ばれたのは、丸められた一枚のお札。

「ん……っ……あう」

白亜は横向きにされたそれを静かに啞えた。

すぐさまその上に雪が被せられ、声すら出せなくなる。続けざまに鼻も塞がれて呼吸が封じられる。

霊体である白亜にとっては本来、呼吸は必要のないものだ。だが、生前の記憶がその事実を霞ませてしまうせいで、実際にはない呼吸器が塞がれた状態の苦しさを、意識としては覚えてしまう。あたかも、失われたはずの四肢の痛みを感じてしまう幻肢痛のように。

もう、暴れてしまわないように意識することも、悲鳴を上げないように歯を食いしばる必要さえない。それらはとっくに封じられているのだから。

涙で濡れた白亜の瞳に映るのは、みこの慈しむような瞳で。

「目も開けたまま、ね。傷はつかないようにしてあるから」

目に向かって伸ばされた手が、白亜の目元をなぞっていく。

片方の手で防護術を打ち消しながら、もう片方の手で慎重に目に

雪を被せる。

だめ押しとばかりに鋭い痛みに襲われるのかとも思ったが、みこの言う通りそんな類たくいの痛みは特になかった。

光のない真つ暗闇の中で確認することはできないけれど、被せられたこの雪の目に接している面は、白亜のそれに合わせて滑らかな緩い曲線を描いている気がした。

だからといって苦痛が減るわけでもなく、むしろ増すばかりではあったが、いいこともあった。

仮面のように被せられた雪のおかげで、これ以上辛そうな表情をみこに見せずに済むのだ。それだけは、ありがたかった。

視力も言葉も、体の自由さえ奪われた白亜に残されたのは聴覚だけ。

吹雪の音と、被せられていく雪の音。みこの微かな息遣い。

耳に入ってきていたそれらの音さえも、やがて聞こえなくなっていく。

……弱い子でごめんなさい、お姉ちゃん。でも、白亜は頑張りますから……。

だからっ、だからどうか ……。

生き埋めにされた白亜は、祈りながら静かに涙を流し続けていた。

容赦なく吹き付ける吹雪の中、降り積もる雪のことも考慮した上で白亜の上に雪を被せ終えたみこは……。

「頑張つてね、白亜ちゃん……」

少女を埋めた場所を悲しそうに見つめながら、ぼろぼろになった両手を組み合わせ、しばし祈るように目を瞑った。

組み合わせられた手から滴り落ちる赤が、雪に埋もれていく。

やがて深い悲しみを湛^たえた表情を打ち消したみこは、二人の少女がいる雪原へと踵^{かかと}を返した。

彼女が去った凍てついた大地には、赤い足跡が点々と続いていった。それさえも、激しい雪は覆い隠していく。初めから、血など一滴も流れていなかったかのよう……。。

第35話 雪と悩みとお風呂の二人

白亜を生き埋めにして、雪原へと一人戻ったみこは、その傷一つない手のひらを見つめながら内心嘆息した。

……ささやかな痛みさえ、もうないんだね。

凍てし雪原の雪。通常ならば道具を用いて扱うそれを、あろうことか素手で掘り起こし、かき集め、鋭利な部分を削って、白亜の体に被せていった。

その結果、とても鍛錬などしているとは思えないようなみこの手は、酷い有様になった。

不思議と柔らかさの保たれた、しなやかな手のひらには幾筋もの裂傷が刻まれ、繊細な指先は痛々しいほど歪な形になり、適度な長さを整えられていた爪は残らず姿を消していた。

それなのに、今のみこの手には何の傷もなく、その名残すらない。剥がれ落ちたはずの爪も、何事もなかったかのようにそこにある。傷など、最初から負ってすらいなかったのだろうか。そんな疑問さえ抱いてしまいそうになる。

そうなってしまうのもすべて、それが現実のものだと知らしめているはずの痛みがないことが原因だった。

……傷、治っちゃった。

術式を用いて強引に治療したわけではなく、自己の回復力で自然に治癒したために痛みもなくなった。凍てついた雪が固まった大地を力任せにほぐした足も、同じく完治している。これはたったそれだけのこと。

みこはそれが悲しかった。他人に苦痛を与えておいて、自分だけ

はすぐに楽になってしまふ。

見習いも含めた都守の巫女には、強力な自然治癒力が備わり、その治癒力は負傷と治癒を繰り返すことにより強いものになる。そのため、傷や怪我の治りが常人のそれをずっと上回っていること自体は不思議なことでもない。

……不思議なことじゃない、か。私の自然治癒力が、他の誰よりも強力なものでなかったら、そう思えたのに。

魅^{みほり}被^ひによつて、普段生活している領域においては自然回復力も大幅に制限されているのだが、どうにもその領域を離れると一気にその効力が弱まるのか、ちよつとした傷くらいならあつという間に治つてしまふ。

自分で張つた結界の中においては、そうならない。普段とは違う領域に組み替えても同じだった。何かしら条件があるらしい。

……ちやんと気をつけとかなないと、ね。

何もしていないのに傷がすぐに治つてしまふのは、いくらなんでも気味が悪いだろう。

軽傷ならともかく、負傷の種類や度合いによつては、とても見せられたものではない光景が繰り広げられるのだから。

「ええつと、二人は……つと」

本来ならば戻つた時には視界に入っているはずの、せりとなずなの姿を探す。

どれだけ長く見繕つてもせいぜい三時間ほどしかこちらで過ごしていないだろうから、まだ倒れたりはしていないと思つていたが、遮蔽物^{しゃへい}なんてまるでない空間なのにどこを見渡してもその姿が見当

たらないとなると、二人仲良く雪のベッドに沈んでいると考えるべきか。

周囲に感覚を広げて反応があった場所に足を運ぶと、

「さ、寒いよ、なずな……」

「せり……」

そこには抱き合ったまま雪の中に寝転んでいる、もとい倒れ込んだ二人の姿があった。

寒さからせりを守るように、なずなが下敷きになって抱きしめていた。

……これはしばらくかかりそうだねえ。

どうやら二人には、じっくりたっぷりと雪原を堪能してもらうことになりそうだった。

静かに降り積もる雪の中、みこは誰にともなくわざとらしく肩をすく竦めてみせた。

それから丸一日分の時間が経過した。

今頃せりは雪原の雪の中で悪夢に迷い込んだような、生きた心地のしない気分でののだろうか。

飢えや寒さ、呼吸のできない苦しさに加えて、雪という物理的な障害によって視覚さえ奪われ（透視は今のところできないらしい）、果てはなずなとの繋がりも一時的に妨害しているので、下手をする_と気が狂いそうになっているかもしれない。

命に別条があるというわけではなく、精神的に狂うことさえできないようにしてあるが、みこは心配せずにはいられなかった。自分

でやったこととはいえ、いや、むしろそんな状態にした張本人だからこそ、せりの身を案じているのだ。

せりを埋めた雪の上では、なずながぺたんと座って陣取っている。寒さに多少なりとも慣れたらしく、寒そうにはしているものの、ここに来た当初に見せていたような耐え難い^{がた}というのが見てわかるほどの反応はすっかりなくなっている。

もう少し精神的に余裕のない状態になるものと考えていただけに、これは意外だった。

それならばと、せりを雪漬にしている間に力の扱い方を教えようと思い、基本的なことをなずなりに手解きしていたところだった。

そんな彼女の目の前には、杯のような形をした白銀色の台座があった。そこには手のひら大の透明な水晶玉が飾られている。

みこが忘れ物を取りに一度戻ったついでに持ち込んだ物だ。

「えっと、この水晶にお札^{ふだ}を翳^{かざ}しながら、さっきやったみたいにお札に力を集めればいいんだっけ？」

二本の指で挟んだお札を不思議そうに見つめながら、なずなが確認する。

「そうだよ。力をきちんと自分の制御下におくことができているれば、水晶は青色系統の色に。余計な力が注がれていたりして、制御がきちんとされていないときは赤色系統の色になります。ずっと青色系統の色を出せるようになるのが目標だよ」

「ん……」

軽く頷くと、早速お札を翳して集中し始める。

「それじゃあ私は向こうに行くから、なずなはそこで練習しててね。

絶対にせりを助け出そうとかしちやだめだからね？」

そう念を押して去ろうとしたところに、声がかけられる。

「みこ、その前にお願いなんだけど、わたしが動けないように雪で封じてよ。この鍛錬に姿勢は関係ないんでしょ？」

「え？」

「埋めるのがだめって言うなら、わたしを雪塗れにして。せりだけ冷たい雪の中だなんて、やだ」

「そういうわけにはいかないよ。それを我慢することが鍛錬なんだから」

「……………」

「……………なずな？」

「ごめん、みこ。今は忘れて。わたし、頑張るから」

透明だった水晶が、紫色のような赤とも青ともつかない微妙な色合いに染まっっていく。

「力を使っているかどうかはわかるから、サボったりなんてしたらお仕置きしちやいますからね？」

なずなの真剣な横顔を見ながらにこやかに言い残して、みこは再び吹雪の地へと境界を越えた。

「それじゃ、今の内に……」

容赦なく吹き付ける吹雪の中、少女は佇んだまま微動だにせず祈る。

胸の前、組み合わせられた手の内にある物を完成させるために。

雪原から戻り、幾らか時計の長針が進んだ頃。

姿見に映る己を見て、みこはなにやら悩ましげな表情を浮かべてしきりに首を捻っていた。

「……やっぱり、巫女服こねはないかな？」

紗希からの連絡を受けたところ、どうやらもう少し時間がかかるそうだ。

予期せぬ時間の空白ができてしまったせいか、このまま巫女服で行ったものかといったことを考えてしまい、気がついたらクローゼットの中を覗いていた。

巫女服姿で出歩くのが嫌とか恥ずかしいとか、そういうわけではない。

私服で行った方が、紗希は喜ぶのではないだろうか。電話での反応から、何となくそんな気がしていた。

加えて言えば、巫女服という一見するとコスプレしているとは思えない格好で隣を歩かれるのは、やっぱりというか、できる限り遠慮したいのではないだろうか。

「でもあまり時間かけたくないし……」

手間取りそうなら連絡を入れるのは当然だとしても、下手に紗希を待たせてしまうととなると、もしその間に一人で外出されたりすれば、その隙に襲われてしまいかもしれないのだ。そんな事態は避けなければならぬ。

「うーん、安直な気もするけど、楽ししワンピースでいいかなあ」

すると巫女服を脱ぎ捨て、一人ぶつぶつ言いながら適当に手近なものを取る。

「ってこれ、コスプレ用……」

何となく取り出したのは、紗希の愛読している漫画のヒロインが着ているワンピースを再現した物だった。

生地が頼りなく布面積も少ない、ちよつとえっちな感じのする代物で、漫画の中ならともかく、色々見えてはならないものに対する鉄壁の守りは、現実においてはまるで期待できない。

頼みの内容の恥ずかしさからか、顔を真っ赤にした紗希に、「一度だけ、一度だけでいいからこれを着て見せて！」と、プレゼントされたのを覚えている。

エプロンドレスやロリータ、漫画の登場人物やオンラインゲームなどの様々な職業の衣装など、そういったコスプレ物は他にも多数存在する。

紗希にコスプレをせがまれて以来、何かの拍子に目にしてかわいいと思ったものを、調子に乗って集めていたらそうなってしまうた変わった趣味の方からとある交換条件 要するに撮影会 を持ち掛けられ、その際に貰った物もある。着る機会はそれほどないというのが、残念でならないといえそうなる。

「こんなの着ていたら変態さんだよ……。ほんとにどうしよう」

衣装をそつと戻しながら、何かちょうどいい物はないかと物色を続ける。

適当に引つ掴もうものなら、何が飛び出してくるかわからない。今のようじ。

誰かに意見を貰うことも考えはしたが、一番訊きやすい相手は紗希なので、そういうわけにもいかない。今から訪ねようという相手に服の相談をしてどうするのだろうか。

かといって、せりとなすなは鍛錬後の調整中である。異常がないかを調べるために簡単な検査を受けてもらい、その後は冷え切った体を徐々に温め、しっかりと休息を取って体調を整えるということに専念してもらわなければならないので、その妨げとなるような行動はしてはいけない。

白亜は、ちょうど鍛錬を終えて戻ってきた未那夜によってお風呂へと連行されてしまっている。あの娘なら特に調整せずとも、その身に宿した巫女の力が勝手にどうにかしてくれるだろう。氷柱つらなで穿うがった手足も、あちらから戻ってくる前にその傷は塞いである。痛みこそ残っているが、行動に支障がでるようなことはないだろう。

ただ、いくらなんでも即座に体の感覚が元通りになるわけではないので、いきなりお湯を被るうものなら、火傷をするのと同じ痛みを味わうことになる。肌への影響はない。

なので、まずは水浴びからということになる。今なら水でさえ熱く感じるだろう。

その辺は未那夜も体で経験しているから、配慮に欠くことはない……と思いたい。

……未那夜ちゃん、暴走してなきゃいいんだけど。

そう思うと急に心配になってくるけれど、とにかく、せっかく二

人っきりの時間を得たところに、みこが下らない用事で割って入って従姉妹の恋路を邪魔しては悪いので、こちらも頼れない。

「いっそ魅被に……」と思いはすれど、それはあまりにも恐ろしくてできない。

出かけるのに着ていく服さえ選べないような娘には、きついお仕置きが待っていることだろう。

「焼き饅頭とかされたら最悪だよ……」

意味は名前から察して欲しい。

焼かれたら周辺組織諸共どろどろに溶ける。

とても敏感でデリケートな部位なので、そこが焼かれる苦痛たるや想像しただけで体が震えてくる。

そんな傷さえ元通りに治せてしまうのが、術式とその原動力たる巫女の力の凄いところではある。だがその代わり、苦痛は残るだけでなく確実に悪化する運命にある。むしろそれこそが本当のお仕置きで……。

……っ、これ以上考えるのは止めとっつ……。

みこは我知らず内股になっていた。

「だめだめ、そんなの絶対だめ！」

とはいえ、このままうだうだ悩んでいても決まりそうもない。

……っ、着ていく服であれこれ悩むのって、デートする訳じゃないんだから……。

「ん、デート……?」

普通、デートといえば気のある男女が行うものだろう。そう、男女。女の子だけではないのだ。つまり、男の子。

そこで、みこはもう一人意見を聞くことのできる相手を思い出した。

「しょうちゃんがいるじゃない！」

これは名案だとばかりにポンと一つ手を打つと、みこは部屋を飛び出していった。

自分がどんな恰好をしているかなどまるで鑑みることなく、そのままの姿で。

……確かしょうちゃんは、今のままじゃいつか力不足になるからとか言つて、いつも朝から家の施設で鍛錬してたから……。

昨日までは見張りの任についていた彼も、今まで通りの生活リズムに戻っているはず。

翔雨がいるとするならば、地下一階の道場だろう。

この時間帯は誰も利用しないので、男一人で黙々と刃を振るったりするのはちようどいいらしい。

白蒼乃七枝はくそうのななやを扱うようになってから、彼がよく通っているのもそこだ。

幸か不幸か、みこは誰にもその姿を見られることも咎められることもなく道場へと辿り着く。

控え目なノックに応じる声は、間違いなく彼のものだ。

「ねえしょうちゃん、ちょっと聞きたいことが　　ってあれ？」

お邪魔しますと一礼してから足を踏み入れ、早速本題を切り出そ

うとしたみこは首を傾げた。

こちらを振り向こうとした袴姿の翔雨の体が、その途中で氷結したかのように動かなくなったからだ。

手から零れ落ちた白蒼乃七枝が澄んだ音色を奏でる。

「なっ……なっ……！」

本来発されるはずだった言葉は彼の思考から消し飛び、開いてしまった口からは言葉にならない呻きが零れるばかり。

その顔に浮かべられた驚愕に、どうしてそんな反応をされているのか本気でわかっていないみこは疑問を抱く。

「えっと、どうしたの？　なんか、驚かせちゃっ……た？」

まずは疑問を解消しようとして訊ねてみれば、翔雨は思い出したかのようにくるっと反転してみこに背を向け、それから。

「なんで……、なんでそんな格好してるんだこの馬鹿みこ

「！」

「うひゃあっ！？」

音がよく響く室内にあつて、翔雨の叫びは、一種の衝撃派のようになつてみこを襲った。翔雨の前ということもあり完全に気を抜いていたため、ぼてんと尻餅をついてしまう。

「うう……。いきなり叫ばないでよ……」

床に座り込み、強かに打ちつけたお尻に手を伸ばそうとしたところで、ようやくそれが視界に入る。

白い、なぜか日焼けなどとは無縁な肌。そこには、服どころか下着すら存在しなかった。

色々なところが、というより、およそ年頃の男の子に見せるべきでない胸のあれやら股間のそれも含めて、何もかもがもろ見えだった。

「……あ」

みこは自分の部屋でのことを思い出す。

……えっと、やっぱり私服にしようと思って巫女服脱いで、それから……それから？ そのまま、だよな？

凍てし雪原から戻り、氷雪で濡れた巫女服を代えのそれに交換する際、同じく湿った下着は洗濯に回したが、こちらは「どうせ巫女服姿でいるだろうし、別になくてもいいかな」と新しく身に着けることはせずに脱いだまましていた。

そのため、部屋で巫女服を脱ぎ捨てた段階ですでに一糸纏わぬ姿を晒していたということになる。

しかもそのまま家の中をうろつき、あまつさえ同じ年の男の子の前にその身をさらけ出している。

みこはようやく、いかに痴女的な行いで翔雨に迷惑をかけてしまったのか理解した。これでは言い訳のしようもなく変態さんである。よく誰にも見られなかったものだ。来客とばったり出会ってなんてことにならなくてよかった。

「じ、ごめんなさい。私、こんな恰好で……。あつ、あのつ、でもね、しょうちゃんになら、見られてもいいよ？」

立ち上がったみこは、手で胸などを隠そうとはしなかった。

みことて人並みに羞恥心は持っている。だがそれ以上に、相手にそういった気持ちで微塵も悟られないようにしようとしてしまう癖が、長年の教育によって染み付いていた。

それでも、鍛錬や本番以外の場においてここまで平然としてられるのは、相手によるところが大きい。

絶対に振り向いたりはしないという信用と、それなりに裸の付き合い（みこによる半ば強引な混浴。しかも無自覚）があるせいだ。

普段ならばちゃんとできるだけ隠そうと努力はするし、顔をほんのりと赤らめたりするぐらいのことはしていても全くおかしくはなかった。さすがにきゃーきゃーと口やかましく悲鳴を上げることはしない。

逆に言えば、裸を見られてもその程度の反応しかしない、とも受け取ることができる以上、みこの羞恥心が人並みのものであると言えるのかについては、疑問を差し挟む余地が多々ありそうだが。

「みこがよくても、俺はそうじゃないんだよ」

みこの状態を察しているのか、翔雨は背を向けたままで応じる。

「ほっ、ほらっ、私たち、一応許婚だよ？ 将来的には一つになつたりもすることだし、ね？」

幼少期からそれなりに付き合いがあるとはいえ、果たしてみこは翔雨をどこまで異性として認識しているのか。

将来的も何も、今この場で襲われかねない状況を、とてもではないが理解しているとは言い難い発言だった。

「何が、ね？ なんだが……。さっさと服を着てこい」

とある思いからその胸中に抱える言葉を告げずにいる翔雨は、動

揺を表に出さないように苦心しながら、これ見よがしに肩をすくめて見せる。

毎度この手の誘惑に抗うことになるこちらの身にもなって欲しいものだなと、内心でぼやきながら。

翔雨を試しているのか、それとも無意識か。どちらにしても、はた迷惑な話だった。

「それがですね、その……」

「一応訊こうか。どうした？」

その場を動こうとしないみこの気配に、翔雨は諦めたように言った。

「たまには私服もいいかなあ、なんて」

翔雨の心境を穏やかならざるものに行っているとは露とも思っていないみこは、遠回しに話を振った。

「私服とは珍しいな。家に居るときでさえ大抵巫女服なのに」

「それでね、何着ていったらいいか、中々決められなくて。しょうちゃんの意見が欲しいの」

そうすれば、しょうちゃんの好みもわかるよね？

誰にも聞こえない声量で、そう付け足す。

ちなみに、今になってそのことに気がついた。

それを意識した瞬間、みこは体の奥に火照ったような熱が生まれたのを自覚した。

……あれ、なんで急に……？

「よりもよって俺の意見？ 女の子の服のことなんてさっぱりだぞ？」

「……え？ あ、うん。それは大丈夫だよ。いくつか質問するから、それに答えてくれればいいの」

心も体もきちんと制御できるはずなのに、どうして乱れたのか。意図せず体が熱くなった理由がわからず釈然としない気持ちを抱きながらも、今考えるべきものではないと気を取り直す。

「………………。答えられるものなら、な」

……………ん？ ま、いつか。

微妙におかれた間に首を傾げながらも、一応の了承は得られたので質問を開始することにした。

「ありがとう。それじゃあまずは」

数分の後、気恥ずかしさのあまり二人の間に微妙な空気が漂ったのは、ある意味必然だったのかもしれない。

都守の屋敷には、一般家庭にあるような浴室の他に、ホテル等の

宿泊施設に見られるような大浴場も備えられている。

時間によれば娘達でかましい大浴場も、まだ朝の時分においては人気もなく、静けさの中でお湯の湧き出る音だけが控え目に響いていた。

そんな浴室から扉を隔てた先、閑散とした脱衣場には二つの小柄な姿があった。いずれも、どこか幼さを残す面立ちと未成熟な体つきをしている、十四歳くらいの少女である。

その片割れ、髪が背中の半ばまである少女が、ぎこちない動作で苦勞しながら脱衣しているもう一人の少女に呼びかけた。

「白亜ちゃん大丈夫？ よかったら手伝うよ？」

白亜と呼ばれた少女は一瞬悩むような様子を見せ、

「ごめんなさい未那夜さん、お願いします。かじかんでいるせいで、体が思うように動かなくて……」

身の安全と不自由さを天秤にかけた結果、申し出を受け入れることにした。

同じベッドで寝ていても、白亜の同意を得るまでは絶対に手を出さないと、初めて一緒に眠った夜に未那夜は約束し、現にそれは守られているので、白亜はそれなりに未那夜を信用するようになっていた。

「気にしない気にしない」

白亜の胸中をよそに、すでに準備完了な未那夜は嬉々として白亜を脱がしにかかる。

「おっふる～おっふる～白亜ちゃんとおっふる」

ついには喜びのあまり歌い出す始末だ。

未那夜はそんなテンション鰻登りの様子を見せながらも、白亜の服を脱がせる手つきは決して荒くなく、ましていやらしいものでもなかった。丁寧かつ慎重で、無理に脱がそうというものでもない、あくまでも手伝いとしての動きに留まっている。

「う、嬉しそうですね……」

白亜はやや引きつり気味の笑顔を浮かべた。

手伝ってもらっている身としては心苦しいところではあるが、ちょっと怖いなと思うってしまう。

今の状態では満足に抵抗することもできないのだ。

どの道、本気で襲われたりすれば抵抗の余地なく純潔を奪われてしまうだろう。

幽霊にそんなものがあるのかは、いささか疑問ではあるが。

「ごめん、怖がらせちゃったね……。嬉しくって、つい」

白亜を怖がらせてしまったことに気づいた未那夜は申し訳なさそうにしながら、静かになって作業を続けた。

「よし、これでオーケーだね。いこつ、白亜ちゃん」

白亜の準備が整うなり、その手を引いて未那夜は浴室へと向かう。

「あの……、未那夜さん？」

「ほい？」

「その、未那夜さんも鍛錬を終えたばかりなんじゃ……?」

「うん。帰ってきたばかりだよ」

「体は平気なんですか?」

「もちろん平気だよー! って、ほんとなら言わないといけないんだけどね」

元気よく言ったかと思えば、白亜ちゃんには嘔吐きたくないからと、未那夜は苦笑いする。

「すつごく辛い。許されるのなら、今すぐ心を切り離して痛みから逃れたいよ?」

そう口にした未那夜は、日頃の鍛錬の賜物たまものなのか、口振りの割にはそれほど辛そうには見えない。

平時の表情とすべきだろうか。無表情とはまた違う、いつもの未那夜の表情で、どこかを痛めているとは全然思えない、いつもと変わらない未那夜の立ち姿がそこにある。

さっきまでの嬉しそうな様子を目にしているだけに、白亜はつい疑いそうになる。

しかし、疑いそうにはなるけれど、嘘とは思わない。白亜とて都守の巫女の見習いとして、その鍛錬の一端を経験ないし垣間見た身なのである。そういう風に振る舞うことが義務であり、鍛錬とはそれができるようにすることも含めてのものであることを承知している。

都守の家系に生まれた者には、それがより徹底されていることも。部外者を驚かせないために、見かけこそ何事もなかったかのようにキレイさっぱり治療する事が多いとはいえ、重症の苦しみや重傷

の痛みを負っていることが平時なのだとすれば、彼女らにとってのそういった類の異常とは、一体どのような状態を指すのだろう。

家系外の巫女も似たようなものだが、血筋の者に比べればずっとマシで、扱いても丁寧だった。

「こういうのは慣れっこだし、お互い様じゃない？ 白亜ちゃんだって、今は全身を炙ら^{あぶ}れてるようなものだよね？ ぼくが迂闊^{うかつ}に触れたら、酷い痛みになるだろうし。それに、今日はそんなにグロイことされたわけじゃないから。今日の痛みはそうだねー、せいぜい壁とかに足の小指を思いつきりぶつけちゃって骨折したときのようなものでしかないよ」

「地味ながらそれもかなり痛いですよね？」

「間髪入れずにツッコミありがとう」

「ど、どういたしまして……？」

にこーっと眩しいくらいの笑顔を見せる純粹に楽しそうな未那夜と、少々戸惑い気味の白亜は、桶とタオル片手にぺたぺたと小さめなその足で、タイル張りの床を踏みながら洗い場へ直行する。

未那夜は白亜から少しだけ間を開けたところに位置取った。

シャワーを使用した際、白亜にお湯がかかってしまわないよう配慮してのことだ。

隣に行きたい。もっと近くにいたい。お互いに洗いつこしたい。彼女に……白亜に触れていたい。

そういった気持ちをも、未那夜はぐつと堪える。

今そんなことをすれば、余計な痛みを与えてしまうから。

今にも動き出してしまいそうな体を強い意志で抑え込む。

大好きな“ねえさま”であるみこがするように、白亜の痛みを引

き受けてしまえばこんな事をする必要もないが……。

そう、痛みを引き受けてしまえばいい。

そんな嘔きが頭の中で聞こえた気がした。

未那夜ははっとなって、そのような考えを追い出すべく内心でぶんぶんと首を振る。

一体何を考えているのだろう。みこは必要と判断しなければ痛みを引き受けたりしないのに。今はそんなことをしていい時ではない。それは白亜の鍛錬を妨げるようなものではないか。

「……………」

「……あの、未那夜さん？」

「ふえっ！？ え！？」

物思いに耽^{ふけ}っていた未那夜は、白亜の困ったような声で現実に引き戻された。

未那夜を見つめる目には警戒の色がありありと見て取れた。

「その、どうしたんですか？ ずっとこちらを見ていたようですけど……。白亜にどこか変なところでもありますか？」

本能が身の危険でも察したのか、白亜は意識しない内に未那夜から距離を取るように及び腰になっていた。

「い、いや、その、これは……」

軽くパニック状態になってまともに応えられない未那夜をよそに、白亜は自分の体へ不安そうな視線を落とし、手でなぞっていく。

形がよくわかる鎖骨。控え目な二つの膨らみ。引き締まった腹部

に、くびれてはいるものの丸みに乏しい腰周り。小振りなお尻と、そこから伸びる細い脚は柔らかさとは無縁のよう。

元々体が弱かったせいで肉付きはよろしくない。全体的に線が細いせい、か弱く儂い印象を相手に与えてしまう。そんな、あまり好きではない自分の体を改めて観察し、憂鬱ゆううつな気分になる。

もう育つことがない分、余計に。

やっぱり貧相ですよ、こんなの……。年相応といえばそんなのかもしれないですけど、もう少しくらい、こう……。というような嘆きが聞こえてきそうなくらい、白亜は目に見えて落ち込む。

一般的な人と比べれば、生前の体調や鍛錬からして普通どころかマシなくらいなのだが、比較対象が問題だった。

体調はともかくとして、似たような環境で育っているのにもかかわらず、出るところが出ている娘や、細身な見た目に反してその肉感からは柔らかさを感じさせる娘の方が多いせいで、その辺の感覚がおかしくなっていた。

白亜と同じく体の弱い娘もいたが、そういった娘の中にすら“らしい”体つきになっている娘がいるのだから、尚更だった。

むしろそちらの方がおかしいといえばそうなのだが、都守においては割と普通だったりするから恐ろしい。見る側からすればいい意味で。持たざる者からすれば……。色々とよろしくない部分がある。

「ああそついえばなずなさんもぺったんこですよねそうですね結局遺伝子ですよ。どうせ白亜の家系はだってお母さんも小さかったですし所詮人間には抗えない運命というものが……」

「は、白亜ちゃん！？ どうしたの!？」

いきなりぶつぶつと怨嗟えんさの声を上げ始める白亜に、どうにか落ち着きを取り戻した未那夜は、今度は困惑することになった。

どんよりとした暗いオーラでも纏っていきそうな雰囲気になった白

亜は未那夜を一瞥すると、

「……………はあ……………」

盛大に溜息を吐いた。

「ええっ!?!」

どうしてそのような態度を見せつけられるのか。未那夜は当然わからない。

軽くショックを受けたものの、それ以上になぜ白亜が急にこうなってしまったのかという気持ちでそれどころではなかった。

それもそうだろう。

確かに未那夜の胸は、今はまだ白亜とそれほどかわらない程度のものしかないが、そのなだらかな丘はやがて立派な双丘へと変貌を遂げることが約束されているようなものだからだ。

みこも魅抜も大きいのだから、きつと未那夜の母親のそれも大きいはず。となれば、もうまもなくすくすくと成長を始める頃合いだろう。もちろん、体つきだってそうだ。一目見ればつい手を出したくなるような、男女を問わない垂涎すいぜんの一級品に仕上がるのは間違いない。

たとえ生きていたとしてもそういうものとは縁遠い白亜にとっては、羨ましくてしょうがなかった。

「あの一、白亜ちゃん?」

「未那夜さん……………何でしょうか?」

白亜は力なく返事をしつつシャワーを手に取って水を流し、それをそのまま足先からゆっくりと体を慣らすようにかけていく。

「さっきのは一体……どうしたの?」

未那夜が問いかけると、白亜はびくつと体を震わせ、

「ふえっ!? な、なんでもないでしゅよっ!?!」

発言の際、自分の舌に大きなダメージを与えた。

「白亜ちゃん、噛んでる噛んでる。それじゃあ何かあるって言うてるよつなものだよ?」

「うう……その、ですね……」

「えっと、言いたくないなら、無理には聞かないよ?」

羞恥で顔を赤らめ、口に手を当てている白亜の姿が痛々しく思えて、未那夜はこれ以上の追及はかわいそうだからしないことにした。

「そ、そうしてもらえると助かります。ごめんなさい……」

「そっかぁ。白亜ちゃんがそう言うならそうするね!」

そう言って、未那夜も気を取り直して体を洗い始めた。

未那夜は上機嫌に鼻歌を歌いながら、時々白亜の様子を盗み見る。さっきのことを気にしているのではなく、単純に彼女の姿を見たいからだ。

一通り水を浴びた程度なのにすぐにお湯に切り替えていながら、白亜は苦悶の表情は一つも見せない。他の娘なら顔をしか顰めるくらいはしているだろう。

「白亜ちゃん、もうお湯浴びてるけど平気なの？ 痛くない？」

「あ、はい。大丈夫です。これくらいなら、平気です」

「そう？ なら、いいんだけど」

きつと痩せ我慢をしているだけだとは思ったが、ここは何も言わず黙っておくことにした。こんなに早く体が慣れるはずがないのだから。

鍛練は久しぶりだったということまで心配していたのだが、痩せ我慢をする余裕もあるようでありよりだった。

それはそれとして。

未那夜としては白亜には自分を大事にして欲しいと思うので、

「ね、ね、白亜ちゃん。洗い終わったら水風呂行かない？」

「えっ……？ お湯に浸からないんですか？」

「もちろんお湯にも浸かるよ？ でもその前に、少しだけ。んでもって遊ぼ？」

彼女がちょっとでも楽になるよう、策を弄もよほしてみたりするのでした。

第36話 見守る者、見守られる者

夏空に浮かぶ太陽は、今日も今日とて、地上のすべてを焼き尽くさんばかりに、熱い陽射しを容赦なく注いでいた。

薄い雲がちらほら浮かぶ、青所々白の空。

いい天気なのは嬉しいけれど、少しくらい曇ってくれた方がありがたいかなあ。

そんなことをぼんやりと考えながら、私服姿のみこは神社から駅まで向かう坂道を下っていた。

普段は巫女服姿で駆け回っているし、学校へ行くときは制服といった具合なため、こうして私服姿で出歩くことの方が珍しいのは、嘆いた方がいいのだろうか。

駅までの通りに居並ぶ商店はもう間もなく営業開始なのか、見かけ上は日中のそれに近かった。その内の多くは観光客を主なターゲットにしている。昼時には人通りも増えて賑わっていることだろう。夏休み故か、普段は学校にいる子供らの姿もちらほら見える。それなりの荷物を持って家族で歩いているのは、これから帰省するのか、はたまた旅行に向かうのか。

そういった光景を横目に入れながら、手提げ鞆と日傘を携え、暑がっているとはとても思えないほど涼しげな表情で、「今日も朝から暑いなあ」などと誰にも聞こえないよう小さく呟く。

いつも通り、見かけと言っていることがまるで一致していない。

仮に今ある雲が太陽に被さったとしても、果たして気休めになるかどうか。もう少し層の厚い雲でなければ何も変わるまい。

週間の天気予報は、すべてが赤いお陽様マークで埋め尽くされていたので、しばらくは暑い日が続きそうだ。

「お洗濯ものがよく乾くのは、嬉しいんだけどね……」

とはいえ暑過ぎた。みこは何事も度が過ぎるのはよくないと思っ
た。

お前が言うなという幻聴がしたのは、暑さのせいだろうか。その
声が翔雨のそれだというのは、一体どういう訳か。

呑気に思考を遊ばせている間にも足は動かし続けているわけで、
歩いていればその内に目的地にも辿り着く。

それほど大きな町というわけでもないが、駅周りは開発も進んで
いて中々賑やかで、駅舎も結構立派なものだ。

こうした人通りの多い場所では、みこはその外見から必然的に周
囲の人の視線を集めてしまう。

胸を中心として向けられる、主に男性時折女性の、ちらちらとし
た遠慮がちだったり、じーっとした無遠慮だったりする視線を、少
なからず感知する。

その視線の中に、いくつか微妙に違う種類のものが混ざっていた
が、特に疑問に思うこともなかった。いちいち気にしていたら、出
歩くことなどできやしない。

そんな視線の中を、いつものことだからと、素知らぬ顔を維持し
たまま通り抜け、みこはその姿を人で賑わう駅中へと消した。

とある重大な事実には、気づくことなく。

その様子を、恋い焦がれる乙女のような視線で見守っている者が
一人いた。

駅前のバスターミナル。その停留所の雨除けの上に、少女が腰か
けていた。

誰に咎められることもなく、それどころか、みこにすら気づかれ
ず。

「ああ、お姉ちゃん。あの女のところに行くんだね？ いつもより
も歩くペースが零コンマ七秒くらい速いよ。そんなに嬉しいんだね。

そんな姿を見せられたら私、妬いちゃうよ……?」

その少女は、みこをそのまま数年ほど幼くしたような 具体的には十二歳くらいの 容貌をしていた。似ているなどというものではない。年齢差がなければ、全く同一と言ってもいいかもしれない。

幽霊となって今もこの世に留まり続ける、みこの妹　みさその人だった。

「ああつ！ お姉ちゃんつてば“また”ブラジャー忘れてる！ あれだけジロジロ見られてるのに、どうして胸の先の突起に気づかないんだろっ?」

幽霊であれば服は自由自在に構成できる。そのことを知らないはずはないのに、なにを思ってたか、みさはどこか死装束めいた白一色の着物を身に纏っている。

「というか、どうやってたら忘れられるんだろっ? そういう変に抜ける不思議なところも好きだけど、妹としてはちよっと恥ずかしいよ……」

文化祭か何かで、お化け屋敷の幽霊役を嬉々として演じているかのような、どこかそういう雰囲気がある。

実際、みこが通りかかるまでの間に、暇を持て余していたみさは何人かを驚かせて遊んでいた。

みこを眺めていたのはついでで、本命は別人なのだが。

「ん……、よくわかったねー。お姉ちゃんですら見つけられないのに」

それは唐突だった。

傍には誰もいないのに、みさはまるで誰かがそこにいるかのように語りかけた。

音もなく、彼女の細い首筋に独特の形をした刃が背後から突き付けられる。

「……動くな」

その刃は一つの刀身から小さな刀身がいくつか枝分かれしていた。

翔雨の愛刀、白蒼乃七枝だ。

そんな危機的に見える状態にあっても、みさに動揺の色は見られない。むしろ、こうなることがわかっていたかのように落ち着き払った態度で、

「お姉ちゃんにも、実はとっくにバレてたりするのかな？」

後ろを振り返ることなく、どこか意味ありげな微笑みさえ浮かべている。

それだけ余裕があるということでもあった。

「ねえ、翔雨さん？ おはよーございます。今日も暑いねー」

「俺にだけわかるようにしておいてよく言う。妙な真似をすれば斬る」

みさの真後ろに何の前触れもなく現れた翔雨は、まともに応じる気はないとばかりに、冷たく突き放したように告げる。

鍛錬の後すぐにこの場に出向いたのか、袴姿のままだ。

みさと同様、翔雨もその存在を誰にも気づかれてはいない。

もしみさが振り返っていれば、彼の周りの空間だけが陽炎のごと

く揺れ動いているように見えただろう。

「今日はお姉ちゃんも楽しそうだし、手出しせずにこのまま見物してるつもりだよ？ だからさ、そんな怖いものしまつてよ翔雨さん」

みさは降参とばかりに、両の手を肩の上まで移動させ、ひらひらと振って見せる。手の動きにつられて左右に揺れる袖は、その色もあつて白旗めいていた。

「……………」

翔雨は一言も発さず、動く気配もない。

「うう…………、翔雨さんのいじわる。いいもん、別にそんなの怖くないもん。死ぬほど痛いだけだし！ もう死んでるけど！ 生きてた頃の鍛錬の方がずっと辛いもん。あれ、思い出したら涙が……………」

傷ついたような顔になったかと思えば、拗ねたような表情になり、それはたちまち膨れっ面に変化を遂げ、あつと言つ間に泣き顔へ。

みさは感情のままに、コロコロと顔色を変える。その様はまるで猫の目のようだ。

自身にそっくりな年上の誰かさんとは違って、曖昧に笑ったり思つたことを表情に出さないようにすることなく、自分の気持ち素直に表へ出しているらしい。

「そうだな、戯言たわごとを続けるようなら一回くらい斬るか」

「え、ちょ、まっ」

首筋に感じていた刃の冷たい気配。それが揺らいだと意識した瞬

間、肩から腰にかけて斜めに描かれる青白い軌跡。

「痛いよ！ 何もほんとに斬らなくてもいいじゃない！」

あんまりな扱いに、つい振り返ったみさは、刃が辿った跡に血色の液体を滲ませながら涙目で訴える。

「まったく、私はお姉ちゃんみたいに我慢強くないんだからね！」

勢いよく体を捻るように動かしたせいでさらなる痛みに襲われたのか、身体を丸めて「うぐっ」とくぐもった声を上げた。

「うーっ！」

体を丸めたままの姿勢で、威嚇いかくするように唸る。

睨むように鋭くした目つきを翔雨に向けている様子は、姿勢のこともあってか、尻尾を踏まれ、怒りに燃えて毛を逆立てる猫そのものだ。

なんというか、斬られたくせに割と元気だった。

「痛いで済む問題ではないんだがな……」

普通は切断面から体が二つに割れてしまっはすなのだが、みさにはそれすらない。

これも効果は薄いか……などと、どこか物騒な気配を感じさせるような、そんな響きを内包した呟きが微かに聞こえた。

半ば以上に呆れを含んでいたが。

「これもって……、ちょっと、翔雨さん！ 私に何を試してるの！？」

あっさりと威嚇するのを止めて、みさは困惑を隠さずに訊ねる。

「魂を還す方法だが？」

何を当たり前のことを。

言外にそう言われているとしか考えられないくらい、はっきりとした答え方だった。

「うわあ。そんな躊躇ためらいいなく言い切られると、みさちゃんちょっとショックだよ。でもそれ、無理だけどねー」

「どういうことだ？」

「んーとね……」

直接話すことができないのであれば、別の方法でどうにかして伝えられないものかと、みさは思案する。

数秒の後、額に多量の汗を浮かべ、その一方で、極寒の地の冷気に蝕ほまれているのかと思うほど小刻みに体を震わせながら、

「だーめだこりゃ。ごめんなさい翔雨さん。それ言おうとすると、強く抵抗されちゃって」

あははー、と誤魔化すように笑いながら舌先をちらっと見せる。

「……面倒なものに憑かれているようだな」

翔雨は、みさの様子に何か言いたそうにしていながら、あえてそれについてはなにも言わない。

みさはみさで、そんな翔雨の反応を不満に思つてもなく、むしろ好意的に受け止めていた。

「いやはやお恥ずかしいところを。私には、翔雨さんが前に見た通りとしか言えないよー」

口では恥ずかしいと言つておきながら、意に介している風には見えない。

たとえ相手に心中を見抜かれていたとしても、みさとしてはそういう風に見てもらいたかった。

「それはそれとしてですね……」

先程の症状のためか、ちょっとだけ疲れたような様子だが、症状自体は鎮まった模様で、みさの顔には笑顔の花が咲いていた。楽しそうな、しかしその笑顔を向けられている相手は嫌な予感がある、そんなたにたした笑顔である。

「お姉ちゃんとはどこまでいったの？」

翔雨の動きどころか、呼吸すら止まった瞬間であった。

「おや、その反応はもうやることやつちやつたりしたのかなー？」

「……………」

「あの一、もしもしー？」

「……………生憎、特に何も無いな」

とても長い沈黙を経て、ようやく重い口が開く。
みさは「もう、翔雨さんったら貝じゃないんだからー」と苦笑しながら、

「な、ならキスは？ さすがにそれは済んでるよね？」

次なる質問をぶつけた。

口ではそう言っておきながら、既に頭の中では真逆のことを想像している。

「……………」

やはりというべきか、返ってきたのは気まずそうな沈黙で……。

「そつ……それじゃあ、デートは？ まさか手を繋ぐことさえ未だに二人して躊躇ってたりするの!？」

激しく動揺したみさは、悲鳴のように叫んだ。

動揺のあまり、あらゆるものから自らを隠蔽する術に綻びが生じ、みさの叫び声の一部が漏れ出してしまふ。

何事かと、周囲にいた人々の視線が停留所の屋根に集まった。

だがそこには何者も存在しない。ほどなく人々は、首を傾げながらもそれぞれの活動へと戻っていった。

「……………面目ない」

幾らかの間を置いて、申し訳なさそうな、なんとなく気落ちしていることがうかがえる声が出た。

「あー、えっと、そのー。ごめんなさい……………」

みさは、なんだか悪いことをしてしまったような　ある意味しているのだが　気分になって、罪悪感から謝罪の言葉を口にして

いた。
翔雨の回答も含めて、ある程度はこの状態を予想していた。とはいえ、いざ一番やつかない状態になっていることを確信してしまうと、暗い気持ちにならずにはいられなかった。

顔を伏せて翔雨からは表情を窺えないようにしてから、私のせいだろうなあと、みさは胸の内で呟いて自虐的な笑みを浮かべる。

しかしながら、それも束の間のこと、顔を上げたみさの顔には、何かを決意したような気配が滲んでいた。

「落ち込んだかと思えば、今度はどうした？」

みさの極端な変化に、翔雨は戸惑う。

「実はですね、二人の仲が進展しない理由に心当たりがありました」

「……単に俺がヘタレてるだけじゃないのか？」

「翔雨さんヘタレなの？」

みさが意外そうな顔を翔雨に向けると、

「ぐっ……」

彼はどうしてかその場でよろめいた。

案外そういうことも気にしているようだ。

「大丈夫だよ、わかってるって。翔雨さんは、お姉ちゃんの好きな

よ用にさせたいんでしょ？」

「……あんなのでも一応女だからな。体を任せる相手くらい、自分で選びたいだろ」

みさの指摘はどつやら当たりらしく、翔雨はわざとらしく咳払いした。

やや口が悪くなったのは、照れているせいだろうか。

「へー、翔雨さんは他の人にお姉ちゃんを取られてもいいんだ？」

「あいつが選んだ奴なら、それで構わない」

翔雨はどんな顔をするのだろうか？

そういう思惑もあって、冗談半分興味半分で訊ねてみれば、悩む気配さえなくあまりにもきっぱりと宣言されてしまった。

「……ところで翔雨さん、お姉ちゃんのこと好き？」

翔雨は、姉の気持ちを大事にしようとしてくれている。

その事自体は妹としては嬉しいことのはずなのに、みさはなんだか面白くなって意地悪したくなった。

どつしてそんな風に思うのか、みさには理由がわかっていた。嬉しいのはあくまでも“妹”としての気持ちでしかないということなのだろう。

「どつしてそんなことを訊く？」

怪訝けげんそうに、あるいは戸惑っているようにも見える様子で翔雨は訊ねた。

「いいから答えて。私にとっても大事なことだから」

みさは理由を答えることなく、代わりに相手の目を真っ直ぐに覗き込む。

翔雨の中にある何かを見極めようとするかのように。

「俺は……………」

みこが駅の中へ消え、みさと翔雨が対峙たいじしている一方で。

借り受けている部屋の中、なずなはベッドで眠るせりを心配そうに見つめていた。

検査を終える頃には、なずなはもう目を覚ましていた。片や、せりの方はというと、まるで目覚める気配がない。

鍛錬の内容からして、せりに比べれば随分楽なものだったので、当然といえばそうなのだが。検査を受け持ってくれた巫女さんが言うには、『初めての娘はみんなそうなってしまうものですから、大丈夫ですよ』ということらしいのだが、やっぱり心配なことには変わりない。

だからこうして、ベッドの端に腰かけてせりの顔を見つめていた。時々辛そうに顔を歪めたり、涙を流しながら苦しそうに呻いたり、うなされ続けている。そんなせりに対してなずなができるのは、怖ろしいほどに冷たいその手を握りしめることくらい。

生きているのはわかっているけれど、その冷たさは心を不安にさせてならない。

……………こんなに胸が苦しいだなんて……………。

今自分が感じている辛さ。生きてるとわかっただけでも、胸が押し潰されそうなくらい痛いのに。なら、物言わぬ冷たい屍となったかつての自分は、一体どれだけ辛い思いをせりにさせたのだろう。どれほど痛かったのだろうか？

少なくとも、こんなものとは比べ物にもならないに違いない。

……父さんや母さんにも、だよね……。

幽霊となった今となつては、両親に『ごめんなさい』の一言すら自分で届けられない。

今更な事だけど、みこに頼めばどうにかしてもらえるのだろうか。いや、そんな都合の良いことなど、可能だったとしても頼めるわけがない。手前勝手な理由で死んでおいて　　やや語弊のある言い方だが　　、今更のこのこと謝りにだけ現れるなど、どうしてできようか。あまりにも身勝手だ。

そもそも、どの面を下げて会いに行けと言うのか。

「……………」

愛するせりの顔を声もなく見つめながら、なによりもまず、この娘に償いをさせてもらわなければならないと、強く思う。

一番大切なこの少女にしまった残酷な仕打ちをどう償えばいいのか、半ば途方に暮れながら、なすなは考え始めた。

……それができないようなら、愛してるだなんて口にする資格、ないよ……。

どれくらいの間そうしていただろうか。

不意に、握りしめていた手が握り返された。強くしっかりと。けれど、決して痛くはない。

「……また一人で思い詰めてる」

次いで、落ち着いた声が聞こえた。それでいて、散々泣いた後のような鼻声でもあった。

いつしか下へ向けていた顔を、声の方に向ける。

うつすらと開かれた瞼。どこか悲しそうな目で、せりがこちらを見つめていた。

眠っている内に泣いていたせいで、頬が腫れていることからわかりきってはいたが、やはり目が赤く充血していた。

そんな顔に、酷く悲しそうな表情を浮かべられると、なずなは胸が抉られるような痛みを覚えずにはいられなかった。

眠っている間、夢の中でせりは何を見、思い、感じていたのだろうか。

なずながそんな思考をしているうちに、せりは自由なもう片方の手を、なずなの顔に伸ばした。

それに引き寄せられるように、なずなが顔を近づけると、

「いえ!?!」

頬を指で引つ張られた。それも思いつきり。

「にゃっ、にゃんで!?! っ、いらい、いひゃい、いひゃああっ

!?!」

抓り、捻り、執拗になずなの頬を弄るせり。

「……お仕置きおしまい」

しばらくして、ボソツとした呟きと共に解放される。

なずなの頬は痛々しいくらいに赤く腫れてしまった。

「うう、ほっぺたがじんじんするよう……」

ようやく解放された頬を手で労いたわっていると、

「そりゃそうよ。本気でやったもの」

せりから、何を当たり前のことを、と言わんばかりの視線を向けられた。

「うーっ、なんでさ？ ほっぺた引っ張るなんて、わたし聞いてないよ！？」

さすがに納得がいなくて抗議の声を上げると、

「当然ね。言っていないもの。最初はキスするつもりだったのよ？
なずなが落ち込んだ顔してなかったら、間違いなくそうしてたでしょうね」

感情を隠した、淡々とした物言いで返されてしまった。

その中に、どこか残念そうな響きがあったような気がするの、
なずなの聞き間違いではあるまい。

「そ、そんなあ……」

なずなはがっくりと肩を落とす。

事前に知っていればなあ、などという思いがちらつと浮かんで、
知っててもだめだったろうなあと、一瞬で沈没していった。

落ち込んだ顔をしていなかったとしても、考えていることが同じ

だったら、表情を取り繕ったところで、今のせりにはお見通しだろう。

むしろ、余計に心配させてしまいかねない。

今までだって、あえて口にしないだけで、全部気づかれていたかもしれないのだから。

なずなの生前、せりから向けられる視線に時折混ざっていた、僅かな揺らぎ。

今にして思えば、とっくの昔に。

「本当なら片時も離れていたくない相手と離れてて、ようやく傍そばにいられるようになったと思ったら、そんな顔してるんだもの」

再会して以来、言葉を交わさなかった日は数える程しかない。だからこそ、お互いを引き離されて、一日どころか数日分の時間を経た今は、互いが互いを求めて止まないのだと思っていた。

せりもやはりそうだったことに安堵しつつ、目覚めたばかりの彼女の気分を、いきなり害してしまったのだと今更ながら自覚する。

「うう……、ごめん。せり、怒ってる？」

「結構怒ってます。……あたしのせいかもしれないけれど、一人で悩んでそんな顔しちゃうんなら、起きるまで待ってて欲しかったわ」

「うう……」

真面目な顔でそう言われてしまうと、言葉に詰まるというか、なずなは何も返せなくなってしまう。何せ、またやってしまったのだから。

悩みがあるのなら、一人で抱え込まずに二人で話し合おう。

校舎の中を逃げ惑ったあの日、そう約束したのに。

「それとも、あたしじゃ、力になれない、ようなこと、なの……?」
泣くのを堪えているようにも、痛みに耐えているようにも見える
おそらくはその両方だろう、そんな顔でせりは言った。
言の葉一つ一つに、身を裂かれているのかと思えるほど体を震わ
せながら。

「そつ、そんなことない!」

なずなは叫びながら、衝き動かされるようにせりに抱きついた。

「そんなことない。そんなことないから……」

「ごめんなさいと、何度も耳元で呟く。

「……………」

せりは無言で、そつと包み込むようにして、なずなの頭と背中に
手を回した。

「約束よ。もう忘れちゃ、だめなんだから……」

なずなの顔の向きが、せりによって変えられる。

二人の顔は向き合う形になって。

長く、少し塩辛いキスの始まりは……せりからだった。

第37話 見守る者、見守られる者・その2

都守神社の最寄り駅、上代駅より電車で揺られること約十分。駅から歩いてこちら也十分。

締めて、およそ二十分の道程をみこは行く。

みこと比較して、学校までの距離それ自体は遠いものの、通学時間は短かくて済むという。駅にほど近いだけでなく、商店などもお手頃な距離にある。そんな恵まれた立地に紗希さきの家はあった。

駅前通りから商店の立ち並ぶ区画を抜けて、橋を渡った先の住宅街。結構な幅を持つ川が間にあるおかげで、駅前の喧騒は実際の距離よりも遠いところのものようだ。電車による騒音も幾分か和らんでいる。気休め程度というより少しマシ、といった具合だが。車の往来もこちらの通りでは疎まばらで、まさしく閑静な住宅街といった風情だった。

みこはそんな中を、「紗希にどんなお願いをされるんだろう?」と、想像力逞しく“いろいろ”な妄想をしながら、迷いのない足取りで目的の家に向かう。

静かな住宅街にあつては、インターホンの音さえよく響いて聴こえるのか、それとも単に設定音量が大きいただけなのか、思いの外大きな音が木霊こだましたため、びくつと身を震わせてしまった。

紗希の家の前。インターホンを鳴らして待つみこは、音を立ててはならなかったような雰囲気を感じて、ちよつぱり居心地が悪かった。もちろんそんなことは全くなく、完全に気のせいである。

間もなく応答した紗希にこちらも応じ、「せつかく来たんだから」と促されるまま家の中へと招かれる。

元より寄り道前提なので、何かを急ぐ必要はない。

そんなことよりも、紗希の声にあまり元気がないように感じられたことが気がかりだ。

「おじやましまーす」

しーんと静まり返った家の中。

思わず、紗希の身にまた何か起こったのではないかと身構える。入ってすぐ、正面右手側には二階への階段がある。左手側、廊下の突き当たりにはリビングの扉がある。その途中に、洗面やお風呂といった水回りの部屋があったはずだ。

紗希の部屋は二階だが、今はおそらくリビングにいるだろう。

きちんと靴を揃え、日傘は畳んで玄関脇に立てかける。足音を忍ばせて上がり込み、余計な気配がないか探りながら真っ直ぐそちらに向かおうとする。

すると、ちょうどそのタイミングでリビングの扉が僅かに開かれ、そこから紗希がひよこつと顔を出した。

「みこ………？」

警戒するように、少しだけ。

学校では勝ち気そうに見せている目元は、今にも泣き出しそうになっている。

それに苦笑いで応じ、その場に留まって彼女の許しを待つ。

みこの姿をじっくりと観察すること数秒。

安堵したのか、紗希はほっと息を吐き出しながら、もたれかかるようにして扉を開く。

多少の消耗は見られるが、どうやら無事らしい。

ゆっくりと、焦らすように扉が開かれていくにつれて、紗希の姿が露わになる。

抜けるような白さを感じさせる瑞々しい肌。細い見た目に反し、易々と手折れはしないだろうすっかりとした首筋に、艶めかしさを主張して止まない鎖骨。露出した肩は可憐に咲く花のように愛らしく、慎ましやかな胸元は奥床しさを感じさせる。バレエをしていた

だけあって、無駄なく引き締められたお腹に、ほっそりとした腰。ドアノブを握る手先は繊細そのもので……。

肩紐や裾はフリルで装飾されていて、スカートの丈は長く、胸の下辺りからティアドロップになっている。

そんな、ちよつとロリータ気味な、可愛いらしい意匠の白いワンピースを身に纏った彼女は、季節を越えて迷い込んだ雪の妖精みた이었다。

いつになく弱々しい、それこそ手のひらに舞い降りた雪のような触れた途端にそつと溶けて消えてしまいそうな紗希の状態と相まって、とてもよく似合っている。

例え彼女が今のように弱り切った様子でなくても、間違いなくそう思うとみこは確信しているけれど。

みこは知っていた。学校では気の強そうなイメージを振り撒いている紗希にはもう一つ、女の子らしい女の子の顔があるということ。そうは言っても、ここまで弱々しくはないが。

扉を開ききった紗希は、そのままへなへたと床に座り込んでしまっ

「はあ

」

酷く疲れた様子の紗希は大きく息を吸い込むと、時間をかけて吐き出した。

ようやく警戒態勢を解いてくれたようだ。

「お待たせ紗希、迎えに来たよー！」

できるだけ明るく元氣よく呼びかける。

しかし反応は薄い。言葉なく、こちらに疲れの色の濃い視線を送るだけだった。

「げん、き……には見えない、ね……」

せつかくの可愛い装いなのに、紗希は既にぐったりとしていた。

「その服って前に買ったつきりのやつだよな？ とっても似合ってるよ！ 妖精さんみたい！」

励ましも兼ねて本心からの声をかけながら歩み寄り、みこも床に座り込むと、

「……………ん」

紗希は特に言葉もなく、みこに抱きついた。

せつかくのコメントがスルーされてしまったことは軽くシヨックだったが、そんなことを気にしている場合ではなさそうだ。

脇腹の辺りから背中に戻された腕には、痛いぐらいの力が込められている。

ぎゅっと締め付けるような、きつい抱擁。

「大丈夫。もう一人じゃないからね……」

紗希の弱々しい様子に幾らか驚いていたが、みこはそれを受けて気持ちを切り替える。

ふっと表情を和らげると、そんな彼女を優しく包み込んだ。

触れ合う体を伝って流れてくる紗希の怯えを、確かに感じ取る。

やはり、一人でいるのは心細かったのだろう。

怖くて、恐くて、堪らないのに。電話で話した後も、無理に気を張り続けていたに違いない。

こんなことなら、強引に押しかけてでも一緒に居た方がよかったのかもしれない。少なくとも呑気に服なんて選んでいる場合ではな

かったのだ。

……うう、また失敗したなあ……。

もはや後悔したところでどうにもならない。

ともあれ、まずは紗希を安心させるべく、あやすように頭を優しく撫でる。

紗希が落ち着くまでの間、みこはしっかりと彼女を胸に抱き続けた……。

それからしばらくして。

「その、いきなり抱きついてごめん……」

やっと平静な心持ちになった紗希は、開口一番そう言って体を離そうとした。

「もう、いいの？」

そこへ、すかさず放たれるみこのその一言。

何気ない一言に、紗希の動きがぴたりと止まり、二人は息がかかるほどの距離で見つめ合う。

そうしていると、紗希の血色が幾分か良くなった。

「じゃあ、もうちょっとだけ」

紗希は淡い笑顔を見せるとみこに体を預け、彼女の胸に横顔を埋められるよう体の位置を調整する。

よくよく観察すれば、頬の色が他に比べて赤くなっていることがわかる。

完全に甘える態勢に入った紗希の笑顔からは、隠しきれない嬉しさが滲み出ている。

そんな紗希に^{こた}応え、みこは優しい笑顔で受け入れる。この様子ならもう大丈夫だと、安堵しながら。

その柔らかさを堪能するべく、紗希はみこの胸にゆっくりと頬を押し当てようとしたりした。

すると、

「……あれ？」

何か違和感を覚えたらしく、彼女は怪訝そうな顔になった。

「紗希？」

紗希にたつぷり甘えてもらおうと身構えていたみこは、どうしたのだろうと首を傾げる。

「あかさ、みこ」

紗希は何かを確かめるように、みこの胸を服越しに撫で回す。やっぱりという咳きか聞こえたのは、間もなくのことだった。

「どうしたの？ 私の胸、なんか変だった？」

「……言いにくいんだけどさ、その……ブラは？ どう考えてもしてないと思えないんだけど」

見たり触ったりする側としては嬉しいのだが、される側としては恥ずかしいというか、明らかに問題があるのではないだろうか。

そう、例えば外を出歩くときとか。

そう思った紗希は複雑な気分を抱えながらも、やっぱり伝えておくことにしたのだった。

紗希には、自分は楽しめるので黙っておきたいという思いもあった。

が、その気持ちを押しつけてしまうくらい、みこの胸の先のものが何よりも気になっていたのだ。

精神的な余裕がなかったとはいえ、先程までは気がつかなかったことから、服の加減次第で目立たなくなったりする時もあるみたいだが……。

“それ”は、今となってはすっかりとその存在を主張しておられた。

胸周りの服の状態が変えられたためにそうなったのか、はたまたみこの“それ”が胸へ与えられた刺激に反応したためなのかは定かではない。少なくとも、紗希が胸を触ったせいなのは確かだ。

近くで見ているため余計に目立つので、ついつい視線がそちらに向かう。それでなくとも視界に入ってモヤモヤとした気分だということに。

眺めていると魔が差して、つついたり摘んだりしたくなってくる。そうしたい けれど。

この状態を知らせることなく放置したままにしておくのは、親友としてどうかしている。

だから紗希は、この誘惑を振り切っても、みこに伝えることを選んだ。

そんな紗希の心中など知る由もなく。

みこは何度か目をぱちぱちさせると、不思議そうにしながら視線を胸にやっつて、

「……………あ」

その一言を残して沈黙した。

「……………み、みこ?」

なんだか不安になった紗希は、自分を安心させるためにも、みこに呼びかけて様子を確かめる。

「ごめんごめん。ちょっと思い出してた。うん、なんか忘れちゃったみたい」

「忘れちゃったって……。あんだ、こんな立派なものを二つもぶら下げておいてそれはないでしょうに」

みこの胸を、指先で優しく摘むようにふにふにと揉みながら、紗希は呆れた声を漏らす。

服と擦れ合って痛くないのだろうかとか、何かの拍子に揺れたりして動き辛くないのだろうかとか、言ってしまうえば大きなお世話なことも頭を過ぎる。

決して羨ましいとかそういうわけではなく。

「家にいるときはしてないことも多いから、その、ついいつもの調子で」

「そんな状態でよく外を歩けるわね……。まさか下の方も穿いてないとか言っんじゃないでしょうね?」

「え? ちょ、ちよっと紗希!??」

「どれどれ……」

みこが止める間もなく、紗希の手はスカートの中にするりと滑り込む。

紗希の手は足の外側を蛇のごとく這うように伝って、お尻に到達する。

「あの、紗希さん。服越しに触ってもわかると思っているのですが」

下着の存在を確認し終えたのにもかかわらず、何食わぬ顔でお尻を撫で続ける紗希は、

「いや、さ。すべてすべしてるから、なんか無性に触っていたくなっちゃって。……いつそ前も弄いじろうか？」

既に開き直りの境地にいた。

「紗希、もしかしてそういうことしたいの？」

内腿うちももを撫で始めていた手の動きが、すんでのところで止まる。

紗希は意外そうな目をみこに向けた。

「どうやらそこまでするつもりではないようだ。今のところは。」

「これがなすなだったら、うんと嬉しそうに頷くと、返事も待たずに勝手に続きを始めていたことだろう。」

しかし、とみこは思う。

いくら女の子同士気心の知れた間柄とはいえ、さすがに前を触るのはどうなのか。いやその前に、ただのスキンシップで、普通こゝまでするんだらうか。

女所帯なせい、家では普通とまでは言えないまでも割と良くあ

ることなのだが、一般の人はどうしているのだろう。

そんなことを考えながら、苦笑に多量の困惑が投与された、どこか珍妙な表情を顔に浮かべていた。

嫌かどうかと問われれば否と答えるし、単純に快樂目的でそういうことをしたいのなら、紗希の頼みとあれば軽くする分には応じないことはない。けれど心の準備くらいはさせて欲しい、というのがみこの本音である。

これでも一応そっちの気はないんだけどなあと内心で呟きながら、指先で頬を搔く。

残念ながら説得力はない。

「冗談よ。半分は、だけどね」

紗希は笑うでもなく、真っ直ぐにみこの目を見据えていた。まるで、心を知ろうとするかのごとく。

「要するに半分は本気である、と」

「そうだけど？」

紗希は真面目な表情のままさらっと言い切り、あっさりスカートの中から手を引き抜くと、

「よし、みこエネルギーも補給完了！ いつまでも廊下に座り込んだままってわけにもいかないから移動しましょ」

みこから体を離し、さっぱりした笑顔を見せて、未練を断ち切るように勢いづけて立ち上がった。

虚を突かれ、座り込んだまま呆然とするみこの前に手を差し出す。みこの視線は差し出された手を辿り。

そこには、紗希のはにかんだ笑顔があった。

『……みこエネルギーってなんだろう？』
そんな疑問が、ようやくみこの頭に浮かんだ。

「で、でえーとおー!？」

紗希の部屋の中に、みこの素つ頓狂な叫び声とんきょうが響き渡った。

二人は今、向かい合って座っている。

みこはいつもの習慣で行儀良くお手本のように正座しているが、なぜか紗希までもが畏かしこまっていた。

やっといつもの調子に戻ったかと思えば、今度はこの有り様である。

原因は、紗希のお願いにあった。

赤面しながら、うまく想いを言葉にできず何度も口をばくばくさせていた紗希がようやく発した一言。

それは。

「き、今日一日、で、でつ、ででデートしてください!」

これが、みこの叫んだ理由である。

紗希の雰囲気諸々含めれば、もはや告白に等しい。

「だ、だって、何でもいって……」

確かに、何でも要望に応えるというようなことは言ったが、こん

なことになるとは予想外だった。

潤んだ瞳で見つめられ、みこは困り果ててしまう。

冗談の気配など微塵もない、真剣な雰囲気で“お願い”されてしまつては、それはだめだよと断るにも断れない。

かといって快く了承しても、みこにそっちの気はないわけで。

であれば、どう見ても本気な相手に安易な返事などできるはずもなく……。

「えっと、あのね紗希、一つ確認するけど、紗希が言ってるのは本気のやつだよな？」

こくと、紗希は泣きそうな顔のまま頷く。

しかしそう考えれば、なるほどと納得する点があった。

紗希の女の子らしい女の子な一面や、かわいい系の服の多数所有は把握している。

紗希が今着ているワンピースは確か……と、みこは記憶を探る。

あれはいつの日だったか、二人で店を渡り歩いた末に、一目見ただけで余程気に入ったのか、紗希が異様なまでに執着を見せていた代物だ。

だがそれ以来、取り出したところも着ているところも見たことがない。今日が初めてだった。

いつもなら「最近買ったんだけど、どうかな？」といった風になら、大抵はすぐに新しい服をお披露目してくれるのに、なぜかそれに限ってはなかった。

つまるところ、いわゆる勝負服というやつだったのだ。多分、下着も。よもや上下とも、もしくはそのいずれかを身に着けていないなどということはあるまい。

改めて紗希の姿をじっくり観賞すると、同性のみこにさえ胸にくっつくものがあるし、やっぱり魅力的だと思う。今はそこに涙目も合わさって、その破壊力はさらに増強されている。

その服を着た紗希に対するコメントは、悲しくもスルーされてしまったわけだが……。それどころではない様子だったので、仕方ないのだけれど。

誰か想い人でもいるんだろうかとは考えていたが、まさかそれを使われる対象が自分になるとは、夢にも思っていなかった。

「その、白状しますと、確かに家では女の子同士じゃれ合うこともあるよ？　けれど、私にはそっちの気は一切ないと言いますか、たとえあつたとしてもお家の事情で紗希の気持ちに答えるのは、はっきり申し上げますと、無理なただけ……」

本当に、それでもいいの？

確認するように問いかけると、紗希はゆっくりと首を縦に振った。

「知ってる。みこにその気がないことも、家の事情も……」

誰を好きでいるのかも。

続くその一言だけは、紗希の胸の中で。

「その上で、お願い。一度でいいから、みことデートしてみたかったんだ。今日だけでいいから、ちょっとでも愛してくれると嬉しい」

そうまで言われては、もはや断るといふ選択肢など有り得なかった。

駅前通りにある喫茶店の一つ。

別段流行っているというわけでもないが、^{すた}廃れているわけでもない、そんなお店の窓際の席に、その二人の姿はあった。

その内の一人、可愛らしいデザインの白いワンピースを着た少女が、目の前でストローを啣^{くわ}えてちまちまとミックスジュースを飲んでいる少女を見ながら言った。

「それにしても、すごい違和感ね……」

「どうしたの、紗希？」

ジュースを飲んでいた少女はストローから口を放し、首を傾げる。

「それよ、それ」

白いワンピースの少女　紗希は、相手の体を、正確には服を指し示した。

「さっきまで自分のことで精一杯だったから言いそびれてただけど……、私服で来てくれてありがとう、みこ」

紗希は照れくさそうに視線をさまよわせながら、他の人に聞かれないよう、ちよっぴり声を小さくする。

「たまにはいいかなあって。その、私あんまり普通の……っというのかな、こういう洋服って着ることないから、どこか変かもしれないけど」

みこは微笑みを返しながら、紗希の視線を辿って自分の体を見下ろす。

首元から胸にかけてドレーブがかかった、ゆったりとした印象の、

優しいクリーム色のチュニツク。肘にぎりぎり届かないくらいの長さの袖は袖口が広くなっていて、その色もあつてか、天使の小さな翼のようにも見える。丈長の、裾がふわりと波打つ水色のフレアスカートとの組み合わせは、まるで夏空を模したかのようだ。

ドレープで少しは胸が目立たなくなるかと思いきや、別にそんなことはなかった。確かに巨乳と呼べる大きさだが、決して過剰ではないポリウームであるのにも拘わらずそうなるのは、それだけ細身ということなのか。

「うーん、変つてわけじゃないけどさ、なんか巫女服じゃないみこつて違和感あるのよね……」

「そうなの？」

「制服のときはそうでもないんだけどね……」

「それって慣れの問題じゃない？」

「そのはず、なんだけどねえ……」

どこか釈然としないらしく、紗希はしきりに首を捻る。^{ひね}

そんな会話をしている内に、注文していた残りの品が届いた。

「とりあえず、それ先に食べちゃいなよ」

みこはサンドイッチの載ったお皿を紗希の方へと押しやった。

「じゅん、お言葉に甘えさせてもらつわね」

見るからに苦そうなブラックコーヒーを、涼しい顔で口に含んで

喉を潤すと、紗希はサンドイッチに手を伸ばした。

実はこの喫茶店。紗希の家から、大して離れていない場所にある。遡ることぎりぎり数分前、威勢良く家を飛び出したまではよかったのだが、その後まもなく事件が起きた。数歩もしない内に紗希のお腹の虫が悲痛な叫びを上げたのだ。

みこの日傘を二人で使用 要するに相合い傘 をしていたので、腕を絡ませ合うなど双方の距離はほぼ密着しており、はっきりと耳に届いてしまった。

聞かなかつたことにするにはあまりにも不自然だったので、みこが何事かと問いかけると、赤熱した顔から湯気を立ち上らせながら紗希はこう答えた。

曰わく、みことの通話を終えて意気揚々と外出の準備を始めたまでは良かったが、汗を流そうとシャワーを浴びている間に、だんだん恐怖心が強くなって、何も喉を通らなくなってしまったのだという。

紗希が朝食を摂っていないことが発覚したので、行き先など予定を決めるついでに軽く食事をしようと立ち寄ったのである。

家を出た紗希は、すっかり平常運転に切り替えたかと思いきや、いつもは人目を気にせずかぶりついているサンドイッチを、今回は下品にならないよう意識しながら咀嚼しているようだった。

現に、少し食べ難そうにしている。

それについて、普段の紗希を知るみこはあえて何も言わない。

いつも通りでいいよと言ってしまふのは簡単だ。みこならばそれはそれでいいと思うだろう。

けれど、紗希に対してそのような態度をとるのは野暮というものだ。

みこには確かにそっちの気こそないが、そんな紗希を見ると愛おしさが込み上げてくる。

今はみこと一緒にいるので安心したのか、食欲もあるようだ。

「ねえ、みこ……」

二つ目のサンドイッチを半分ほど齧^{かじ}ったあたりで、紗希は上目使いでみこを見つめた。なんだか物欲しそうな目だ。

「どづしたの？」

「……………せて」

「……………え？」

「食べさせて……」

消え入りそうなボリュームの涙声で告げると、紗希は半分になったサンドイッチを差し出した。当然、口を付けていない方を向けている。

まだ朝の時分なのに、夕陽に染まっているのかと思うほど紗希の顔は赤くなっていた。

焦らしたい衝動に駆られながらも二つ返事で了解したみこがサンドイッチを受け取るやいなや、紗希は目を瞑り、あーんと可愛らしく口を開ける。

みこは想像だにしなかった衝撃に胸を打たれてよろめいた。

（ …… なにこれかわいい！！ ）

予期せぬ衝撃に少なからず興奮したみこは、努^{つと}めて平静を装いながら、食べやすい大きさに千切ったサンドイッチを彼女の口へと運んだ。

妹や妹のようにかわいがっている娘達が家や関係施設にいて、そういう娘たちにねだられ、みこは紗希にしたように何かを食べさせることもある。

だから、そういうかわいらしさにはすっかり耐性が付いていて、何食わぬ顔を装って餌付け……もとい食事の面倒をすることができ
る自信があった。

“姉さん達”のそれについてはむしろ楽に耐えられたくらいだが
……。

同年代の友人は盲点だった。

密かにどぎまぎしているみこに、紗希が気づいた様子はない。
どうしようかと、みこは悩んだ。

この気持ちを抑えて接するのが、それとも身を任せるのか、どっ
ちがいいだろうかと。

やがて 悩むみこに、止めが刺された。

「あのさ、みこにも食べさせたいな、なんて、思うんだけど……」

紗希のその一言で、みこは覚悟を決めた。

その結果がこうだ。

朝っぱらから、喫茶店にて人目も憚はばらず、女二人で、「あ〜ん」
と食べさせ合いつこ。

どこかの誰かさんたちのことを言えたものではないこの所行。

後に、二人して思い出し、恥ずかしさのあまり悶えて床を転がる
ことになろうとは、今は想像さえできていなかった。

そんな二人を、こっそり見守り続けている者たちがいた。

こちらも二人で、男女のペアだ。

男の方は、目つきが悪くどこか近寄り難い雰囲気がある。それ以
外は可もなく不可もなくといったところか。

女の方は、まだ小学生と言っても通じる程度に幼さの残る、やんちゃそうな少女だ。面立ちは整っていて、美少女と言ってもいいくらいなのだが……。

そのやんちゃそうな少女は、人目も憚らずにいちゃつく二人正確には紗希のみ　を鋭くした目で射殺さんばかりに睨み、ハンカチの端を啣えて口惜しそうにしている。

目から滝のように途切れることなく流れる涙が、どれだけ少女が悲しみに暮れて、嫉妬に狂いそうになっているのかを物語っていた。ハンカチを啣えた口はもごもごと蠢き、呪詛紛いの言葉を呟いている。

そのお陰で、せつかくの綺麗な顔は台無しになっていた。時々、ムキーツと猿のような唸り声もあげるせいで、もはや見るに耐えない。

明らかに意図して少女を視界から外している男は、呆れたように本日何度目になるのかわからない溜め息を吐く。

「涙くらい拭け」

そう言って、少女を見ることなく無造作にタオルを手渡すあたり、意外と気にかけているらしい。

「うう……、ばびがどうしようぶざん……」

みさはハンカチを啣えたまま、口を開かずに話す。

彼女はそんな器用な真似ができるわけでもないのに、紡がれた言葉はわけのわからない音となった。

「そんな物を啣えたまま話されても、何を言っているのかわからないんだが……」

「ありがとう翔雨さん」

律儀に言い直すのなら、最初から普通に話せばいいのに。そう思う翔雨であったが、口にはしない。言ったところで、素直に聞き入れたりはいしないだろう。今のみさはそれどころではない。

「それで、何でみさちゃんまでついてきてるんだ……？」

返事を期待しているわけではないが、翔雨は一応訊ねてみることにした。

上代駅からかれこれここまで、ずっと付きまとわれている。するとみさは、よくぞ聞いてくれましたとばかりに目を輝かせた。さっきまでの様子はどこに行行ってしまったのだろうか。

感情をあつと言う間に切り替えたみさは、紗希を睨むどころか、みこさえ視界から外して翔雨に向き直った。

それからすぐさま腰に手を当て、えっへんと薄い胸を張る。

その瞬間、どことなく物悲しい空気が漂ったのはなぜだろうか。みさの外見的に、ごく当たり前の光景なのだが。

「もう、翔雨さんったら、やっと訊いてくれたね！ よっ、この焦らし上手！ 答えは簡単、せつかくだから一緒に見守ろうと思っただけです！ ほら、ダブルデートみたいな感じでいいでしょ？ ね？」

にこにこ笑顔で楽しそうに語る姿は、これも一つの真実であることを物語っているように思えた。

しかし、今までこうして姿を見せることなどなかったみさである。こうやって翔雨に付きまとい、みこをこっそりと見守るためだけに現れたりはいしないはず。

たとえこうすることが、彼女にとって大切なことであつたとしても。

「さて、斬るか……」

眉一つ動かさぬまま、自らの愛刀に手をかける翔雨に、

「なんで!?!」

みさは信じられないものを見たかのような、驚きの表情を浮かべる。

やや腰が引けていたり、目の端に僅かだが光るものがあるのは、気のせいではないのだろう。

どうやら七枝ななきざやの斬撃による痛みは、みさにとって無視できない痛みらしい。

実際に斬るつもりはなかったが、ちょっと乱暴過ぎたかと翔雨は反省した。

「それで、本当のところはどうなんだ?」

幾分穏やかにした声で促すと、

「実はですね、本題がまだありまして。というより、お願い……かな?」

みさは今度こそ真面目に答えた。

手を後ろに回してお尻の辺りで組み、淡い笑顔を浮かべている。

「……………!」

翔雨は目を疑った。

みさの姿が一瞬揺らいだように見えたのだ。

彼女の存在感が、急に薄くなったような気がした。

胸騒ぎがして落ち着かない心境の中、翔雨は儂げに佇む彼女の姿を静かに見つめていた。

今にも消え入りそうなその姿を、決して見失うことのないよう、
注意深く……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7973i/>

魂旨 ~たまうま~

2011年9月30日12時56分発行